女學世界

第三巻第二號




地方よりの御註文は御手紙にて
御申越被下候はゞ小包郵便にて
發送仕る可く候尚ほ註文御
案内書は御一報次第御送り
可申上候
一切の商品は店内一
面に陳列致し置候に
付き御立寄り御
縦覧被下候様奉
希上候
東京日本橋駿河町
三井呉服店
大阪高麗橋二丁目

女學世界 第參卷第貳號 目次

雨



上村松園女史筆

懸賞寫眞第三等賞

海の春



肥後國有明の浦

（山本寅次郎氏撮影）

韓國風景



朝鮮京城光化門前

渡頭



丸山古香氏筆

貴族院書記官長 法學士太田峯三郎君序
衆議院書記官長 法學士林田龜太郎君序

貴族院書記官兼內務省參事官 法學士小原新三君著

（近刊）

帝國議會 府縣會 郡會 市町村會 議員必携

全壹冊洋裝袖珍上製極美本
紙數四百餘頁
正價未定
郵稅

議會制度は立憲制度の精髓にして且つ自治制度の骨子なり然れども其議事及撰擧の法理は複雜にして而かも一度運用を誤るときは全く却て多數の意志と反せる意外の結果を生ずるに至る本書は多年其局にわりて且つ法理に精通の聞かる小原法學士が某所に於て帝國議會及地方議會等に關する法理の一斑を講述せられたるものを速記し更に仝法學士の周密なる校訂增補を經て今回弊館より發賣せるものなりし由來我國に於て此類の書わるとなし諸子各議長議員及候補者關係者等は一本坐右に備へられよ

在大學院法學士 島田俊雄君著
衆議院書記官長 法學士林田龜太郎君著

●衆議院義員選擧法論 正價金四十錢 郵稅金六錢

●衆議院議員選擧法釋義 正價金八十錢 郵稅金十錢

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

【甲の一】

宮中御歌所寄人中郁秋香新作
華族女學校講師小野鵞堂浄書 （新刊）

女子消息文の[illegible]

木版半摺無二の美本定價四十錢郵稅六錢

●曩に兩先生新篇女子書簡文例を著はされ女子大學校始め各女學校の參考書或は敎科書に採用され頗る江湖に觀迎されたるは最も弊店の名譽とする處なり
●本書は右文例初步とも云ふ可き書にして書簡文獨習者の爲に通俗平易なる實用の文題百餘種を總振かな付にせられたるは他に其比を見ざる處特に小野鵞堂先生が大字に書かれたれば習字の手本として此上もなき良書なり學生諸君は勿論家庭の御婦人方は是非一本を坐右に供へられんことを

久津見蕨村新著 （增訂五版）

家庭 子供のしつけ

●洋裝美本●定價廿五錢●郵稅四錢

本書は著者が該博の識と多年の實驗に依り幼稚兒童、少年、青年時代の四段階に至る家庭敎育の仕方を言文一致体にて十三章百六十餘條に說き示されたる者なれば婦女子にても容易に理解せられ直ちに實際に試むることを得べきやう記述せられたる近來稀に見るの好著書なり宜なり大好評增訂五版發賣す

安藤謙吉君著 （內外遊戲全書第十四編）

八版 福びき集 附歌かるた法

全一冊洋裝
正價拾貳錢
郵稅四錢

本書は福びきに付き題の部解の部及福引談の三部に分ちて最も面白可笑しき題解數百を揭げて斯の道の蘊奥を闡き福引談に於て福引の由來及興味を詳述せり尚附錄の歌かるた法は覺え方並べ方取り方を說き讀者をして遊戲の莚に勝利の榮を期せしむ

發兌元 東京本町 博文館

治肺新法

附錄 肺病全快實歷談

此書は拙者肺病全快に付其實地經驗の方法を詳記したる物郵券三錢封入申込者に無代施本致すべし

東京下谷上根岸町百十一 藥學得業士金澤巖
（電話本局二二五九番）

（甲の二）

巖谷小波山人作　武內桂舟畫伯密畫

明治お伽噺

全部拾貳册
洋裝菊版形
紙數一册百三十頁
定價一册拾貳錢六册壹圓
六拾七錢十二册壹圓
廿八錢郵稅一册四錢

日本昔噺以來、先には日本お伽噺を完成し、今又世界お伽噺の大篇を企て、斯道に多年の肝膽を碎ける、御馴染の小波山人、今度は更に步を進めて、**明治お伽噺**なる題目の下に、**十數年の經營**に成れるの**自作お伽噺**を、美麗嶄新なる小册子として、順次世に公にせんとす。是れ啻に少年讀書界に於けるのみならず、また以て**明治文壇に對する稀有の一大貢獻といふべし**

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

（甲の四）

雪

コブラン織まがひ刺繡畫



（東京女子美術學校製品）



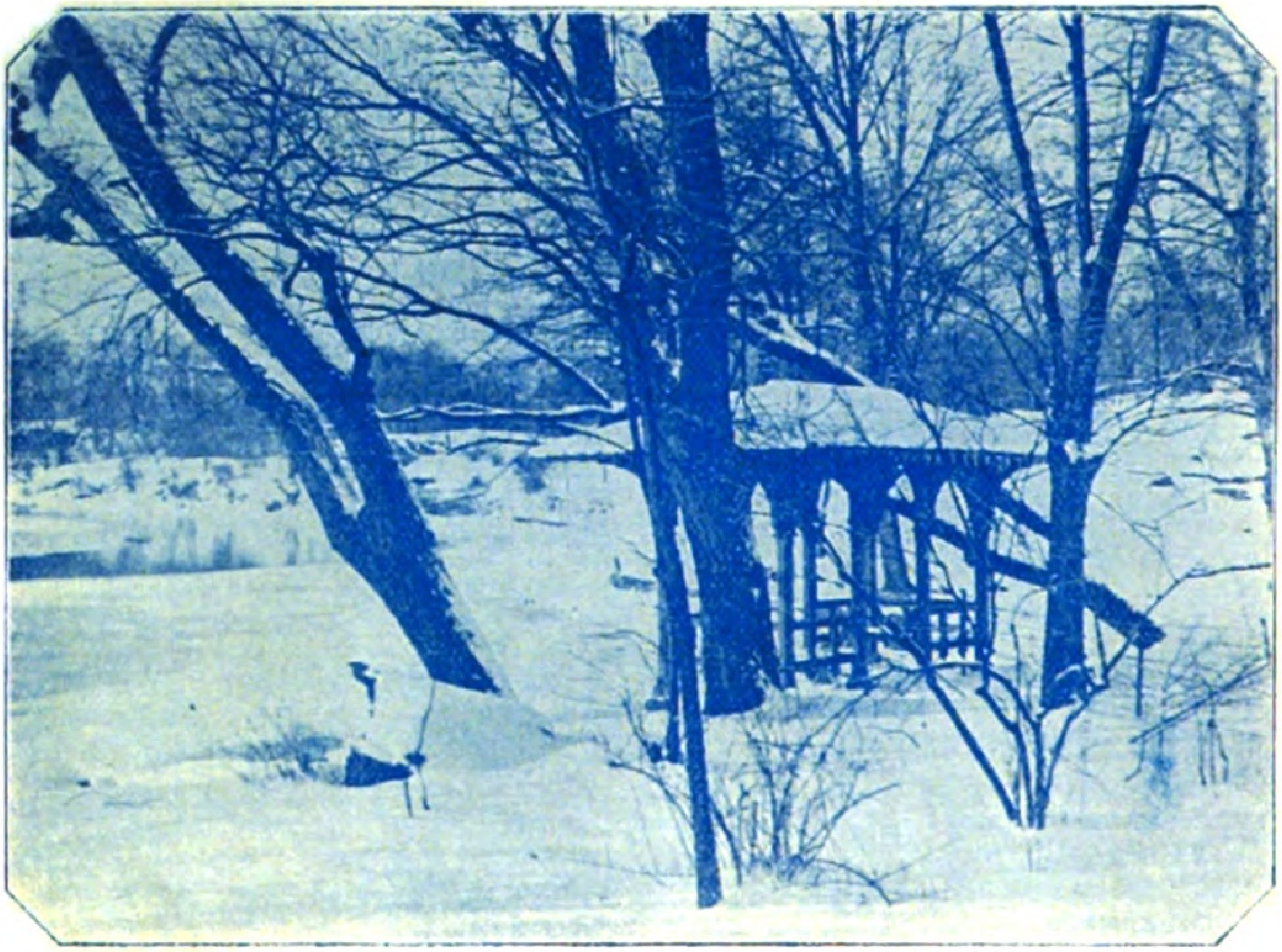
人物（木炭畫）



女子美術學校製品

作者　大島千代子

雪景





米國紐育中央公園

舞姫



佛國名優ベルテ孃



仝　ジエラール孃

村井弦齋君著

全二册上卷近日發行

酒を飲む者衆し、酒の効用と害毒とを知て而て飲む者幾人かある我小説を讀む者衆し我小説の精神を知て而て讀む者幾人かある、惟ふに知るは易く、悟るは難し、悟るは易く、行ふは尙ほ難し、千萬人中幸に、我精神を知悟して、而して行ふ者ありや否や!!



本書目次

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

(乙の一)

若松賤子女史遺稿 中島湘煙女史追懷書翰 三宅花圃女史外五名序 （四六判全壹册）

『忘れがたみ』

新刊 洋裝總クロース 金字入頗美製本 正價金壹圓 郵税拾四錢

若松賤子女史異材を抱いて白玉樓中の人となりしより春風秋雨既に七星霜文界落寞の今日女史を追懷する無き能はず生前の述作今にして編纂せずんば散逸に歸せんことを憂へ即ち忘れがたみ、雛嫁、我宿の花等彼『小公子』と共に永く我文學史上の珍たるべきもの十數篇を收む、裝釘美麗、今や版成る、

北村透谷君遺稿 星野天知君 島崎藤村君 平田禿木君 戸川秋骨君 共編

透谷全集

全壹册肖像詠歌草稿筆蹟寫眞密畫木版色刷入上製金壹圓廿五錢郵税廿錢並製壹圓郵税十六錢

透谷北村門太郎君は明治の異材なりき、清高の想、激切の文、以て當年の文壇を照せしも、靈光俄然として消え、世人其遺香を追慕する切なるものあり、爰に友人諸氏相謀りて遺編を集錄して公版す、文學論あり、隨筆あり、戯曲あり、皆以て此の不幸短命なる詩人の高志清想を後世に傳ふるものなり、又た此書一たび出でゝ、當今文界に投ずる一大矩火たらん。

ハーツホーン女史編纂并序

嚴本嘉志子 英文集

（新刊發賣） 袖珍頗美本 正價金參拾錢 郵税四錢

我國英文界の泰斗として推重せられたる故嚴本夫人の遺稿を渉獵し後世斯文の至寶として傳ふべきものを選して此書をなす蓋し此哀悼すべき閨秀文星の遺光をして我英語界の一嚮導たらしめんとするものなり、

（乙の二）

文學博士元良勇次郎君評論
文學士戸澤姑射君譯述

小説 愛と心

（訂正四版） 菊判頗美本 正價金參拾五錢 郵税四錢

希臘神話中、エロス、サイケ、の情語は愛と心との至美を圓滿に發露せるものなり、本書は即ち之を基として心理的小説に結搆したるものにして、元良博士、戸澤學士の筆に成るもの出版以來大に江湖の歡迎を受けたるが今之を訂正して第四版を公にす。

發兌元 東京日本橋區本町 博文館 東京神田表神保町 東京堂

新奇發明 **増酒資料**（さけふやすもと）

壹斗の淸酒は即座に倍增し(即ち貮斗)となる大金儲的釀造化學作用の一大發明新法なり(附錄)腐敗酒直し法、味淋酒醬油參倍增法、

速造法、酢速造法、新酒を古酒に變ずる法、香竄葡萄酒速造法、燒酎倍增法、味噌速造法等以上の釀造家及び請賣營業者の大有益案内…**無代進呈**す酒造家右今回披露の爲拾萬部限り及前記載の營業者にして望の方は郵券四錢相添申込次第直に送呈す速に見よ營業上一日も缺くべからざる確實**大有益**の秘訣なり是ッ非早く利用せよ驚くべき大金儲あることを確證す(注意)本館の隆盛を羨み近時當館廣告に贋せて怪しき無効の僞法を傳ふる奸者顯はれたり有志者深く注意して僞傳者に欺かるゝこと勿れ……(當舘は去廿壹年の創立也)

發明**元祖** 東京市神田五軒町拾九番地 **日本授産館**

●肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色**に變**化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は八拾錢特別製分壹圓四拾錢

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新舘藥房**

血塊月やく

忽ち下る 確證新藥

本劑(調經丸)は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑三劑分を用れば二三ケ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止にても必ず立處ろに流下し且つ**惡血毒血**を一掃すること確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるに付き**姙婦**の服用を嚴禁すもし妊婦服藥せば**即座に流産**するを以てなり尤も本劑は何人服用するも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分六拾錢貳劑分壹圓六拾錢特別製分貳圓貳拾錢(注意)本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新舘藥房」の名義に着目し購求あらんことを乞ふ

●わきが（腋臭症）

根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割增の事

以上貳藥**專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新舘藥房**（電話本局二五四六番）

坪谷善四郎君著

增訂 日本女禮式大全

全一册

洋製上綴美本 正價金九拾錢 郵稅拾六錢
和製凾入特製 正價壹圓二拾錢 小包送四百匁

▲口繪 彩色木版精巧畵及寫眞銅版女禮各式拾數葉入

本書が世の良妻賢母の友として、女學生の良師友として、歡迎せられたるは、發刊後既に十數版を重ねたるにても知らる。著者は此の如き好評を博すると共に、益〻責任の重きを悟り、更に全文を修訂して增補の新刊を成す。日本固有の女禮の美性と、泰西普通の禮式の外に女子の知るべき禮式技藝作文作歌、其他一切の事を網羅し、記事の豐富と文章の流麗に加ふるに、製本の美なる世に比類なし。女學生は勿論良妻賢母及令孃を有せらるゝ父兄方は必らず、一本を備へ賜ふの必要あらん。

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

（乙の四）

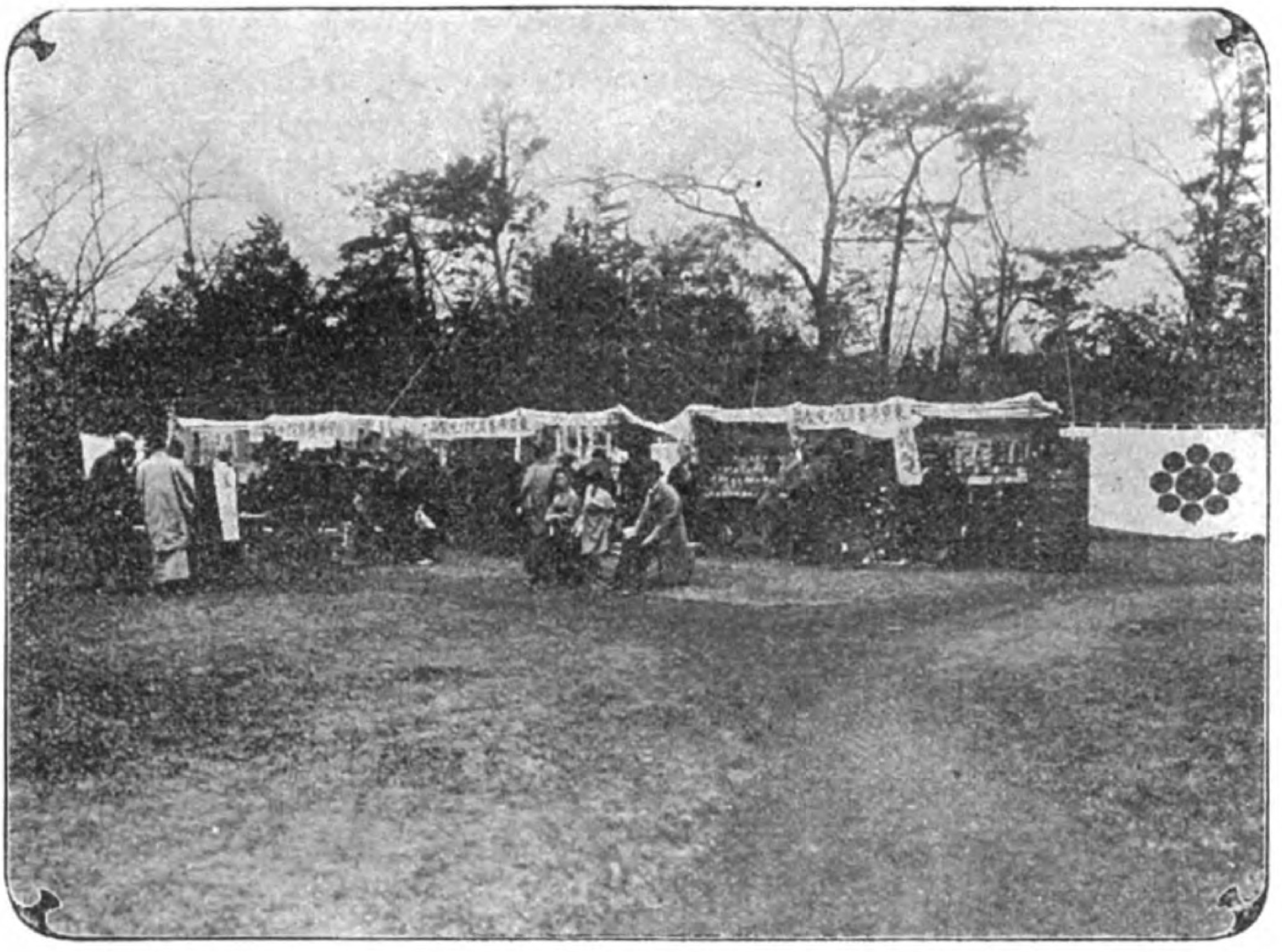
新式遊戲法



(齊藤紫白撮影)

日本女子大學校に於て(振り鼓)

四恩瓜生會大會





王子澁澤邸内に於て

和洋裁縫女學校卒業生

（麹町區飯田町中坂上に在り）



校長堀越千代子

私立裁縫女學校第二期卒業生

（芝區公園能樂堂前に在り）



校長 戸板關子

大和田建樹先生著



能を舞ふ人はあれども能を知る人は少なく能を見る人はあれども能を解する人は少なし此の書一度出なば知る事も審かに解するとも速かなるを得ん斯道の爲め舟筏とも燈火ともなるへきは獨り此の書か

第一の巻……一月下旬發行

第壹の巻 翁、高砂、八島、東北、蘆州、船辨慶、三輪、兼平、羽衣、安宅、安達原、蟻通、田村、江口、百萬、猩々

第貳の巻 竹生島、清經、熊野、隅田川、融、邯鄲、鉢木、卷絹、俊寛、海人、小鍛冶、夜討曾我、杜若、花筐、鞍馬天狗

第參の巻 養老、忠度、松風、七騎落、山姥、橋辨慶、春榮、道成寺、富士大鼓、土蜘蛛、西王母、箙、草紙洗、唐船、紅葉狩

第四の巻 加茂、巴、三井寺、葵上、烏帽子折、葛城、小袖曾我、櫻川、攝待、野守、花月、實盛、景清、放下僧、望月

第五の巻 嵐山、敦盛、二人靜、雲雀山、殺生石、小督、賴政、井筒、熊坂、善和鳥、項羽、盛久、住吉詣、柏崎、絃上

第六の巻 龍田、朝長、砧、阿漕、善界、國栖、弱法師、大原御幸、蟬丸、鵜飼、大佛供養、斑女、藤戸、大江山

全部六册製本和綴石版表紙
能舞精巧木版畫挿入
紙數一册二百頁以上
正價一册四拾錢三册壹圓拾五錢
全部二圓廿錢郵税一册六錢

發兌元 東京市日本橋區本町 博文館

（四の二）

業務擴張

東京堂は多年**書籍雜誌の大取次**を營み來り候處世上の御引立を蒙り業務益々盛大に趣き賣捌方其他の設備も大に擴張致し候に就ては此際一層の勉強を以て各位の御便利を相圖り可申候尚**本年度**よりは更に**歐米諸國の出版者と特約を結**び書籍雜誌の類は何種に拘はらず廣く大方の御註文に應じ精々廉價迅速に御取次可致候間何卒倍舊の御愛顧を以て續々御註文被成下度奉懇願候

◎東京堂發賣**書籍雜誌目錄**（二月改正）御望の方は郵券貳錢封送申込あれば出來次第送呈す

委託販賣部

書籍雜誌御發行の御方にして一手販賣方御委託相成候はゞ諸事御便利を相圖り弊堂獨特の擴張法を以て賣捌方は勉強可仕候間御發行前に御相談被成下度候

圖書雜誌大販賣

東京神田表神保町三番地
特電話本局貳百四拾八番

東京堂書店

The English Student.

英學新報

主筆 新渡戸稲造。 津田梅子

定價 （定價金拾錢郵稅壹錢○半ヶ年（十二冊）郵稅共壹圓貳拾錢○壹ヶ年（廿四冊）同貳圓廿八錢

所載概目

社說 英語英文學研究社論其他一般青年學生を補益すべき倫理教育社會等に關する社論 **寄書** 社會一般の事項に關する内外の寄書家の意見 **通信** 英米學生の通信 **講義** 斯業大家の講ゐ

訪問 英語英文學研究等に關する大家の實驗談 **時報** 内外の新事件 **逸話** 歐米帝王名士最近の逸話 **會話** 純良なる談話語になる會話及びダイアログ

註釋 英米大家の詩文拔萃詳註 **飜譯及作文** 諸家の和文英譯、英文和譯の模範●和文英譯指南（斯道の大家に依頼す）和文英譯英作文答案修正●懸賞和文英譯及英作文

讀者の隨意英文 **雜說** 英語研究上に注意すべき事項、作文要訣、故事故語、熟語等 **尺牘** 各家の尺牘○作例○答案修正 **商業書簡文**講義

笑話 古今名士の滑稽譚、笑話 **小品** 從來の改作小話の他に近時英米新聞雜誌に見ゆる彼國大家の健全なる小品文に註釋を附す **雜錄** 近時の文學界○大家修學談○逸話○海外文壇

○英語謎○我國英學界○編者の机上○讀者の領分 **質疑解答** 書籍十數種の質問に應じ且つ直接講話者に限り、通信解答を與ふるの特典あり、**挿畫**等

（每月二回一日十五日發行）

發兌元 東京神田 **東京堂**

（丙の三）

本田増次郎著

畜類のまごころ

挿畫入▲定價金五錢▲郵税二册迄二錢

本書は、畜類に同情を寄せ、彼等に代はりて動物虐待の無法なることを絶叫したるものにて、各種の事例を兒童少年に分かり易く面白く書き綴られたる小冊子家庭の讀み者學校の賞品年頭の贈物等に最適當品なり

土居耕雨著

公徳童話 一名御伽奉公

全一册口繪入▲定價金廿五錢▲郵税四錢

本書は公徳養成に關する好材料を小説體に記述し言文一致なる上に漢字に總振假名を付けたれば兒童少年の讀本小學校の褒賞品とし最適當なり

堀内新泉著

家庭讀本

全四册各挿畫入▲定價各金拾六錢▲郵税各四錢

全部目次

春之卷 (1)古稀の賀(2)自愛(3)一船長上(4)一船長中(5)一船長下(6)花ちる里(7)おもちや(8)御國の風俗上(9)御國の風俗中(10)御國の風俗下(11)母のおもかげ(12)初旅(13)おぼろ月夜

夏之卷 (1)庭の若葉(2)螢狩(3)游泳の名人(4)雨後の月(5)蚊やり火(6)姫百合(7)夕すゞみ(8)夕立(9)撫子

秋之卷 (1)秋の旅(2)ゆく秋(3)雁がね(4)十三夜(5)千草百草(6)虫のね(7)紅葉狩(8)かくれ家(9)暮れの鐘

冬之卷 (1)初時雨(2)木枯(3)霜夜(4)冬の月(5)雪の月(6)寒紅梅(7)うづみ火(8)水鳥(9)歲の暮

●發行所 東京市神田區小川町(電話本局二四二〇番) 開發社

神奈川縣立第一中學校敎諭 小櫃鶴城先生著 菊判美本全一册

新式 漢文獨習書

正價金四拾五錢

郵税金六錢

切手代用一割增

中學校師範學校及ビ同程度ノ學生ニシテ初メテ漢文ヲ學ブニハ其ノ文字組立方ノ國文ト異ナルガタメ學修ノ際非常ニ苦痛ヲ感ジ終ニ漢文ノ妙味ヲ解セザルモノ往々コレアリ是レ其ノ敎授方法ノ宜シキヲ得ザルニ因ルノミ若シ其文字ヲ知リ文法ヲ解セバ其ノ趣味ノ多キコト蓋シ言フベカラザルモノアラン古來漢文講義錄ト稱スルモノ多ケレドモ讀方ト意義トヲ記スルノミニテ文章ノ組立方法ヲ示サズ是レ豈ニ完全ナルモノト謂フベケンヤ本書ハ著者ガ二十餘年間漢文敎授ニ從事セラレテ新案セラレタルモノニシテ譯解部アリ文法部アリ原文部アリコレヲ彼此對照スレバ師ニ就カズシテ自ラ漢文ノ意義ト文法トヲ了解シ且ッ漢文ヲ造リ白文〔反リ點ナキ文〕ヲ讀ムヲ得以テ其ノ妙味ヲ解スルニ至ランヿ必セリ世ノ漢文學ニ志アル學生諸君請フ本書ヲ玩味シテ速成ヲ期セラレンヿヲ

發賣所 東京市神田區表神保町 東京堂書店

發賣所 東京市京橋區弓町 松邑三松堂

(丙の四)

樞密顧問官子爵黑田清綱君
故楓内侍 稅所敦子刀自 共撰

庭乃摘草

（新刊出來）

全壹冊大和綴寸珍形極美本
定價卅五錢
郵稅六錢

附り
歌德記
黑田子爵寫眞銅版肖像入

現代の歌聖を誰とかする。樞密顧問官たる黑田清綱子を推すならん。茲に同子爵の別墅に、年來つどへて詠しられたる人々の歌、將同子爵の玉詠中より稅所敦子刀自が、よしと思ふを摘みとりて、庭の摘み草と名けおかれたるなり。滿天下の歌人よ。一度之を繙かば、自ら眞正なる和歌の價値を知るに足らん。殊に仝子爵が年來種々の書中より。和歌の德によりて身を雲井にあげ將位を得、身命を助けられたる、其他種々の事柄を、數百擧げられて、歌德記と名けおかれたるをも切に請ひて、兩つなからかくは世に出すことせり、されは歌人にあらさる人といへども、和歌の德の大なるを知るを得ん、

發兌元 東京本町 博文館

（門の六）

新刊

高安月郊氏作（演劇脚本）

大鹽平八郎

全一册　定價金拾八錢

本篇は演劇改良に熱中せる高安月郊君が近業の傑作なり
大鹽中齋が壯擧はさながらこれ一大悲劇、今これに配するに一箇薄命の佳人と溫厚なる大鹽格之助とを以て、更に富豪の蕩兒を描きてこれに反照す勇壯なるもの、可憐なるもの、快活なるもの、悲慘なるもの、收めて一篇の裡に存す。本書の出版未だ成らずして、京坂の劇界既に爭つてこれを場に上せんとす、新演劇としての評價はこゝに贅するを要せじ、健全にして多趣味なる讀書として亦敢へてこれを江湖に薦めんとす

新刊

市川左團次丈序文
木村錦花氏新作

一夜夫婦

全一册　定價金廿五錢

著者木村錦花とは世を忍ぶる假の名實は是市川左團次の門流に同名左伊助の子高之助其の興行の餘暇に好める文筆を以て成れるの處女作即ちこの「一夜夫婦」とす元是文藝界が應募の懸賞に選ばれし事なるが幸ひ同誌編輯の主任佐々醒雪氏の眼鏡に因り、はた師左團次に請ひて獲たる序文あるを楯として遂に美裝せる單行の一書とはなりぬ、其平易、流暢なる言文一致は巧にもワキ仰俳優某の性情を描き、風雨の日木曾川の冒險を記しシテとツレとして點出せる人物こそ其の題號の因る所の一夜夫婦が悲慘なる境涯を寫し得たる、實に黒う人なる小說家をして後に瞠若せしむるの趣あり、而かもまた現今の俳優にしてその自らの名を現はせる著皆多くは代作なるを、茲に勇敢なる市川高之助事木村錦花子ありてこの一篇をものしたる文壇の產物としてその價よりは梨園に結びたる果實として世の歡迎し愛讀すべきものなり
（讀賣新聞評）

東京市日本橋區本町三丁目
金港堂書籍株式會社

（丙の七）

多田親愛先生筆

宮内卿

かきくらし猶ふるさとの
ゆきのうちにあとこそ
みえね春はきにけり

多田親愛先生筆

摂政太政大臣

空はなほ霞も
やらす風さえて
雪けに
くもる
春乃夜乃月

坂正臣先生筆

紀元節　初午

立春　うめ見

はつ霞　紙鳶

烏賊　蕗のとう

新年海の御画一葉御恵
贈下され生猿ありがたく近来の
名作と存じ候て掛物に
して永く秘蔵仕るべく候

うし
こ



野口小蘋女史筆

白菜紅梅

野口小蘋女史筆



菜籠



跡見花蹊女史筆

梅

跡見花蹊女史筆



通俗農藝文庫

農學博士横井時敬君閲
農學士井上正賀君著

第二編 **作物生理**

本書は普通の植物生理と其趣を異にし先つ日常吾人の目に觸るゝ葉の作用より説き起し作物体内に生長せる有機物質に及ぼし次で莖及び根の作用と根に由て吸收せらるゝ養分とを説明し尚ほ進で種子の發芽生長生殖器に及ぼし作物と氣候との關係を説きて局を結べり挿畫の説明簡潔初學者をして容易く其理を知らしむ

第壹編 **農學初步**（既刊）

正價金廿錢　郵稅金四錢

本書は難解の學理と實地との關係を明にし最新の學理を加味し挿繪數十葉本文の説明を補ふ篤志家是非一本を購はれよ

續刊 續々發行 每月一回

- 第三編 作物病理
- 第四編 土壤
- 第五編 肥料
- 第六編 氣候
- 第七編 作物栽培
- 第八編 園藝
- 第九編 養畜
- 第拾編 養蠶
- 第拾壹編 養鷄
- 第拾貳編 農業經濟

裝訂 洋裝並製菊判紙數百五十餘頁用紙精良印刷鮮明讀み易く解し易し

正價 一冊金貳拾錢六冊壹圓拾錢十二冊貳圓十錢郵稅一冊四錢

（丁の一）

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

（三〇一）

各宗本山

石倉翠葉君著

第一編

本派本願寺名所圖會

全壹冊洋裝菊判美本
正價六拾錢郵稅拾錢

本書は眞宗本派の本山たる西本願寺創建の沿革より小は庭前一松の傳說に至る迄徽細荀もせず歷史と實地に參照し極めて通俗に編述し且境內の建築物寶物古文書室內の裝飾庭園等に至る迄皆之を精巧緻密なる寫眞銅版及石版木版二百餘種を挿入したれば史家の好參考書たるは勿論吾信徒百萬の同胞が座右缺くべからざるの珍寶なり

第二編

大谷派本願寺名所圖會

全壹冊洋製菊判美本
正價四拾錢郵稅六錢

本書は眞宗本山中最も莊嚴偉觀ある堂宇を以て普く天下に知られたる東本願寺の事蹟を編述せるものにして先づ所在地の名義大谷地名考大谷廟所考眞宗の名義及沿革舊史に現れたる東本願寺法系門跡考門跡傳門跡の邪懷蓮如上人の子守歌等を始めとし境內の沿革建築物及庭園の沿革寶物古文書本寺に附屬せる名勝舊蹟等其他一切を一々歷史と實地に考證探查し文は勉めて通俗に振假名を附し且つ精巧緻密なる寫眞石版木版數十種を挿入したれば一は史家の參考となり一は旅行臥遊の好伴侶たらん

第三編

佛光寺名所圖會

全壹冊洋製菊判美本
正價廿五錢郵稅六錢

本書は眞宗佛光寺派の本山たる京都佛光寺の事蹟を詳細に編述したるものにして一々現況と歷史に參照し極めて精密に考證記述したれば同寺の事蹟を知るは蓋し本書を措きて他に求むべからざるなり由來佛光寺は由結正しき古刹にして卷頭に揭げたる御醍醐天皇の御綸旨及御宸翰後水尾天皇後西院天皇の御宸翰孝明天皇御寄附菊形香爐皇太后大進有範御眞筆見眞大師自作の有範鄕及吉光尼の木像見眞大師眞筆嗣法相承の名號等寶物の寫眞銅版及其他同寺內外の眞筆に由て知らるべきなり

(丁の四)

名所圖會

博文館發兌

官國幣社圖繪

日光名所圖會

全壹冊洋裝菊判極美本
正價六十五錢郵稅十錢

山紫水明にして殿堂の偉觀壯麗たる日光山の事蹟につき明細に記せるものは實に汗牛充棟も啻ならずしかも時日の變遷は在來の史書を以て到底滿足を得ず著者即ち幾多の舊史漫筆と幕府の諸記錄に據りこれを現況に照して史的考證を試み且つ文中一々精巧美麗なる寫眞銅版木版二百餘種を挿入して通俗に記述せるもの是を本書と爲す苟も日光一山の事蹟と沿革を詳細に知らんと欲するものは宜しく本書を繙くべきなり

第四編

日蓮宗各本山名所圖會

全壹冊洋裝菊判美本
正價郵稅　未定

著者は宗祖日蓮の垂跡の靈地として將た一宗の大本山として幾百萬の信徒が渇仰禮拜しつゝある久遠寺、蓮永寺、法華經寺、藻原寺、誕生寺、妙本寺、龍口寺、本門寺等を始め一宗に於て尤等閑に附す可らざる靈蹟地は皆親しく探見し大は各寺の由緒沿革より小は一片の墓標に至るまで一々舊史に考へ各寺の靈寶記錄に參照し記事は極めて平易明細に編述し添ふるに各寺院の重寶建築物室内の模樣風景等美麗なる寫眞銅版石版木版三百餘種を挿入したれば一は史家の參考とすべく信者の珍寶として座右缺く可らざる良書なり

續刊

- ●第五編　善光寺名所圖會　全壹冊洋裝菊判美本
- ●第六編　高野山名所圖會　全壹冊洋裝菊判美本
- ●第七編　成田山名所圖會　全壹冊洋裝菊判美本
- ●第八編　永平寺名所圖會　全壹冊洋裝菊判美本
- ●第九編　比叡山名所圖會　全壹冊並裝菊判美本

（丁の五）

天城半海君著　小峯大羽君畫

少年商業文庫

（本年度創刊）

每月二回
發行全部
貳拾四册
菊版洋裝

商業は極めて趣味あり又極めて平易のわざあり、之に關する教育豈ひとり趣味無きの理あらんや豈ひとり平易ならざるの理あらんや、而も商業教育に關するの書枯淡無味人をして讀むを厭はしめ讀んで了解に苦しましむるもの比々皆然らざるはなく遂に商業上の智識を少年の頭腦に注入するは殆と望むべからざる一大難事なるかの如き感を一般教育家に懐かしむるに至りしは眞に實業上教育上の一大恨事にして其責任實に著述者其人に歸せざるを得ず、天城半海君夙に此に見る處あり多年の實驗と識見と學才とを以て商業教育上に一生面を開かむとし平易にして趣味ある商業書類の著述に從事せらるゝもの已に十年其書の一たび出づるや每に江湖の歡迎する品となり類似の群書をして殆と顏色な

第壹編▲勤儉貯蓄
第貳編▲商業の栞
第參編▲海外金傑譚
第四編▲商業通信
第五編▲日本金傑譚
第六編▲商人修身訓
第七編▲日本商業地理
第八編▲致富要訣
第九編▲商業計算法
第拾編▲東洋貿易地理

からしむるの觀あるは君が一種の妙技之をして然らしむるとは云へ又實に實際の必要を滿たすの價値あるが爲めにして其教育上實業上に貢献したるの功績識者の既に公認する處たり、然れども君が從來の著多くは學校教本の目的に成るを以て自から文部省の法令に拘束せられ爲めに幾多の趣味を殺かれ却て實益を擧ぐる能はざるの遺憾のみならず亦教育界實業界の共に遺憾とする所なり、是に於てか今や君は更に少年商業文庫の編纂を企て文部省の法令以外に立ち輕妙多趣の筆を以て多年の懷抱を擅まゝに吐露し商業教育に關する百般の智識を少年の頭腦に注入し以て國家が商業教育を奬勵する所以の本旨に副はしめんとす、文庫收むる所の事項下揭の如くにして每編談話躰の文を以て高尚の學理を極めて平易に解説し讀者をして學理に接するの感無くして直ちに學理の要旨を會得せしめ一篇のお伽草として誦讀し興趣味々たるの間に知らず識らず商業上の智能と性格を具備せしむるの益あり、商家子弟が家庭の讀み物として此上のものなかるべく又實業補習學校實業夜學等の課外讀本として好適の文庫たるべし江湖の少年諸子是非購讀あれ

第拾壹編▲内國商品誌
第拾貳編▲帳簿整理法
第拾三編▲外國商品誌
第拾四編▲日本商業小史
第拾五編▲經濟大意
第拾六編▲取引所
第拾七編▲株主の心得
第拾八編▲運輸と保險
第拾九編▲物價と金融
第貳拾編▲銀行と手形
第廿一編▲外國貿易
第廿二編▲歐米貿易地理
第廿三編▲世界商業小史
第廿四編▲海外商業事情

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

蠶業叢書

福島縣立蠶業學校教諭 森正恒君
縣立宮城農學校教諭 井上隆君 共著

製絲新論

正價金三拾錢　郵稅八錢

我邦生絲の欠點多く爲めに海多需要者の非難を蒙むる事の一再にして止まらさりしは洽れく世人の知る所而かも其聲大なるに比し其實蹟の擧からさる幾多原因有つて然らしむべしと雖とも蓋し製絲上に關する知識の程度一般に低きにより甚たしきに至りては婦女の手に一任して又た顧みる事なし彼の幾多蠶業の書あるに拘らす事の製絲に渉るもの甚た少きを見ても亦た其の一班を窺知するに難からす豈に蠶絲業の一大痛恨にあらすして何ぞ弊舘此の書を刊行するの微衷又た玆に外ならす本書の說く所能く學理に適し實驗に合し寸毫の誤りなきか故に一度之れを公にせんか斯業を利する事の決して少々にあらざるべきを信す乞ふ世の製絲家たると養蠶家たるとに論なく苟くも身を蠶絲業に委するもの須らく一讀の榮を給はらんことを

既刊

- 第一編 蠶業通論
- 第二編 生絲撿查論
- 第三編 栽桑新論
- 第四編 桑樹病害論
- 第五編 蠶体解剖論
- 第六編 殺蛹乾繭論
- 第七編 蠶病論
- 第八編 蠶業經濟論

續刊

- 第十編 養蠶新論
- 第十一編 蠶体生理論
- 第十二編 多化蠶飼育論

▲正價 一冊三拾錢六冊壹圓七十錢十二冊圓三十錢郵稅一冊六錢ヅヽ

（丁の八）

發兌元　東京日本橋區本町　博文館



第參卷第貳號

婦女處世の要義

何人も決して餘分に飲食すべからず、況んや節制婦は人の美德なるに於てをや。自他の益にならざる事を談ずる勿れ、さなきだに婦人は言葉多きものなればつゝしむべき事なり。益なき事に物を費す勿れ、況んや金錢をや是れ儉約の要義なり。事を成すに時間を定めよ。物を置くに場所を定めよ。是れ家を整へ家を守るの要義なり。身體は清潔なるべし。居室は洒掃をせよ、衣服は汚れざるやう注意すべし。是れ婦女たしなみの第一たり。事に臨んで心を落ちつけよ。決して物に驚く勿れ、縦へ災禍の身に及ぶも虚心平氣となりて善後を處置せよ決して煩悶の愚に陷るなかれ。すべて極端の事を爲すべからず、みだりに高き望みを抱く勿れ、奢侈の心を起す勿れ、他人の榮華を羨む勿れ、世の流行に目を迷はす勿れ、常に心を優くして事に臨み自個の平和を全ふして、世の益をはかるやうつさむべし。是れ平和國の大哲人フランクリン翁の格言なり。

婦人に對する希望

子爵 渡邊國武

わたくしは一年有餘歐米諸國を歷遊し文明國百般の事情を觀察して日本敎育の革新、社會風俗の改良に就いて愈々宿論を實行するの急要を感じましたが、殊に女子の地位女子の敎育に關して最も深く感じたのであります。元來圓滿なる家庭が集合して健全なる社會を作り、健全なる社會に於て所謂憲政の完美も始めて期することを得べきものとすれば、今の時に當り此の國に於ける政治問題は結局女子問題に外ならぬのであります。

今日のやうに日本の女子の地位が低くては到底圓滿なる家庭を見ることは出來ぬのである、夫は親友を以て妻を待ち妻も亦た親友を以て夫を遇するやうにならなければ社會の健全なる發達は望むべからざることである、男子は女子を玩弄物のやうに視做し女子もまた男子の被玩弄物を以て甘んずるやうな事では迚も駄目である、元來日本の女子は獨立心を缺き又責任心に乏しいやうである是等は歐米の女子に比較して大なる懸隔がある我國の婦人は須らく自覺する所がなければならぬ世間には働きのある婦人が全く無いではないが眞實責任を知るものは寔に稀であらうと信ずる。

勿論日本の女子敎育は賢母良妻を養成するを目的としてよろしい、けれども今日の如く徒らに學藝を敎授することにのみ傾いて女子に最も必要な品性の陶冶を後にしては困るのである。女子が感情的である丈け男子より

も一層品性といふことに重きを置かなければならぬ、品性のない女子は假令學問や才能があつても賢母たる本職を盡す事が出來ない又良妻たる責任を完ふする事が出來ない且又當今各學校に於て女子に授くる學藝は一般に虚飾的であつて實用的でないやうに思はれる、滔々たる天下に理想もなく性格も卑く而して實用的の智識を備へざる婦人ばかり出來るやうになつては國家の前途の爲め實に慨嘆せざるを得ぬのである、虚飾的の學問よりも實用的の智識は必要であるか何かは扨て措き品性の淘冶は最も肝要である、換言すれば教養あり、品格ある男子より敬愛せらるべき女子の多く出づることを希ふのであります。

男女の交際といふことも次第に適當に其道を開かなければならぬことゝ考へる、然して後に始めて男女相知り相擇びて婚姻することゝなるのである、男女の交際といふことに關聯して一言したいことは談話の修練である女子の談話は男子に對して一種の力を有するものであるから、大に修練することを望むのである。日本の習慣では婦人同士が相集りて喋々とお談話はするけれども扨て一朝男子の前に出るときとなつては一語も吐くことが出來ぬのは肝腎な言語の修練をせぬからである、且つ又婦人同士が寄り集つて相語る事柄に就ても之を歐米の品性あり、教育のある婦人に較ぶれば其卑陋なる實に赧顔すべき限りである。品格あり理想あり而かも修練せる女子の談話を耳にすることを得たならば家庭の趣味を加へ幸福を増し、隨て社會の健全なる發達を助長することが出來ると思ふのであります。

（完）

歐米諸國の慈善事業

男爵　澁澤榮一

皆さんこの四恩瓜生會と申すは元來慈善を目的とするものでありますからこれに就て何か述べやうとおもひますが幸ひ私は歐米へ旅行して商工視察の傍ら少々慈善事業に就て取調べた處ろもありますから一寸その大躰を申述べませう。扨て私が參りました米國のニユーヨークと申す所は亞米利加の首府ともいふべき繁華な市でありますが、こゝより三四里ある、費府といふ處にジラルトコレッヂといふ大學校がありますこれは三十年前佛蘭西から米國へ歸化したジラルトといふ人の創立したものであります、ジラルト氏は十五六歳の時に米國に歸化して事業を起し其一生に於て大身代を作つた人であるが元來妻子を持たない人であるから死ぬる時に自分の財産を擧げて費府の貧窮の人の爲めに教育事業を起して呉れとの遺言で遂に此學校は起されたのであるその財産は六百二十五萬弗、日本の金に換へると千三百五六十萬圓となります。この莫大な財産を悉く貧民教育に投じて起つた學校であるから、そこへ收容された生徒の數は現に千六百三十人の多數に上りその建築物の如きも頗る宏大なものであります、一躰米國といふ處ろは地價の高い處であるから餘程の富人でも廣い屋敷を持つ事は出來ない、然るに此の學校はその校内極めて廣く、講堂、寄宿舍、教室、工場等頗る宏く且つ完備してその教育事業も盛大で又頗る親切であります、大抵六七歳から二十歳位まで之を教育し、それ以上でも種種適當な事業に從事せしめ社會に立たしむるのであります。

それから又獨逸國では勞働社會に對して中々盡して居ります、彼の有名なクルップ氏の慈善事業などは大に世

界人の注意を惹くべきものであるが、即ち寄宿舍を設けて多數の人を收容し、最も廉價に且つ尤も適當に休養せしめて居る。殊に此の寄宿舍の方法は宛然たる一個の市をなして學校あり、敎會あり、倶樂部あり、家屋の構造は長屋造であるけれども九尺或は六尺位に建築され若しその中に老人があれば其老人に年金を與へ、又鰥寡孤獨の者にはそれ相應な養育法が立つてゐるから勞働者はいづれも皆安心してその業務に從事するのである。獨逸皇帝も又大に此の事業を賞揚せられて此の寄宿舍に臨御の際には庖厨に在つた鍋の蓋を取つて此れを見給ひしといふ事である。で皇帝は是等勞働者が如何なる食物を採りつゝあるかに御心を配らせられた次第である、又皇后陛下も同じく此の寄宿舍に臨御になつて二階の窓から諸所を眺望されたといふので其の窓も又今紀念として遺されてあります、兎に角皇室が斯る慈善事業の爲に御熱心であるといふ事は誠に羨ましい次第といはねばなりません。

次に英國では此の種の事業を廣く見る機會を得なかつたけれど、倫敦附近にアレキサンドラツラストと稱するものがあつて、同じく勞働者に向つて尤も安價に食物を供給してゐます。工人等が平日の外に稍や美味な食物を欲する時には尤も好都合に此處で供給する事が出來るのである。現皇帝陛下が未だ皇太子であらせられた當時此所で貧民と一所にスープを御喫りになつたといふ事である。此所に注意すべきはすべて英國の救助法は個人的の傾向を有してゐる、即ち此の會でも價を拂つて切符を買つてそしてその切符で以て此の所へ這入るのである、こうすれば救助せらるゝ方でも兎に角價を拂つて之を償ふのであるから唯人から物を貰ふのとは大に感を異にして救はるゝものでも乞食のやうな考へを持たないのである、これは實に慈善事業の習慣としてよい習慣と言はねばならない。

（完）

（右は翁が西區瓜生會大會に於てされたる演說の要領なり）

女子のつとめ

棚橋絢子

貞操とは妻たるもの丶一切の德義を稱するものにして唯俠義の守節のみを云ふにあらず、守節が貞操に於て最重要なることは云ふまでもなけれど唯だ是れのみを以て貞操とは稱すべからざるなり、されば平常に於て能く家政を整理し良人をして後顧の憂なく其力を志業に盡くすを得せしむるは妻たるもの丶大義務にして能く之を行ふこと能はざれば貞操の德に於て缺けたることなしとは稱すべからざるなり

凡そ女子は人の妻となるべきものにして妻たるものは直接に社會の事業に當らずして細心謹慮以て良人を內に助け良人をして事業を成就せしむべき者なり、是れ即ち女子が天の人を生じたる道を盡くし其天職を完うする方法にして間接に社會の事業を成すものなり、たとひ其事業を成すに直接間接の別ありとするも其は單に其方法を異にするに止り之を成すに於ては全一なりとす、婦女の職責かくの如し故に營家は婦女たるもの丶重要なる務なり、すべて人間の志望行爲は主として其經濟狀態の制御を受くるを常とするを以て營家の務は家政を整理するを以て最大要務なりとす、而して家政の整理には積極的のものと消極的のものとの二あり、此兩者共に行はれて初めて其整理を見るを得べし、二とは何ぞや其一は勤にして是れ即ち積極的のものなり其二は儉にして是れ即ち消極的のものなり。勤と儉と相俟ちて營家の事成るべし、勤と儉とは鳥の兩翼車の兩輪の如しと

云ふべし、宋尚宮の女論語に是等の事詳しく載せたるあり今之を抄説し且つ自説を加へて少しく述ぶる處あらんとす

夫れ家を起すは勤勉にあり、人能く勤勉なれば其家必ず起り、之に反して怠惰なれば其家必ず傾くべし、能く儉を守れば富み奢らば貧しからむ、女子たるもの其日常の生活は因循なるべからず規律ありて敏活なるべし、因循にして規律なきは即ち怠慢なり、人の一生の計は勤勉にあり、勤勉の一語能く一生を通じて人を幸福にするものなることを思ふべし、事物は其初に之を匡し其計をなし其道を考へ着々として其進程につかざるべからず一年の計は春に在り一日の計は朝にありとは明言といふべし

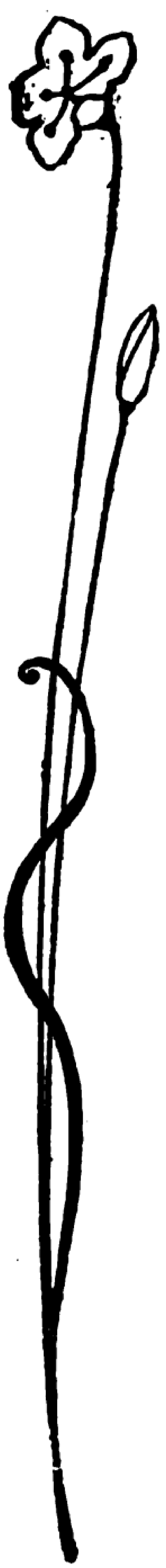
偖て一家の主婦たる者最も注意すべき事の一つは其衣食住を清潔にすることなり、清潔なることの衛生に必要なるは勿論にして其上人の心を高尚にし爽快を覺えしめ秩序を立て荒廢を拒ぐ等の德あるものなるが故に清潔は營家の一要務なり、されば主婦たるもの辛勞を厭はず能く掃ひ能く拭ひ器具を整頓し能く洗ひ能く濯ぎ衣食住共に潔淨快濟なる樣心掛くべし、其家其身分に應じて種々營家の業務を爲し辛勤を厭ふことなく或は食品の原料の蒐集に或は調理に心を用ひて遲慢あることなく物品の荒廢せざる樣注意し一粒一紙片だも之を無用に歸せしめざる樣にこゝろがけ、若し酒なり肴なりあらば存積して賓客のあらん時に備ふべきなり、それ能く勤勉して怠ることなければ大富は命に由ると云へばあながちこれのみによりて大富に至るとは期し難しとするも小富は期して必ず得べく家に餘蓄あり一家和合し享福極りなきに至らむ、又婦女たるものは能く心を盡くして其志操を守り言語擧動を高潔婉雅ならしむべし、昔より賢婦烈女と稱せられし人々の行爲はみな今日までそれ〳〵

傳はり人々の知る處なり、人もし不幸にして人事の變に際會せば平常の心掛けを忘れず平常の志を失はず正しき道を踏みて少しも屈することなき樣に修養すべし、平日の言語擧動に於ても婦女たるものは自ら注意を加へて輕卒のわざなき樣心掛くべきなり、即ち猥りに外出することなく、又客などの在るとき此方にて猥りに聲音を露はさゞる樣に注意すべし下女などゝ私語嬉笑することなどあるべからず

たとひ書を讀み時に或は音樂を弄ぶにも高潔なるものを撰みて之を讀み之を弄ぶべし、止むを得ずして夕暮なとに外出し來往することあらば必ず燭を秉るべきなり

夫婦は其義至て重く其情極めて厚かるべきものなるが故に若し不幸にして良人を失ひ未亡人となる樣のことあらば亡夫の遺志を奉じ己が志を守り心を堅め家を保ち業を持し祭祀を怠らず墳墓を整頓し子女を教育成人せしめ、若し舅姑は在まさば心を盡くして奉養し慰籍すべし、かくてこそ婦人の節義を完うし人情を圓滿に伸ぶるものと云ふべけれ、此事は夫婦の情として自ら斯くあるべき事ならんが故に今更こゝに説くを要せざるべし、未亡人の再婚につきては唯之を人情に問はんのみ

要するに女子たるものは勤儉の二字を心に銘しまた古來の貞婦烈女の心事を知得し幼より心身を修養しわれもむかしの人に愧ぢざらん樣にこそ期すべけれ



婦女雜観

鬼も十八

大町桂月

櫻三月、あやめは五月、女盛りは十八九。女は社會の花也。十七八の娘は、女の中の花也。ふつくらと肉つき來りて、その姿はすらりとしたり。肌はあぶらぎりて、光澤あり。頬は常に微紅を潮す。聲は澄みて清し。全躰にいき〳〵して、目口の揃はぬ女も、この際は、とことなく愛嬌あり。容貌の清きにつれて、心も亦清し。無邪氣にして、貪慾なし。この際は、木の葉の落つるも可笑しとかや。小言いはれても笑ふ也。多少の嬌羞を帶びて、一層かはいらしく、げに此世ながらの天女かと思はるゝも、誰か知らむ、少時の菩薩、年長じて夜叉と化け去らむとは。

なげかはしき哉、光陰、人を待たず。女の心も姿もうるはしきは、僅か二十歳前後の數年間也。先づその容貌を見よ。ふさ〳〵として、黑く、長く、光ある髮も、産する度毎に、拔けて少くなり、短くなり、光なくなり、赤つちやけたる色となり、胡麻鹽となり、終に灰色となる。生へ際ぬけあがり、頭の中央に禿を生じ、凸凹をも生ず。つや〳〵した顏の色も、生色なき土色となり、眼は慾と共に深くなりて、凄く、大理石の如き額に、辛苦と共にしわの數を添へ、白き齒は黃になり、紅き唇は青紫になり、すらりとして、骨を露はさぬまでに輕盈たりしからだ、或は毒々しく肥り、或は瘦せて骨を露はし、腕や、股や、梅干の如く、ひしなび、脊中も曲り、腰も曲る。細面の色白く、目口そろひて上品なる顏の女は、老いても、見よき所あれど、丸ぽちやの愛嬌にてもちきりたる顏の女は、老いて愛嬌なくなると共に、幾んど別人となる。元來の醜女は、年老いては、遂にはんにやの面相を呈す。おそろしや、おそろしや、百年の戀も茲に覺め果てざるを得ず。

心の變化は、更に甚しきものあり。はゝと、輕く無邪氣に笑ひし少女も、年とりては、或は愁眉をとざしがちなるものあり、或は青筋たてゝ、怒鳴るものあり。中には笑をつゞくるものあれども、最早可憐無邪氣なる笑に非ずして、意味ある笑なり、いやらしき笑也、媚びて笑ふにあらずんば、輕蔑して笑ふ也。愛に輝きし眼の、慾にかゞやくを見よ。清泉の涓々たるが如く清かりし聲も、邪念に濁りて、惡口たゝくと多し。あはれや、高等女學校にて、普通學をまなびたればとて、たかの知れたる學問也。とても社會を解する能はず、人生を解する能はず、竟にわけのわかりたる人となる能はず。胸はせまし、膽は豆の如し。女子の天地は、せまき家庭也。一家の少しばかりの不利益を、國家の存亡よりも切に感ずる也。人を容るゝ能はず、又恕する能はず、感情に偏して、理性明かならず、下らぬ事に怒つて見たり、泣いて見たり、恨んだり、愚痴をこぼしたり、胸には、瞋恚のほむら絕えず、友の出世を羨み、そねみ、はては我亭主の金もたぬにも愛想をつかすべし。嫁は必ず姑と衝突し、細君時に下女とも衝突す、ひがみ根性益多くなりて、理性益くらし、人の惡口いふより外には、話柄をもたず。うはべばかりの好意に、うれし涙をこぼして、口に苦き良藥の味を解せず。恥づる心はうせて、深くなるは、貪慾ばかり。一身の事のみ氣にかゝりて、思ひやりなく、あばずれて、人情には痲痺し、惡がしこくなりて、義理に眼をふさぐ。やさしくすれば、あまへて、つけ上り、やかましく言へば、泣いて恨む。嫁をにらむ面相は、まるで夜叉也、木の葉の落つるを見て笑ひし事ありし少女とは思はるべくもあらず。迷信益ふかく、御幣かつぐこと益多く、心中片時もやすまらずして、下らぬ事に煩悶す。氣の毒にもあり、又かはいさうにもあれど、智惠あれば、あるで、牛うりそこなひ、智惠なければ、まるで道理がわからず。依賴心多きが故に、不平多く、人をあてにしすぎるが故に、失望多し。あはれや、歲月の仇波は、彼が淸き姿を變じて、惡鬼の相に化せしめ、浮世の仇波は、彼が無邪氣なる心をそう

ちてはして、ひがみ、そねみ、瞋恚、怨恨、不平、愚痴、偏狹、失望、貪慾、頑冥、沒條理、沒人情、猿智惠、利己主義の權化とならしめぬ。

鐵石の膓なくして、浮世の仇波に漂ふかよわき女子こそはあはれなれ。女子とても、かく成りたくはなかるべけれども、無情なる社會の境遇に驅られて、自から然らざるを得ざる也。さは云へ、容貌の歳月と共にうつりかはるは、人力を以て如何ともする能はざれども、心の方は、女子の覺悟如何によりて、容貌の如くには惡くならざるを得べき筈ならずや。英雄とは、幼兒の心を失はざるものなりとかや。蠻勇をふるひ、權謀術數を弄するも、胸の底は、幼兒の如く、無邪氣也。盤根錯節に處して、從容たり、死生の間に、自若たり。人を咎めず、天を恨みず、未練を言はず、愚痴をこぼさず。よしや女子は此域には到る能はずとも、せめて十七八の無邪氣なる心を、姑の時代までも、もちつゞけるだけは、出來さうなもの也。敎育の本旨は、則ち此に存す。この覺悟なくして、普通學をまなび得たりとて、何かせむ。琴を習ひたりとて、何かせむ。茶の湯、生花が出來たりとて、何かせむ。

似たもの夫婦

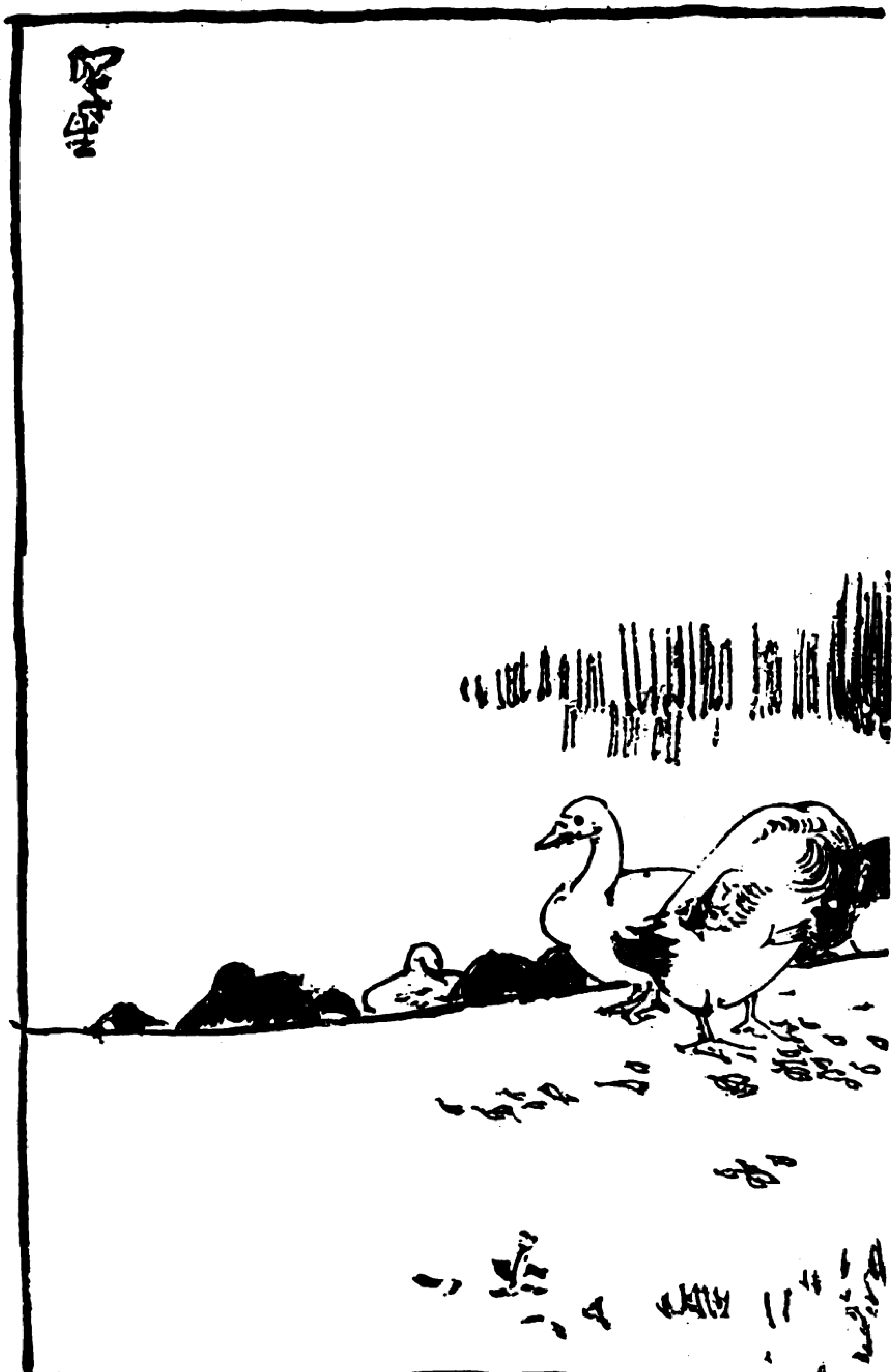
二三十年も一所に住めば、似た所も多くなるべき筈也。大根が嫌ひにて、食たとのなき男も、妾の大好物也。殊に丹精して調理したるなれば、せめて一口はめしあがり給へと、やさしき言葉と共に、嬌眸をさしむけられて見れば、惚れたが弱味、それでもなはいやとは言はれず。いや〳〵ながらも、ひと箸つけて見るは、大根を味ふにはあらで、女房の情を味ふ也。はじめは、苦きも、なれては、さほどにもあらず、終になれ〳〵てうまくなり、好きになり、互に箸にてつゝつき合ふやうになりて、益〻其味を覺ゆべし。似寄るは、食物の上のみならず、士族の娘も町人に嫁すれば、おかみさんじみ、百姓に嫁すれば、土臭くなり、酒のみに嫁すれば、酒のみになり、義理知らぬ男に嫁すれば、義理

知らぬやうになり、性格人品の上にも、少なからぬ感化をうくるものぞかし。

さは云へ、感化といふも、程度のあるもの也。由來女子と小人とは、養ひ難し。女も幼き時は、敎へて化すると出來ざるにあらねど、惡き家庭に生長して、二十餘にもなりたる女は、賢夫之を娶るも、容易には感化すべからず。太公望の妻を見よ、ソクラテスの妻を見よ、天下の宰相、千古の敎育家を以てするも、なはその妻を如何ともする能ざりしにあらずや。女にのろきが男の常とは云へ、亦以て二十歲以上の女



を感化するとの困難なるを知るべし。それにつけて、感化しやすきうちの家庭の教育しつけが大切なる。



もとより夫婦が、犬と猿とよせたやうに、まるで相反して居りても困つたものなれど、或る點までは、異なりたる所あるがよし。教育家の妻に、教育家あれば話しが合て、一寸よきやうなれど出ても教育、入りても教育、起きても教育、寝ても教育と、教育づくめにて、おし通されては、たまつたものに非ず。夫の門出に涙をこぼすやうでは、軍人の妻として不適當

なれど、軍人の氣象をうけて、粗豪磊落、夫にまけず酒のみては、家政がたちゆかざるべし。陰氣な男に、陰氣な女が添うては、一家益陰氣になるべし。氣隨な男に氣隨な女では、時々つかみ合ひが起るべし。男が豪放なら、女はつましく、男が氣の小さき人ならば、女はしつかりして居り、男がてせつくならば、女はゆつたりした處があり、男が歌に長ずるならば、女は繪に長ずといふやうに、陰陽相助け、強弱相補ふやうにありたきもの也。友に求むべきものを、妻にもとむるはとんでもなき間違ぞかし。

道樂息子の母

墮落せしめむとて、子を可愛がる親は、あらざるべけれども、可愛がるの餘りに、あまやかし、あまやかすの果は、子をして自墮落とならしむ。言ひなり放題に、何でも買ひて、幼時より贅澤の味を覺ゆる也。奮發心起らずして、勉强がきらひ也。遊ぶとが好きなり。酒のむとがすき也。叱られたるとなきまゝに、てはいものがなくなり、子故の闇に迷ふにつけてみて、口先にてごまかして、いくらでも金をつかみ出す也。斯くて行末は推して知るべきのみ。長じて勘當せらるゝ息子は、必ず幼にして甘やかされたるもの也。

父親の威嚴、母親の慈愛、剛柔相待つて、家庭の敎育を施すべきものなれども、母親が餘りあますぐるは不可也。男は、心を外に勞するものなれば、こまかく家庭の事に注意するに由なし。隅から隅へと氣をつくるに由なし。家庭敎育は、母親おもに之に任せざるべからず。隨つて多少父親の威嚴を兼ねし所なかるべからず。人は如何に賢明なりとも、惚れた目には、痘痕もゑくぼと見ゆ。慾目には、我子が利口にも、正直にも見ゆるもの也。妄りに他人を信用せざるも、我子をば信ず。況んや之を深く愛するに於てをや。他人には利口なるも、我子には馬鹿に、他人には、けちなるも、我子には慾なし。かくて子をあやかせば、子は親をあなどる。父われを叱れば、母かげにまはりて我をなだ

ひるに、益くみしやすしと見くびる也。母は中にたち、父親の叱りを無理とも思はねど、子が可愛くてたまらず、ひどい目にあはせたくなし。追ひ出されても、なほひそかに臍繰金をみつぎて、依然として遊蕩費を供するに、子はさまで難有しとも思はず。母の前に泣きて、かげにて舌を出す。世に親の愛着こそあはれなれ。父親は母親を責めて曰く、貴樣が甘すぎる故、あのやうになれりと。母親辯じて曰く、いや、あなたがやかましすぎる故、あのやうになれりと。あゝ、誰か烏の雌雄を知らむ。われ故に家にかゝる爭あるべしとも知らで、道樂息子は、美人の膝に、如何なる夢をか見るらむ。

夫への注文

假りに妻に代りて、夫に注文せむ。

一、氣烟を吐くも外、力を注ぐも外、氣張るも外、家にありては、たゞおとなしく妾の尻にしかれて居り給へ。

二、妾は、やきもちやき也、もし浮氣し給はゞ、角を生じ侍らむ。

三、少くとも、月に二度は妾をつれて外出し給へ。月に一度は芝居を見せ給へ。新衣を買ひてたべ。

四、舅、姑、小姑を家によせつけ給ふな。もし同居し給はゞ、妾は直に此家を去らむ。

五、毎月の收入は、一切妾に渡し給へ。その中より小遣錢を御身に參らせむ。

六、送別會、歡迎會、懇親會等のおつきあひは、一切斷りて、たゞ妾の側にへばりついて居給へ。

七、琴の稽古、歌の稽古、生花の稽古、茶の湯の稽古、御身の名代の訪問、親戚への訪問、舊友への訪問など、外出しげゝれば、妾にも抱へ車置きてたべ。

八、妾の爲めに養生して長生してたべ。されど、人の存亡は期し難し。せめて五千圓の生命保險に入りて妾をして、少しは安心する所あらしめ給へ。

九、義捐、寄附、友人や親族への義理には目をつぶ

りて、妾への遺産を多くし給へ。
十、一家の事は、妾にうちまかせて、一切、口を出し給ふな。

妻への注文

假りに夫に代りて、妻に注文せむ。
一、おとなしき女がはしきもの也。それでも、おとなしすぎて、ぼんやりして、氣が利かなくても困る。氣が利きて、そしておとなしきを望む。
二、顔は美なるを望む。されど化粧にばかり念を入れて、家事をよそにしては困る也。
三、躰は壯健にわりたし。わづらはれては迷惑也。
四、妻方の厄介の舞ひ込むことは、まつぴらお斷り申す也。
五、右むけと云へば右、左向けと云へば左、何事も我命に從つて居ればよし。わが爲すとに、一切喙を容るべからず。
六、よそに宿泊りて歸るとも、妄りに邪推して、やきもち燒くべからず。
七、朝は我より先きに起きて、化粧して、我を待つべし。晩方も更に化粧して、我が歸るを迎ふべし。笑つて晩酌の盃に侍すべし。
八、妄に衣服、芝居、遊山などをねだるべからず。
九、我に斷らずして、一歩も門外に出づべからず。
十、一切金の出入を問ふべからず。たゞわが與へたる小遣の中にて、つめて、ちゞめて、儉約すべし。毫も贅澤を言ふべからず。

女房天下

家貧にして、良妻を思ひ、國亂れて、良相を思ふとかや。もとより牝雞の晨を司るは、慶事に非ず。世の所謂嚊天下にて、亭主が女房の尻にしかるゝは、ほめた話に非ず。されど、男子は社會に、はたらくもの也。その力を家事に勞するは、牛刀雞を割くに類す。

之に反して、女は、一家の支配者也。從つて一家の事に關しては、多少の權力なかるべからず。

世の所謂嬶天下にも、種類多し。閨閥によりて立身し、細君の持參金によりて出世したるものは、嬶大明神とあがめ奉らざるを得ざるべし。亭主智あり、蠻勇あるも、女にのろき男にて、女つけあがりて、自から横着になれるもあるべし。亭主社會の事に忙くして、區々一家の事を觀るの遑なく、萬事細君にうちまかせて顧みざるもあるべし。さは云へ、亭主は、一家の代表者也。少し大なる事件は、自から之を決せざるべからず、何事もいづれ家内と相談してお答へ申さむと云ふが如きは、傍いたきものなるべし。

まづ茲に軍人の夫婦ありとせむ乎。夫は軍人故、家は留守がち也。また一朝事あれば、いつ討死するかも圖られず。かゝる家の細君たるもの、夫が軍の門出にのぞみて、夫婦の愛情にひかされ、愚痴の涙をこぼして、夫をして後髪ひかるゝの思あらしむべからず。軍人戰死すれば、遺族扶助料あれども、極少額にして、家賃と米代とがあるかなきかぐらゐのもの也。扶助料以外、自活しうるだけの藝能を有し、立派に子をそだつるだけの智恵を有し、舅姑によく事ふるだけの情誼を有する細君ならば、夫は戰場に出でゝも、いかばかりか心やすかるべき。軍人たるもの、もとより一死を國に許す。命を惜むものは、一人もなかるべけれど、身後、扶助料のみにては生活の出來ぬ家族の事を思へば、鐵石の腸も寸斷せざらむや。而して細君たるもの賢にして能ありて、夫をして毫も内顧の憂なからしむるは、その一家にとりても仕合也、その夫にとりても仕合也、社會にとりても仕合也。かゝる調法なる細君ならば、夫たるもの、大に之を調法がりて可也、之に一家の權力の大部分を割き與へて可也。即ち、或る意味に於て、嬶天下の實を與へざるべからず。

軍人たらずとも、男は、事業に、學問に、藝術に、力を注ぐべき事多し。一家の私事に、かれこれ心を勞するは、損な話し也。細君賢にして、毫も夫をして内顧するを要せざるやうなものが、ほしき也。之を亭主

の得手勝手と思ふは、あやまれり。實はこれ社會の爲め也。國家のため也。かゝる細君ならば、自から一家に於て權力あるべきはず也。

要するに、細君賢にして能あれば、自から權力あり。細君權力ある家は、よく整頓し、よく繁昌す。之に反して、細君の權力なき家は、うまく立ちゆかざるが常也。細君賢なれば、家は決して貧乏とはならざるべし。啻に貧乏ならざるのみならず、その子も亦賢也。古來腹は借りものとの言あれども、はたけ惡くしては、作物みのるものに非ず。細君にして身躰よわからむ乎、その生む子もよわし。細君にして愚ならむ乎、胎育、家庭敎育がよく出來ざれば、子も亦多く愚とならむ。されば、英雄の子には、豚犬多けれども、偉人の母は必ず賢なるぞかし。

女子のはたらくべき處は、主として家庭なれども、綿密にして、感情のこまやかなる女子は、社會に出でゝもなすべき事業多し。賢妻は、一家の寶なるのみならず、社會の寶也、また國家の寶也。母を作れとの言は、千古不磨の名言也。野蠻の社會にありては、女子はたゞ器械視せられて、毫も權力なし。開化にすゝむほど、女子の權力生ず。女子の權力の消長は、實に國の開化と不開化との分るゝ所也。こは歐米と東洋諸國とを比較しても、わかること也。而して、女子を賢にし、能あるやうにして、一家もしくは社會に活動せしめむには、女子敎育の盛なるを要す。余は此意味に於て、女子を重んず、從つて女子敎育を重んず。

▲獨逸皇帝秘藏の骨牌　獨逸皇帝維廉陛下の秘藏なる一對の骨牌は、歐洲の貴顯及び有名なる美術家の肖像より成立ち、非常に美麗なる者の由なるが、其繪模様を記さんか、ハートの女王はヴイクトリア女皇クラブの女王はエリザベス皇后、ダイヤモンドの女皇は伊太利のマガリエト皇后、スペードの女王は露國の皇后にて表はされ、スペードの王は羅馬法皇、クラブの王は伊太利王、ダイヤモンドの王は白耳義のレオポルド王、ハートの王は獨逸皇帝自身にて表はされあり、其外四名のジヤツクは四人の國務大臣にて、エースは有名なる脚本作者にて表はしありと云ふ

家庭

庭乃をしへ

野中千代子

忍といふことは善行の一つでありまして、忍とはこらゆることで、物事かんにんすることを申します。忍に二つありまして、一は自身の心にきらふことをこらえて怒らぬのと、又一つはわが心にこのむ物をこらえてむさぼらぬのとの二つで、是は忿と慾との二つをこらゆるので御在ます。忿をしのぶといふことは、人のしわざの我心にかなはないのをこらゆるのでありまして、忿はわが心を亂し、人をさまたげます、心といふものは萬事の本でありますから、忿りて心がみだるれば、いふこととなすことと道理にかなひませぬ。故に忿るときに先づ物をいつてはなりませぬ。忿るときに物いへばかならずまちがひます、是は忿をこらゆる一の手だてゞ御在ます。もしいはでかなはぬことありとも、言葉にいかりをあらはしてはなりませぬ、たとひ心のうちに忿がとけずとも、言葉に出さずして忿がやみて、本心に立かへるまでこらえてをれば、大したあやまりは御在ませぬ。慾をこらゆるのは、酒食好色など申すおよそわが心にかなひてすき好める耳目口腹の慾、貨財や器物の慾を成べくこらえて、ほしいまゝにむさぼらないのであります、朝晩飲食の奉養や身につくことは、衛生のゆるすかぎり輕くして、そうして躰は勞働することが大切です。おごりて酒食の美をこのみおこたりて躰を安逸にしてはなりませぬ、おごらずおこたらぬやうにすれば、第一德を養ひ、次に身をやしな

ひ、次に財をやしなふといふ三つの利益が御在ます、暴飲暴食せずして身躰を勞働すれば、食氣滯らず、氣血はよくめぐり、胃や腸をそこなはずして生命を養ふにごくよろしう御在ます、又躰を動して身を勞すれば艱難辛苦にたへて、孝行の道や學問藝術をならふにつとめよくなりますが、もし身体を勞働せずして安逸になるれば、艱難辛苦にたへかねほどになりて、父母につかへ夫をたすけ子をそだつるつとめをもつらくおもひ、學問や技藝におこたるやうになり、萬一家運が逆境にかたむくやうなことになつても、とても難義苦勞にたへることはできませぬ、のみならずついには病氣がおこり躰はよはりて、孝行のみちをつとめ、學もんや技藝をはげみたくも、できないことになり、かへつて人の厄介になりて家名を潰し世の物笑となるは、世間にいくらも其例のあることだから、よく愼みて何でも人間は心は安靜にし身躰は勞働せねば、なりませぬ、斯樣なわけでありますから、この慾と怒との二つをこらえなければ、義理にそむき、心を亂し、病を起し、金錢を費し、耻をかき、命を失ふやうなことにもなりゆきまして其損害はえらいもので御在ます。

總じて身のわざはひは怒と慾とをこらえないからおこるので、暫時のあひだ怒をこらえずして、われと我身を忘るゝから父母に心配をかけるやうなことになりゆき、是より大きい不孝はありませぬ、そこをしばらくかんにんすればわざはひはなくて喜が御在ます、古人の詩にも、忍ぶこと過ぎて事喜ぶに堪たりとありますが、堪忍しすましてのちは喜ありといふ意でありまして、しばしのあひだ堪忍せねば大層な禍となります、程子も貪慾を忍ぶと忍ばざるとは便ち有德無德を見ると申された程で御在ます。

さておよそ世の中のことは、一天萬乘の天子樣でさへ、叡山の徒と鴨川の水とおほせられたほどでありますから、まして我々どもの心にかなはぬことは、澤山にあると思つてをらねばなりませぬ、ところがそれをかんにんすることがごく／＼肝要で御在ます、之をかんにんしないやうでは、世の中はとてもおさまりはつきま

せぬ、第一衝突が絶えぬことになりますから、交際が圓滑にやはらかにゆかふ道理が御在ませぬ、終には不和になり從て疎濶になりて、僅かにおのれを利せんと思ふもの丶外は、交際を求めてまゐらぬやうに成行ます、さてかほどまでに立至らぬまでも目前てまること は、智識交換の範圍の狹くなることです、第一不愉快の點からいへば、此世界に孤立するより上のことはありますまいから、それは論外といたして、智識交換の要具たる交際を、僅か忍ぶか忍ばないかのために縮少するやうでは、書物と首引ばかりしてそれぬ婦女子のことであるから、外に智識の求めやうはありませぬ、ですから、是はけつして女子に限つたわけでは無論ありませんが、忍ばぬために智識をひろむるたよりを自ら少うするなどは、決して賢き人のいたすことでは御在ませぬ、此のかんにんといふことは、此外萬事に付て極めて大切な關係がありますから、なほざりにおもつてはなりませぬ、今若し忍ばないところが互に怒りうらむやうなことでは、第一睦しかるべきはづの家の内に、はや喧嘩のたえまはありますまい、母や姉は子や妹のわれにつかへやう足らずして、心にかなはねば子や妹をせめ、子や妹は母や姉のめぐみうすくしてあきたらねば、母や姉をせめなどし、其外夫婦親戚の間にしても其通りで、たがひにかんにんせねば、いかりうらみが出來て、父子姉妹夫婦親戚の間がむつましくまゐりませぬ、それゆへに人の行の我心にかなはぬことを、たがいに堪忍してうらみいからねば、一家の内は必ずやはらぎしたしむにきまつてをります、是は家をとゝのふる道で御在ます。又人のあしきことをばゆるしてかんにんし、我身には道をつくして、人に堪忍せらるゝやうな行をせぬやうにせねばなりませぬ。

大ていの人がめい／＼其こゝろに生れついた偏性があるものです、自分の子女やめしつかひに、わるいくせあることを見出したならば、時々告げをしえねばいけませぬ、わらたむればよし、もし其性質がつたなくしてあらためがたいとしれたならば、堪忍してたび／＼せめとがめてはいけませぬ、人の生れ付たくせといふ

ものは、大かたなほらぬものですから、とがめても何の益にもたちませぬ、だがをしゆることは怠らないやうにして、只氣永くいさめをしえて、にはかにさとさうとしてはいけませぬ。古き諺に癡ならず聾ならざれば家翁とならずといふことがあります、その意は家の主人となり主婦となるものは家人の過あるを堪忍しておろかなやうにあれ、かしこだてして明察にすぐるときは、家人はくるしみて家はおさまらぬ、又家人の悪いことをつぐるのを、たやすくとりわけぬやうにして聞かないふりをせよ、かやうなあんばいでなければ家の主とはなりがたいとのことであつて、此ことわざはよく心得おくべきことで、大ていは知らないふりですくせ



ば、わざはひはありませぬ、是は智慧あるものゝすることです、殊に奴婢などのいふことを、一々信ずるときは必ず間違が出來ます、是を聞て信ずるのは愚かなことです、かやうに智慧なきものにたぶらかさるゝのは、眞にあさましいわけですから、よく心を用ひねばなりませぬ。又下部と世間の多くの人は、人の恩をわつくう



けてもわすれやすいものです、是はその人のつねであるから、一々いかりとがむるやうではいけませぬ、かやうな人は必ずかやうに恩をわするゝものとおもつてをらねばなりませぬ、それを一々うらみとがむるのはとがむる方がおろかで御在ます、恩をうけてわすれぬ人は十人に一人もむづかしいくらゐです、これは人のつねの

ならひとおもふ外いたし方は御在ません、もし恩をわすれぬ人があればそれは善人で御在ます、人の恩をうけては長くわすれずに必ずむくわねばなりませぬ、恩をほどこしては忘るゝが良い、恩をたのみにしてはなりませぬ、よく〳〵心得をくべききことで御在ます。

およそ世の中にはあしき道におもむきて、よきことをこのまず、孝悌を行ひ家業をつとめ、書をよみ藝術をならふことをきらひ、少しのつとめをもむづかしがりて、かしらがいたいの氣がなやむのといつて、色々のつとむべきわざをば皆氣がつまるからとてつとめず、父母は唯もう愛におぼれて、只その氣ずいにまかせて放逸をゆるしてをけば、ます〳〵其心はほしいまゝになりて、だん〳〵にならひて性となれば、いよ〳〵よきことをきらひむづかしがりて、氣がつまるとか病氣がおこるとかいつて、つとめぬやうになり、中にも書をよむことをふかくきらふものが御在ます、およそ氣のつまるといふことは、皆よきことをきらひ、むづかしくおもふ氣隨よりおこるやまひでありまして、自分のすきこのめることには、終日終夜心をつくし力を用ひても氣はつまらぬ、たとへば圍碁將棊などこのむものが夜をうちあかしても、氣がつまらぬのを見てもわかります、又蒔繪師彫物師縫物師などは、實にこまかなむづかしいことに、晝も夜も心力と眼力をついやしますが、かやうなしごとは面白くもないのに、家業であればつとめてしますけれども、まだ氣づまり病人となるといふことをきゝませぬ、むづかしきをきらひて氣がつまるといふのは、孝悌の道家業のしわざなどのよきことをきらふ氣隨より起るのでありまして、孝弟人倫のつとめ行はれずして、學問技藝のけいこの成就せぬ本で御在ます、書をよまない人は學問のこと不案内なる素人ですから、讀書學問すれば氣がつまり氣がへりて、病人となり命もちゞまるとおもつてをります、是はそのことはりをしらない愚痴な世俗のまよひで御在ます、全躰學問して親に孝し夫につかへ、家業をつとめ身をたて道をおこなひ、よろづの功業をなすことも、皆むづかしきことをきらはず、艱難辛苦をて

らへて、其わざをよくつとむからこそ成就するのであ
りまして、むづかしいことや、しげきわざに心おだや
かにくるしまずして、一すぢにしづかにつとめてゆけ
ば、後は其事になれて却ておもしろくなり、心をくる
しむることもなくてそのことは終に成就いたします、
又むづかしいとて事をきらへば、心から事をくるしみ
て、つとむべきことをむづかしとするのは、心のひが
ごとです、心のひがごとをば其まゝをきて、事の多い
のをきらふのは間違であります、又煩に耐ふとは、む
づかしきをこらゆることですが、此二字をまもれば天
下のことは何事でもできぬことはないと、昔の人のい
はれた程ですから、何事をなすもかんにんといふこと
が、人生最も必要のことで御在ます、又何事をなすに
も待といふことが大切で、待とは急がぬことは急がず
して、心しづかに思案し注意周到に物事をするので、
かやうにいたせば過が少ないが、事をなすにいそがし
く急なれば必ずあやまちがある、程子と申す人も、事
急なるをもつて敗るゝもの十常に七八といはれまし
た、勿論おこたりいるかせにして、急なることをいそ
がず、時におくるゝは、わるいにきまつてをりますが、
急がぬことは詳にしていそがず、よく思案せねばなり
ませぬ。

庖厨讀本（一）

梅軒主人

奥様の爲め下婢の爲め

庖厨といへば、下女お三どんに委かせて好いような、
極めて淺薄な仕事だと思ふ人は、今日では、よもある
まい。一家の和樂幸福の一部分は、此の庖厨の手際に
繋ることは確かである。主人が外で役々として働いて
歸つて、膳の前に寛いで、『アヽ旨い！』と舌を皷せば
主婦の心持は、どんなであらうか。一家總てが、一室
に團欒して、老も幼も、男も女も、打ち揃つて、『アヽ
結構だ！』と頤を解せば、一家の情合は、どんなであ

らうか。世間には、食道樂といつて、內を外に料理屋などを荒し廻はる人がある。それが果して我が家の庖厨に満足してからのことであらうか。又他家で馳走になることを常に愉快として居る人がある。それは果して他家の料理が我家のよりも好いのであらうか。

何にせよ、主婦たる人は、主人を喜ばせ、一家を滿足させんがために、明け暮れ、日常の料理に心を痛めて、或るときは、「何か變つた献立はあるまいか」などゝ思はぬ嘆息を洩らすことがある。よく〳〵考へて見ると、心底に庖厨の理窟を知つて居れば、色々に變つた工夫も出ようが、何分にも、そういふことは餘り研究もしないで、たゞ出任せの方法で遣るから、此のようなことになるのだ。全躰、庖厨の仕事は、今日の世に、獨り取り殘されて居る。電信、電話が瞬く間に用を辨じたり、機械、轆轤が人力の堪えない重い物を上げ、堅い物を切るなど、實に驚くばかりであるに、獨り庖厨を見ると、相變らず昔のまゝの方法を改めないで、些も進步の姿を認めない。文明の本元たる西洋でさへ、今日の庖厨は、數百年前の舊態を存じて居るとて、痛く攻擊されて居ることである。

梅軒はかくいふもの、料理割烹に明いといふではない。世に百法とか三百法とか又五百法とか、種々雜多な料理法があるといふが、そんなことは全然知らぬ。併しどんな六づかしい又高尙な料理とて、原理は皆一つであらうと思はれる。只々旨くし、柔かにし、能く消化するようにとするに止まつて居るだらう。其れがために、火を入れる、冷ます、切る、刻む、搾る、潤すなど、大躰に於て大なる差別のある筈がない。しかも、其れが何の故に切るか、何の故に熱するか、何の故に潤すかなどの理窟が、一々解つて居れば、一の法を學びて、忽ち二三に應用し得べく、十の法を聞いて、忽ち百に活用することが出來ようと思ふ。此のようであれば、今日の如く、料理とさへいへば、大變の道具と、大變の材料とを以て贅澤な金を使はずとも、簡單にして、而かも樣々の違つた品數を作ることが出來ようと思はれる。どうも料理法といふものが、贅澤なも

のとなるから、世の多くの家庭に適しない、そこで、家庭の和樂幸福の一部分を失うて了ふ譯である。梅軒は、どうかして、日常の芋や蘿蔔や鰯などでも、成るべく旨く愉快に食べられるやうに祈るのである。

そこで、庖厨の膝栗毛といふ理由を說き明かす必要があらうと思ふ。前にも述べた如く、梅軒は料理法を知らないので、只々其の原理を明したいとばかり思ふのであるから、どうせ系統の立つた立派なことをいふのでもない、心に浮んだまゝ、庖厨の缺點を指し、理窟の上から、これを救ふだけで、詰まり膝栗毛で道中するやうな、極々緩慢い調子でポツリ〳〵と話して行つて、其の中に何とか目的の處へ達するであらうと考へるのである。

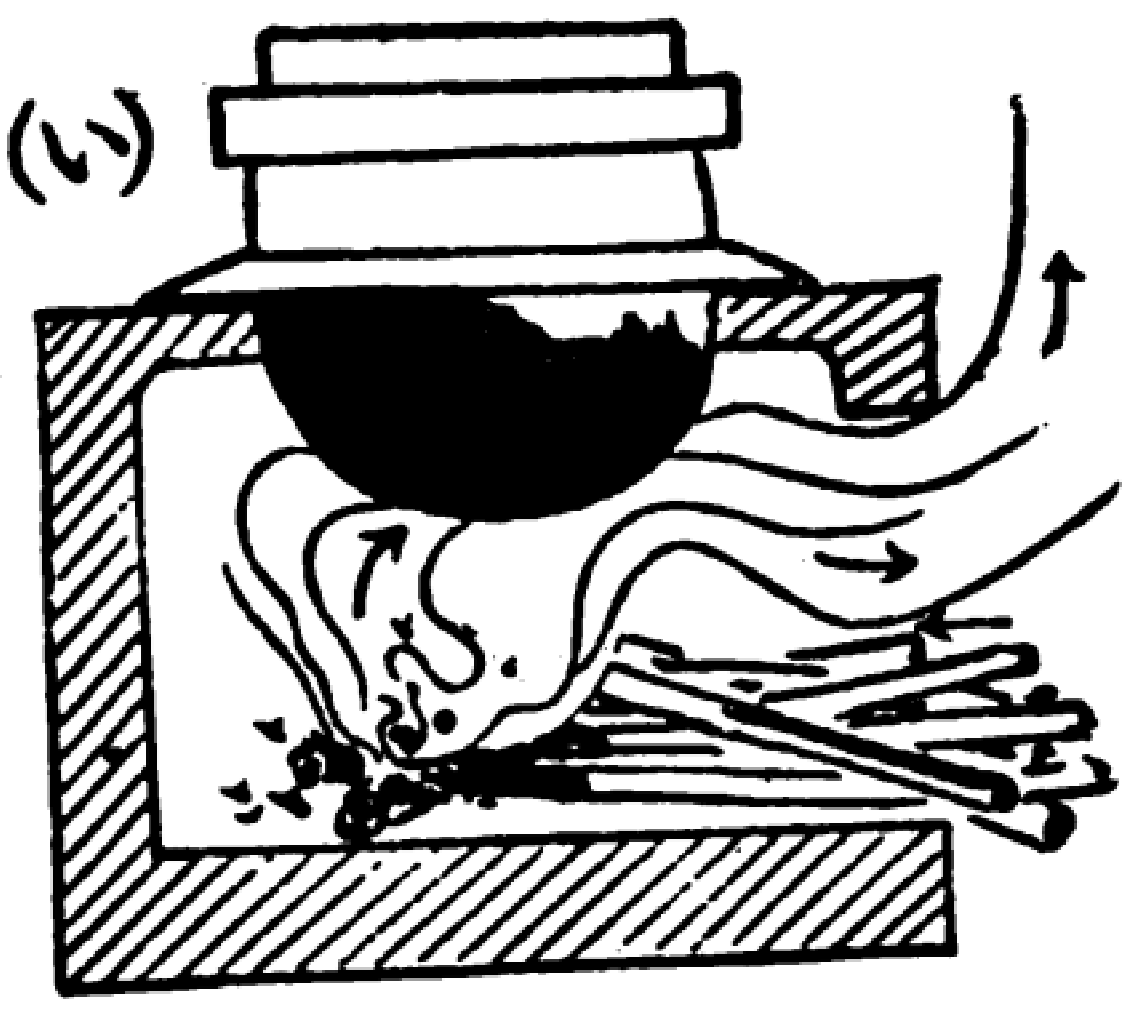
何から話さうか、先づ

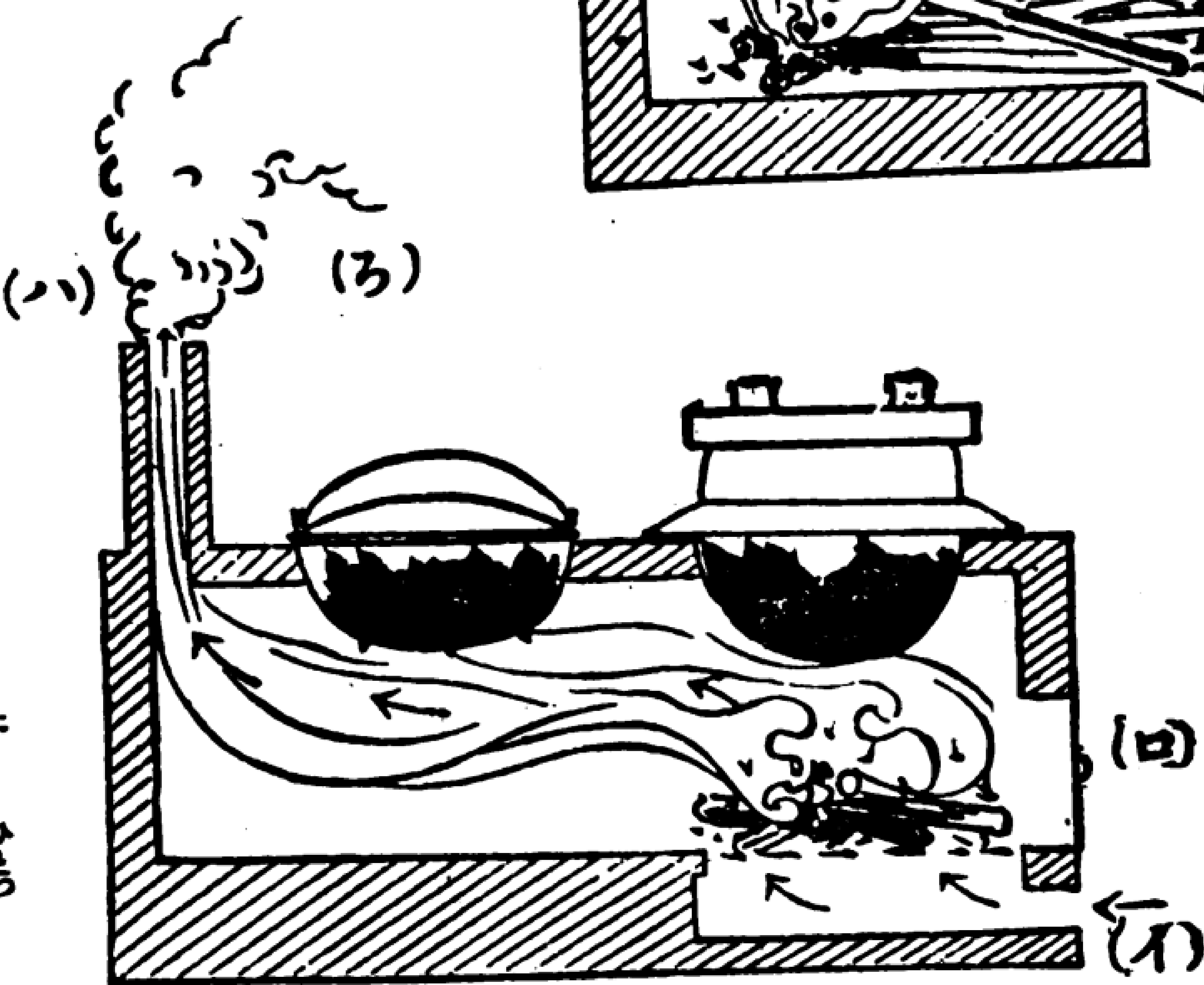
▲御飯炊き

からいふであらう。御飯を炊くほど、容易いやうで、實は六づかしいものはないと世間はいふて居る。御飯が巧に炊かれれば、それで一人前の仕事が出來るとまでに、世の人が許すのである。何が六づかしいのであるか。第一、水の加減のことで、或る時は柔かで、餅の如く、或る時は堅くて、糒の如く、どうも中位の堅さ柔かさが六づかしいのである。それには、水の注し合が拙いからといふて、釜に洗つた米を容れて、それに注し入れる水の分量を、指の尖で量るやうである。どうも其の不精密さには、呆れたものである。毎日此の分量が定まつて居れば、指のどの邊まで水に沒ければ好いかの目分量が出來るが、それでも、多少の熟練を要するに、況や、日毎に多少の米の分量を變へるに於ては、迚も尋常不慣の人間では務まる役ではなからう。氣のきいた家では、此の指尖の法に依らずして、柄杓の一パイ二ハイを以てするのである。併し、それも十分には行かないが上に、米の品種が變れば、矢張り失措ることが多い。米によりては水を引くもあり、又引き方の少きもあり、其の都度に水の加減を變へて行かねばならん。總躰、乾いてある米は幾分か輕いものだから、米の品種が變る毎に、量つただけの米を、一定

の袋に入れて、其の目方を秤ることにしたらば、どうであるか。此のやうにして、五匁なり十匁なり輕い重いが差へば、それに應じて、どれ程の水を加減すればよいのであるか、初二三回これを試すときには、其の後は、譯もなくなりて、全く下女に任せても安心であらうと思はれる。

右の目方を秤ることは、決して面倒でもあるまいと思ふ。全躰いへば、臺所には、必ず桝や秤を缺いてはならぬもので、用意の宜しい家では、屹度其の備があるだらうと思ふ。米屋の量り方は、我が家でこれを量り試す塲合もあらうし、又八百屋の秤り方も、亦これを試驗せねばならんから、是非とも精密な確かな道具が入用である。秤は日本の從來の品でも我慢の出來なくはないが、洋製のが設けらるれば、一層都合が好いと考へられる。





御飯の炊方に於て第二の困難とする點は、炊損ひ即ち心の出來ることである。心とは不熟の部分のことで、畢竟火の力が釜の中全躰一樣に渉らなかつたから出來るもので、それは火の焚き方が拙いから起るのであることは誰れも知る所である。元來、日本の竈は此の(い)圖の如く薪を入る口と、空氣の入る口と、出る口との三つが、只だ一個の穴であるから、出る空氣と、入る空氣とが衝突し、更に入る空氣は、薪の爲に充分

の通り道を妨げられるから、不足するはいふまでもない。これ等に因りて、どうしても火力が弱くなる。西洋風の竈は(ろ)圖のやうに、三つの口が、各々別々になつて、(ロ)の口は薪を入れて火を附ければ、直に戸を閉ぢ、(イ)の口よりは、常に新しい空氣が何物にも妨げられずに、上の鐵網を透して通ひ、それから、烟は烟と共に、竈の中を一面に充たして、(ハ)の口から、易々と出て行くのである。此の法に依れば、薪は少くて、火力は充分で、且釜の外に鍋までを同時に煮ることが出來る。安く積つても三四倍の利益があらうと思ふが上に、御飯の炊損ひがなくなるのである。一時は、此の西洋竈が、流行したが、今では、矢張り舊來の日本のが善いとて、又元に復る家もあるやうだが、畢竟理窟の上から篤と考へないから、折角の利益を廢して了ふのである。殘念のことではないか。

次にお話することとは

肉や魚の煮方

である。抑も煮るといふは、何のためにするのであるか。總べて物は、熱を受くれば膨れて、其の組織が多少引き離されるから、疎らに、且軟かになる。だから齒を以て能く之を切り又刻むことの出來るのみか、其の疎らの間に鹽、醬油、酒などの香味料が浸み込みて、思ふやうに美味を添へることが出來るのである。煮るといふことは、此を措いて外には目的がないといふても差支ない。

そこで肉や魚を煮るに於ても、矢張り此の目的でするには相違ないが、此等には蛋白質といふ一種の成分が大部を占めて居ることを注意せねばならん。此の蛋白質といふは、妙なもので、煮られると却つて益々凝まるものである。チヨット卵の蛋白を見ても解かる、それは大部分が蛋白質から成つて居るもので、冷い間は水のようであるが、湯に入れると直に凝まる。それと同じいわけで、肉や魚は皆これを熱すると凝まるのである。

右の通りであるから、肉や魚は煮立ることの長ければ、それだけ段々堅くなつて來る。だからこれは、長く煮

ることは出來ない。といふて、チヨット煮たばかりでは、其の内部までが全く熱することが勿論出來まいし、又た醤油砂糖などを充分に浸み込ませる時間もあるまい。すれば、どうするかといふと、始は文火に掛けて、トロ〳〵と温めて、段々に強く熱し、其の強く熱する間を短くすれば好いかのやうであるが、全くそれは反對である。此のやうにすると、段々熱せられる間に、内部の滋味が拔けて出て、跡は只だ肉滓出殻となるまでゝある、すればどうすると最も好いのかといふに、

先づ始めに水のみを充分に沸騰するほどに熱するのである。水よりも酒ならば尚好し。其の沸騰して居る處へ急に肉や魚の大片を投ずるのである。魚の如きは、其れに庖刀の切れ目を入れて置くもあるが、それも甚だ好い。此のやうにして凡そ五分間ばかりも熱すれば、これを引き上げて了ふ。すると、其の短い時の間に外部に蛋白質の凝まつた薄皮が出來る。此の皮が既に生ずれば、内部の滋味は、決して拔け出ることはない。そこで、今度は、改めて文火の上に掛けて、トロ〳〵と煮て、醤油砂糖等を加へれば、丁度内部がよく熱して、香味料が段々と浸み込むことが出來る。此の第二の煮方にはそれ程に多くの時を費すにも及まい、多く費せば、又却つて固くなる恐がある。それから、右に述べた酒を始に用ふるは、何故に好いかといふに、酒は水の中にアルコールを含んで居るもので、此のアルコールは、能く物の水を吸ひ取つて、これを堅くする性質がある。だから、始に蛋白の薄皮を造るにも都合がよい上に、酒を用ふる場合には、第二の煮方をするに其の酒に入れたまゝ、即ち器物を其のまゝにして、只だ火力を急に弱くするのであるから、其のアルコールのために内部の熱するに、適度に組織を引き締めて、食べるにコツ〳〵と歯觸りが善くなるのである。

（つゞく）

加納子爵の家庭（下）

▲消極的の經濟　我々は世間から華族とか貴族とか言はれては居りますが、家事向に至つては、他とは全然反對の針路を執つて來たものである、即ち消極的の經濟で始終苦境の地に立つたのである、世間一般の人に就いて申せば、先づ小學の國民教育を卒へ、中學大學と進んで學士號を得るとか、又は高等文官試驗に及第するとか、其より官海に入て局長となり、秘書官となり、又は貴族院議員。もう一歩進んでは運好く大臣にも成れるのであるが、斯ういふ人は誠に仕合なもので、はじめ修業時代に於ては机一脚行李一個の下宿屋住ひで在つた者が、出世すると同時に家を持つ、屋敷を求める、書生を置く、恁ういふのが普通の順序で、自分の地位が進むと共に其れに比例して一家の經濟を膨脹せしめて行く事が出來るのであるから、いはゞ順境に掉すもので、是等は即ち積極的の家計と言つて宜しいが、我々に至つては爾で無い、時勢の激變に連られて始終逆境へ逆境へと進んで來たものである、先づ手初には多くの家來共に暇を遣る、續いて三太夫中太夫と申すものをも一人廢し二人止めさして全く無いものに致して了ひますし、母の衣裝をも改めさせて御引摺を止させるとか、頭の結ひ方も御殿風を止めて手輕な物にして了ふとか、外出に三人連れたものをば或る一の機會を目付ては一人減らし、又た他の機會を見出しては一人減らし、仕舞には自分一人で散歩に出るやうにして貰ふとか、萬事此通りに縮少的消極的の態度を執らねばならぬ境涯であるから、一方ならぬ苦痛を感じたのはお話の外で御在ます、乍併同じ華族と申しても侯伯なぞに成りますと私共等とは全く異つた生活を爲て居る早い話が電話ですな、私共の家に電話を設けません理由は此物の便利なる丈其だけ弊害が伴ふ、是が爲に餘計な用事も出來ますし、東京の友人なぞより宴會其他に誘はれて引張り出される場合も起つて來やうし、有らずもがなと思ふ付合も是がある爲に出來て來やうし、して見れば東京に住ひ致すと同じ事

で敢て田舎に引込でる甲斐が無くなつて了ひますから、それで電話架設を見合してあるのですが、彼の池田侯等に成ると全然理由が反對して居る、あの家では電話を架けると、勢ひ人手を省くやうに成て不用の人間を生ずる、さりとて今迄養つて在た召使を解雇するとは到底出來惡い事であるからして、電話よりは寧ろ手足具備の人間を使つた方が善いと言つたやうな理窟ださうです、又た前田侯の如きに至ると、庭園の噴水許りにも莫大の費用を拂つて居る、一立方積の水量に對し何圓といふ水道税を拂ふのであるから、噴水一本の入費は私共一年の家計よりも遙に多額であります、だから一口に華族と申しましても格段なる懸隔差別が在つて到底一槪には申されんので御在ます。

▲子供の衣服　私共では三人の娘に皆な改良服を着させます、此は山根正次氏の考案したものに更に家内が工夫を加へて新規に作り出したもので御在ます、唯今實物を御覽に入れて御咄致しませう（子爵は此時卓下の電鈴を鳴らして僕を呼び娘の着物を持ち來るべく命じた）近來女學生の風俗は隨分區々で誠に外見無い、先達も或る女學校の遠足會を見ましたが、生憎雨のシヨボ〳〵降るのに、麻裏を穿いて袴の裾を引摺て居ります、其の無樣さ加減と申したら御話に成らんのです麻裏なり駒下駄なり穿きますと勢ひ日本流に着物を長く致さんければ似合ぬ、爾しなければ尚更可怪なものに成つて了ふのですと言ふのですけど、此草履を穿かせるのは父兄の方の惡いのでは無い、學校が惡いのである、何故と申せば西洋風の板敷でありながら昇降口の所で靴を脫がせる所がある、靴で上るやうに出來て居る所にわざ〳〵脫いで往くといふのは可怪しいでは無いか、其の理由を聞けば淸潔を保つに在りといふのですが、此の淸潔を保つといふ文字を解釋して見ると、或る程度までは塵埃もたけるが宜い、汚れる丈は汚すが善い、其を怠らず掃除し奇麗に仕末してこそ初て淸潔を保つといはるゝのである、然るに初手から淸潔を楯にして塵一本落すまいといふ主義では淸潔を保つのでは無い、喩へて見ると便所を拵へたが淸潔にして置

く必要があるから此處小便無用といふのと同じ理窟である、恐く天下に此位間違つた話は有るまい、(子爵は此時僕の手より一領の改良服を受取つて扨言ふやう)此改良服は此通り筒袖の絎け方を洋服の仕立方に倣つて御在ますから、伸縮自在で躰操等を致しましても少しも窮屈を感じない、袴は膝の少し下まで來て居ります、裾の廣がりは襠に取つて袴腰に疊込んで御在ます、そこで袴と上着との連絡には釦を用ゐて在ますから、袴腰がズル〳〵下の方に垂下つて來るなぞの憂は御在ません、上着の胸は付紐で留めて在ります、帶の金物は少々贅澤かも知れませんが、是丈は純銀で拵へて置きます、疎末な物を使ふよりも氣張つて置いた方が、小供も大事にしますし、幾度も外のに付替が利きますから却て此方が餘程經濟であります、其故天賞堂に誂へて這麽物を拵へさせたので御在ます、而して物もフランネル以上は用ゐません、日本服のやうに無駄な布を使ひませんから、並幅一丈一尺で一領出來ます、其故大幅二丈二尺あれば四人分が出來るのですから、繻珍の帶一筋の價で四人に着せられるので御在ます、是を仕立るにも日本針を用ゐては手間が懸つて間に合ひませんから、彌針で以て家内が仕立る事にして居ります、其柄兄弟共には縞柄も色合も皆んな同じ物を着用致させます、人間の天性が夫々嗜好を異にして居る以上は、赤いのを好むものも有りませうし、青味がゝつたのを好くものも御在ませう、だから假し品物の價値に甲乙が無いにせよ、兄弟に依つて衣類を違えますと、姉さんの方が善いの、私のは似合はないのなぞと不平がましい事を申出るに相違無い、是等の事柄は設令少なりと雖も、家庭に風波を起す基で御在ますから、子供の教育上大に注意せんければならぬ點だらうと思ひまして、子女に對しては恁うい ふ方針を實行して居ります、一寸子供を呼びますにも、尤も單獨の時は誰さんと名前を呼びますが、子供達が揃つて一緒に居る場合には決して名を呼びません、此時は單にコドモといふ言葉を用ゐます、爾で無いと、阿父さんは兄さんの名前許餘計に呼ぶから兄さん贔負であるとか、又は妹

を可愛がるとかいふ様な怨言を同胞間に唱へるやうに成る、斯う在ては子供の爲にならん許で無く、面白くない結果を來たしますから私共は可成公平の態度を執つて、遍頗や依估の無いやうに努めて居ります。

▲婢僕の使ひ方　是と申しても別段御咄致す程の事も御在ませんが、兎に角婢僕には辛抱して長く居て貰ひますれば其丈主人の利益で御在ますから、可成何時迄も辛抱忍し耐て働いて貰ふやうにするのが一番得策である、併し人間界は總て利益の交換で御在ますから、忍耐と交換する物が何か無ければ不可い、仍で私共では婢僕に月々の給料から十錢位宛貯金致させます、爾して解雇を申出る時之を渡して遣る事にして在ます、初めは誰も皆な面白くなく思つて、何だか約束の給金を減らされた樣な心持が致すと見え、不平らしい樣子も無いでは有りませんが、一月經ち二月過ち、段々貯めて往つて、月數が重るに連れて貯金額の殖えて來るやうに成ると、仕舞には慾が出て來ますから、拾錢で濟む所も三十錢なり五十錢なり、身錢を切ても足前して貯金に充てると言ふ樣に成ります、最初の二三月では解りませんが、斯うして六ヶ月も經てば既う大丈夫である、私共では僕が一人女中が二人車夫が一人、都合四人の婢僕を使つて居りますが、孰れも七年以上勤續して呉まして私達よりは却て多額の貯金を持つて居ります、唯今是へ參りました僕などは最早百圓以上の預金を持て居ります、（此時子爵は坐を離れて奥より預金證券を持つて來られて一々說明をされたのである）其柄又た久しく勤めて呉れて成蹟宜しく、品行の優れた者には善行褒狀を遣します、是には私が手書捺印致しますのですから、滅多には出されませんが、既に唯今迄に此褒狀を與へました者が三人程御在ますのは、非常に悦しく存じます、是はつまり一種の身元保證で在ますから、其の者が他へ緣付く時にも、又た再び主人を取るにしても、大層力に成る事だらうと思ひます。

▲子爵の平生　私は毎朝六時に起きますが眼が覺めると其儘起上つて、卒然先づ裸躰に成ります、而して手

拭の乾いたので躰中を摩擦致します、是は皮膚を丈夫にしますと見えて、此の二十年間は誠に無病でして、風邪一つ引いた事が御在ませんかつた、併しながら寄る年波には致方無いもので、本年の夏は少しく煩ひましたが、是とても大した事なく直に癒つて了ひました、其柄朝食をした丶めまして東京へ參ります、歸宅は大抵午後五時で御在ますが夕食前には必ず風呂に入ります、そうかうする內に小供達も休んで了ひますから、是から信用組合の事務に執懸りまして計算致したり記帳致したりするので御在ます、此の信用組合と申しますのは幾干か私一個の社會主義を實行したものである、御承知の如く彼の社會黨なる者は貧富の懸隔からして、孑孑的に生いて出る自然の結果であるからして、是をして未然に防がんとするには何とか宜い方法を講じなければならぬ、仍で私は日本現下の貧富の懸隔懸隔と申しましても日本のは西洋杯の其とは違ひ、未だ甚しく無いのであるから此時を幸ひ此間の度合を此儘に持續して行きたい、即ち富者の進度と共に貧者も其丈進んで行つたなら善からうといふのが私の持論で御在ます、で之を事實に行ふには富者が一手に龍斷て居る殖利を、多衆に向て平等に分配しなければならぬと思ふので、村方の人と共同して最初八百圓の基本金を出合ひまして一種の信用組合を組立つたので御在ます、而して村方一般組合員の貯金を年五朱の利で預る事、貸出の請求に對しては一割の年利で貸付る事、その間の差益を村の共有財產たる基本金の方へ繰込むてと丶致しております、元より信用組合の事で在るから抵當物件も何も要しません、唯だ一名の保證人を立て丶貰へば其で宜いので御在ます、其には信用評價委員といふものが各區に設けて在つて、評價表が調製して有りますから、其に依て貸付の多寡を加減致します、而して年一割と言ても普通のとは利息の立方を異にし、十日丈使つて直に返金するとか又は僅かに月を跨いだ許りのものは、日から日を數へて、其日數丈の利息より外は取りません、即ち年一割を日割にしたものより外は受取らぬ規約に成て居る、で踊りだとか書替

へだとか申すやうなとは一切無い、唯だ實地使用に供した丈の利息を拂ひさへすれば宜いのだから、非常に安い金が使へるのである、其柄貯金の方では少許の金を一々私共の玄關先へ持て來るのも臆氣の話であらうと思ひますから、各戸に貯金箱を備付させて、各區の委員に取纏めて貰ふ事にして御在ます、併し是が爲に書記を雇つて給料を拂ては迚も行立ませんから、私共一家が國家への御勤と思つて、無給無手數料で此の組合事務を執つて居るので御在ます、そこで是が濟むと彼此十時に成りますから、軈て號鈴を鳴らして一同に就寢を報ずるので御在ます。　（完）

▲米國の婚禮に惡戯の流行　近來米國にては其家にて婚禮の式を擧ぐるさき種々の惡戯を爲すこさ盛んに流行する由此程紐育の富豪カーメー、ベンツがシカゴ市に於て結婚式を行ひたる際其友人等は一輛の馬車を借り來り其馬車の内には古靴及び其他の不潔なるものを積み載せ己等も之に乘り新夫婦の馬車に隨ひてホテルに赴きホテルの給仕に賄を遣りて此等の不潔物を新夫婦の宴會の席に飾り附くる計畫を爲したるがベンツは惡戯を爲すものあらんこさを豫期して五人の番人を雇ひ留きたるに此番人は其馬車の怪しきこさを知り馬の口を攫みて進ましめざりしに車中の人々は兇漢ならんさ信じ馬車を下りて喧嘩を始めたり間も無く巡査來り次第を說明する間に折角の計畫は畫餅に歸したりさ

家庭衛生

一日醫者

糸左近

▲はしがき

私が今更申すまでも無い、病氣の時は、醫者程賴みになるものはありますまい、されど其の病氣の起つた時、おいそれと、其の醫者にかゝられぬ場合が往々あるものである、令へば旅行先であつたり、或は生憎それがしの醫者も、くれがしの醫者も、留守であつたり、或は醫者の來るまで待たれぬ急危な場合もあつたり、或はその他色々な事情もあるやうなものである、箇樣な時に唯病者の苦しひを見て居られませうか、仁愛深き貴婦人方の忍びざるところでありませう、乃で何うする、賣藥ですか、ところが其の賣藥は、其の効能書通りに、無論ゆかぬもの、

縦んば効能あるにしたところで、何を服ませて可いか、これ又六かしい問題である、然るに爰に人あり、其れは斯うしたら善い、容易く處置してくれたなら、何程嬉しいでせう、何の位助かるでせう、であるから、私は今其の人になり代つて、貴婦人方に一日だけ醫者に逢はれぬとても、又醫者の印が無くても買・はる丶、通常薬の範圍内で、大抵何うか斯うか、處置の出來る治療法を述べて、見ようと思ふのである、今や

朝寒し遠志根切る醫者の妻

と、誰やらが詠んだ丁度其の時節、いでや其の感冒から追ひ拂ふとしませう。

▲感　冒

〔原因〕 躰温の調節を缺いたり、垢を溜めたりするなとから起るものである。

〔病狀〕 惡寒を感じ、熱は三十八度以上に昇り頭痛を發し、鼻汁が頻りに出で、續いて咳嗽が出たり、痰が出たり、咽喉が痛んだりなどとする。

〔療法〕 撒里矢爾酸曹達　一瓦(二分六厘六毛)
白糖　適宜

右能く混せて、朝夕一包宛服むべし、又咳嗽が出る時は

遠志根五瓦(一匁三分三厘)を温湯一合で十五分間五勺に煎じつめ砂糖を入れ一日三回に分服

▲胃加太兒(食あたり)

〔原因〕 腐敗及び不良の食物、暴飮暴食、菌或は魚の中毒などから起る。

〔病狀〕 惡心が催し、或は直ちに飮食物を嘔吐し、腹痛、頭痛、煩渴、曖氣、四肢脱力、微熱を發することなどある。

〔療法〕 氷片を喫せしめ、身躰を安靜になさしめて、左の薬品を與ふるが可い。

重曹五、〇(一匁三分三厘)酒石酸四、五(一匁二分)拘櫞油二滴砂糖適宜水二〇〇、〇(一合)　右適宜服用す

▲腸加太兒(下痢)

〔原因〕不良の飲食物、過度の冷物、氣候の變換、及び蛔虫などから起る。

〔病狀〕腹痛雷鳴（雷鳴とは腹がごろ〳〵鳴ることを云ふ）續いて下痢し、黃色或は綠色或は粥の樣な、或は水の樣な大便を、一日三四回乃至十回以上も洩す、さうして裏急後重（裏急後重とは大便がしたい樣で、思ふ通りに行かぬ即ち澁ることを云ふ）或は惡心嘔吐を催ふすこともある。

〔療法〕淡泊なる流動性の食物を與へ、脂肪類を嚴禁し、腹部を溫め、冷水を飮むことを避けねばならぬ、藥品としては、

次硝酸蒼鉛（單に硝蒼ともいふ）一、〇（二分六厘六毛）但し一包の量
　右一日三四回服用

阿仙藥丁幾一〇、〇　葛粉五、〇　砂糖適宜　水一〇〇、〇（半合）
　右一日三回分服

▲便秘（ふんづまり）

〔原因〕素人の方に之を說くことは六かしい、のみならず餘り必要がない。

〔病狀〕便通が幾日も無くて、腹部緊滿、食思缺乏、精神鬱閉を感ずるなどする。

〔療法〕消化し易い食物を與へ、適宜の運動を命じ、茶珈琲などを禁ずるが可い、藥品としては、

舍利鹽十五瓦（四匁）稀鹽酸七八滴砂糖適宜溫湯一〇〇、〇（半合）
右能く溶解するを待つて、一日三回分服
或は又次の藥も善い、但し味が惡くてのみづらい
人工加爾々斯泉鹽十五瓦（四匁）水半合
右一日三回分服（この藥ならば一週間位連服しても差支無い）

▲間歇熱（おこり）

〔原因〕これも素人の方には分り難い。

〔病狀〕初め欠伸或は顏面四肢寒冷し、口唇藍色となり、續いて惡寒戰慄し、これが一二時間續くと、皮膚が熱くなり、熱は三十九度乃至四十一度にも達し、煩渴頭痛呼吸疾速となり、これが二三時間經つと全身大いに發汗し、精神爽快となり、殆んと平日に異ならぬやうになる、斯の如きことが隔日或は三日目四日目

或は毎日重いのは一日二回もあるものである。
〔療法〕　可成暗室に居らしめ、諸般の嗜慾を避けしめ、衣服を重着し、發汗を催すやうにし、皮膚を拭ひ、少量の葡萄酒を與へ、頭痛には氷嚢をあて、温暖の飲料を飲ましむるが可い、藥品としては、

　鹽酸規尼涅〇、六（一分六厘）

右丸藥として服むか、或はオブラートに包み水に浮べて服むが可い、何れにしても、病氣の發る六時間前に服むと、大抵は發らぬ、發らぬにしても三四日續けて服むことが必要である。

▲歇私的里（ちのみち）

〔原因〕　十五歳以上の婦人に多い病で、精神感動即ち驚き或は怒り、或は心配事などから起るが多い、又子宮病からもなる。
〔病狀〕　精神が驚き易く、僻み易く、何となく鬱々し人と話しすることも厭になり、鈍い頭痛がし、或は食欲欠乏聽嗅味の感覺が過敏となり、己れの病氣を他人が重く言へば、氣に入り、輕く慰めくるゝと、却つて氣に入らぬ、或は咽喉に何か支へてゐるやうな氣がして、嚥下困難となるなど、この外色々の苦痛がある。
〔療法〕　この病氣は、勿論醫者で無ければ、直されぬものなれど、一寸かい摘んで、述べて見よう。
消化し易い食物を與へ、可成運動せしめ、精神感動を避けしめ、山水花木を眺めさしたり、氣に合つた友達と遊ばしたりするが善い、芝居見物小說などは宜しく無い、手品滑稽談のやうなものが善い、温浴或は冷浴を以て、身軀を清潔にせしめねばならぬ、藥品としては、

纈草丁幾四、〇　阿魏丁幾四、〇　苦味丁幾一、五
砂糖適宜　水一〇〇、〇（半合）

右一日三回分服　或は次の藥も尙可い。

嗅素加里三、〇　含糖百弗聖三、〇　砂糖適宜　水一〇〇、〇

右能く溶解してから一日三回に分服
　但し一週間以上連服してはならぬ。
又便が結するならば、便秘の章で述べた藥を用ゐる

が可い。

▲火傷（やけど）

〔原因〕火焔或は熱湯などが身躰に觸るゝより起るこ
とは誰も知つてゐる。

〔病狀〕第一、潮紅　第二、水胞發生　第三、たゞれ
る

〔療法〕第一、氷片冷水或は醋を注ぎ、阿列布油に浸せる布片を以て創部を被ひ、又石灰末を撒布するが宜しい。

第二、針を以て水胞を刺し百倍の石炭酸水を以て能く洗ひ、亞鉛華軟膏をつけておくが可い。

第三、醫者にかゝるが善い、輕いのは、第二の療治で直つて仕舞ふ。

▲凍瘡（しもやけ）

〔原因〕雪中の旅行、冬季寒冷の候下婢小兒などに多く發する。

〔病狀〕第一、潮紅　第二、潰瘍　第三、壞疽

〔療法〕左の藥品をつけるが可い。

苛性加里一、〇（一分六厘六毛）屈利設林三〇、〇（八匁）アルコール五〇、〇（三匁程）水半合

右浴後に塗布すると、赤ぎれ、ひゞのきれ、一切に善い。

▲胃　痛（癪）

〔原因〕素人の方には解きにくい。

〔病狀〕胃部（みぞおち）に劇痛を發し、胸部及び背部までにも響くものである、或ひは時に嘔吐することもある。

〔療法〕胃部に芥子を塗り、或は發泡膏を貼り、藥品としては、

日本酒　二勺頓服

平生酒を嗜む人ならば、今少し多く飲むべし、その外色々の善い法があれど、悉く劇藥であるから醫者にかゝらねばならぬ。

▲消化不良（胃病）

〔原因〕暴飲暴食烟草の喫過或は心釋、過房、寄生蟲、或は胃加太兒から轉するなどである。

〔病狀〕脫力、鈍頭痛、食思缺乏、惡心、嘔吐、噯氣、上腹部厭重緊滿、腹痛、精神鬱閉を感ずるなとする。

〔療法〕消化し易き食物を少量に食し、脂肪少なき食物を撰み、半熟卵、牛乳、刺身、豆腐の類を常食とすべし、藥品としては、

重曹一、〇　含糖百弗聖一、〇　但し一包〇の量なり

右一日三回食後一包宛服用

又左の藥を右のと兼用すれば尙可い。

稀鹽酸七八滴　苦味丁幾一、五(二十滴程)　砂糖適宜　水一〇〇、〇(半合)

右一日三回分服(但し食前)

(注意)すべて藥品は別々にお買になつて、自身で調合なさらねばならぬ、右の處方通りを藥屋へ調合してくれと言へば、醫者の印がいると言ひます、又右は皆一度分或は一日分を書いてあるから、若し三度分或は二日分以上を服用しやうといふ方は、一時に買つて來て、それを分けて用ゐるが可い、又一瓦即ち一、〇は何れも二分六厘六毛で一〇〇、〇の水は半合であると心得おかねばならぬ、且つ砂糖は何れも白の上等である、若し甘いもの厭ひな方は入れないでも差支無い、又右は皆十五歳以上六十歳以下の人に適するので、それ以外の小兒老人に用ゐてはかならぬ、夫等は又追々に述べませう、其外號を追うて、必要なものから、四百四病殘らず書いて見やうと思ひます、されとこれで醫者にかゝらぬとも可いといふのでは勿論無い、はしがきに書いた通り、一日乃至二日位までの一時凌ぎであると、いふことを忘れてはなりませぬ、されと廣告なとに欺かれて、つまらぬ賣藥を用ゐるよりは、非常に善いと斷言することを憚かりませぬ、今まで衛生顧問だの素人療法などいふ本にこの樣な事を書いてあるけれと原因病狀療法と分けて詳しく書いたのが恐く無いと思ひます、何うか繰り返し〱讀んで覺えて貰ひたいものである。

(以下續出)

百日咳の話

（病兒看護の栞）

醫學士　石原笠軒

此百日咳と申す病は、以前から人がよく知つてる御病氣でありまして、おもに一二歲位から七歲八歲位の小兒のかゝる一種の傳染病であります、百日咳と申すわけは、小兒が、これに罹る時は、仲々容易になほらない、即ち、短時日ではなほらないので、通例、初めから計算すれば、五六十日もかゝり長いのは、百日以上もかゝつて漸く快復するのでありまして、長いから、百日咳と云ふのであります、また、別名がありまして痙咳とも名付けます、それは、咳がついて、痙攣をするやうである爲めであります。

百日咳は、おもに、寒い時候に多く見るもので、十二月一月二月三月等には隨分澤山あります、其他の時候にあれども、これが傳染病であることは、譬へば一家の內に先づ一人の小兒がかゝれば、次に、段々と、他の兄弟に感染して、みんなが同病に侵されることがあるのを見てもわかります、けれども、まだ此の病原はわかつて居りません、何でも、一種の黴菌であらうとのことでありまして、或學者は、既にこれで御座いと云つて、自分の發見した黴菌が、百日咳の原因だと云つてゐるがありまするけれども、まだ〳〵、これは信じられてはいないのです。

百日咳にかゝりますると、小兒の身體が疲勞して、衰弱致し、色々の餘病たとへば肺病などを惹き起すことがあり隨分、恐るべき病であるからして、皆さんに、其御注意の爲めに、少々かいつまんで御話を致しましやうと存じます。

▲特徵

百日咳の特異の點は、其咳が一種特別の咳であつて、他の病氣の時の咳とは、大變にちがつてゐることゝ經過即ち病氣に罹つてゐる日にちが長いのとの二點であります、其特異の咳と申すのは、ぶつつゞけに呼氣で

もつて咳を致して殆んど呼吸がとまりさうに見える程であつて、そして、其間に、唯僅かに、吸氣を致して漸く呼吸を、營み得ると云ふ有様で、小兒がコン〳〵〳〵〳〵ヒイー―と咳をするのであります、一度聽けば、もう、忘れません程の咳のつき方で御座ります、扨て、少々醫者の領分に立入りすぎるやうではありまするけれども是から、皆さんに御わかりになるやうに一層委しく、此病氣の病狀、それからして看護上の注意に就き御話申します。

一體此病氣の初めは、どんな風であるかと云ふと、大抵、氣管枝加答兒のやうな模樣でありまして、こう云つてはおわかりにならぬのがも知りませんが、まあ、風引きの重い位の所であつて、どうかすると少しの熱があります、小兒は、怠氣にしてゐて、涙を出したり頭痛がしたり（年取つてる小兒ならばわかります）少し聲がかれたり、また噴嚏をしたり、食物を飲みおろすに困難をするやうであり、それからしてまた咳嗽が出ますのです、此咳嗽は乾いたやうな咳嗽で、調子が高く鋭く聞こへるのであります、そして往々青色のついた、痰をだすことも御座ります。小兒が何か精神上で感動するなど丶共に咳が起り、また、夜分睡眠中にも起り、爲めに小兒が目を醒すやうのことがあります、こんなふうで、咳が、追々と、きつくなり、且度數が増してくる、そして夜分に多くなる、此の有様が續くこと凡そ一週間、長くて二週間位です、其間は、父母も尚又、醫者でも、あたりまへの咳と考へて百日咳とは思はぬことがあるのです、けれども別段醫者を怨むわけのものでも無いでせう、何となれば實際上此間は、百日咳と普通の呼吸器殊に咽喉氣管枝加答兒との區別がないのでありまするからです、しかし、それでも、こんな風な咳は百日咳がやつてくるのでは無いかと用心するのが注意深い醫者の頭腦でせう、それで今頃は世間の教育ある家庭では衞生上の智識が段々と進みて參りまして、以前とおべこべに、醫者の智識を批評致されるお方もあるやうになりました、あの醫者はどうもあまり診斷が巧くない

やうだなんと、と、どうか、益々そう云ふ風に願ひ度いものであります、今日實際我邦の醫者と云ふものは未だ充分滿足の出來るだけの程度になつてゐないので是は世間が幼稚である爲めで、つまり世間の罪です、今後は今迄通りではすみますまい、世間が進めば醫者もそれに連れて進んでゆくわけのものでせう、話が飛でも無い横道に入りましたが、却說、前に述べました有樣で、小兒は、次には愈々百日咳に特有の病狀をあらはしまする、即ち特異の咳を起すのです、これは先きに一寸述べました如く、ぶつつゞけにコン〳〵コン〳〵ヒイーと云ふ風な咳をするので、委しく申せばおもに夜分に多いのです、其時叫ぶとか、急に床に起き直るとか致しまして、そして極めて短く、突つかゝるやうな、劇しい苦るしい、呼出氣の咳であつて、終りに深い、長い、笛を吹くやうな吸氣をする、即ち以上をひッくるめて云へばコン〳〵〳〵〳〵ヒイーであります、こんな咳が一時に度々繰り返へし起りまして少しの休み間も無い、それで側から見て居れば、誠に見るに見兼ね聞くにきゝ兼ぬると云ふ有樣で、小兒が大變に苦みもがきまして、其顏と云つたら、赤いか靑いか、むしろ蒼白か灰色かを呈し、眼玉が高く飛び出るやうに見へ、涙もこぼれるし、額に汗がうるほひ、など致します、こんな苦しい出來事であります、これを發作と申しまする、此發作の終りに粘稠つよい痰が出ます、其時嘔吐を致しまして、折角食べさした物が皆んな出まして、爲めに、小兒の養分が取れぬから大變衰弱するであらうと心配致すのです、そして、吐くには、單に、口からばかりで無く、鼻の內からも吐くことが御座ります、けれとも、此嘔吐は實は反つて善兆であります、即ち嘔吐が有る場合と無い場合とを較べて見ると有つた方が病氣の方の質がよろしいのです何せかと申すと小さい小兒は痰がからまつても咳をして之を吐き出すことを知りませんから、自然其痰が喉を塞ぐやうなことが起ります、そうすれば大變であります、然るに、嘔氣が起りますと、此の吐逆作用、即ち、吐きもどす作用につれて、喉にからまつてる痰を

も驅出すことが出來るからである。

若しまた右に述べました處の發作が、一層ひどくなると、小兒が、つめたくなり、身體がふるえ、胸やお腹の皮が痛みを發し、言語の出來る小兒ならば、おなかが痛いと申して之を知らせます、そして、痙攣を起すこともあるのです。

▲發作

此發作は、初めには短く、度數も少くありますがまづ三十秒位の間ですめば短い方で、十分間も續けば長い方です、そして、一晝夜の間に數回乃至十回、若くは、それ以上も起りまして、數十回に及ぶこともあります此回數の多少によりて病狀の重いと輕いとに區別することが出來ます、此發作はどんな時と云つてきまつた時に起るとは限りませぬが、普通は、夜分とか朝方の時に多いので、身體を動かすとか、笑を發するとか欠伸をするとか食物をたべるとかすればよく起つてまゐるのです。

發作の回數が餘り多からぬ場合では、發作と發作との間の時、即ち、間斷時には、小兒は何とも無いやうな風をして、よい機嫌でゐますが、若し、餘り數多く起つて來る場合では、小兒は、身體をだるそうにして、不機嫌で、食物を好まないやうに見えます。

如此發作の續くこと、通例、二三週、尙は長ければ七八週間もかゝります、短ければ、一週間以內のこともあります、凡て發作の來る前には、小兒は何となしにこれを感知してゐるやうに、妙な具合を示しまして、能く氣を付けて見て居れば、今に發作が襲ふて來るのであらふと云ふことがわかります。

斯ういふふうで、若し、病氣が癒つてゐるものならば發作の回數も、段々に、減り、其强さも、漸次にやはらひでゆきます、咳の性質も、追々に、あたり前の咳に近づいてまゐり、痰もやはらかくなつて、易く出て來ます、此際、大に看護に注意せねばなりません、折角此處迄も輕快して來たものが、或は、更に、寒冒にかゝるとか食物の攝生が惡るかつたとかすれば、もと

に引ッ返へすか、餘病を起すとかの恐れがあるのであります、此餘病が最も恐ろしいのであつて、小兒の肺病などを惹き起した場合には、醫者は、此お子さんは以前百日咳に御罹りなすつたことは無いかと尋ねます位であつて、惡くすると、百日咳のあとで、肺病を起すことが少からぬので御座います、恐るべきことではありませんか。

▲病狀の經過

扨て、百日咳と申す病氣の病狀、經過即ちどういふふうに始まりどういふふうに成りかわつてゆくかと云ふことをざつと御承知になりましたこと丶存じます、是より其看護に關する御注意に就き聊か御話を致しましよう、先づ第一に豫防の點です、能く世間の小兒の狀態に注意をして居りますと、今頃諸方の小供に百日咳が流行すると聞及びになりますれば、用心を致しまして、疑はしき内とは交際を遠ざけ、保姆や、負兒娘などに注意を與へて、咳をする他家の小供の傍には寄りつかぬことにせんければいけません、又學校であるならば休校させるのです、次に一家の内で、これに罹つた者があれば、病室を別に區別して健康なる小兒はそれの側にゆかぬこと丶するのであります、出來るならば百日咳の無い土地に送つて轉地させるのです次にまた、小兒は凡て寒冐に罹らぬやうに（平素は勿論ですが）又食物の攝生、等の豫防的用心をしてゐることも、緊要であります。

▲療養

次に既に百日咳に罹つたならば、どうしてよいのかと申すに、勿論醫者にまかすより仕方は無いのでありますけれども、例によりまして、皆さんの御心得に、御話申して濟きますので、これは一通り御記臆になりまして、實地の應用を冀望致します。で、百日咳にかゝりましても、初めの時は、醫者でも確かとはわからぬ程ですから、素人の方にわかる筈はありません、け

れども、今頃、此病氣が流行つてゐること、交通する家にでもこれを患ふてゐる小兒のゐるとか、近所にでもこんな小兒でもあるとか學校にゆく兒童なれば校內にもあつたとかして、そして、自分の小兒が、先程御話した如く咳をつき始めたならばそれと感付くのが決して惡くありません、それで雨の降らぬ前に牖をしめる用心をするのです。

先づ食物です、無論消化困難の物は避けねばなりません、胃腸を害して身體の衰弱を招ぎますれば長の咳の病に持ちこたへることが出來なくなります、それゆゑ、養分になるやうなもので、消化のよきものをやり、そして刺戟性のものは、咳を增す恐れあれば、全く嚴禁とし、小兒の年齢に應じて、それ〳〵、適當の品を撰ぶことゝします、又、あまり熱いものも、あまり冷いものも避けます、それから、小兒をして、精神や身體を使ひすぎることのないやうに取扱ひ、衣服は、時候にもよりますが、冬季では毛織物を貴びます、室內は空氣の流通よきやう務めます。西洋では日本と違ひ建築材料の質が緻密である爲めに、換氣がよろしくないからして、從て、室內の空氣流通のことを、大變に、八釜敷申します、けれども、日本の家屋では、換氣が餘程よろしいから、西洋の書物にかいてある程、それ程の心配は入りませんが、それでも、能く、此空氣の清淨に注意致しまして、室內空氣の塵埃などは外氣の出入につれて運び去るやうに務めます、冬分でも、天氣よろしく、風なく、日光のあたりがよき折には暫時障子を明けて、善き空氣を導いてよいのです、掃除ははたかないで、拭くと云ふことに致します、室を暖めるには、室內暖爐、火鉢でもよろしくあります、が、あまり暖くなく、そして、火鉢なり暖爐なりの上に鐵瓶とか、又は、金盥に湯を盛りて、かけて置いて、空氣の乾燥を防ぐ必要があるので、是は、空氣が乾燥すれば、粘膜も乾いてまゐり、咳を惹き起し易いからであります、夏分ならば、風すきの適當にあるやう致します。

小兒は、病氣の輕重により、また年齢の異るに從ひ、

取扱に加減せんければならぬことは多言を須ゐません、强ち、皆が皆、床に着けきりで置くといふ譯でも無いのです。

藥は、無論、醫者より貰ふ他はありませんが、○○温き牛乳などは、咳の爲めによろしいのです、それから、首のまはりに罨布を當てるのもよろしくあります。綺麗な淸潔な晒木綿、若くは「ガーゼ」とか「フランネル」を適當の大さに切りてこれに微温湯をしめし、程よく絞りて首を二三回巻き其上から乾きたる布で蔽ふて水分が他に移らぬやうにする、また、胸のまはりにも同様の罨布を巻く是等は咳の爲めに起る痛みを和らげる効があります。

○○吸入も必要です、重炭酸曹達一匁と純食鹽一匁とを水百匁に溶かしたるものを以て、吸入法をやります、小さい小兒ならば睡眠中に行へば便利でせう、一日二回位、

發作がひどく、咳がはげしく、痰がからまる恐れがあれば常に、人が付いてゐて用心せねばなりません、窒息しては困りますから、されば、そんな時には、可成、胸や、首の部を自由にして、束縛しないやうに致します、小さい小兒で粘稠つた痰が咽にからまつてゐて、困難をするならば、柔らかい毛の、しつかり軸についてゐる筆を、よく湯であらひ、それでもつて、咽の處をなでる、そうすれば、痰は取れないにしても、小兒が、嘔吐を起して、同時に痰を吐出することがあります、急場の時には是は心得て置く必要のあるものと信じます、また窒息を防ぐには、小兒を床に起して座らせ、そして前方に少し屈するのであります。

其他痙攣などあれば、醫者を招くべく、また大抵皆主治醫の御相談を冀望致します、百日咳の極初めから、直ぐに醫者にかけて、適當の治療を受ければ、經過を確かに、縮めることが出來て、早く全快することを得ますから、初めの注意が、肝要です、即ち百日咳の初めではなからうかと考ひ付くので、それには、世間の小兒の様子に注意することが必要です。

百日咳には、通例熱の無いものですが、若し熱が加は

つて來れば、是は、心配すべきものです、早速醫者に通知せんければなりません、また肺結核の遺傳ある小兒に百日咳を起せば、是は、非常に注意を要すべきのであります、それは何故かと申しますに、第一此百日咳の爲めに、身體全躰を弱くするのと、それから第二現在、此病の爲めに呼吸器系統も弱くなつて居りましやう、凡て病は弱めにつけこむものでありますから、色々の病が侵入して來るやうになつてをります、殊に肺病の遺傳のある小兒で、身體がよはり、呼吸器がよはつて來て居れば、そこえは、好んで肺病が襲ふて來るのは見易き道理ではありませんか、そこで、若し、百日咳のあとで、熱でも起ることありとすれば、是は肺病がついたと疑つてもよろしい程であります、であるから、肺病の遺傳あるものならば、一層用心して、看護を怠らぬことが肝要であります、また出來ることならば、誰でも百日咳の後は、空氣のよろしい、季候のよろしい、暖かな地方に轉地をする、例令ば、東京附近ならば、逗子とか、葉山とか、伊豆邊えでもゆきて小兒の身體が丈夫に復する迄、静かに養ふと云ふことに致し度いのであります。

（完）

育兒艸（泰西育兒法）

西洋産婆述

▲沐浴の事

分娩の時には産婆を聘して母子ともに萬事の手當を施すものなれば詳しき事は申さずともよし、唯大躰の心得までに申置くべし、まづ兒の生れたる時産婆は臍の緒を縛りて切り、さてその兒をフラネルに載せて介抱人に渡さば、介抱人はそのフラネルにて暖に褁み、若し寒き時候ならば火の前ならずとも、その傍につれ行きて暖かく居くべし、その譯は兒の産るゝ前、胎内にありて適度の暖氣に馴れ居たりしを今遽かに冷氣に觸れさすれば大に害あるを以てなり。

次で爲すべきは兒に湯を使はす事なり、若し月滿たざ

る分娩にて兒の呼吸苦しく、その他怯弱の微見ゆれば格別なれどもそれさへなければなる丈早く沐浴せしむべし、若し呼吸苦しく又怯惰なる微見ゆる時には暫く靜かに落つけ置きその自由に強く呼吸の出來てや丶丈夫に見ゆるまで待つべきものなれば、その際篤と見定めて後善き頃に至りて浴さするを肝要とす。

嬰兒の體には白く脂ぎりて乳の凝りたるやうな物附着し居り、別けて瞼や鼠蹊、腋下、その他皮の摺目などに多くあるべし、若しその附きたる儘になし置く時はやがて乾きて堅くなり皮膚を刺衝して終には烈しき潰爛を生ずるの恐あるものなればなる丈手を盡して取るべし、扨てこれを取るには水にてはよく落ちず、石鹸も又十分に効を成さず、唯豚の脂肪は極めて善くこれを融かし落する効あるものなればまづ兒の全身に豚の脂を塗りその後に華氏の寒暖計九十六度より九十八度(人肌の暖みより少し冷かなる位)までの温さの湯に入れ五六分間も過ぎたらば、湯の中にて海綿又は柔かなる布にて石鹸をつけてよくその體を洗ふべし斯くすれば大抵は奇麗に落つるものなり、假令少しづゝ處々に殘り居りて取れ難きことありとも強いて取らんとせざるをよしとす、妄りに劇しく擦すれば、皮膚を刺衝するより遂に熱氣を起さしむることあり、故にその儘になし置けば次の浴の時には必ず容易に取れるものなり、又或説に嬰兒に冷浴を試むるは。兒の皮膚を緊めて丈夫ならしむるなどの事あれど斯は甚だ危険の事なり、すべき浴に限らず産後未だ日月を多く經ざる嬰兒に向ッて寒冷の氣に當つるはかよわき神經を刺戟して案外の大害を惹き起す事ありと知るべし。沐浴の折注意すべき要件を左に記すべし。

◎兒を洗ふには湯の中にて洗ふをよしとす兒の骨は柔かにして起たせ置かるゝを支柱ふる力なき故若し手を持ちて引立つる時は幾分か體を痛ますのみならず、嫩弱なる體を傷はんも計りがたし

◎盥は楕圓形に造りたるをよしとす、若し完全なるを求めば深さ七八寸位にして嬰兒の體を十分浸さしめ頭だけ支へるやうに造りたるものをよしとす

◎沐浴の際體を洗ふたる湯にてなるべくは顔を洗はざるやうにすべし、若し同じ湯にて顔を洗ふ時は必ず皮膚より洗ひ落したる汚物の眼に入りてその靡爛を醸し、終には眼目の妨げを爲すに至るべし

◎沐浴中は長くも十分間を過すべからず、湯よりわけんとする時は介抱人の膝の上に湯ゐげ手拭を布きその上に臥させてよく拭ひ乾かすべし、ゐまり抱きかゝへなどして身體を動搖さするはよろしからず、

▲授乳の事

世俗産兒を取扱ふに、麻苦利と稱し甘草など煎じたる汁を含めて大便を促がす習はしゐれど、こは益なき事なり、産れて姑らく手を着けずに置き、やがて程過ぐれば自然に大便通じてこれを行ふに及ばざるものなり、産れし小兒をばなる丈早く臥床の上に臥させ置き寒氣に面を觸れしめず、又烈しき光線にも未だ堪えざるものなればそれにて目を射させざるやうにすべし、さて數時間も過ぐれば母も最早十分に眠る故その乳を兒につけてよし、但しかくするは、前度既に兒を生み、乳を飲ませしことゐるものに限ると心得べし、又その乳をつけるは産後二十四時間内になすべき事にてその譯は一には乳房の堅くなりて吸ひ難からざる前に出すべき用意の爲め、二つには乳汁の出づるを促さんとする爲めなり、實に此時に兒の乳汁を求めんとてその吸ふことを勉むるは大に乳汁の分泌を進むるの効ゐり、」一躰分娩の當初に分泌する乳汁は稀薄にして兒の爲めによろしからずとの説ゐれど決して然らず、成程分娩の初に出づる乳は薄くしてやゝ成長せる小兒の飲むには不適當なれども、産兒の飲むには尤も適當にして造化の妙作用なりといふべし。夫れ産兒の腸につまり居る黒き糞（俗に蟹糞と稱す）の通せざるは必ず惡しきものにて若し久しく通せざれば大なる患害を爲すものなれば必ずこれを通せしむるの作用なかるべからず、今産婦の始めに出づる乳汁の中には一種の性質を含みてその緩下の効用を具ふるは全く是れ造化の妙作用にして專らその産兒に益ゐらしめんとするなり、故にそ

の乳汁を兒に飲ますするは啻に害なきのみならず、却て大に効益ありとす、彼の甘草汁等を與ふるは誠に止むを得ざる時に爲すべきものにて即ち母に乳なき時、若しくは乳母の乳にて育つる時等の外は決して行ふべからず、若しこれを飲ましめんと欲せば蓖麻油一茶匙を一度或は二度用ゐるに若くものなし出産後十時或は十二時過ぐるまで兒には何等の滋養物をも飲ますに及ばず、大抵その母乳早く出で來りて自然その養に乏しからず、されど初次の分娩にて乳汁早く出で來らざるやうならば三四時間毎に搾り立の牛乳三分の一と熱湯三分の二とを和し三盃糖にて薄く味をつけたるものを飲ましむべし、その量は二三匙づゝ飲乳器にて飲ますべしさん斯くなし置きて母の乳の十分に出づるを待つべきなり

▲哺乳の職分

健康なる世の婦人が、その兒を哺乳するは天然自然の約束にして、申さば天の大法ともいふべし、造化が婦人をして兒に乳を哺ましむるの意は養育と共に母子の愛情を増さしむるにあり、母は勿論小兒をしてその生れ出でたる始めより慕ひ恃むの情を備へしむるにありて、他日兒の父母を信じ親しむの心深くなるは實に此の始の情、即ち哺乳の天然的至情に基くものなり、蓋し兒の未だ生れざる間には乳汁少しも出でざれどもその生るゝや忽ち出で來りて加之、その品質は三種の原質蛋白質、脂肪、澱粉を程よき割合に含みてよく嬰兒の嫩弱なる機關を速かに成長せしむるに適へり、彼の身躰剛に才智俊られたる世の大英傑を養ひ成す所の食物又同じ三種の原質より成れるを見れば今兒の爲めに此の三種の原質を兼ね備へて調理したる天然の食物は唯乳汁のみ知られたり、されば西洋の大醫も之を稱して諸般の滋養物の模本なりと云はれたり、且つその出づるも日夜間斷なくして爾後年月を經て兒成長して終に常人の食物なる諸種の物品を消化し得るの機關全く整ひて乳汁の最早要用ならざるに及んで始めて絶ゆるものなり

抑又この哺乳する事は獨り小兒の爲のみならず、健康なる婦人の躰の爲めにも大なる利益ありて產室に籠り居る間に生ずる諸種の疾を防ぎ又は之を治するの効あり、その上又哺乳の期限中始終母の健康を保護し及び之を增進するものなり、その故は凡そ婦人の一生中にて此の期限ほど健康なる時はなく、縱へその前までは多少虛弱なりしもその時より壯健となるもの多くあり、一躰婦人の躰格を弱らせて早く老衰せしむるは數度の懷妊ほど甚だしきものなきに、却りて哺乳するが爲めに之を豫防するの便あるが故なり、且又彼の乳癰を患ふるもの、多くは子を生みて哺乳するものよりも、人に嫁して子なきもの、又は寡婦なるものに比較的多きの例なり。

▲母乳の利益

抑も小兒の体に適實なる滋養物は乳汁を置いて他に何等の好物はなきものなり、且夫れ母と子との間には天然の倫あり、若し今子をして他人の乳を仰がしめばその倫あるを認むることと明かなる能はざるべし。然るに世には浮薄にして徒らに若氣の遊樂を貪らんが爲めに、又は哺乳の爲めに家内に引籠り居るの窮屈なるを避くるが爲め、又は子を產みて容色の衰ふるを悲しむなどの浮薄なる了見よりして天然より定まりたる此の大法を破り背くものなきにあらず、それが爲めに己れの身に及ぼし來る災害の如何を顧みざるものあり、此の如き婦人は天然が定めし完全なることの健康法及び人倫を蔑するものにして禽獸にも劣るものと言はざるべからず、彼の極めて猛惡なる獸類すらも猶その子を哺乳するの情ありて我が乳汁を飲ませて愛護を加ふるものなるに、天然に出づる乳汁を止めて乳母に托するが如き婦人は禽獸にたも如かずと知るべし。



英國の新遊戲　振り鼓の遊び

白井規矩郎

振り鼓とは私が假りに付けました名で御坐いまして、英話ではTam-Bourin.と申します、御承知の方も御坐りませうが東京では救世軍とか申して基督教の傳道を致して歩行きますものが持て居ります、少さい大鼓の様なもので御坐ります、

併し此鼓は未だ日本では餘り見ませんし賣て居る處もない様ですが、私は極く手輕に自分で造りまして女子大學の生徒に持たせて居ります、其れは味噌漉しの古いものを底を抜きまして西の内の二三枚も張り（之れに一枚毎に糊を十分に引きます）其上へ金巾の一枚も張りまして、能く日に乾しますとポン〳〵と音が出ます、其れから周圍を紅唐紙位で張りまして處々へ小さい鈴の五つか六つも付けますと其れでよいのです、斯様なものを持て遊ぶと申すと定めし少さい兒童のする事でわらうと思ひの方も御坐りませうが、決して左様ではないのです、此種の遊戯をIDEAL DRILL.理想的体操と申して外國では昨今婦人社會に大流行の様で御坐ります、少さくて十六七歳先づ大概廿歳前後の女子が重に致すことになつて居ります、

其れで此鼓を以て致す遊び法を私は四通り程存じて居りますが、先づ其中で一番面白さうな直ぐに出來さうなものを一ト つ御目に掛けませう、道具も手輕に出來ますし人數も澤山は入りません遊びですから、春永に一つも行つて御覧なされませ、

遊び法

之れは人數を十六人と定めて御坐りますが、決して其程には及びません、又た其れより多くてもよろしふ御坐ります、私は四十人程を一組として致して居ります、

其れで之れには音樂が入りますが、皆様が御存じの

マーチでも何んでもよろしう御坐ります、御上手の方が一人ピアノか風琴を彈いて下さい、

一、鼓を右側垂下し徐かに音樂に伴ひ足踏み……………二小節間

二、右足を左足の前に出し、鼓を右手にて左肩と眞直の位置に揭げ左掌を以て下より打ち上げ次に左手を下す、（四回繰り返す）…………二小節間

三、は（一）と同じことと…………二小節間

四、鼓を右手にて眼の上邊に保ち、躰を前へに屈して、左手を下し、右足を左足の稍や前に……………………二小節間

五、は（一）に同じことと…………二小節間

六、鼓を右耳の後ろに保ち、頭を左右に回し、左手を側に垂下す…………二小節間

七、は（一）と同じことと…………二小節間

八、鼓を頭の後方に頭上に、双手にて保ち、右方に屈す…………二小節間

九、は（一）と同じことと……――二小節間

一〇、鼓を頭に、右肩に、右の髄骨に、地に（各半小節つゝにして變へる）…………二小節間

一一、は（一）と同じことと…………二小節間

一二、鼓を右手にて頭上に保ち、右足を前へ出して、体を徐かに屈し、左手を髄骨に……二小節間

一三、は（一）と同じことと…………二小節間

一四、鼓を水平に腕の長さに左の方へ展伸して、左手を開掌して胸を壓す如くに…………二小節間

一五、前のまゝにて腕を右の方へ…………二小節間

一六、鼓を正しく前に展伸して…………二小節間

一七、右の膝を跪き、双手にて鼓を正して前に保つ…………………二小節間

一八、各對の一人は起ちて徐かに屈し、一方の腕を跪ける對手の肩に與へ、一方に鼓を以て對手の頭上に置く如くにして下方を視る、

跪けるものは双手を結合して目を上部對手の顏に注ぐ、（寫眞を御覽あれ）…………四小節間

一九、は（一）と同じことと…………二小節間

二〇、鼓を右手にて保ち展伸して四回徐かに打つ…………………二小節間

二一、は（一）と同じことと…………二小節間

二二、鼓を頭の後方上の方に保ち、右足を前へ出して躰を後方に屈す…………二小節間

二三、鼓を下方に來たし、次に頗る外側に展伸し、

同時に右の足を輕く蹴る……二小節間
二四、は（一）と同じこと……二小節間
二五、鼓を足の前へ置き、速かに起つて躰を眞直にし、兩腕を前にて組む……二小節間
二六、屈して鼓を執り、右の髖骨に休め、左手を垂下す……二小節間
二七、は（一）と同じこと……
二八、對手と向ひ合つて右足を輕く蹴り、鼓を前で打つ……二小節間
二九、は（一）と同じこと……二小節間
三〇、再び對手と向ひ合ひ鼓を輕く打つ…二小節間
三一、は（一）と同じこと……二小節間
三二、兩腕を頭上に高く揚げ、鼓を右手に保ち、左手にて輕く打つ……
三三、鼓を頭上にて打つ……二小節間
三四、は（一）と同じこと……二小節間
二五、鼓を双手にて保ち、前面に展伸し、次に胸へ引く……二小節間
三六、は（一）と同じこと……二小節間
三七、左手にて四回打つ、次に二小節は足踏み……二小節間
三八、は（一）と同じこと……二小節間
三九、右臂を左の掌に乘せ頭を右方へ回して鼓上に休め、目を閉ぢる……二小節間
四〇、右足を前に出して躰を稍や前面に屈める、……二小節間

之れで御仕舞です、能く熟して參つて、始めから續けて致す樣になりますと隨分面白いもので御坐ります、次には又た何にか變つた運動法を御記しませう、さようなら、

舞踏遊戲

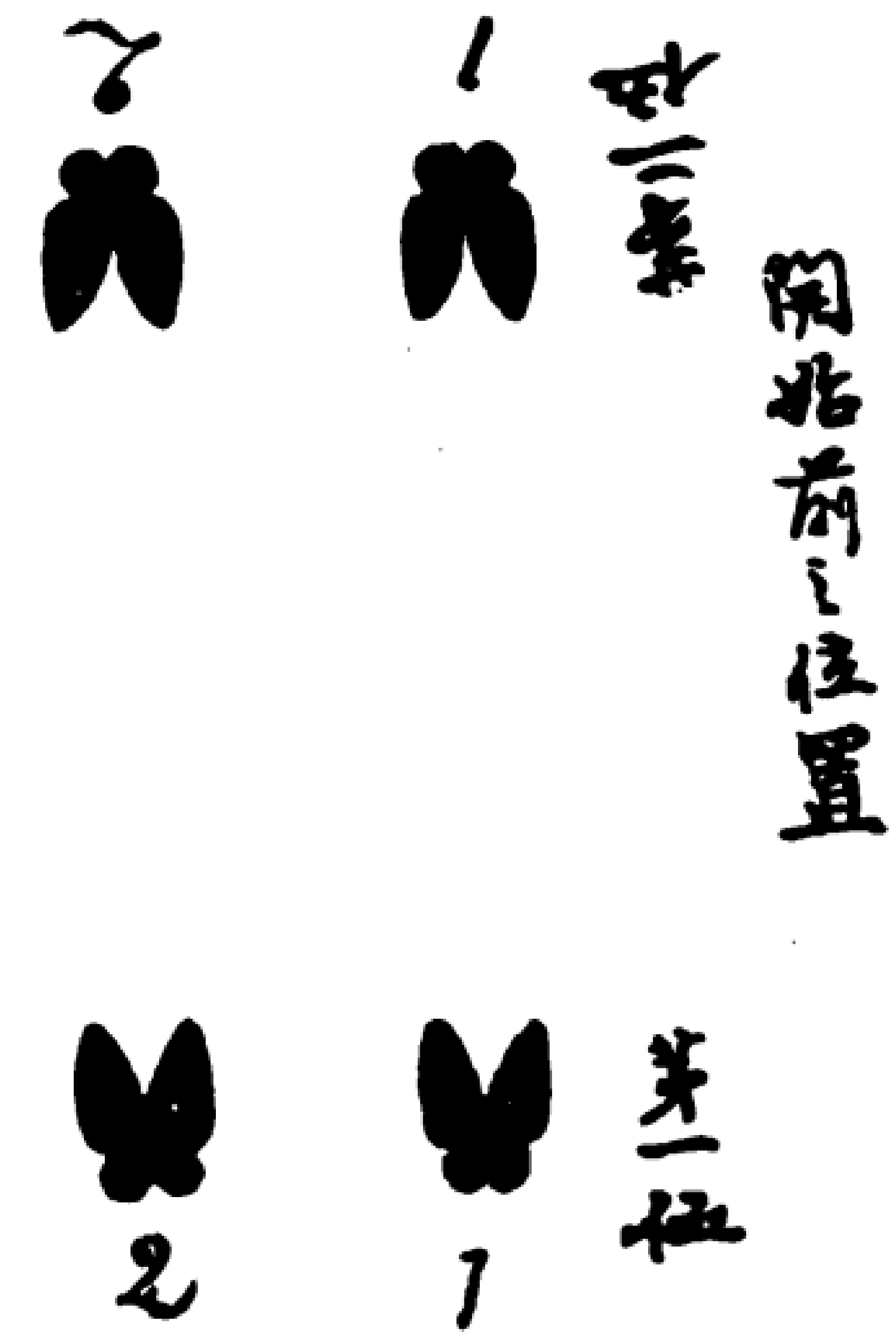
西川政憲

グワドリル (Quadrille)

此の遊戲を説明するに八呼又は十六呼と云ふは一より八迄算ふる間又は一より十六迄を算ふる間を云へるにて此の間の調子は後ちに音樂に和して行ふ調子なれば正しくして違はざる樣注意すべし

（一番）

両伍は互に左右になりて前に進み八呼の間に向ふのもの、居た所に行き其位置を換へて向き合ふ。途中にて行き逢ひしときは右の方の者は互に先方



二人の中間を通り抜くべし。又先方の位置に入るには自分の右の方(体の右半身)より先きに入りて對向ふ。次に八呼にて前と同法によりて舊位に復る。

●次に十六呼にて、右の者は内の方に左の者は外の方に「セット」して(八呼間に)。更に八呼間互に両手を握り左方に廻る。(「セット」とは右の者は圖中點線



の方に右横足をして互に顔は見合せつ、一二三四にてAB點迄行き次の五六七八にて左横足をして舊位に復り互に向き合ふ)

●次に十六呼にて両伍の右の者は「チエイン」をなしつゝ對伍の位置まで往きて再び復る。

(「チエイン」とは鎖と云ふことにて両伍の右の者は斜に出で、先方の位置に入り(八呼にて)次の八呼にて再び舊位に復る。途中行逢ひたるときは互に左方に寄り右手を以て握手す)

●次に八呼にて両伍のものは互に右手と右手。左手と左手を握り合ひガロップして對伍の者と位置を變更す。

(ガロップとは互に右と右、左と左の手を握り合ひ右の者か先になりて横摺足をして走りて對伍の位置に入る(摺足の時は後足にて前足を蹴る如し床より足を上げざる様にすべし))

●次に八呼にて左右になりて舊位に復る。

(左右とは最初に行ひたる如く右の者は互に對伍両

者の中間を通り抜くるを云ふ）
以上の動作を始めより今一回繰り返し「第一」を終る。

（二番）

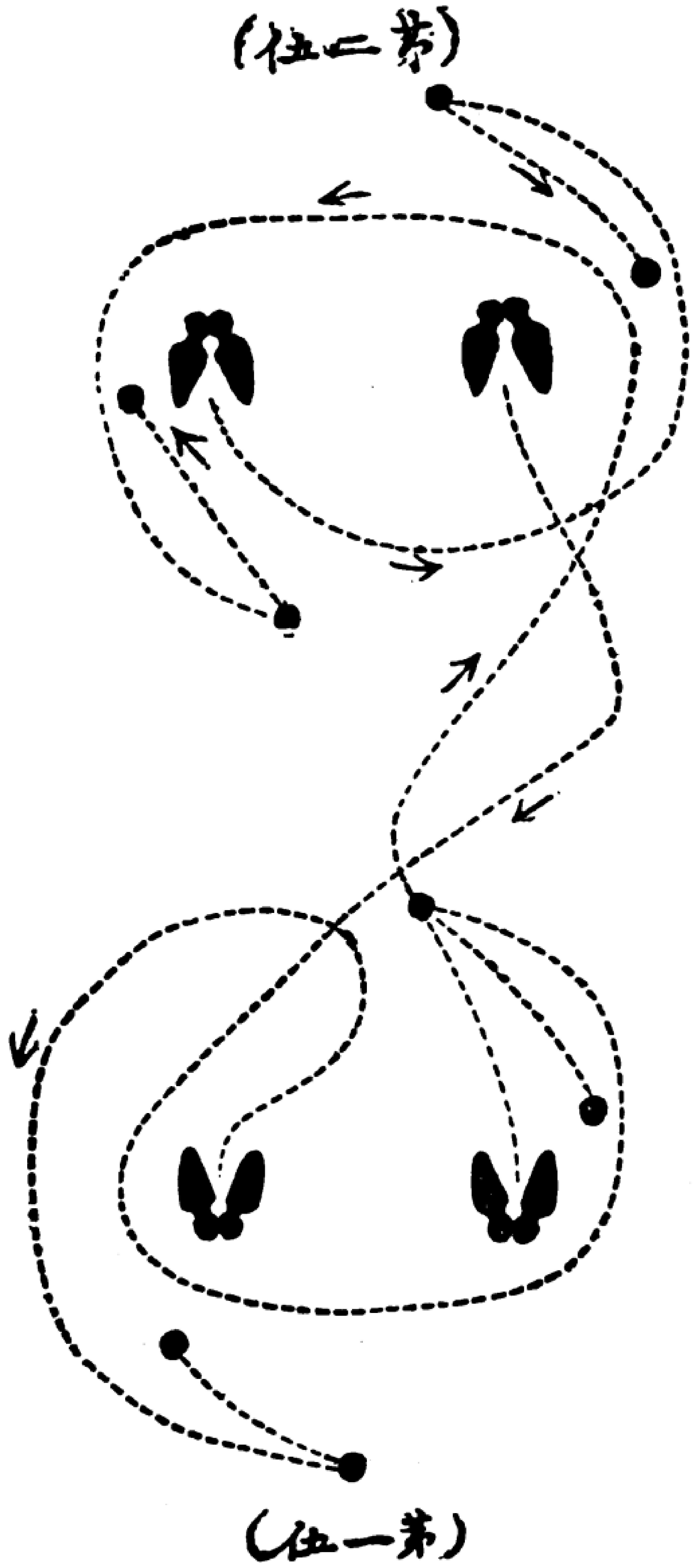
第一伍の右の者と第二伍の左の者とは左斜に一二三と三歩進み四にて両足を揃へ、五六七にて三歩退り八にて両足を揃ふ。

●次に同じく右斜に三歩進みて三歩退る。

●次に八呼にて第一伍の右と第二伍の左とは互に右の方に寄りて前進し其の位置を交換る。

●次に其位置に於て右斜に三歩進みて三歩退る。

●次に八呼にて圖の如く舊位に復り停止せずして直ちに八呼間セツトして両手を握りて互に左に廻はりて舊位に復る。



前に位置を交換せず殘りたる第一伍の左と第二伍の右の者とは同時に運動を始め點線の如く行進して後にセツトす。

以上の運動を終れば今度は第一伍の左の者と第二伍の右の者とにて右の動作をなして「第二」を終る。

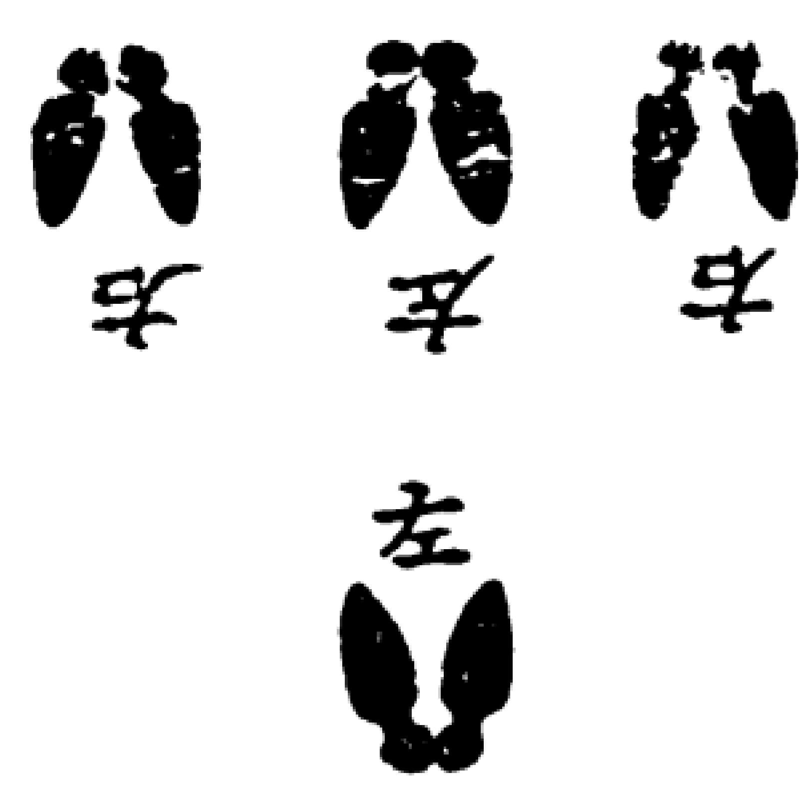
（三番）

第一伍の右と第二伍の左と一二三四と前に進み（少し右方に寄りて）て一歩互に行き過ぎ、五六七八にて二歩戻り互に左り手を握りて左右に開き其右手にて跡に殘り居る者の右手と互に握り連鎖す

●次に八呼丈け其儘休止す
●次に八呼間一直線になりたる儘バランスをなす
(バランスとは、四人の者が互に手を連ねて肩の高さ位に保ち一。にて第一伍の居し方に一歩寄り二。にも兩足を揃へ。三。四。と元へ復り。五六にて第二伍の居し方に一歩寄り。七八にて元に復る。)
●次に八呼にて先方の位置に行き對向す(第一伍の右と第二伍の左は手を解き其同伍の者は握手したる儘)
●八呼にて第一伍の右と第二伍の左は互に三歩進みて三歩退く
●次に前の如く八呼間三歩進み互に默禮して三歩退く
●次に八呼間兩伍とも各右手と右手を取りたる儘三歩進みて三歩退く。
●次に八呼にて兩伍は右左となりて舊位に復す
以上の運動は第一伍の左は第二伍の右と行ひ。次に第一伍の右は第二伍の左と行ひ。第一伍の左は第二伍の右と共に行ふて『第三』を終る

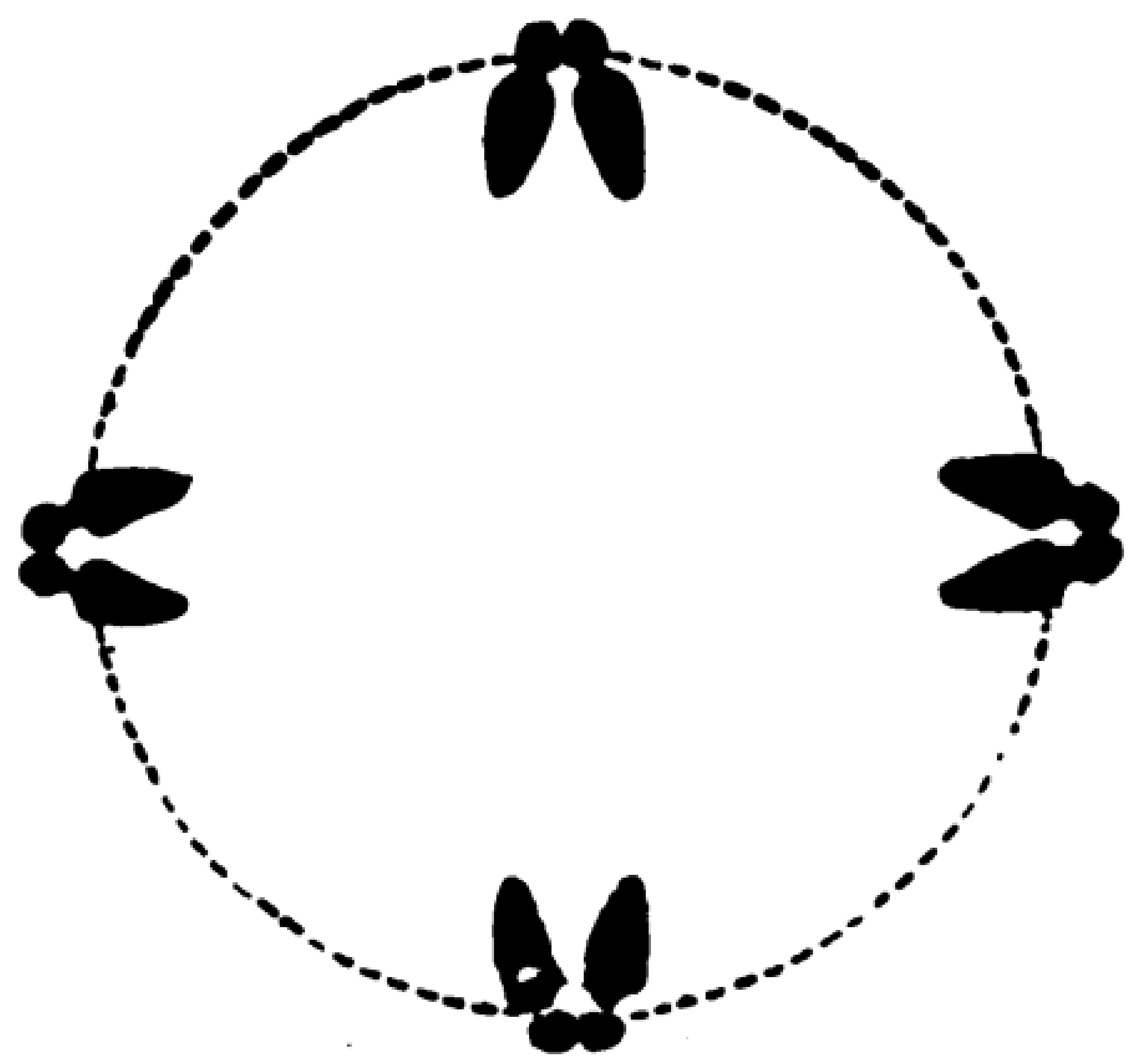
(四番)

第一第二兩伍の左の者は右手を以て右の者の右手を取り之を連れて八呼にて三歩進み三歩退く
●次に前の如く八呼にて進み右の者を第二伍の左に渡し默禮す
●次に第一伍の左は八呼にて舊位に復ると同時に第二伍の左は左右兩人を連れて三歩進みて三歩退く
●次に第二伍の左の者は左右兩人を連れて八呼間進み第一伍の右の者に之を渡して默禮す(此の時兩人は其外側より廻りて着く)



●次に第二伍の左の者は八呼にて舊位に復ると同時に第一伍の左の者は兩人を連れて三歩進みて三歩退く
●次に第一伍の左の者は兩人を連れて八呼にて前進し第一伍の左の者の所に至りて四人共に手を連鎖す
●次に四呼間手を繋ぎたる儘左方に廻り。次の四呼間

各伍は分れて互に舊位置を交換す



●次に八呼にて右左となり舊位に復る以上第二伍は出で丶渡し初め又第一伍次は第二伍と都合四回行ふ(但し第一項丈けは毎回の始めに兩伍同時に行ふ)て『第四』を終る。

(五番)

幾伍あらうとも皆な一同に兩手を連ねて横隊となりて八呼間三歩進みて三歩退く。

●次に八呼間同じ事を繰り返す。

●以下は『二番』と同じ動作をなす。但し運動の始めと終りとに於て毎回手繋のまゝ三歩進み三歩退く動作を二度づゝ行ふものとす。

家庭談叢

新年初刊の各新聞紙上に於て、家庭に關する記事は頗る饒はしかりしが就中尤も有益にして趣味多かりし記事は時事新報紙上に掲載されし中井芳楠氏夫人の倫敦の家庭觀とす。中井氏は横濱正金銀行の支店長として久しく英京倫敦に滯在されしの人、夫人は即ち良人に從ひ明治二十四年始めて彼の地に渉り十二年の久しき一回も歸朝せし事なくやうやく昨冬休暇を得て久々にて故國の地を踏みたりといふ、されば其の觀察の淺からざるは元より殊に婦人の眼を以て家庭を見るものなれば男子の觀察とは自から趣きを異にして精到綿密なるべきや必せり仍て茲に夫人の談話の一班を紹介して彼地の風俗を知るの料となし併せて家庭改良の一助ともなさん歟

倫敦の家庭(家庭改良の好資料)

(中井芳楠氏夫人の談)

私が倫敦に參つたのは今から十二年ほど以前で其間

一度も歸りませんで今度久々で歸朝致しましたが、十年と申しては短いやうでも、大分久しいことになりますので、英國風の生活には悉皆慣れまして、最初は珍らしいと感じたことも、今では面白くも可笑くも思ひませぬ、勿論英國の社會とても必ず今日は十年前より一層進歩して居るに違ひないのですけれども、同時に日本の社會も總ての事が大變に開發されまして私の出立いたした頃には未だ眞の萌芽であつたものが、今日は大分成長して既にそれ〴〵の形を爲して居ると云ふ有樣ですから、日本の事情には餘程疎くなつて居ります、殊に私は研究に參つた譯でもなく只夫に附隨して永く外國に暮して居つたのみならず敎育も學問もない昔人ですから迚も立派な御話は出來ませぬが、極平易な日常耳目に觸れて感じた點を申上げます且つ私の申述べますことは總て始終普通社會のことのみで單に英國一般の風俗だけですから其お積りで御聞きを願ひます。

倫敦では下宿を致さうと思へば營業的の家でなく普通の素人の家に馬車を置き侍女を遣つて下宿をして居ることも出來、又は一室だけを借りて夜寢るだけの用に供へることも出來るのです、私共も當分は下宿をして

居たので其家は可なりの財產家で家内は夫婦に娘二人其妻君は大變に日本贔負で、嘗て日本に見物に來て一月ばかり居つたこともあるそうで、誠に親切な好い人です私共は其處に四年ほど居りましたが固より語學も碌々出來ませず其頃は日本の婦人などは僅に三四人でそれも銘銘離れて居るとですから我國の婦人と話をする機會も少なく外出は出來ず據なく手毬を突いて運動の不足を補つたほどです、それに御承知の通り倫敦は霧の深い處で殊に私の參りました年は不幸にも例年よりは一層霧深く戸外などは見えないやうに立罩めて火を點して、晝飯を戴くやうなことも屢々ありました．且つ冬は日が短く四時にはモウ暮れて了ふので其淋しさは申上ぐるまでもないそれから語學の補足にもと存じてカパチス（我國の保姆若しくは家庭敎師の如きもの）を頼んで毎日ピヤノの稽古を一時間運動を一時間宛しました、又川瀨夫人（本邦駐箚公使）が御深切に御世話下さいまして婦人社會の樣子など承りおぼろげながら少しは事情にも通じて參り、漸く家を持ちましたのですが、最初五年ほどは何でも日本の事が好く西洋の事は惡いやうに思つて居りましたが長く居る中に段々と目が覺めたやうに成程總てのことが

日本は遠く西洋に及ばないと思つて一々感服し今度歸つて日本風の生活をいたすのが大變樣子が違つて自分の家の樣な氣が致しませぬ、久振で鄕里に歸つて何となく心安く嬉しい中にも尙は旅にゐるやうな心地が致しますのは恐らく私一人でなく彼地から歸つたもの丶誰人も感ずることだらうと思ひます、例へば此家の如きも戶を閉て丶も障子の間が隙き火鉢に火を起せば頭がカン〳〵すると云ふ樣に一々擧げて比較をしたら殘念ながら劣つて居ると云はねばならぬ實に彼地の生活は便利になつて居りますけれども、物質上の進歩は色〳〵の關係があつて個人が直に取つて眞似ると云ふことは六ケ敷いから、此處では只心の向け方一つで改良すればつまらぬことでも割合に裨益する處の大きいと思ふ端を御話致しますゆゑ其積りで御聞きを願ひます、先づ第一に私の毎度感心して居ることは總てが規則正しいことで、御座います私は毎も思ひまするが日本の總てのことは多く感情から打立てられて居る、それ故に何となく基礎の据らないやうな傾きがある然るに西洋の事は多く道理を標準にして能くそれが行はれて居りますが、斯くてこそ社會の秩序も整然と紊れずに往くのであらうと存じて居ります。

▲衣服の事（比較的質素なり）

日本では此頃夫人方が華美な立派な服裝をなさるさうで、今度私が歸ります前にもなか〳〵着物を調製るのが大變だらうなど丶言はれた方もありましたが、實際如何にも皆樣が華美で以前は斯うまで丶はなかつたと存じます、是れが若しも國の富の度に應じて立派になつたのなら誠に喜ぶべきことですが、それは何うであらうか、兎に角富の度が日本より遙に立勝れて居る英國の婦人の服裝（大禮服は別）は、通常斯はどに立派ではありませぬ、彼地では絹織物は品質が弱く且つ價も高い處から餘程高貴の人でなければ平常着には用ひぬのです併し今日は輸入の道が開けました故か元のやうではありませんで、甲斐絹のやうな薄い絹を下女の如きものまで用ひて居ります、彼地では中等の生活をする際でも人を雇ふことが容易でないから、大抵は多勢の召使を置くなと丶云ふことは出來ない、從て夫人方はなか〳〵能く働きます、それ故朝の中は極粗末な服を着て居つて、午から着物を換へ立派ではないが、身奇麗にして編物をするとか、刺繡をするとか、或は訪問を受けたり訪問したりしますが訪問をするにも買物に往くにも婦人の會に出るにも決して衣服を着換へる

など丶云ふことは有りませぬ、一般に英國婦人は極質素で驕らない、體裁をして居る夫故晝間倫敦の市中を偶々けば／＼しい服装をして通るものでもあると品格が卑しいと云つて却て輕蔑されます、それから又お茶に招かれたとか或は珍らしい賓客があるからなと丶云つて招かれました時は日本で申せばお召とか風通とか位のものを着ます、又晩餐に招かれた時はイブニングドレッス（禮服）で此時こそ大變に立派な白色とか其他華美な色合輝く寶石珠玉等の装飾をちりばめて各々盛装を凝して参ります其時の服装に至ては日本の婦人が之に匹敵して少しも遜色なきやうとするには大抵な身代を傾けてもまだ六ヶ敷い、而して又英人は能く歩きますけれどもディンナーに招かれたときは多くは馬車で往きます、日本では年を取るに從て人の妻は尚更ら漸々地味にして少女が一番華美にしますが、彼地は御存知の通り其反對で人の妻は華美に粧り少女は極淡泊です併し彼地では年を取つても婚禮しない人が澤山あるが、是れも年を取るに從て幾分か飾ります、夫人方から比べると淡泊して居ます、又旅行及び旅に立つ人を送るときは殆ど平常の儘で一寸江の島に見物に往くとか横濱に買物に往くとか云ふときにはウォーキングゲドレッス（絹でなく羅紗服）です小兒の服は殆ど白色に極つて居ると申して宜い、貴人より貧民の子に至るまで白い淨い着物で好き人は之に雅な粧飾でも餘計附けるまでゞす、而して一體に衛生思想が發達して居りますから好く洗濯を致します一週間に一度は必ず洗濯するから貧民の子でも誠に清々と品質は劣つて居ても白色は何處までも白く透き通るやうに奇麗になつて居るチルドレンパーチー（小供のみ招く時）などに往つて見ると着物から靴下まで純白な子供が大勢遊んで居る樣は無邪氣な子供の心を現はして何となく高尚に見えます清潔を尊びますから、保姆などは子供に注意して着物を汚さぬやうに申して居ります、西洋服と日本服の優劣に就ては服を着慣れて見ると、装飾とか外形とかの點は扨措き、實用上洋服の方が宜いと思ひます、日本服は何だかバサバサとして袖は引懸り裾は刎るドウしても此服は自然無精になる服装であると思ひます、一般に西洋の婦人が能く働くのを見て毎度我國の婦人は迚も斯うに行かぬと考へて居つたが今度久々で日本服を着て是れでは働けないのが當然であらうと今更に思ひ當りました。

▲買物の事

彼地では日曜日には各店共店を閉ぢて（烟草屋酒屋は午後開店）市中は至つて靜で御座いますから買物は主に土曜日に致すとになつて居る、其れは必ず主婦か或は娘が自身に出掛けるので買ひ置きの出來るもの相場の高低なきものは一週間の入用を此日に買ひ込ます、例へば家族幾人でバタが幾ら砂糖が幾ら下女一人に就ての入用がいくらと云ふ樣に要るだけのものをチヤンと極めて仕舞ツレですから、泊客が一人あつても餘計のものが要ることは經濟上明に分るので日本では田舍の方に往くと何か事があると近所の人が頼みもせぬのに大勢手傳ひに來るのが何處でもの風でありますが、西洋ではアンなことは迚も出來ませぬ買ひ整へた物を皆押入に仕舞ひ錠を卸して置きまして其日の要るだけを主婦が出して與へます此處も不注意に開け放しにするのは女中に對して不深切であると云つた私なとは能う叱言を言はれました。

▲親切にして且つ快活なる事

彼地の人は一般に親切で迚も日本人などは及びませぬ何故なれば人に對して叮嚀親切の心がないものは紳士淑女の資格に缺けるとしてありますから、萬人が萬人と心から親切であるかとうかソレは保證されませぬが兎に角表面の交際は誠に美しい而して男でも女でも我儘と云ふことが少なく互に人をして愉快ならしめ樣と務めるのですから、其結果互に面白く感ずるので御座いませう私は四年間も他の家に居りましたが其親切に人懷しきことは久振で逢ふた時など丁度親にでも逢つたやうに心から嬉しく感じます、それに彼方の人は情を表面に現はして少しも日本人の樣に包むと云ふことが有りませぬから、友達に久振で逢ひましても日本の婦人ならばマア暫くと丁寧に頭を下げて禮をする感情が極まれば窃と涙を落すと云ふ場合に彼人の婦人は痛くて何うしやうと思ふほと極手を堅く振つてマア〳〵暫くでした御機嫌好うと云ふ、其語にも擧動にも活氣が充滿として居ります然るに日本人の中には彼地の婦人は何となくギクシヤクして始終六ヶ敷い理屈でも言つて居る樣に思ふ方もありませうが、婦人の權利とか義務とか女權とか云ふことを何處の家庭でも言つて居る譯ではなく、家に這入つて見れば大違ひです。

死する者は唯一度父母を煩はし悪しく生活するものは常にこれを煩はす　（英國俚諺）

文藝

支那第一戯曲の梗概(二)

幸田露伴

饑饉は猶引續いて烈しく困究してまゐりますが趙氏はヂッと堪へて居りまする、蔡邕の方からは何の音信もありませぬ、其中いよ〳〵窮乏して來るので趙氏は舅姑には何の氣も見せずに食を勸めて居りまするが、自分は糟糠を食べて飢を凌いで居ります。まことに鑛毒被害地の民のやうな譯で、目も當てられぬ慘狀です。頭上には簪一本無く、身には破れ衣を纏つて舅姑に隱れて糠を食べてるのでございますが、死なうとすればば老人二人を捨てる譯に當るので死にも爲切れないで生きては居るもの丶、糠の事ですから喉を通らうやうはありませぬ、思へば糠よ糠よ、你は礱に遭ひ舂に遭ひ簸り揚げられ、散々に憂目を見るものなるが、辛苦に窶る丶我が上にもなか〳〵似たる不幸のものよ糠と米とは離れぬ中の、本は互に依り合ひしが簸に扇られてより別れ〳〵に、一つは貴く一つは賤く、復遇ふ由も無くなりて身の行末を悲しむは、妾が身にも好く似たことよ、吾夫は米に同じこと、米は他鄕に在つて尋ぬるに處無く、妾は糠の甲斐無くて人の饑をば救はぬごとく、御父樣御母樣に甘旨ものを進ぐる譯にもならぬか、と種々に思ひ亂れて歎いて居ります。左樣とは知りませんから老母の方は、何時も〳〵媳婦が自分に隱れて竊に食事を仕ますのを見て、そこは女の廻り氣を起して、一日老夫の扯住めるのをも關はず突然に現れて其の食べて居るものを見ますと、如何なこと糠でございますから、これはとばかり喫驚致しまして、これほど迄に自分は辛苦して我等二人を養つて居

て呉れたか、嗚呼濟まなかつた、と思ふと同時に老年の事ですから二人共に悶絶致しました。幸ひに老父の方は蘇生しましたが老母の方は沈々として蘇りません。苦い中での不幸の出來事に趙氏は身一つで弱りきりましたが、幸ひに隣家の張太公の幇助を得て、一生懸命になつて殯殮の事を致し、猶病氣づいた舅の看病を致して居ります。

國は恐ろしく廣くて交通は恐ろしく難儀な支那の事ですから蔡邕は故郷に斯樣いふ悲しいことが有らうとは露知らずに居ります。然し富貴の中に居り嬋娟の傍に居ればとて其に心を奪はれて仕舞つて父母の事を忘れるやうな蔡邕ではありませんから、美酒芳樽も去つて斟むに懶く、琴を彈じて思を遣つても兎角に其事ばかりに心を取られるので、夫人の求めによつて一二曲を彈いても間違つてばかり居るといふやうな始末ですから、夫人も幾許か怪しく思つて居ります。左樣右樣する中に故郷の方の饑饉だといふことを風の便りに聞いたので、さあ蔡邕は愈々心配でなりません、親に強ひられて選場に赴き、君に強ひられて議郞となり、又強ひられて牛家と緣を結び、今に至つて何樣することも出來無くなつたのを幾度悔んでも甲斐はありません雞の鳴く聲を聞いて眼を覺まして女房と共に御父樣御母樣の御機嫌を伺ふかと思へば其は夢で、身は錦の衾を被て象牙の臥床の上に居るといふ有樣ですから、今の身の上の樂なだけに故郷の事が氣になります。夫人や牛太師には知らせたくないが、何樣か故郷の者が此地へ來て居るのに逢つて其者に手紙やなんぞを托したいものだから、左樣いふものが有つたら內々で知らせて呉れ、と侍僕に賴んで置くと、惡い時は惡いもので生憎拐兒めが故郷陳留の者だと云ひ立てゝ來る、騙詐とは氣が付かないから其漢に手紙と金珠とを托して遣つて辛と安心すると、豈圖らんや拐兒めは、巧くいつたと悅んで、手紙はどこかへ抛り出して金珠は着服して仕舞ひます。

趙氏の方は益々慘然たるもので、貧苦の中に舅は病み患つて居りまするし、夫の方から音信は有りませんし

何樣する事も出來ませんが、其中で趙氏は一生懸命になつて藥を薦めたり粥を進めたりして看護します、其親切孝行な事は一ト通りではありません、併し舅は藥も粥も喉へ通らなくなりまして、嗚呼悴めに遇ひたいが不孝な奴めは何處に何樣して居ることやら、それにしても悴めが出てからといふもの你に云ひ盡されぬ世話になりました、此世では到底你が親切に報ふことも出來ぬが、責めて來世は你の媳婦に私がなつて恩報じを仕度い、と盡く感謝の意を哀れな語でもつて表はしまして死んで仕舞ひました。舅の所存では嫁の趙氏に氣の毒でなりませんから死際に隣家の張太公の來たのを幸ひに、日頃手ならした柱杖を太公に與へて證として、不幸の子が歸つて來たら打つて呉れ、といひ、また趙氏には休狀を與へて置て後日自分の体が自分の自由になるやうに仕て遣つて置いて死にます。けれども他の事は兎に角、休書を手にするやうな趙氏ではありません、何處までも蔡氏の婦で徹して行く料簡ですから差當つて先づ葬の事を處辨しやうと苦みます。所が衣衫も首飾も賣り盡して仕舞つて家はたゞ四壁立つといふやうになつて居るのですから何樣も仕方は無し隣家へ左樣々々幾度も厄介を掛ける譯にも行きませんから、思ひ切つて自分の黑髮を截つて其を賣つて金に換へやうと終に自ら之を剪ります。眞に可憫な話しで、其髮を持つて市へ出て賣らうと仕ますが、買人さへ無いので、がつかり力を落して、此品が賣れて埋葬さへ濟ませることが出來さへすれば、奴家は直に死んでも關はぬのだが、噫情無い身の運だ、と歎息すると同時に氣を失つて倒れます。幸ひ其處へ張太公が通り掛つて介抱して、仔細を聞いて感心の餘り慷慨して其髮を多少錢に買ひます。趙氏は之に力を得て、終に白楊蕭々として悲風起る山中へ獨り自ら參りまして、自分が麻裙に泥土を裹んで女の力の甲斐無くも死身になつて墳墓を築き立てます。趙氏の孝は是に至つて至れり盡せりですから終に山神を感動して、とろりと一ト睡する中に山神の使ひ獸の猿や虎をして暫時に墳を築き成すに至らしめます。實は此事は張太公が家僮と共

に仕たのですが、張太公は此奇瑞を都て孝感の然らしむるところと致しまして、さわ墳も出來たし、汝の爲べきことは既汝は仕盡した、此上は衣を改めて都へと夫を尋ねに上るがよい、と趙氏の力になつて勵まします。

趙氏は其處で夫を尋ねに都へ上らうと致しますが、考へて見ると道中も長くかゝりますから御父樣や御母樣の命日も旅路で濟まさねばなりませぬ、そこで丁度自分が少い時繪の道を習つたのを幸ひに御父樣御母樣の肖像を描いて携へて、旅路の空でも御命日には心ばかりの供へ物なりと爲て一點の孝心を空しうせまいとの意から、悲酸の過去を思ひながら涙片手に瘦せ衰へた舅姑が睜々たる兩眸物悲しげに歸らぬ吾が兒を待ち詫びて居るところを描きます。趙氏の孝心は實に至れり盡せりでござります。さて畫も出來たところで趙氏は墓前に香を燒き酒を具へまして別れを告げ、衰柳寒蟬聞くべからず、金風敗葉正に紛々たる悲しい秋の旅路に上つて、いよ／＼都へ出やうとして、張太公に暇乞を仕ます。張太公は趙氏の不在中墳墓の看守を請合ひまして少許の路費をも餞け致し、それでは道中氣をつけて都へ上るがよいなれど、それにしても你の御亭主の蔡伯喈殿が此地を出立仕なさる時、都へ上つて少しでも立身したらば早速に回つて來やうと云はしやれたが、年は饑饉なり親は死ぬなりといふ如是場合にも知らぬ事とは云ひながら歸つて來られず、疑ふでは無けれど何樣いふ料簡方になつて居らるゝやら知れた事では無い、まして你と伯喈殿と別れし時は你の面に未だ世の憂さを味はぬ春の嫋さわりしかど、今の你は樣々の艱苦に窶れて自然花の香も無く艶も無く、特に力と賴むべき後楯さへ無き單身、伯喈殿の富貴の身になり居玉はゞ萬々一你を見ても知らぬ顏なされうも知れぬ處わり、時と場合と人の氣をよく／＼計りて邂逅ふ其折悔しき事無きやう氣をつけ玉へ、と老人だけに心も細く心切に心得を云つて聞かせます。趙氏は悅んで其心添を謝して洛陽へと愈々出立しましたが、何がさて長い／＼道中の事ですから盤纒は途中で盡きて仕舞

ひますし、知らぬ他郷の山坂で、伴ふものは影ばかりひとり悄然行き悩む雨の日、風の夜、霜の朝、怨を寄する琵琶の音に僅な人の手の中の哀憐を得て身を過す其辛苦といふものは一ト通りでありません、加之に張太公の言葉の通り測り知られぬ世の習ひ、よもやとは思ひながらも夫の心も按じられ、一夜の夫妻百夜の恩、怎で悠々たる陌路の人と做り得ん、と思ひ返して氣を勇めても、若し又何様な出世をなされて立派な御殿の奥深に御住ひなされてあるならば御目にかゝらう便宜も無く、高き車に駛き馬、大路を馳せさせ玉はんには取りつく島も無からん、と先走りする女氣の取り越して爲る苦勞も多く、心の悩み身の艱み、言ふに言はれぬ苦い思ひをして都へ辿つて參ります。

蔡邕の方ではまた驪兒に金銀や書狀を取られたとは知りませんから、過し日故郷へ音信をしたのを責めての心遣りにして聊か胸を開きましたが、それにつけても父上母上は何様な様子で居らつしやるだらう、故郷の妻は嘸我が歸らぬを恨んで居る事だらう、なぞゝ思ひ出せば思ひ出すだけ羽翼が有らば飛んでも行きたいやうな心持が仕て、自由ならぬ世を喞つばかりです。丁度秋の中になりまして雨の後の天は眞蒼に水は澄み樹は葉をふるふ淋しい中にも快いところのある時節、妻の牛氏は賞月の宴を設けて夫の鬱ぎ勝なのを慰めます。蔡邕の方では良夜の月を見るにつけても嗚呼此の月を一族團欒して觀たら面白からうものをと、吾影を省みて、萬點の蒼山、何の處か是修竹の吾廬であらう關山の笛、門巷の砧、月中都て是斷腸の聲、邊塞の征人、深閨の思婦は偏に天邊無情の月の別離に向つて明らかなるを怪むであらうものをと餘所事のやうに云ひ做して私に我が懐を洩らすと、牛氏はまた才學共に勝れて心優しい夫を持ち貴い父を持つて居るのですから萬里の空に纖の翳も無く嬋娟愛すべき月影を望み、十二の欄干光滿つる處、珠箔銀屏に涼しさ見えて、身は瑤臺に玉の盃を啣む此のおもしろの景に滿足して、唯願はくは年々此夜人も月も雙ながら曇らず缺けずにあらん事を祈るばかりです。老いたのと若いのとの二人

の侍女は、何の氣も無くて、眞にまあ今宵は良い月なぬが昔から云ふ通り月には圓缺陰晴あり人には離合悲歡のある習ひ、今宵の月も得意の人の仲好く互に賞すもあるべく、また唯一人物淋しう來ぬ人恨む門の戸に立明かして見る人もあらう、と空想を起して語り合ひます。かういふ有樣で蔡邕は故郷の事を忘れる間はありませんが、思ふに任せぬので苦惱して居ります。ところが妻の牛氏は賢明の人ですから、雨につけ風につけ、月花につけ、夫が樂まぬ色あるのを見て、終に其心を惱ましむる所以を問ひます。けれども夫の愁が衣食の不足や官位の低いためで無い事は勿論ですし、舅と性質が合はないためでもなく、侍妾の美なるもの丶無いためでもありません、色々と聞き糺しても半呑半吐で判然とは心中を明かして呉れませんから物陰に潜んで居て聞き出さうと致しますと、懷に餘るものですから果して夫は獨語を申します。耳を澄まして其を聞いて見ますと、何樣も天緣とは云ひながら實に困つた事である、故郷の御兩親樣吾妻も定めし我を待つて居やう、此處の新婦も賢うて心立さへ優しけれど、我が身の上を打明けたりとて一徹剛氣の舅御はあり、我を放して故郷へ返らしめたまふやうは無し、それ故姑く辛防して、地方の官員となる事の願ひの叶ふ節を待ち役目の上にて舅の傍を離れて都の外に去る其時吾が家へ立返り、父母をも迎へ取らうとは思ふて居れど儘ならぬ世のハテもどかしい事である、今も今とて我が冴えぬを案じて妻のいろ〳〵と問ふて呉れしが吾が底意を、云はぬは舅に知られては、我が心算の無にされる事の懸念のあればこそ、と思はず知らず本心を現します。それを聞いて默つて居る牛氏ではありませんから忽ち其場へ現れまして、左樣いふ譯でござんしたなら何故打明けては下さいませぬ、相公の親御樣は妻にも矢張り大切な御二方、直にも此から御父樣に申し上げて相公と二人して相公の故家へ參りまして、御父樣御母樣を二人して御世話申さうではありませんか、と云ひ出します。你の心は嬉しいが、其が直に出來るほどなら苦勞はせぬ、你の御父樣には此事を云はぬ方が却

つて増してゐる、なか〳〵人の言ふことを御採上げにはならぬから、と蔡邕は却つて牛氏を止めます。併し牛氏は、自分が理の當然と考へる事を仕やうと致しまするので、夫の止めるのは顧みません、父に對つて此事を云ひ出します。娘の時に我が婚姻の件について父に言はんとして言ひ得なかつたのとは大に異つて、夫に從つて其故里に至り、子の道婦の道を盡さう、と申し出しますと、何樣して珠にも花にも換へ難く思つて居る秘藏の娘のことですもの、牛丞相の許さうやうは有りません、まあ飛んでも無い滅相な、考へでも御覧、吾の身分、汝の育ち、何樣して其樣な萬里の果の田舍くんだりへ漂泊つて芋掘爺を親扱ひに汝に機嫌取らすことを、此の吾が許せるものか許せぬものか、わゝ、成らぬ〳〵、と叱り飛ばします。けれども其で引退つて仕舞ふ牛氏ではありませんから、何樣も左樣仰ゐつたところで妾が蔡氏の婦となつた以上は媳婦だけの道を盡さぬ譯にはまゐりませぬ、又日々夜々物思はしう惱み暮らす夫を見るにも忍びませぬ、父上が妾を最惜がつて下さるやうに夫の兩親もまた夫を最惜がつて居りませうなれば、何卒夫をして一片の孝心を空にせしめぬやうになされて下されませ、夫ばかりを故鄕へ歸せと仰わりましても夫唱ふれば婦隨ふ定め、鷄は鷄を逐ふて飛ぶとも申しますれば、何卒御暇を下されませ、と情理の當然を述べて父に逼ります。是は全く女の方の言が至當なのですから親は終には語が塞がつて仕舞ひます。けれども十二分に女を愛憐して居る太師の事ですから、末には、怪しからん奴だ、何の彼のと申して親に逆らふとは何事だ、親の云ふことは少しも聽かずに夫の云ふことばかり用ゐ居るのか、と頭でなしに親の威で壓へつけて口をきかせません。無理ではありまするが親を何樣する譯にも行きませんから、牛女は快々として己が室へ退きましたが、斯樣なつて見ると愈々吾が夫を身動きも出來無い機會に落して仕舞つたやうな譯に當るので、さあ牛氏は一ト方ならず苦惱致します、君を誤つたのは妾です、君の御兩親を誤り、君の妻室を誤り、君を不孝薄倖の人たらしめ

たのは皆妾の罪です、昔攝政の姉は屍の傍に哭して弟の名を成し、王陵の母は自ら劍に伏して子の節を全うしたる例もあり、妾が身を賭けて再び父を諫め、若し肯かれずば死を以てして君が一家に謝しまゐらせん、と凛々として慷慨します。が、それでは親をして不義の名を取らしむるやうなものであるといふ夫の注意に、云はれて見れば其通りなので、がつくりと氣が折れて、進退兩難の憂き瀬に惱みます。

牛太師は女を叱り飛ばして一度は酷くも逐ひ退けて仕舞ひましたが、もとより太師にもなつて居る位の人で理に昏い人では無いのですから、其後になつて虛心平氣で考へて見れば、一々女の言葉が道理なので、これは此儘に壓へつけて置いたところで、其で可いといふ譯にはなり切らぬことでもあり、且又左樣しては濟まぬ條理の事でもあると氣が付きました。さあ其では何樣すれば可からうといふに、娘を伯嚭に附けて遙々と旅の空に遣るのは何より厭なのですから、人を蔡伯喈の故鄕に遣つて、其の父母と媳婦とをば悉皆洛陽へ迎へ取り、我が邸内に隱居處でも設けて其に住はせて置くとすれば、媳婦の隨いて來るのが些面白くないけれども、先々三方四方が圓く治まる道理で、此外には好い分別も無い、と決斷して、そこで兩人を呼んで此事を話します。二人は異議の容れやうの無いことですから承知致します。家臣の李旺といふのが此事を命ぜられて、旅支度をして二人を迎へに出立致しますが、此時は既彼是蔡邕の父母は死んで、趙氏は故鄕を出立して都へと上りかけた頃でござります。（次號完結）

女歌人望東尼

佐々木信綱

勤王家としての望東尼

さても望東尼は、平尾村の山莊にあつて、夫の菩提を弔ひがてら、靜に月花に對して、吟詠を事として居たが、當時幕末の大紛擾の波は、此福岡にも押寄せ來つて、義俠心厚く、同情の念深き望東尼は、天下の事日

に非なるを、傍觀するに忍びず、さりとて男子の身ならねば、世に出で丶奔走てそはせざれ、我が山荘の靜なるに、同志を集めて時事を語らはせる場所にした。かの清水寺の高僧月照が、幕吏の嫌疑を受けて、京畿に身を置く事が出來ず、危難を避けて、辛うじて博多に來た時、あるは自ら月照を訪ひ、あるは山荘に呼迎へ、同志を會し時事を談じたといふ。其際、互に誦和した歌も少くない。然るに月照は、博多にも止り難く平野國臣と共に、薩摩へ避けやうとした、其折望東尼が贈つた歌に

旅衣夜寒をいとへ國の爲　草の枕のつゆをはらひて

望東尼と平野國臣

かの名高い福岡の傑士平野國臣も、常々望東尼が平尾山の山荘を音づれ來て、和歌を唱和し、或は共に時事を談じて居つた。國臣は屢々諸國を往來して、國事に奔走して居たから、其間の感吟も誠に少なくない、麑島での作に

我胸のもゆるおもひにくらぶれば　煙はうすしさくらしまやま

後に國臣が、馬關で捉へられて獄囚の身となつた時、それを聞いて望東尼は深く歎いて、窃に一首の歌を獄中に送つて、其心情を慰めた。

類なき聲になくなるうぐひすも　籠にすむ憂目みる世なりけり

國臣の獄裏にある事は、殆んど一年であつた。然るに其誠忠畏き九重の上に聞えて、時に出獄の恩命を被り間もなく藩命によつて上京することになつた。其時國臣の詠にかういふのがある。

海山に潜みし龍も時を得て　今日は雲井に立のぼるなり

實に國臣の得意の時代であつた。斯く詠んで上京せんとする前夜、望東尼の山荘に宿り、且つ談り且つ和して、夜の更くるをも知らぬ程であつた。望東尼が餞の歌、

うれしさと別れをしさのいかなれば
　ひとつ心におもひわたらむ

國臣の返歌に

　うれしさと別れをしさは別つとも
　　おもふ心をいかでへだてむ

又望東尼の歌に

　一すぢの心づくしの秋風に
　　いかでむかはむ夕立のくも
　をしからぬ命長かれ藤浪の
　　雲井にかゝる春を見るべく

國臣が上京すると、軈てかの御親征の勅も出で、天下の志士は時を得て討幕論を主張した。其時國臣は、

　天つ風吹くや錦の旗の手に
　　なびかぬ草はあらじとぞ思ふ

と詠んだ。然るに事志と違うて、遂に生野で義旗を飜さうとした。其時三田尻から望東尼に送つた歌がある。

　幾度か捨てし命の今日までも
　　のこるは神の助けなるらむ
　大君にさゝげあまりし我命
　　今こそすつる時は來にけれ
　いひやらむ言の葉草は繁けれど
　　筆にはえこそ盡さゞりけれ

不幸にも生野の戰に敗れて、國臣は無慘にも獄裏に殺戮せられた。之を聞いた望東尼の悲歎は、どれ程であつたらうか。其歌に

　ものゝふの心のたけのさゝき原
　　生野の名にも生きかへれかし

是は國臣が幕府の嫌疑を避けて、佐々木某と改名して居つたから、斯く詠んだのである。又

　うきながら今年も果に成にけり
　　又こん春はいかゞならまし
　あら玉の年立返るしるしありて
　　のどけき御代となるよしもがな

歌は人の性情より發するもであるから、かゝる志士烈婦の熱情より溢れ出た歌は、いづれも其血其熱がほと

ばしるやうに思はれる。

望東尼の上京日記

望東尼は、いかで一度鳳闕を拜し奉り、又橿原の神廟にも參拜したいと、始終念願にかけて居つた。所が文久元年に和宮が御東下遊ばさるゝ由を聞いて、其御行裝も拜み、且つは和歌の師、大隈言道翁が大阪に移住し居らるゝをも訪ひたしと、爰に上京の志を決して吉松言正（醫師にして詩歌を善くす）野坂常興（言道の門人）高谷彌太夫（女婿）の三人と同伴し、時雨木枯の空寒き十一月廿四日に福岡を出發した。其折の道の記に上京日記といふのがある。冒頭の一節は其旅行の目的、及び言道と師弟の關係の深かつたことも判るから引用しやう。

幼なかりし頃より、一度は百敷の大宮を拜し奉り、ついでに都の花紅葉、名所古蹟をも見ばやと、常に忘るゝ時もなかりけり。さるを我師言道のぬし、此五年ばかり大阪に物せられしを、彼處の歌人とゞめて歸さゞりければ、いかで上りてなど思ふうち、貞能君（夫貞貫の初名）もなくならせ給ひじかば、忘れ形見の言の葉は、いかで梓にも彫らせてんと、まだきにのたまひし事もあれば、我言の葉の色なきをも共にして、さる方にもとて、まづ猶先達のもとにゆきて、覺束なきふし〳〵をも問ひ明かし選びを受くべしと、思ひ起してかれこれに語らひけるに、諾なりといふ人ぞ多かりける。

然るに親族の中には、望東尼が兼々勤王家の人々と交りを結び居る事故、今都に上つた時は、再び歸つて來る氣遣ひがないと、色々な事を云つて止める者もあつた。此時、

昔より千度おもへと一度も
　まことなし得る時のなきかな

しかし遂に出立して、舟で馬關に着いた。

關の泊りのかゝり舟　枕に近き風寒し
衾もなみのうき旅寝　かくて幾夜か明すべき

瀬戸内海をゆく〳〵詠んだ歌が多い。其中に

人げなく思ひし島のめぐり來て
　畑もいで來ぬ家も見えこむ

人も住んで居るまいと思つた島に、段々と田畑が見えて來た。扨は人家もやがて見えるであらうとの意である。

追風に下りくる舟羨みて
　ゆくまにかはる我まともかな

まともなど俗語をさながら詠入れたのは、師言道の口吻によく似て居る。

泊るべき多津津と聞きて舟の窓
　たどる〳〵もあけて見るかな

舟が多度津に近づいたと聞いて、舟酔の身のたどるたどる、窓をあけて見る實況である。

時雨ふる軒の雫の音に似て
　舟の底うつさゞなみの聲

海邊に舟をとめて宿れる夜の作で珍らしいゝひ方である。又名高の浦を過ぐる時、

かねて聞く名高の浦もそこはかと
　見とめがてなる走りぶねかな

下句のいひ方などは、言道の口吻をよく寫してゐる。

それから愈々兵庫の湊に立寄つて、楠公の石碑に詣でた。

畏しとぬかづくうちも我袖の
　みなと川水せきぞかねける

舟漸く大阪に近づいた。先づ師なる言道翁のもとに歌をよせた。

冬深き海路はる〴〵浮寝して
　誰ゆゑきぬる旅とかは知る

安治川より中の島まで棹さし上つて、漸くに着いた。

難波江を先みをつくし漕ぎつくし
　心つくしの舟はてにけり

二句は、先見るに水脈の串、即ち水筋を知らせる杭をいひかけたのである。翌日言道翁の許を訪ふた。日記の文に「急ぎ大人のもとにゆく嬉しさ、いふばかりもなし。只互に泪さへこぼる。積る事どもいひつくすべくもあらず。夢心地なるに云々」とある。實に師弟の

情のこまやかなるさまが、目に見えるやうで、此師にして此弟子ありと云ふべきである。其日直に師に伴はれて、言道の門弟の家に、詩歌の會のあるに赴いた。

兼題冬野

　夜もすがら降りし霰を野に出で丶
　　淺茅がもとに見るあしたかな

日々人々を訪ひ、言道翁も屢々尋ねられた。或日旅宿の窓をあけて、川向ひを眺めながら、

　旅寢する我にむかひの一つ船
　　川ごしながら親しまれつゝ

いよ〳〵京都に上る事になつた。「言道翁の許を去りて遠く行く本意なくして」とあつて、

　伊駒山跡に漕ぎゆく淀舟の
　　のぼりたゆたふ我こゝろかな

夜遲く京都について、上立賣の知人の許へ行つた。「ゐの時すぐる頃京町につき、こゝより上立賣、とはき事千里を過ぐる心地ぞしける」

　　中々にさびしく見ゆる都かな

　　ともしのかげを見る家もなく

京都の夜の町の樣は實にさびしい。家々皆、門の燈もなく、闇き中をたどりゆく心地は、實にさこそと思はれる、夫から處々の神社佛閣に詣でめぐつて、新らしい年を旅寓に迎へて、文久二年となつた。元日には今出川御門より這入つて、御車寄に數多の公卿殿上人の參内のさまを拜し、三日には賀茂の社に詣でた。宮居近き早梅のまばらに咲いて、水に映つて居るのを見てあはれ此一花を故鄉の友に送つて遣りたいものと、一首の歌を、

　神垣の梅の初花一ひらは
　　めづる心にゆるさせたまへ

と詠んだ。此やさしい望東尼の心には、大神も一花を心よく許し給ふた事であらうと思はれる。

望東尼の拘留

望東尼の上京日記は、惜しむべし。正月五日、內裏に千秋萬歲の御ことはぎあるに、能き傳を賴んで、拜觀

せし日の記事をもて、中絶して居る。其後矢張り勤王正義の士と交り、神社佛閣を巡拜して、奈良吉野初瀬多武の峰等に至り、橿原の御陵に參拜して、さて歸鄕したのであるが、其道の記の傳はらないのは、遺憾の限りである。只近衞家の老女村岡が、上嵯峨大覺寺の麓に蟄居して居つたのを、訪問した折の贈答の和歌が傳はつて居る。望東尼の歌、

雲井にも君が名高く聞えけり
　したひくる身をあはれとも見よ

然るに村岡は、其物議を憚りて面會を辭し、窃に障子越しに一二言を交へて、斯く答へた。

はる／＼と尋ねし君が惠をも
　しづ心なくあはで苦しき

それから望東尼は福岡に歸つて、様々憂國の志士を助けて、計畫したことが多かつた。ある時の作に、

ものゝふの大和心をよりあはせ
　末ひとすぢの大綱にせよ

又かの長州の名士高杉晋作が、藩の難を避けて福岡に來たのを、望東尼は平尾山の山莊に潜匿させて、其難を救うた　其歸國する折、自から裁縫せし衣を贈るに付けて、

まご心をつくしの衣は國の爲
　たちかへるべき衣手にせよ

と詠んだ。又三條公等五卿の方々が、大宰府に居られた折に屢々伺候して時事を語らうたことがある。六十賀を三條公から賜はつた其歌に、

すべ國の正しき道をふむ人は
　千年の坂もやすくこゆらむ

望東尼は感泣して、

なか／＼に亂れし御代の惠にて
　雲井の露にぬるゝ袖かな

又ある折に、

數ならぬ此身は苔に埋れても
　大和心のたねは朽ちせじ

呉竹のうきふし茂き世の中に
　此君とおもふ人なかりけり

然るに福岡藩では、望東尼が國事に奔走するを咎めて望東尼を始め三十九人の人々に、謹身遠慮親族保管を命せられた。望東尼は始め自宅に監禁せられ、後に親族の家に預けられた。籠居中なか〳〵あはれな歌がある。或日朝顔の花を見て、

物ふかく今は思はじ朝顔も
　あさき色こそめでたかりけれ

又立秋の夜、蟋蟀の聲を聞きて、かの五卿の御上を思ひやり、

秋毎にめづらしかりし蟋蟀
　かなしきものと今宵しるかな

かの朝顔が實になつたのを見て、

顔朝の花よりもろきみながらに
　來ん年さかむ種をとりつゝ

腸鐵の如き女丈夫ではあるが、さすがは女だけあつて優しい心の歌である。又月影の晴れ曇りなとする夜、

一度は野分の風のはらはずは
　きよくはならじ秋の大空

實に一度烈しき風吹かずは、陰晴定りなき天候の回復せざる如く、非常なる大革命あらずんば、此國家を如何せんの意である。

七月十三日、盂蘭盆の夕つ方、御國の爲に命を捨てた正義の士を思うて、

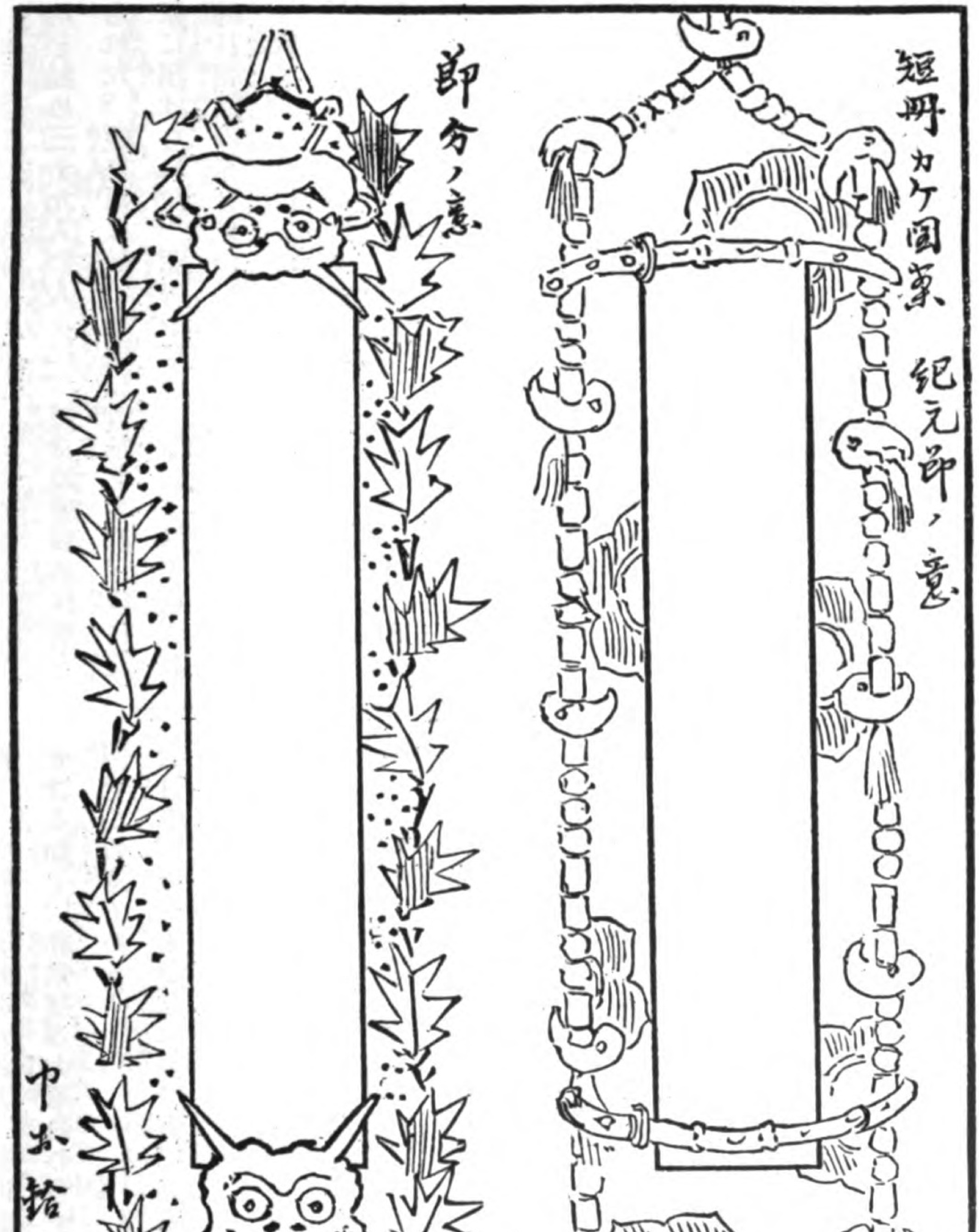
世にありてかひある人にかはりなば
　今もをしまぬ老がいのちぞ

身は老たれど、心老せぬ女丈夫の面目、眼前に髣髴たるやうである。

（完）

圖案說明

この圖案は短册かけにて右なるは紀元節を祝し左なるは節分のこゝろなり。紀元節は神武天皇がはじめて橿原の宮に即位ましましたる芽出度き日にしてこゝにあらはしたるは八坂瓊の曲玉、八咫の鏡、叢雲の劔の三種の神寶を形どりたるなり。又節分は俗に惡鬼を攘ふの言ひ傳へにより柊に形どりたるなり。


短冊カケ図案
紀元節ノ意
節分ノ意
中お鈴子

史傳

光榮ある露國皇帝の保姆

メレー、ヒユース夫人の事歴

丹下時子譯

炊婢時代

メレイが、マーガレットに對しては、考へても胸をゑぐらるゝ樣な、切ない苦しい思がして、何とも堪へられませんでしたが、ア、是もマーガレットの爲である。可愛い子をあんな飲んだくれの父親の許で育て、心まで下等な生涯を學ばせたくないから行くので、決して〳〵自分の榮養の爲めにするのではないと、無理に心を强くして、自分がかつて愛蘭の北方で、兩親の膝下で、暖かい愛を以て育てられ、どんなに樂しかつたかなどといふ事を考へても、胸がはりさけるばかり、今分れて行くのは何とも切ない思ではあれど、彼の子の將來の事を思へば、弱い事ではならぬと、自ら叱つてさて自分が行くに付ては、マーガレットは隣家の内儀で、自分に此仕事を世話してくれた、モーアさんといふ人に頼んで、預かつて貰ふ事にして、其夜はおそくまで子供の衣服、其他の物を洗濯したり、火のしをかけたり、ほころびを縫つたり、つぎを當たりして、もしわたしがちや

んとして渡したなら、マーガレットはいつでも、其時の樣に小ざつぱりさして貰へるであらう、この樣にしてやるのも、まづしばらくは之が終りだと思ふと、涙がはら〳〵拭つても〳〵あとから〳〵。

メレーは、子供のものをきれいに疊んで、翌朝モーア夫人の許へ持ち行き、これは何、彼は何と詳しくいふて、手渡しいたしますと、內儀は其きちやうめんなのを見て、

「マアお前さんの樣な、なぜ御飯たきになどお行きなさる、お附によいお人だのに、」といひますと、メレーは、

「いゝへ、とんな、仕事でも厭ひません、只々子供のところから、遠くはなれるのは堪へられませんから、」とじつと涙をのんで答へました。

ジョンは、メレーが一生懸命に、マーガレットの仕度をして居ると、其晩おそくなつてから歸つて來て、其樣子を見て「お前はわたしの事は少しもかまはず、只マーガレットの事ばかり、大事がる」と、不足をいひました。

メレーは餘りの事に、返事もせずに居りますと、果はじれてメレーを打ちました。

そこでメレーは、自分はこれから自分とマーガレット丈の、口過ぎを仕樣、とても仕方がないと、愈々決心の度を固くいたしました。そしてしづかに、しかし十分心が激してをりましたので、聲もふるへるばかりに、

「あなたは私の生涯をおやぶりなさいました樣に、マーガレットの生涯までやぶる事はなりません。私の力のあるかぎりそうさせません。此の樣になるのも、皆あなたのなすつた事です。マーガレットの爲に、私はどうしても忍ばれません、」といひはなしました。

此の言葉の熱心なのに、さすがのジョンも、今度はおべてべに、默てしまひました。

さて翌朝ジョンはおそく起きて見ると、ゐろりには心持よく火がたいてあり、食卓の上には朝飯の用意がしてありましたが、妻や子供のすがたは、一向見えませんでした。實にジョンは此の樣にして、自分の最愛物を失

ひました。

或日の事、メレーは人形の小さい着物を洗つて、それをきれいに皺をのばしたり疊んだりして居りますと、料理番の女が、

「メレーさん、お前さんマアどうしてそんな人形の着物なんか洗ふ暇があるの。面どくさい。とてもわたしにや出來ないね。お前はとんと自分の仕事でもするやうに、喜んでして居るではないか。」と申します、とメレーは

「それでも料理番さん、わたしは小さい子供の賴むことを、どうしても厭とは云はれないのですよ。どうかして今夜中に、これをチャンときれいに仕て終つて、小さい孃樣をお驚かせ申さうと思つて居るのですよ。お可愛さうに孃樣は、今朝お附が人形の箱を灰の中へひつくりかへした事を、お氣がついて大變おむづかつて居らつしやいましたの。あまりお氣の毒なので、わたくしが洗つてよくして置いて、さし上げませうと申しましたら、メレーほんとうかい、お前そんな暇があるの。お附は忙しくてなか／＼して與れないの。ほんとうに悲しいと思つて居るの。お前暇があるかいと仰しやいましたので、ヘイ暇を作しらへてよくして置てさし上げますと申したら、大變お喜びでしたよ」と云ふ内に、人形の着物もきれいに、火のしが出來あがりました。そして翌朝孃樣をびつくりさせました。するとまた自分も驚かされました。外でもない其日奧樣がお召になつて、

「メレー。孃のお附もこゝ一月で暇を出すのだが、お前がそのかはりやつてくれまいか。」との仰。メレーはあまりの事に、はや目は淚一ぱいになりました。元々メレーは、子供の守りか何かにと、思つたのでありましたが、まづ何でもせねばならぬところから、炊女には參りましたが、今奧樣の仰は、自分のかねての望であ

つたので、夢ではないかと思うて、

「奥樣私の樣なものに、其樣な御用がつとまりませうか、おぼしめしは實にありがたう存じますが。」すると奥樣は

「つとまるともね。子供等を樂しくさせておくれだと、お前が臺所でよくつとめた樣に、子供の世話をしておくれだと、わたしは全く滿足しますよ。子供等はもうお前を大變にしたつて居ります。ほんにエクセイはお前が、今朝われを驚かせたといふ事をはなしたが、子供等の爲、知らない人を雇ふよりは、お前にせわをして貰つたら、どれ程よいであらうかと思ひますのさ。」

メレーは此の言葉に、何も云ひ得ず。只有りがたさに丁寧に禮をして、部屋を出て行かうとしますと、奥樣は、

「内の以前の仲働であつた、モーアの家内が、お前の子供を預つて居るのではないか、」と仰せられますと、メレーは、

「はい御意で御ざります。」としとやかにお答をいたしました。奥樣重ねて、

「お前ね、時々は少さいのを呼んでやつてもよいよ。たまには子供の遊び間で、お茶でも入れて遊ばせておやりよ、お前は許されたからと云つて、そんなに勝手をする樣な人でないから。」

「奥樣、まことにありがたう御ざります。決して御心配下されますな。」と云つて、よろこびの色が滿面にあふれました。メレーは心の内に、これからは此の樣な可愛い孃樣や、坊さまのお世話をして、こんな美しいお部屋に住ひ、時々は可愛實子のマーガレットにも遇へるのかと思ひますと、嬉さがしらず〳〵にかほにあらはれて、あまり事が結構すぎる。此の樣な親切な主人を與へて下された、神樣がありがたいと、一向感謝をいたしました。

さて其月の末に、メレーは自分の望であつた、お子樣附となりましたが、やさしい務では御ざりませんでした小さい坊さんはなか〳〵の剛情者。孃樣のエクセイもまた一通りの我まゝではなく、十分手かげんの入る難物でありましたから。しかしメレーは、まことに上手にやつて除けて、子供等は全くメレーでなくてはならぬと云ふ樣になづきました。

かくして何事もなく、三四年の年月も經ち、月給も追々增して來ましたので、メレーはマーガレット（メレーの實子）を、近邊の小さい學校へあづけました。

それに異つてジョンヒウースは、不幸にも惡友とはなれませんので、愈々惡くなるばかり。時々メレーのところへ來ては、金の無心をいひかけて斷はられました。そこで考へるには、やかましく〳〵云つて行つたら、メレーが困つて金をくれるであらうと思つて、それからは再々うるさくやつて行くので、はては他の下女等までが、ぶつ〳〵云ふ樣になりました。メレーは此有樣に居るにも居難くなり、とう〳〵お暇願を出しました。けれどもメレーは蔭ひなたなく、眞實につとめたので、奧樣は　ことに氣の毒にお思召て、どうかしてよい所はあるまいか、ジョンの行かれぬ樣な所はと、しきりと心配して探して下さいましたが、遠からずロシアへ行く、身分の尊い一家族が、令息の爲めによいお附を、欲しがつて居るといふ事をお聞きなすつたので、早速メレーを、これ〳〵だとお世話なさいました。

そこで先方でも、それはよからうと、大よろこびで、早速相談がまとまり、メレーは本年八才になられる、若樣エトガードのお附となりした。

そこでメレーは、夫に分れる事が出來ると思ひましたが、また一方には、今迄は時々遇ふ事も出來た、可愛いマーガレットと、離れねばならぬかと思ふと、まことに悲しくなりました。しかしマーガレットも、今年は滿

六歳になつて居る。かつは學校の方もまことによく、親切にせわして下さるので、別に心配もないから、今の場合でマーガレットの爲に、お斷りするにも及ばねば。其内には都合して、露西亞の都へ呼ぶ樣にすればよいからと、御受をいたしました。

かくまで覺悟を定めて居りましたが、さて出立と云ふ朝には、さすがのメレーも、最愛の娘や今まで親切に、交はつて下された友だちに分れて行くかと思へば、何となく心が沈んで堪へられません



でした。メレーは英京を去つて、ウエイモスといふ所まで行き、そこから新主人と一所に、ロシヤへ行くのでありましたが、其頃は今の樣に、滊車滊船の便があるではなし、極々のろい馬車で

旅行するのでしたから、日數も多くか丶り、なか〱おつくうな旅でありました。

さて其時となり、ウエイモス行きの馬車は、朝六時立と云ふので、先づメレーは家内の人々に別を告げ、小



さき馬車に乘つて、大きな荷物や小さな包の中に座をしめ、一人の馬丁に送られて、次の立場へと行きました。

そこで、成丈け馬車の上の方に、乘つたがよいと云はれたので、荷物の上に座をとりましたが、馬車の廻りの混雑と云つたら、送つて來た人、送られて來た人、荷物を忘るな、それはわしのじや、お前のだと爭ふ人、下女に送られる貴夫人、下男にせわせられる紳士、なか〱の騷動、で、もしマーガレットと一所に行くのであつたら、どんなにうれしからう、かと思ふと、はや我しらず胸が一ぱいになつて

涙が用捨もなく落ちて來ます。いや〳〵てんな。弱い事ではならぬと、そつと涙をはらつて、無理に唇をかみしめて、外の人のさわぐのを同じ様に、ながめて居りました。

そちこちする内に、お客も揃ひ馬もつけられ、さア立たうと云ふ時に、はるか群集の向うに、小さな小供をつれて立つて居る人がある。もしやマーガレットではあるまいかと、よく〳〵目をつけて見ると、その人はまちがひもなく實子マーガレットで、先方でもこちらが氣が付けばよいがと、色々工夫をして居りました。メレーは餘り隔たつて居つたので、物は云ひませんでしたが、うなづいてにこりと笑ひました。

やがて馬車が出ると云ふ合圖の笛がなりますと、群集はどよめいて彼方でもこつちでも、左様なら御機嫌よう、御無事でなぞと、ハンケチをふる。馬車は追々群集をはなれて動き出すと、メレーは只何も耳に入りません。赤い帽子を被つたマーガレットが人に抱かれて、左様なら早く歸つて下さいと、ハンケチをふりながら、大聲に云ふのを聞くばかり、あとは夢心地で英京を去りました。

夫人の旅立

さても此のウエイモスへの旅と云ふものは、町や、村や、森や、山や、坂やをこえて行くので、ごと〳〵がた〳〵、田舍道の行つても〳〵盡ないかと思ふ程、永い道を行かなければならぬので、一度此の旅をしたものは永く記臆に存してなか〳〵忘れられないといふ事です。

メレーの馬車も、英京をはなれてから、幾つかの町や、村や、山や、坂や、森や、畠道を過ぎて馬をかへたり、少しは休んだりして、漸く其日の夕方にウインチエスターに着きました。

なほ先きへ行くものは、翌日他の馬車と繼替るのでありましたから、まづ其夜は、そこに一泊することであり

ました。
さて車を下ると、此のウインチエスターの人で同車した客が、
「まだ見ないのなら、是非是所の大會堂を、見物して行きなさい。」と云ひました。メレーは、
「是非行つて見たいと思ひます。」と答へましたが、可愛さうにメレーは、英京を出る時から、可愛いマーガレツトの事が氣にかゝり、どうするであらう。こんなに遠くはなれて、さぞ淋しく思うであらう。また此度の仕事がどんな事やら、行く先きの事が案じられて、しかもなれぬ永旅に、身體はつかれる。氣は沈む。まことに悲しく思つて居つたところへ、人が言葉をかけてくれたので、非常にうれしく思ひました。
それから人の敎へてくれたまゝに、ウインチエスターの町へ行つて見ますと、舊い古い大會堂の門前へ出ました。そも此の大會堂は、紀元二百六十年に、初めてキリスト敎會堂として建てられたもので、此所には元羅馬の宮があつたところでした。
メレーはこんな歷史談は、少しも知りませんでしたが、大きな薄暗い建物の內を、そろ〳〵しづかに歩き廻る內に、何となくひつそりとした聖いおごそかな様子に、思はずしらず心がおちついて、我身の上の幇助を願ふ思ひが起りました。かくて會堂內で、何人が奏するか美妙な音樂が、大きな堂內に靜にひゞき渡つて聞えましたが、此の音にメレーは、得も云はれぬ平安の思が致しました。即ち神の御手は、常に〳〵自分の上にある。よしや愛するものは、どんなに遠くはなれて居るとても、神のやさしき御愛しみは、常に近く彼女の上にあると、深くも心に刻みました。
メレーは此の大會堂で、昔時から即位式を執行せられた事や、又は國王や國家の勇將、大政事家大僧官大詩人などが、ことに葬られたなどと云ふ事は、少しも知りませんでした。しかし自分は思に餘るばかりの心配に充

たされて、此の堂内に入り、そして出るときには、何とも云はれぬ平和のよろこびに充たされて、今迄の苦勞も心配も打ち忘れて、出たといふ事を知つて居りました。

實や聖ポーロは、神様の給はつた平和ばかり尊いものはない、と教へましたが、其平和を得てメレーは、此の會堂を出ました。

「ヲヤお若い婦人、あなたは今少しまへ、お別れ申した時とはとんと御様子がかはりましたね。先きは大變につかれて、何事かしきりに心配さうに見えましたが。」とついさきまで同車した、合客の一人に旅店へのかへり道で、出合つて云はれました。メレーは、

「はい大會堂へ行きましたが、まことに美しう御ざりました。」と只一言、これ丈で十分メレーの様子の、變つた譯が分りました。

合客「サ様、私はあなたがキットお好みなさるであらうと思ひましたよ。」明日は御無事でお立ちなさい。」

此の親切な言葉が、此の淋しい悲しい人の心に、どれ程うれしく、有難くおぼえられたかと云ふ事は、誰一人知る者もなかつたのでした。

實にメレーは、其後此のウインチエスターを思ひ出す度毎に、アヽ樂しいところ、うれしい所であつたとの感をいたしました。

それから漸く、ウエイモスに着きまして、其所でロシヤ行きの仕度にかゝつて、中々せわしい思ひをしました。今でこそ露京へ行くのは、只四十八時間ばかりで行けますが、其頃には帆前船で行くのでしたから、三週間から六週間もかゝりました。

彼等の乗つた船はファチーと云ひ、船長はテイラーと云ひました。船は元より小さいので、客室のせまさ、空

氣の通も惡く、おまけに海上が度々しけて、メレーには誠に難儀な航海でありましたが、メレーは預つた若様を大切に、萬事によく注意して、そんな興味のない船中でも、飽させもせず面白く遊ばせましたので、若様は陸のついたのを、かへつて殘念に思はれた程でありました。兎に角此の船中で、小さいエドガーは、メレーがどんなによい人かと云ふことを悟られて、何事もメレーでなければならぬ程にしたはれましたが、其心は日一日と、厚くなつてまゐりました。

元ロシヤの都は、莫斯科でありましたが、今より殆ど二百年ばかり前に、ペートル大帝が、此所は湊によい場所であるとて、ネーバー河の近傍から、スウイデン人を追出して、此所に新らしい都を建てられたのでありましたが、其所は元々沼地でありましたので、水を吐せなければならず、また基礎を固めなければならないので棒や色々の埋木が澤山に入りました。實に其埋立の爲めには、男が五萬人も命をおとしたと云ふ程であります。最も此の土地では、人の命にあまり價値を置かなかつたので、メレーのロシヤへ行つた時、即ち一千八百二十三年頃には、奴隷使用が國中一般に行はれて居りまして、奴隷を打ちたゝく事は、上から下まで何處の家にでも、あたり前の事になつて居りました。

さてメレーは、露西亞の都へ來て、一年ばかりしてから、マーガレットを呼びよせて、其所の英獨語學校へ入れました。

此の冬はメレーにもまた若主人にも、初めての冬でありましたが、都ての防寒具等が、よく行き届いて居りましたので、さしもにひどいピータスバーグの寒さも、無事に過ぎまして、メレーの上にはまづ萬事が、好都合に行く樣になりました。ところが此所にまた、厄介な事が起つて、折角の平和を破らうとしました。それは外でもない全体ならば妻子に安樂をさせてやらねばならぬ筈の夫が、此の平和を破りかけました。

大公爵の誕生

或日の事、メレーは用達にと町へ出かけましたが、此頃は諸國の船の出入りする時であつたので、チーパー河邊は多くの勞働者が集つて居りました。丁度其所へ通りかゝると、群集の中から愛蘭言葉で、

「ナンダうつちやつておけ。かまうことがないぞ。馬鹿にしやがつて、たゝは置かないぞ。たゝき殺すぞ」

と云ふ聲がしました。しかし誰一人、此の多くの人の中で、此言葉に耳をかすものもなく、やつぱり前の通りがや／＼笑つて居りました。メレーは前の聲音をきくと、ハッと思ひました。それも其筈、聞忘れもせぬ聲ですもの、しかも故郷の言葉ですもの。やがて群集を押しわけて、出て來た人を見ると、破れたとも剝たとも云ひ樣のない衣服に、形もなにもない帽子、靴はやぶれて足が見えて居り、顔と云へばアー其顔がよく其人の歴史をあらはして居りました。メレーはあまりの事に、之が私の夫のジョンさんだ。私の最愛の夫であると、はをつた人でわらうかと、わきれて身震ひしながらも、早く此の塲を逃れたいものだと思ひましたが、生憎足がすくんで、とんと釘付けにでもされた樣になりました。

其内ひよつとジョンの目と見合ひました。すると今迄意氣地なかつた樣子が、からりと變つて大威張りに、づか／＼とメレーの方にやつて來て、

「お前！。」

メレー「お前がわのジョンさんか。」

ジョン「だれなもんか、ジョンでなくて。」

メレー「それにしても、どうして來ました。」

ジヨン「何してつて船でよ。可愛いお前のかほが見たさにはる〴〵やつて來たのだ。そして今は何所に居るのだ、元のよしみに連れて行つてくれ。ほんとうにこれまで、お前がこんな美しい裝をしたのを、見たことがないや。」

メレー「いゝへ。どうしてお前さんに、わたしの住家を敎へられませう。其の家のお人達はお厭りなさるから。」

ジヨン「ヘン、またおきまりを云つて居るよ。そんならお金をくれ。今日はそれでゆるしてやるから。」

メレー「お金!。ほんとにさお金なんか持て居やしない。もしあつたにしても、お前さんにあげるお金はない。なぜ自分でかせいで自分の口過をしませんか。」

ジヨンは、メレーの腕をしつかりとにぎつて、

「酷い事をいふ奴じや。くれないか。サアよこせ。サアくれ。くれなきやこの手を放さないぞ。サアくれ。馬鹿をぬかさずときれいによこせ。」

只さへ人込みの中で、此わりさまであるから、人は段々と集まつて來て、人山をきづいた、何樣も堪へられないので、しづかに行かうとすれば、ジヨンはます〳〵云ひ募つて、放さうともしません。メレーは餘義なく、最寄の居酒屋へ連れ込んで、食物と酒とを云ひつけました。するとジヨンは、

「酒と水とはよく知つて居るぞ。上酒でないと承知せぬぞ。」

メレーは大急ぎで走りかへつて、此事を主人につげました。まことや。メレーの眞實な心がけが、主人夫婦の眞實な同情を得て一方ならず心配をかけられて、メレーの爲よい樣にと計られました。

中にも夫人は、メレーの心を察せられて、いかにも氣の毒に思はれ、何とかしたならまた、救はれる事もあら

うと思召されて、宿泊所も見付けてやられ、また仕事もさがしてやられました。
これでジョンが、心を入れかへて勵みさへしたなら、直に妻子諸共に、一家團欒の樂しい生活も、出來たでありませうに、

惜しや。ジョンは全くのなまけ者で、仕事などは大きらひで、只酒の飲みたさに金を儲ける譯でありますから金がなくなると、メレーの處へ來て、せびり散らす。主人夫婦もこれでは仕方がない。どうかしてメレーの苦しみを、させたくないものだと、遂に船賃を拂つて、本國愛蘭へ送りかへされました。其後五六ヶ月經つて、とう〳〵酒毒の爲めに死にました。

其報知を主人夫婦から得て、はかなく情ない夫の死さまを悼みながら、再びロシヤに歸つて來ました。

其後何事もなく、八九年を仕へてゐましたが、同家の子供等も、皆成人されましたので、メレーの手があく事になりました。そこで夫人も、何か良い仕事があればよいがと、思つて居られますと、都合よく一貴族の家で欲しいと云ふ事で、其所へ行く事になりました。それからまた一ヶ年ばかり經ちますと、或朝のこと祝砲が鳴るやら、祝鈴が鳴るやら、市中大騷ぎでありました。

それは露帝ニコラス陛下の、第四の皇子(後にミカエル大公爵)の、御誕生遊ばされたのでありました。

メレーはかねてより露帝の避寒御殿の、壯大美麗な有樣を驚いてゐました。そも〳〵御殿の場所は、景色のよい川のそばなり、大きな建物柱と云ひ、高くそびえたる二階の窓から、ちらちらと見える名もしらぬ織物、それが惜しげもなく窓かけとなつて居る事や、萬事宮殿の立派なありさまが目について、忘れられぬ程でありました。そこで第四の皇子の御誕生遊ばされた報が、市中にひゞき渡ると共に、メレーの心に起りましたのは、

「マアー〳〵此の度お生れ遊ばされた皇子は、どの樣なお方か、あの樣に宮中は勿論、市中こぞつて大騷ぎをす

るが、われが幸福を來すのであらうか。一体彼のお方々は、わたしが内のマーガレットを大切に思ふ様に、此の皇子を大切にお思ひ遊ばすであらうか。わたしはいつか此の皇子を拜する事があらうか。」などと、しきりに空想にふけつて居りましたが、ふと「マー何であらう、天子樣の若君の事であるのに、何の關係があらう。此樣な事を思つて馬鹿な事と、氣がつきました。丁度其時小さい子供方の中で、あらそひが始まりましたので、メレーはそれは誰が惡い、誰がよいと云ふ裁判をして、漸く中直が出來ました。すると、また一人が、

「さう〳〵お話〳〵、乳母お前の愛蘭の家のお話、豚が臺所へ飛び込んでマーガレットをおどろかしてなかせお前が豚を追出したら、豚がうなつたと云ふ面白いお話、どんな樣子でうなつたかねーきかせて呉れ。」

「さう〳〵、お話の時間がまゐりましたから、申上げませう。さア皆樣、玩具をあちらへちやんとお仕舞い遊ばせ、お早くおしまひ遊ばせ。」

子供等は誰が上手に仕舞う、誰は片付樣を知らぬなどと、なげたり拾つたり大騷ぎをして、メレーのお手傳で片付けました。

メレーは約束通り、豚の御話を始めましたが、此の御話は前々幾度もしたお話で子供等の氣に入の話でした。自分も愛蘭の昔のさまを考へ出して、アヽであつた、彼の時は斯うであつたと、思ひましたので、皇子の事御殿の事などは、すつぱり忘れてしまひました。

それから四五日たつた或夜の事、其家の奥樣が、メレーに相談したい事があるとて、お守り部屋へ、お來になりました。メレーは慇懃に、

「奥樣何ぞ不調法でもいたしましたか」と、いつものしとやかな樣子で、やさしくお尋ねいたしますと、

「不調法どころか、お前が來てくれてから、子供等のうれしさうな事、お前の外にだれがあれ程に氣をつけて、

面倒を見てくれ樣、けれどわたしは、お前が出世を仕樣とするのを決してじやましたくはない。」

「奥樣、私は此方樣の樣なお家へ、お勤め申さうとは、思もかけぬ事で御ざりました、私は決して〳〵御當家に對して不滿足に思ふ樣な者では御座りませぬ。」とまことに謙遜して申しますと、奥樣は

「ハイ、それはモーよく知つて居ります、お前はいつも莞やかにして居りますが、人は何か心にかなはぬ事がある時は、自然にかほ色に出たり、樣子にあらはれたりするもの、決してお前の不滿足に思つて居るとは思ひませぬ、實はお前に此家よりもなほよい家が出來たのですが、まアわたしの云ふ事をお聞きなさい、お前先日皇子の御誕生あそばされた事を知つてお出であらう。」

メレーは無言できいて居りました。が又奥樣は言葉をつゞけて、

「皇帝には、此度の皇子の爲めに、お附人を撰ぶ事を、當家の御懇親な彼のロー博士にお命じなされました、しかも其守には、極々氣象のしつかりした、子供を敎導する事になれた人をとのお望み、ロー博士も色々お考へになつたれど、お前の外には、この人がと申上る人がおありなさらぬ。」

メレーは、餘り事の大きなので、全く驚いて何と御答へ申上げてよいやら、只漸く、

「けれど奥樣、私は宮中の作法杯は、少しも心得ません、私に何が出來ませう、私は御覽の通り詰らぬ者で。」

「さ、其樣な心配は少しも入りません、只々子供をどの樣に扱ふか、子供部屋の事はどの樣に仕末を付けるかと云ふ事でよろしいので、何もおそれ多い事ながら、宮中にお生れ遊ばされたお方々とて、われ等の子供とて其邊にたいした違ひはないと思ひます、お前が其樣な優しい心掛であればこそ、此の樣な位置にも昇られるので、私はお前の爲に惡いとは思ひません、そして、若お氣にめせば七年間の御約束であるさうな。」

科學

冬の世界

藤堂梅軒

今は正しく冬寒を以て閉ざされて居る。人も動物も又植物も悉く沈まり默して只々『陽春の季節が來なければ』といひ合せたように、總べて荒涼寂寞の樣である。

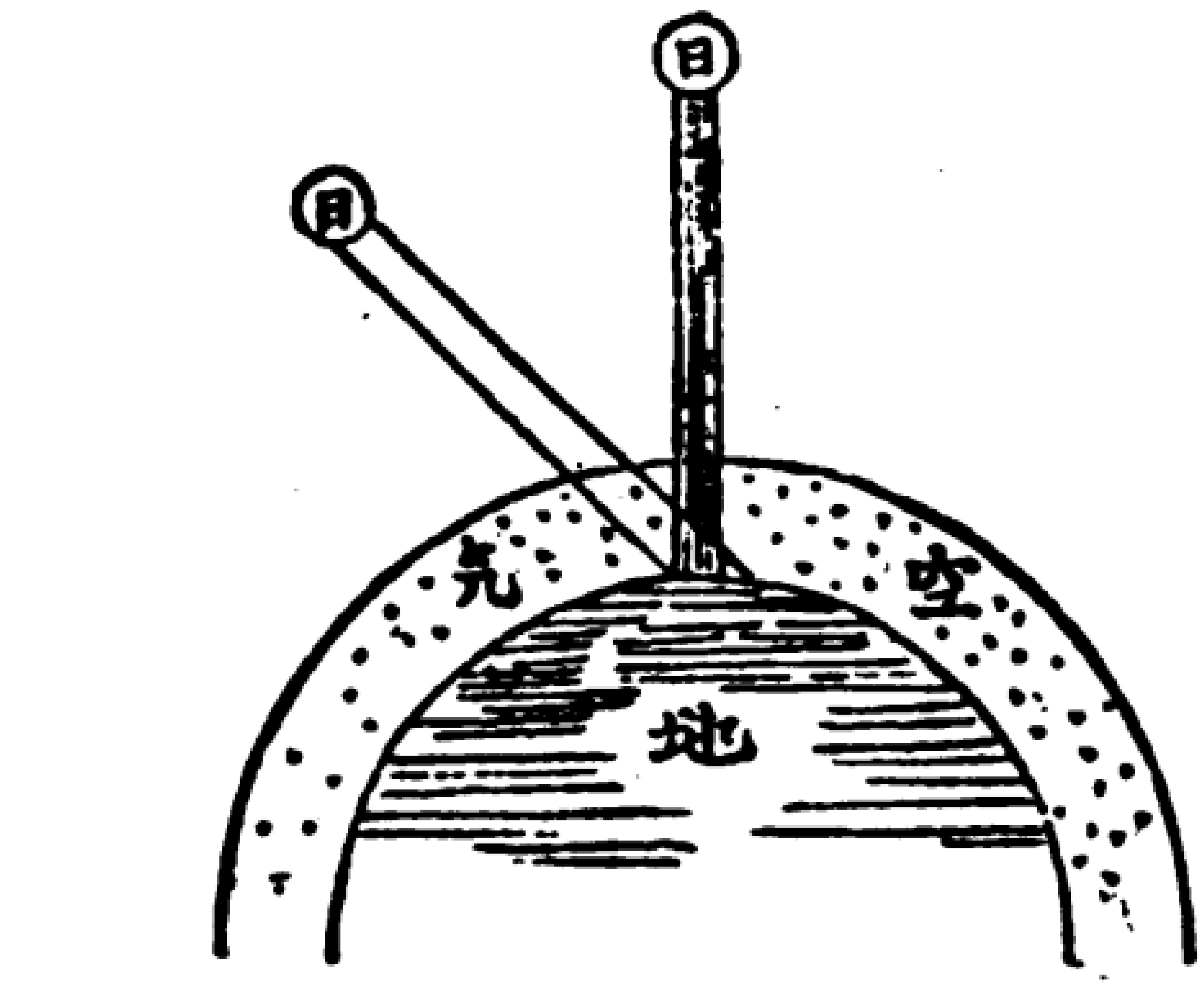
此のやうな物寂しい季節であるに、我々は先月新年の慶事を祝した。何故、此んな時に、芽出度い日があるのだらうか、西洋では、左程新年に騷がないが、兎も角、冬の眞盛り前に、年を新たにする理窟が解らない。同じことなら、春の初にしたらば、とんなにか、陽氣に芽出度く祝はれるであらうに。此の點からいふと、日本の舊曆の方が、何だか都合が好さそうだ。初春の御祝詞なとと、隨分耳に調和する心地がする。

されと、そんなに腐し給ふな。又一方から考へると、此の萬物の凋び切つて居る時節に、此の新年があればこそ、人間の生活を調へるので、これが無ければ、冬は愈が上にも、萎へ凋んで了ふであらう。春は春で、花笑ひ鳥歌ふから、たゞさへ、人が陽氣に浮かれ出すものである。何人が旨く配劑したのであらうか。それに又、萬物の活動する季節には、人間も多忙であるから、或は天が、此のような靜かな休息時期に、心閑かな慶事をさせるのであらうか。

先づ新年は既に過ぎ去つたから、繰り言は止めて、冬の世界の眞景に說き及ぶとしやう。

全体、冬といふものは、とうして出來るであらうか。それは、太陽が天を通つて行く道を、夏に比べれば、直に解る。即ち夏は、太陽が我々の頭の上を、通つて行くが、冬はズツト南の方へ偏つて行く。そこで、我

々が受ける日光の力に相異を生じて來る。それには三個條の理由がある。太陽が偏れば、幾分か、遠ざかることが、其の第一條である。次に同じ幅の光も、太陽が偏れば、それだけ廣がる、又それだけ光の力が薄くなる、此れが第二條である。次に又地球の周りには空氣を以て圍んで居て、それが常に日光の熱を吸ひ減らして居るので、太陽が偏れば、それだけ日光が空氣中を通る道の長い所から、幾分か多く熱を吸ひ取られるのである。詰まる所、以上の三理由のために、太陽の熱が弱くなるから、冬といふ氣候を生ずることは、それで解つたであらう。



さて、冬といへば、氷や雪を思ひ出すものである。氷の出來る理は、今更述べる要もなからうが、兎に角、空氣の温度が段々下つて、攝氏零度に達すれば、地上の水は皆固まつて了ふ。此の氷なるものは、人間に益するであらうか。或は害あるであらうか。それは、取りようによりては、益ともなり、又害ともなる。

朝早く起きて、手を洗うとすると、鉢の水が凍つて、用を足すことが出來なければ、誰も氷の害を思はぬ者もあるまい。況や、其の鉢が、時々氷のために、打ち破はされることのあるに於ては。それから、霜氷のために農作物が害はれ、人の手足が凍傷を起したりなど、隨分我々を害する事實がある。

何故に、氷のために、水鉢が破れるであらうか。水は氷に變化すると其の容積を増すもので、氷の塊が毎も水の上面に浮んで居るを見ても、それが膨れて輕くなつたことが知られる。それであるから、水鉢が到頭打ち破はされて了ふのである。植物や、人の手足が、凍えて傷むのも同じ理で、其の中の水分が氷となつて、膨れて、組織を壓し擴げ、そうして急に温かになれば、徐々に組織を回復し、水分を程よく收めることの出來

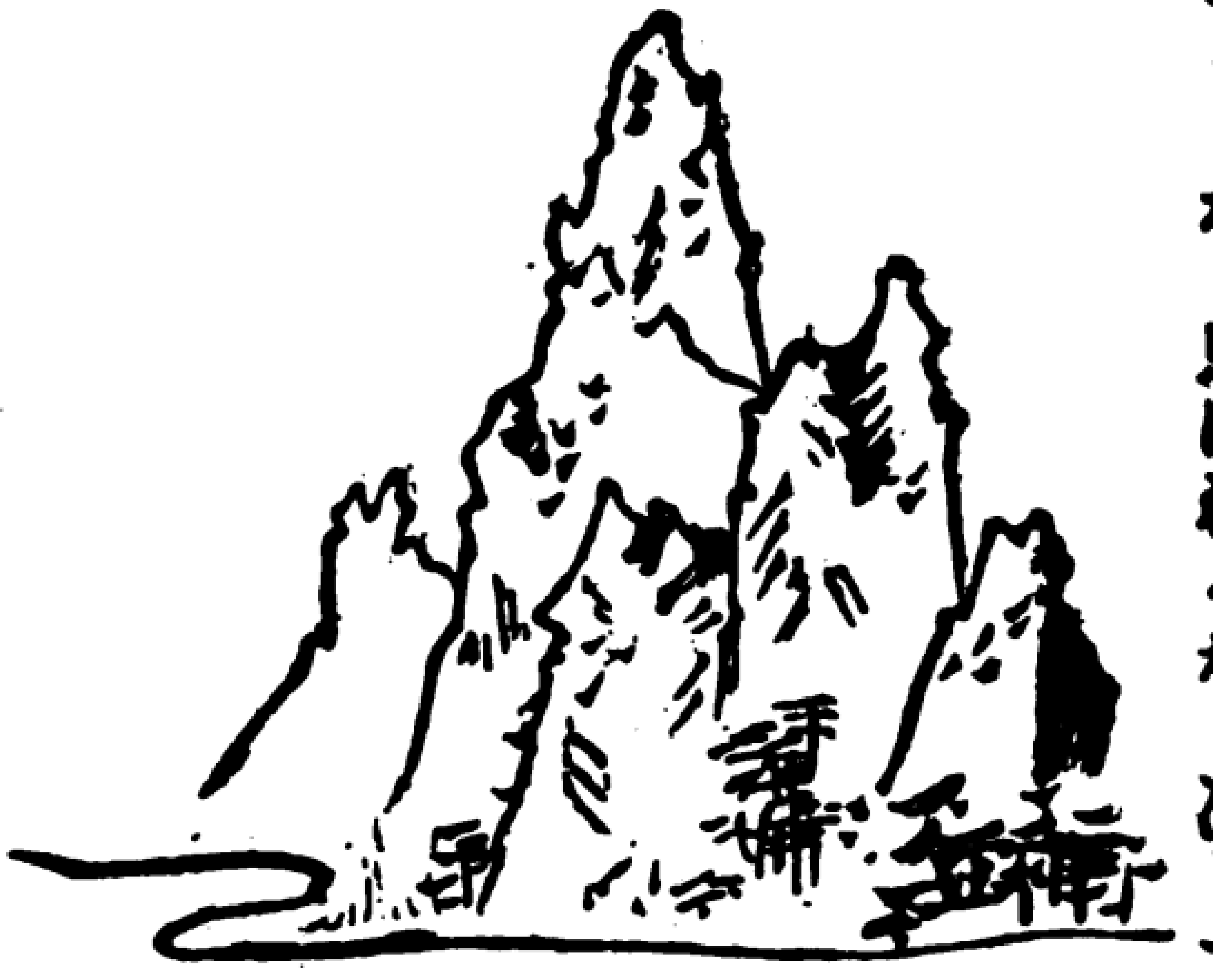
ぬために、到底破壞して救ひ道がなくなつて了ふ。それに、人体の如きは、氷寒のために其の部分が一時麻痺して、活力を失ふものから、其の組織が次第に腐敗して來る。凍傷とは即ち此の事である。凍傷の皮膚よりも内部へ深く及んだものは、漸々、全身に擴つて肉や骨をも腐らせて、終には生命をも奪うようになる。日清戰爭に、冬時清國で、此の病に侵された日本兵士が多くあつた。又近くは、青森師團の行軍が、八甲田山の雪に閉ぢ込められて、それが爲に死亡したものが多い。數へ來たると、氷は中々我々に、大害を與へることが解かる。併し、又我々は氷に依りて、無限の恩澤を蒙りつゝあるのである。

我々が氷を用ひて病人を救ふことは誰れしも知つて居る。氷水を飲んで涼を取ることも分かつて居る。氷で魚の腐敗を防ぎ、氷でビールを冷すことも皆、知つて居る筈である。航海者が、海水から飲料水を採るために、之を凍らせてする、即ち海水の凍るときには、鹽分を排し出して、純粹の水分だけが、氷となるのであるから、後に其の氷を解かせば純粹の水を取ることが出來る譯である。

氷の直接の用は、大抵右の通りであるが、それよりも間接の用で、我々が大に其の恩澤を受けつゝあることがある。此の冬の世界に、池や湖水や或は海面までが、氷で閉ぢ付けられることがある。それで水中の魚類などが、暖かに生存することが出來る。即ち氷は温を導かぬ体であるから、一旦水の表面が氷とならば、外界がどんなに寒くなつても、水の底は、變らぬから、生物は安かに存へて居ることが出來る。それで人が魚などの食物に事缺くことがないので、有り難い話だ。

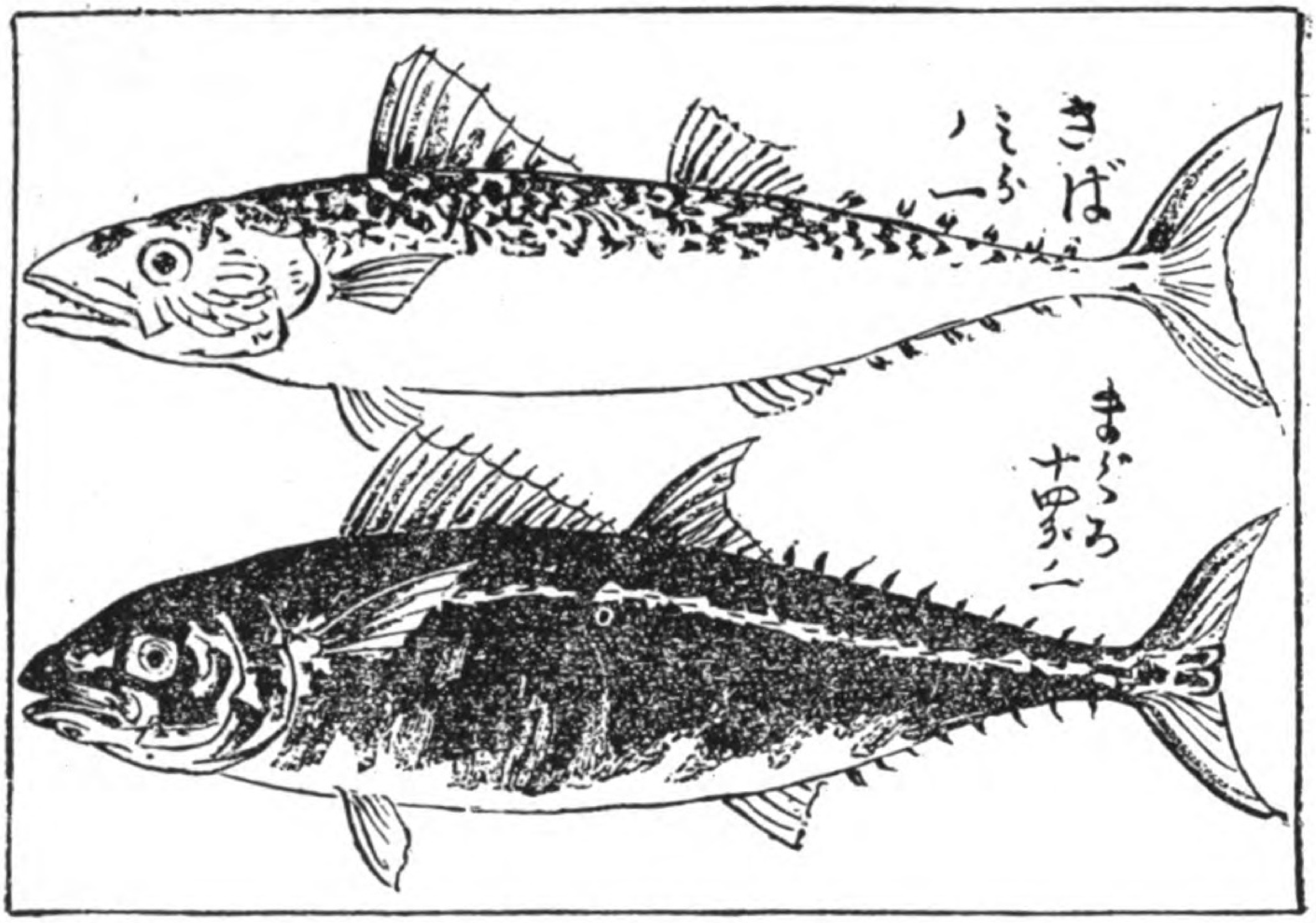
それから氷のお庇で、此の地上に土壤なるものが大部分出來たというても差支ない。前にも述べたように、氷のために水鉢が破れるとあるが、天然は、水鉢どころか、高大な岩石をも氷で以て打壞はして居る。土といふのは、詰まり岩の碎けた粉であるともいはれるので、此の堅固な岩でも氷のためには、知らぬ間に、少しづゝ碎かれて土となつて了ふ。

それで山に行くと、岩の表面が土を以て皆被されて居るかといふと、高い所にある岩はそうではなくて、何れも裸の姿に露はれて居る。これは土にならないのであらうかと思はれるが、決してそうではない。高い所にあるから。土が出來次第に、雨のために、流されて了ふのである。妙義山などを見ると、實に宏壯雄偉なる岩石が突立ちて恐ろしいようだが、其の半腹から下は柔かな土を以て被はれて居る。それは上から流された土が下に積るので、其の土の所に樹木が鬱々として茂る。これに依りて人が山林を造り材木を採ることが出來る。總じて嶮しい山は皆此の通りである。富士山でも其の頂上は、岩ばかりで、中々險阻である。



右の如くして出來た土は、決して山の處にばかり留まらないで、何れも大小の川に依りて諸方へ流されて來る。そうして川の底や亦遠く去つて海の底に沈み積る。我々が住んで居る市や田野は皆元とこれに因りて出來たもので、たとひ今、川や海のない所でも、大昔は其處に川や海のあつた跡である。して見れば、氷のために、人間が受ける利益は實に洪大なものであるといふことが解かるであらう。

話頭轉りて、冬の世界には、水面に氷が張るほどで、水中の動物は生活上多少の迷惑を免れない。よしや、表面の氷で、存外寒くないにした所、それでも運動の上に大な不自由を免れない。それはかりでない、どうしても水が甚だ冷いから多くの動物は其處を去つて終ふか、若くは深く底に沈んで終ふ。鯉や鮒の如きは皆沈む方である。海の魚は多く温い潮流を追うて去つて行く。總体、海魚は春より夏にかけて、北の海へ旅行して、秋より冬に渉りて南へ歸るものが多い。これを回遊魚といふのである。今回遊魚の二三を話して見よう。



さばは上總、安房、越前、越中、長門、安藝の海に殊に多く產するもので、多くは群をなして旅行をする。其の時には、毎も一頭が先頭に立ちて、案内をすると、他は皆これに隨ひて行く。五月より七月までの間に、北方へ旅立ちて、九月十月の頃に南へ歸つて來る。此の歸る頃には、体が最も肉太くあつて、食するに好い時である。

まぐろはさばよりも遙に大きいもので、彼是一間程もある。東北諸國の東海に多く產し西南の海には一般に少い。多少群をなして旅行し、春より秋は、北に向かつて、海岸に沿うて行き、冬になれば、南へ下りて暖い方へ行く。其の下つて行くときは、可なり深い所を通るが、上るときには、海の上層を、勢よく走けて行くから、此の時に漁することが最も盛んである。併し冬の方が食して旨い。

さけも亦此のように旅行する魚である。北海道の西岸に最も多く產し、それから三陸の海岸より常陸の地方にまで及び、北には越中地方にも隨分產する、海中を

以て常居とはして居るが、凡そ九月より十二月までに、群をなして、常陸地方より北方にある諸川に泝りて、卵を產する。其の卵は川の源なる山の谷間にまで入り込み、其處から、群を小く分けて、一組に一頭の雌と、二三頭の雄が伴ひ、急流の砂利の多い場所にまで泝つて行つて、尾で以て溝を掘りて、其の中へ雌が卵を產み落せば、雄が其の上に精子を振り注け、其れに砂を少々ばかり被せて置く。其の卵は雌一頭每に三四千個を產むのである。產後は、雌も雄も、長い間、川を泝り、場所を求める等中々の苦勞を重さねた疲によりて、多くは死んで了ふ。其の卵は五十日間ほども經てば、孵つて、四月より六月頃迄に段々と海へ下り、三四年間も海に居へて成長すれば、又川に泝つて、卵を產むさうである。

海に居る獸類には、屢々寒い所を喜ぶものがある。北海道や千島の邊に居るらつこやをつとせいの如きは其の最も著しいものである。らつこは頭小く、胴体は肥え、後の方は割合に細まつて居る、全身は悉く長



い毛で包まれて、色は十分成長したものは、濃い褐色で、老ゆるに從つて、艶を增して、其の毛皮が高貴の品となる。大さは凡そ三尺もありて、指は太くて小い爪が常は毛の中に沒れて居る。をつとせいは之よりも、少しばかり小くて、頭は圓く、牡には長い鬚がある。四肢は全く鰭の形をなし、尾は極めて短い。体の色は、十分成長すれば、紫褐色を帶びて居る。

水を泳いで活潑に生活する樣は、何れも似て、らつては風波靜かなる時には、遠く沖の方へ去り、兎角、潮の烈しく激する處に集まりて遊んで居る。或は斜めに水面に臥して眠ることもある。又時々半身を水面に起して四方を眺め、若しも變つた物を見るか、或は變つた音を聞けば、直に逃げるか、若しくは、水中に二三十分間も沈んで出ない。時々島に上陸して動植物を採つて食べる。其の步き方は泳ぎ方と全く異つて拙で、跛行ひいて居る。一牡一牝相伴うて生活し、一年一回一頭の兒を產む。母親は兒を愛する情が深く、一年間は乳を與へて育て、其の後も猶愛して、海へ誘うて泳ぐ方法を教へる、兒が三年となれば始めて獨立して生活する。

をつとせいは交尾をする時の外は、一個所に落付いて居ることはない。毎も潮流の緩で魚などの餌の多い所を追うて旅行をする。一二月頃には千島よりも猶北なるカムチヤカの東から漸々下總邊まで下つて來て、それから又段々と北に歸つて了ふ。其の動作は活潑で、海面を躍んだり、跳ねたり、天氣晴れゝば、水面に横はり又は仰ぎ臥して、よく眠る。けれど用心深いものだから、必ず頭を風の來る方へ向けて眠て、若しも音か臭を感ずれば、忽ち逃げて行くのである。

をつとせいは四五月頃になると、北へ上り行く途、牡は急いで、先づ都合の好さそうな島に上陸し、互に程好い場處を得ようとて、烈しく競爭して、嚙み合を始め隨分怪我をもする。そうして一旦其の場所が極まれば、決して動くことはない。それだから、食ふことも、飮むこともなく、凡そ三ヶ月間といふものは、其の場所を守るがために、此のようにして、又敵に其の場所

を奪はれないために、鬪もしなければならぬ。中々勉めたものである。どんなのが程好い場所とするかといふに、岸からは成るべく遠ざからないで、涼しい處で、地面が堅くて少々傾いて乾いて居る處である。そつとせいは隨分暑さ嫌で、暑ければ呼吸苦しく成り後足で以て扇のように自分の体を扇ぐのである。

斯うして牝は七月頃即ち牡に後るゝこと殆ど三ヶ月にして始めて其處へ到着する。すると、牡が各々其の場所を守りつゝ頻りと一種の聲を立て爭うて牝を迎へ誘ひ寄せる樣、宛で、汽車や汽船が着いて客が出て行く所を、ワイ〳〵と宿引者が誘ひ喚ぶのと同じようである。ところが、其の牡は中々一頭の牝ぐらゐでは滿足しなくて、十頭も十五六頭も或は二十頭程も牝を招き寄せて、自分は王となりて其の團体を自由にする。牝は餘程柔順で、如何に牡に扱はれても、決して不平にも思はないで、上陸すると一日を經て、今まで孕んで來た兒を產み落すのである。然る後二日を經て交尾をする。すると牡は直ちに海中に去つて又南方へ下つて行て了ふ。何分にも三ヶ月間は全く斷食のヿであつたから、早々に此場所を去て、体の回復を計らねばならぬ。跡に殘つた牝は、產み落した兒を育て晝の間には、陸上で乳を哺ませ、夜には海に入つて、餌を索めるのである。其の兒は生れて、凡一ヶ月を經て、水の泳ぎ方を母より學び、略三ヶ月を過ぐれば、即ち十月頃になれば、其の母等と共に、陸を離れて、南方へ下つて行く。

牡は六歲牝は四歲に至りて成熟する、即ち一人前となる又即ち交尾するようになる。だから其歲に達しないものは、矢張靑年と稱して、只々成熟者に伴うて旅行をする迄のヿで、島に上陸しても、決して程好い場所を爭ふ必要もないから、他の關係もない島の上に自由に起居するのみである。

牝は右の樣に上陸すると兒を產み、直に又妊娠の身となりて三ヶ月間島に留まり、夫から南方へ旅行に出掛て、又七月頃に、元の島に歸つて來るだから、彼等は一ヶ年間妊娠して居るといはなければならん。而して、毎も一兒に限るとは、丁度人間の樣だ。人間は十月で出產するに、そつとせいは十二月で出產するのが少々違つて居る。

裁縫問答

(一) 衣物の裁ち方は如何にすべきやその順序方法を擧げよ

●答　衣物の裁ち方は裁縫學科中尤も大切なる業なれば一度誤りては如何ともする事能はざるものなれば能く注意せざるべからず。

先づ織傷、縞柄、模樣柄等を改め、若し綴ぢ跡、小皺、伸縮等あれば、火熨斗、烙鏝、或は湯熨斗等にて平直に直したる後、丈及び幅の寸尺を度り、若し織傷或は汚點等あれば目立たざる所に置く樣それ〴〵寸尺に隨ひ、待針を打ち疊み試みたる後、裁ち合すべし、かく並幅ものにて裁ち合す事はまだしもなれども、時には幅廣ものを用ふることあり、又古物を用ひて、小裁物を裁ち合すとか、或は袖丈の都合より衽と取り替るとか又は着物を羽織になし、或は羽織を着物となす等の場合には一定の方法あるにあらざれば、先づ地質の强弱、褪色の如何等に殊に注意を加へ、丈、幅等の寸尺を度り、其人の寸尺に應じて待針を打ち、疊みつけ、然る後、裁ち合すべし、然してこの方法は普通の積り方と、裁ち方とに熟すれば、自然とよき思考の出づるものなれば先づ普通の積り方、及び裁ち方の熟練を要すべし、是等の思考よろしきを得ば裁縫の經濟上の利益は至大のものなればよく〳〵注意すべき事なり。

(二) 衣類寸尺の取方は如何

●答　着物の寸尺の取方は裁縫上極めて大切なることにて、此寸尺の取方にして粗漏ある時は、着物の袖丈より、襦袢の袖丈長く、或は上着の裄下よりは下着の裄下短く又上着と下着との身幅不揃となり、時には着物の行よりは羽織の行短くして地質は如何に美麗なるも且つ縫ひ方は如何に巧妙なるも着用した上にて見苦しきものにてそれが爲めに大に人品を損ずるものなれば、先づ各衣服の寸尺の取方の順序を心得、然る後寸

尺の度り方に及ばざるべからず、此の度り方に熟せざる時は度る度毎に幾分の差違を生ずるものなれば、其地質に應じ伸縮の度合等をも心得べきことなり、且つ殊に注意すべきは裁ち切の寸と縫ひ上げの寸との區別並に身丈の度り方なり、襦袢及び着物の類は三つ衿の縫込みの端より裾端までの間を身丈とし、袷、綿入の類は必ず身丈の外に袵の寸を明瞭に記し置くべし、又羽織、被布、合羽の類ハ幾分か肩明きを後へ操り下げたるものなれば肩山より裾山までの間を身丈となすべし。

(三) 衣類解き方の注意並にその順序を示せ

●答　裁縫教授の方法に不便なる山間の人は衣類の解き物によりて其の縫ひ方の順序を覺ゆる位なれば解き方の順序を心得るは裁縫の初歩に取りて必要の事なり解き物の順序は殆んど縫ひ方の順序の反對にして左の順序により針目の整否及び針留、縫返しの個所等殊に注意を加へ、鋏の尖の地合に障りて、地質の損せざる様解き放し、糸屑、綿、塵埃等は毛刷毛にて能く拂ひ左右二枚以上あるものはこれまでの裏を内に合せ皺を伸し、畳み置くべし然して其の縫ひ糸も濫りに切り取らずしてなる可く長く抜き取り、長短を分ちて束ね置くべし、これ他日短き糸を要する時など態々長き絲を切るに及ばずして足るものなり。

▲單物――(一)袖附(左右共)(二)袖(三)裾(四)衿(五)衿下(六)袵(七)脇縫(八)背縫

▲袷――(一)袖付(二)袖(三)衿絎(四)衿下(五)布綴(六)裾(七)衿(八)袵(九)脇縫(十)背縫

▲綿入――(一)袖口(二)八ッ口より振り(三)脇明(四)衿(五)衿下(六)各部の綿綴(七)綿ぬき(八)裾

右は表の解き方なり次に裏を又表に準じて解き離すべし

▲襦袢――(一)衿懸(二)袖附(三)袖(四)衿(五)裾(六)脇縫(七)背縫

袷に準じて裏表共それ〲解き離すべし

▲羽織――(一)袖附(二)袖(三)衿(四)紐附(五)前襠(六)後襠(七)背縫(八)裏表の縫目


刺繡
鶯
玲子

英語實習

藤生貞子

CONVERSATION. 會話

英文和譯

Matsuko.—Will you take a walk with me?	松子—あなたわたしと散歩に入らつしやいませんか。
Takeko.—Oh yes, I will be so glad to go with you.	竹子—エーよろこんでお供いたしましよー。
M.—Where shall we go?	松子—何所へ參りましよーか。
T.—We will go to the Shiba Park.	竹子—芝の公園へ參りましよー。
M.—It is quite far from here.	松子—こゝからはずいぶん遠方ですねー。
T.—Yes, but we must try to walk as much as we can.	竹子—ソーですが私共はできるだけあるくことをこゝろみなければなりませんわ。
M.—I think Japanese girls are too week to take long walk.	松子—私は日本の女子はながみちをあるくとはよわいと思ひます
T.—Well, because we do not take out side excercise much.	竹子—そーですねーなぜならば私共はあまり野外のさんぽをいたさないからでしよう。
M.—Now, let us go!	松子—さーでかけましよう。

會話

和文英譯

松子—まーあのうめの花のいゝとねー。	*Matsuko.*—Oh, what a beautiful plum blossom!
竹子—はやく開きましたよ。	*Takeko.*—They have opend early.
松子—あなたは梅と櫻とどちらがをすき。	*M.*—Which do you like best, plum flower or cherry blossom?
竹子—私は梅の方がすきです。	*T.*—I like plum flower the best.
松子—なぜですか。	*M.*—Why?
竹子—なぜなら、梅はかつぱつできよいよーな花ですもの。	*T.*—Because, it seems to me plum blossom is so brignt and pure.
松子—私は花よりも實ににほひがいゝと思ひます。	*M.*—I think we love its fragrance then blossom.
竹子—あなたは青梅をめしあがりますか。	*T.*—Do you eat green plum?
松子—いゝへ私はからだに毒ですからいたゞきません。	*M.*—Oh no, I do not eat it because it is not good for us.
竹子—うぐいすがなけばよーでございますねー。	*T.*—How I wish to hear nightin-gale sings.
松子—すこしこゝへこしかけましよー。	*M.*—We will sit here a while.

名家小品

ATTENTION. LORD CHESTERFIELD.

Without attention nothing is to be done: want of attention, which is really want of thought, is either folly or madness. You should not only have attention to everything, but a quickness of attention, so as to (1) observe, at once, all the people in the room, their motions, their looks and their words, and yet without staring at them, and seeming to be an observer. This quick and unobserved observation (2) is of infinite advantage in life, and is to be acquired with care; (3) and, on the contrary, what is called absence, which is a thoughtlessness, and want of attention about what is doing, makes a man so like either a fool or a madman, that for my part (4) I see no real difference. A fool never has thought; a madman has lost it; and an absent man is, for the time, without it.

注意といふ者なくては何事をも爲す能はず、考への足らぬのは即ち注意の欠乏にして、愚に非ずむば即ち狂なり。萬事に就きて、たゞに注意すべきのみならず、また敏捷なる注意なかる可からず。そは一目直に室内に在る皆の人々、その擧動、其かほばせ、また其ことばを觀察せむとてなり、されどゆめ眼を凝して其人を視、又はさも觀察者らしう見ゆる事勿れ。この敏捷にして而かも人に氣付かれざる注意こそは生涯のうちに無限の利益ある事にして、之を得むには常に意をこゝに用ひざる可からず。また之に反して思慮なく、其現在なせる事物に注意の足らざるは、即ち世に「氣拔け」と呼ぶ者にして人を狂人か、はた愚人のやうにならしむる者なり。われはおもふ、狂も愚もまこと異れる者には非ずと。愚人は全く考ふる事をなさゞるもの、狂人は考へを失ひたるもの、また氣拔けしたる人とは一時のあひだ、考へなきものを言ふなり。 (完)

Notes. (1) so as to—何々せんが爲に (in order to). (2) それと氣付かれない樣に觀察すること、 (3) care 心づかひ、意を其方に用ゆる事、 (4) 余に在ては即ち、余の思ふ所にては。

WIT AND HUMOUR. 一口噺

"Now, then, children," said the teacher who had been commenting upon polar expeditions, "who can tell me what fierce animals inhabit the regions of the North Pole?"

"Polecats," shouted the boy at the foot of the class.

北極探撿の事を說明して居た敎師、生徒に向いて、

"さ、皆さん、北極地方には、どんな猛獸が住むで居りますか。となたか言ふて御覽なさい。"

"鼬（いたち）です"と末席に居る生徒は申しました。

（鼬は北極獸には非ざれども、Polecat といふ語が"極に住む猫"といふやうに見ゆる故生徒が斯る滑稽の答をなせしなり）

There is a new medical invention in Paris. It is a little apparatus which is put under the arm of a fever patient, and so constructed that on the temperature reaching a dangerous height it rings a bell, summoning doctor and nurse.

巴里で醫學上の新發明が出來ました、それは小さい器械で、之を熱病患者の腕の下に置くのです、熱度が危篤といふ程の所まで上ると、此仕掛けで鈴が鳴るやうに出來て居ります、醫者と看護婦とがそれで直ぐに呼べるやうに成て居るのです。

"For a first attempt in public," said her friend, encouragingly, "I thought you sang with a good deal of feeling.

"I don't wonder at that," replied the ambitions young vocalist. "My heart was in my throat all the time.

"公會の席で初めての演奏にしては、大變ひまく情をこめてお歌ひなすつたやうに、私は思ひましたよ。"

奬勵的に斯く

友達が申しましたら、功名心にかられて居る若い其歌ひ手は、かう答へました。

"それもその筈ですさ、歌つて居る間、始終、心臟が喉もと迄來て居ましたもの。"

（I don't wonder at that 私はそれを少しも怪みません。my heart was in my throat. 之は英語の俗語にして、非常に恐れ、または驚く、といふ意なり。即ち此文の意は"私は始終（all the time）ビクヽヽして居りました"といふ事なるを、兩樣の意に解せらるゝ樣にいひたるが滑稽の在る所なり。又 Heart 即ち心臟は feeling（情）のある所なりとは、西洋人の一般に言ふ所なり。）

"How did you get in without a ticket?"

"Walked in backward and the ticket taker thought I was going out."

"どうして、あなた切符なしにお這入りなすつたの"

"後びきに歩るきましたの、そしたら改札掛は、私を外へ出て行くのだと思ひました。"

（Ticket taker は木戸番、改札掛の類をいふ。）

名　句　集

It is a wise father that knews his own child.—*Shakespeare.*

已が子を知る者は賢父なり。

Moderation is the silken string running through the pearl chain of all virtues.—*Bishop Hall.*

中庸を得る事は、もろ々々の德てふ珠の鎖を貫ける絹糸なり。(中庸節制これ實に諸德の基なり)。

Three removes are as bad as a fire.—*Franklin.*

三たび居を移せば、一度火災に遇ひしと同じ損あり。

Order is Heaven's first law.—*Pope.*

秩序は天の第一法則なり。

Never leave that till to-morrow which you can do to-day.—*Franklin.*

今日爲し得べき事を明日に延ばす勿れ。

Old friends are best. King James used to call for his old shoes; they were easiest for his feet. | *John Selden.*

古き友こそ、こよなき者なれ。王ジエームスはいつも已が穿きふるしたる靴を求めき、そは最もおのれの足にかなへばなり。

While there is life there's hope.—*John Gay.*

命ある間は望あるなり。

Truth is as impossible to be soiled by any outward touch as the sunbeam.—*Milton.*

眞理は日の光と同じく、外界より觸れて汚す事を得ざる者なり。

Procrastination is the thief of time.—*Young.*

延引遲滯は時間の盜賊なり。

Absence of occupation is not rest,

A mind quite vacant is a mind distress'd.—*Cowper.*

職業なきは休息にあらず、

全く空虛なる心は惱める者なり。



小説



初鮭

遅塚麗水

一

甚句に高き米山を左手にして、前は一面の青海川停車場、歌枕の時雨松、京の春の胞衣姫神社、守護本尊の瑠璃光佛、辨慶が金剛杖、岩清水、名物は同じ人の名に呼ぶ力餅、寄せては返す碁盤波に、白きは鷗岩、黒きは鵜が嶋の離れ岩、

波除の石垣壘とばかり汐路に並びて、一區寂しく圍みたる停車場に滊車は霎時停まりぬ、窓近う整列したる一隊の海老茶袴、束髮、銀杏、下髮の高き低き右翼の端に立ちたりしは、古りたるモーニング、コート、埃に白き山高帽子、天神髷の貧相なる校長なり、

『わざ〳〵、何とも恐れ入りますね、切望、皆さん、御遠慮なくお歸り下さいまし、』

乳白色の一條長く流れたる客車の牕より、眼鏡をかけたる顔蒼白き一個の束髮、半身を露はして、見送り來れ

る海老茶袴の女生徒に對し　應揚に會釋するなり、

帽子を脫ぎて頭より二三寸、斜に翳せば赭禿の三日月樣に現はれたり、腰を屈げて進み寄りて、『何ういたしまして、まだ上り列車は參りませんな、柏崎邊で手間取つて居ると見えます、お待遠で御座いませう、』

『皆さんこそ』

手の甲を唇に中てしは、窃かに欠伸せるにやあらむ、顏を背けつゝ眉を攅せて、鬢の後毛を掻き上げたり、無名指と小指とに指環二個、五色の霧噴くごとく美しく颯と光れり、

『あら紅玉よ、彼の紅いのは、』

『綠晶色に眩しく光つてるのは、金剛石よ、』

『好いことねえ、』

『一個、妾も欲しくつてよ、』

『左の指にも穿めて居らしつてよ、』

『小指と無名指と中指とに、一個づゝ、』

『眞珠と紅玉と金剛石、』

『豪いことねえ、』

『豪氣だはねえ、』

私語は耳より耳に傳はりて、一隊二十餘人の女生徒の愛らしき瞳は凝乎と車中の人の指頭に集まりたり、

『今日は直に小千谷へお歸りなさいますので、』

はい、爾う致さうと存じます、豫定よりは早く御用が濟みましたので、兩三日、故鄕で保養を致す考へで御座

います、」

「新潟へは、」

「新潟の女學校の巡視で御座いますか、はい、其れは跡廻しに致す心算、久しぶりの歸省で御座いますから、墓參やら親類廻りやら、二三日の逗留と極めて置きましても、田舍の事で悠長で御座いますから、一週間ぐらゐは何うしても費えませう、徴行で參ります心算ですが、狹い土地では御座いますし、縣下の新聞には吹聽されて居りますし、嘸ぞ五月蠅ことで御座いませうよ、故郷へ歸りましたらば、」

「十五年振りの御歸省で御座いますさうな、」

「貴下、何うして其れを御存知、」

紫微塵の細絨の衣、袂を欄の外に溢して稍や身を展しつゝ、淺黃縮緬の襦袢の袖に絡まる腕の媚めかしう、白羽二重の襟を重ねし衣紋にそつと手を觸れて、問ひし人には瞥も呉れず、すらりと整列びし海老茶袴の肩越しに瑠璃を展べたる海の彼方を、眼も遙にふりさけ見たり、

遠く霽れたる波の上に、佐渡が島、眉より青く浮びたり、

「矢張、其の新聞で、」

「呀、爾う、ソンナ事まで新聞に書いてわりましたか、那邊から聞いて參りましたので御座いませう、——勿論、長野でも高田でも新聞記者が旅館へ推し蒐けて參りまして、迷惑をいたしました、まだ其の外に何か書いて御座いましたか、先生、」

先生と言へりし言葉の、異しくも此の羊羹色のモーニング氏の耳に響きけむ、爪長く白墨に白き指を帽子の廂にかけて瘦せたる頰の、法令いと寂しく深めながら、『外國のお話しが、長々と記して御座いました、』

「あゝ爾うでしたか、米國の女學生の生活を話して遣りましたので御座います」

「其のお話で御座いました、」

「妾が申上げるまでも御座いません、御存じで居らつしやいませうが、貴下彼土では國家の基礎は個人の上に建てられて居るので御座います、ところが我國では、國の基礎は一家の上に建てられて居るので御座いませう、隨がつて彼土では個人の生存競爭から、女子も男子と共に生活の戰爭を致さなければならないのですから女子の氣象の烈しいこと〻申したら、ポンチツト、長い袴、容こそ異つては居りますが、其れを取り除けますと變生男子、日常の生活は男子と少しも異はないので御座いますよ、けれども貴下、日本ではまだ仲々爾ういふ譯には參りません、矢張何んで御座いますねえ、良妻賢母、——女子教育の根本は、人の妻となつては貞淑に、人の母となつては賢良なる女性を作るといふことに致しませんでは、ねえ、貴下、其の意味で話して遣つたので御座いますよ、」

蒼白き頰のあたり血の氣やゝ動いて、臉はのかに笑を堪めぬ、手を膝の邊に身を支えて起てば、胸高に綾綸子の濃紫の袴、太白の縣縫したる廣紐を綾に取つて、乳房の下より括つて娉婷、鰐革の旅行鞄と推し並びて臼ほどの臀を据ゑたる髮の毛赭き赭ら顏の女書生を顧きて、磯浦さん、何うしたんでせうねえ、汽車は、」

「彼是三十分過ちました、」

「無責任だねえ、此の鐵道會社は、妾達は好いけれど、見送つて下さつた先生や學生の方にお氣の毒でならないこと、」と眉を寄せて窓より斜に頭を出せば、貧血の耳朶木蓮華の葩かとばかり、鬢を掠めて斜に射せる影に白う透けたり、

「ヤツと參りまして御座います、」

[illegible]家の碓の音と響く輪聲は、旋て大地を搖り動かして走せ來りぬ。頂を露はしたる校長脫ぎし帽子を打ち振れば、學生一同『されば吾師』の訣別の歌、車掌が唇に啣みし短笛鳴れば、滊笛長くこれに響へて、車の動くとは覺えざるに地は看る〳〵伸び行きたり、五步ばかり滊車と共に走りし校長の停まりて、帽子を振る時、海老茶袴は隊伍を解いて簇がりぬ、プラットホームの驛長驛夫、降車の客、柱、時計、靑海川と記されたる驛名標、靑筋入りの洋燈、ポイントは寂みかへつて、走せ行く滊車の窓に蒼白き人の顏を見送れり、旋て停車場を過ぎ行く時、去來標は臂を抗げてぞ目迎へぬ、

二

車は故鄕の山に入りて、秋立ちたり、椰の陽にくづ折れて、うら寂しく身を靠せたる女學士は、實に某の國の公子が簾に代えて三鞭酒飮みたりしと、聞く美くしき漆革の小さき靴の爪先に、床を踏みつ〳〵輕く拍子とりて、ローヘングリンの花嫁の曲を口吟さみ居たりしが、沈みし氣を鼓舞てんと思ひしが、急に顧きて、『磯浦さん、可笑な人ね、今の校長は、』

『爾うねえ先生、本統に可笑な校長で御座いますね、』と夕陽を受けし烏瓜の燃えんとすなる頰に笑を湛えたり、

女學士は寂しく笑つて、『本統におかしな人よ、故いわねえ、彼の羊羹色の洋服のやうに頭顱から衣服から帽子から靴から古いもの盡め、其の筈さ、二十年前の師範學校の卒業生だもの彼の服も彼の帽子も、初めて敎師の辭令を受取つた時に、月賦かなんかで新調したもんだよ、おほ〳〵〳〵、』

「餘まり可哀相で御座いますわ、先生、」

「可哀さう、——爾うね、可哀相ね、何うしても田舍にばかり居たんぢやア、時勢には後れるし、世の中の事は知らず、四圍が進歩をする中に自分は依然故の儘、丁度竹林の中の石地藏のやうなもので、春の筍は秋の親竹、雲を拂う勢で伸びて行くのを、石地藏は寸も伸ずに苔の着くばかり、磯浦さん爾うぢやアないかえ、」

「旨いことを仰しやいます、」

「田舍に居ちやア仕方がないよ、」

「志のある人は、都へ出るに限ります、」

「爾う、妾だつて東京へ出て往つたばかりで、今日の地位が出來たのよ、兎にも角にも東京高等女學校の校長とか何とか言はれる身分になつたのさ、若し此の田舍へ蟄乎として燻つて居て御覧なね、小千谷在 某村の水呑百姓田五作の女房お鏡さんね、おほゝゝほゝゝゝ」

「おほゝゝゝ、」

「豫言者も故郷には尊ばれずといふ喩がありますがね、妾の故郷へ、磯浦さん、まア往つて御覧なさい、喫驚しますよ、乾度、」

「何故で御座います、先生、」

「田舍も田舍も酷い田舍なのですもの、何しろ冬は一丈五尺も雪が積るところですよ、冬中は磯浦さん、此の下に鹽殿村わりと記いた標木を建てゝ置くのですよ、天窓から按摩が轉げ落るところですよ、」

「まア先生、」

「冬中は雪の籠城、寒いから爐へ柴を折りくべる、家の中は燻り通し、酒好きな男は炬燵板の上へ酒陶を置い

て朝から酒浸し、勝負事の好きな者は、碁、將棊、花牌、段々下つて骰子といふ始末、酒も嫌い勝負事も知らぬといふ人が俳諧、歌、小說、草双紙、炬燵に假臥るか、爐の火に燬るか、不健全な娯樂ばかりしか爲ぬところなのですよ、焚火の烟に薰されるので、眼を病ない人は少なく、誰れも彼も眼が赤爛、酒毒に中つて身躰は水腫、青白い脛の邊を指で推すと、霜に爛れた種瓜のやうに爪頭も沒れるやうになる、如其處なのですよ、妾の故郷は、」

稍や西に傾むきたる日脚は篷より、走れる樹、流るゝ烟、來る電信柱、往く竹林、後に翔けるがごとく見ゆる駒など、種々の影を帶び將て女學士に射つけたり、過ぎり去る影の絶間に、顏も容も燃るばかり、泥金の絹扇象牙骨を三つほど殘して斜に翳し、

「おゝ眩しい、閉めて下さいな、扉を」

回顧りて女書生に吩咐けたる時、金縁の眼鏡は日を反射して、一双の白玉錢を床に投げたり、

磯浦といへる女書生は、慌てゝ起ちて篷の鎧扉を揚げて、先生、復た暑くなつて參りました、今朝青海川の學校へ參りました時は、秋のやうに涼しう御座いましたのに、」

「閑うねえ、」

女學士は點頭きながら日に翳したる扇を其の儘、輕く搖かして襟に風を送りぬ、

けれども、先生故郷といふものは懷かしいもので御座いますね、妾も靜岡から出て參りまして、先生のお世話を戴いて居りますが、雨の降るにつけ風の吹くにつけ、毎時故郷を憶ひ出します、千本松原、濱の觀音、桃郷の桃、靜が浦、松露が濱の眞砂から熊手で搔き出される頃になると百二十端の曼陀羅が、龍燈の松の梢から懸ります觀音樣の御緣日の賑やかな有樣が、眼の前に彷彿くので御座いますわ、青竹へ灑き込んだ紅寒天、柴

のやうに束ねました肉桂、青や紅や黃や紫やを、丁度鯛の鱗ぐらゐに附木に並べた細工新粉、妾しは其れが好きで母や祖母と參詣に參りますと、屹度買つて貰ひます、其の嬉れしさが、まだ胸の那邊かに浸みて居るやうに思ひ出す毎に恍惚と夢心地になるので御座いますよ先生、妾の家は、篁竹を網代に編みました垣根、一八を家根の棟に栽ゑました茅屋、門の前には玉を熔して流したやうな小川、覆せた鍋やら浸けた樽、沈んで居る缺茶碗までが鮮明と見えて居ります流れの上に、青石の一枚橋、眼の前に見えるやうで御座いますよ妾の家の樣子が、先生、貴女も矢張お懷かしう御座いませう、先生の御鄕里は」と、改良服の袖の露を緩めたり又た緊めつして恍然と他愛もなう、遊び出づる吾が魂の行方を趁ふか、圓の眼を瞬りたり、

「阿母樣が御居で遊ばしますので御座いませうに、」

「妾は、餘り故鄕は戀くないのよ、」

「だつて百姓よ、」

「結搆では御座いませんか、」

「磯浦さん、まア妾の家へ來て御覽なさい、喫驚しますよ、陋穢い家で、」

「先生、其れは東京とは違ひませう、」

「勿論、東京とは違ひます、田舍ですから、雖然田舍でも妾の故鄕は格別です、冬になれば一丈の雪の下に埋もれて仕舞います處ですもの、母や兄などは、善く如此ところへ住つて居ると思ひますよ、人は草木と同じですね、妾は柳の性、何んな土地へ移しても根を卸します、母や兄などは竹の性、土地好みをするのですよ不自由ね、」

一哩の漆の冥を盛りたりし塚の山の隧道は、突如に汽車もろともに女學士の談話をも吞み去れり、

三

「お前がお鏡かえ、妾の娘の、」

來迎寺停車場の改札口より徐々と立ち出てたる女學士が、裾長の濃紫の袴、踏み鳴らす漆靴の痕やさしく八の字の五個ばかりを沙の路に印したるが、娉婷と立ちてチラリと白き歯、笑み傾げたる顔を覗つめて、身長低き老女は霞める眼を揩り〳〵、鏡子の四周を三たびばかり匝りしが、旋てしげ〳〵目戍りぬ、紺の香高き手織の單衣、幅窄き觀光繻子の帶、裳を搴げて淺黃の二布、白足袋のみは新らしく、黒天の細き鼻緒をすげし小町を穿きたる老女は、正しく東京高等女學校長越山鏡子の萱堂なり、

『阿母樣、鏡で御座いますよ妾は、おほゝゝ　ほゝゝ、お忘れ遊ばしましたか、』

老の眼には早や涙、掌らで横に揩つて復た慌たゞしう瞬きして、『魂消て仕舞つたがンだ、お前が妾の娘のお鏡だつたか、』

『お久しぶりで御座いました、阿母樣、阿母樣は太層お齡をお取り遊ばしました、途中でお目に掛りましても妾には解りません、』

『爾うよ、お前に分れてから一と昔と三年になるだすけ、』と言ひしが急に回顧いて、『太郎吉や、何して居るだ此處に居なさる豪い立派な女の先生がお鏡だよ、早く來なせえよ、何狼狽して居るがんだ、』

紋の酸漿赭く煤けし絽の羽織、其の裾膝に撒らぬほどの短かさ、山の入りし小倉の角帶、突盃形の帽子を阿彌陀に、雪駄を淺穿けて、啣え煙管一服吸つてポンと敲いて小刻みに來る途中、自然木の煙管筒にトンと煙管を打ち込んで、右の手に逆に取つて腋の帶際へ、挿さんとしては突き滑らせ、取り直しては復た突き滑らせ、驛

の前の掛茶屋より僅か二十間とはなき間に、挿し損ずること十度ばかり、母と撲地、身を開いて煙管筒を斜に構へ、前跌りに進み行き、頤で揶つて背を展しながら、慌たゞしくも帽子を脱ぎて、

「お前樣がその何ですか、俺の妹のお鏡なんで……、素晴しく立派になつて來たもんだな、阿母ア、お鏡だよ左の眥の黑子が證據だ、善くまア歸つて來て呉れたな、立派な先生樣になつてよ。俺の糕子ッ鼻が今日ばかりア、少とばかりせり出して來たがんだ」

「呀、阿兄樣で御座いましたか、おほゝほゝゝ阿母樣も兄樣も、まア大層お齡を召ましたこと、」

「一と昔と三年になるんだな、お前だつて大層お齡を召しましたよ、」

苦きを嘗めしとばかり、鏡子は双眉鈎のごとく攣みて顔を背けぬ、鞄を提げて一丈の師の影に跟き隨がへりし女書生の改良服が、耐えんとして忍び得ざりし滿面の堆笑は、紅く夕陽に對うて頽れたり、

「おほゝほゝゝゝ、」

「笑はッしやるな、お前が十七の時に別れた切りだ、變る筈ぢやアないか、いやさ、猶豫しちやア居られねえのだ、先づまア當面の茶屋へ往つて、一と休みして、それから直に歸ると爲やう、車もな、東京の女學校の校長樣をお載せ申し上げるといふので、彼のソレお前も知つて居やう、小千谷の山本樣、彼のソレ飄輕で面白いお醫者樣が、村の病家を見舞ふ時にお乗りなさる、扇骨の、重籐轅の、金紋附きの、紅い敷毛の、小千谷第一といふ車を、態〳〵仕立てさせて俟たせてゐるんだまア彼の茶屋へ來て一と休みなさいまし、茶屋の主婦はそらお前と學校朋輩、始終青ッ洟を垂して居たが仙さんよ、今ぢやアお前嫁づいて立派な主婦さん、東京の市村家橘とかいふ役者の扮た紙治の女房おさんに酷似だといふので大評判よ、まだ御挨拶は致しませんが、お連れのお方は誰樣で御座いますか、其の、唐の漢コロリンのやうな衣服を召て居なさるお方は、先生樣、ぞつこい

お鏡さん、何も學者と口を听くと氣後れがして狠狽すらア、妹だから呼び捨てにしても好いんだな、晴れの席ぢやア先生樣として立てなけれアヽ、校長樣の品格に觸らうが、母子、兄妹水入ずといふ今日なんだから搆うめえな呼捨てにしたつて、——お鏡——、うふ、何だか氣後れがするな學者の威光といふものは豪氣なもんだな、併し耐忍して呉れねえよ、學者の妹を有つた冥護に憚りながら界隈の奴等に、コレお鏡やなんて呼捨にして衒誇かして遣りたいのだよ、權高な兄だなんて、怒つちやア不可いよ、好しか頼みやしたぞ、難有え、お前を呼び捨てにする時ア眼を瞑つて申しますア、お鏡——、斯ういふ鹽梅式に、といひながら、突袖の先を掬つて昂めし双の肩を一時に落せば、一張羅滑つて脱けさうなり、

「おほゝゝは、阿兄は、そかしな事を仰しやるよ、」

「いや、些とも可笑しかアないがんだ、全く先生ぞつていお鏡、夕顔の蔓のお蔭で、傾ぎながらも倒れずに居る穢い汚い茅屋の中から、女の學者が現はれたすけ、自慢せずにやア居られねえがんだ、お連のお若いの、誰樣ですかえ」

「おほゝゝゝ宅に居る學婢なんです、」

「何の事た、」

「書生さんですよ、」

「うむ、爾うかえ、矢張其の何ですか、お前の許へ學問を爲に來て居なさるのか、書生さん、重たからう、出しなよ、俺が擔つて上げるすけ、」

腋を擽ぐられたるごとく、肩を窘めて、避けんとするを引つ提へて鞄を奪ひつ、茶屋の暖簾を頭で割つて案内顔、

「お仙さん、いや主婦、昔馴染を連れて來ました、」

丸髷の赤手柄、龍膽の中形浴衣の袂を絡む紅襷、右を外して衣紋を繕ろひ、帯際淺く斜に挿みし前掛を卸してトンと膝を突き、色白の面を颯と紅くして、見上げし女、剃りたる眉の痕青う、歯も涅く染めたれど、幼な馴染の懷かしき面影、

「お仙さん、妾しは鏡で御座いますよ」と鏡子は鷹揚に點頭きながら、緋鹿の兒メリンスを額に取りし蒲團の上へ腰かけたり、

「まアお立派にお成り遊ばしましたこと、おほゝゝ、何と御挨拶を申し上げて宜しう御座いますか、お愛たう御座います、」

「お前さんも、大層立派な主婦さんに日常お壯健、」

「難有う御座います切望、奥へお上り下すつて、お休息遊ばしまし、今日は仲々お暑う御座います、奥の座敷の方は、此處よりか風入りも宜しう御座います、切望、彼方へ」と導きて、復た欣々と出で來れば、俟ちくたびれし車夫の一人は、上り框に脊を丸めて、新らしき草鞋を穿き換え居たり、

「昔の事を憶ひ出したかえ、鏡さん緊乎お爲なねえ」

過ぎざまにお仙はぽんと輕く若者の肩を敲いて、回顧て嫣然と笑めば、汗の香高き紺法被に籠れし蒼蠅立ち迷ふ中に力なき顏を揚げて、言はず、

四

「車屋さん、急がずに俟つてお呉れ、後の車は什麼したんだらうね」

後に續く輪聲なさに、鏡子は車を停めて回顧りぬ、髮より直き路の彼方に、吾が乘りし轍の痕のみ双行長く延びしのみなり、幼かりし時鬼籠もりと聞きて、今は亡き父の黄昏の寢酒の使ひ怖ろしかりし八海山、龍の棲めりと傳へられし七ツ釜の苗葉山は、わりし昔に變らぬ姿、丘、林、稻田、黍畠、鮠走る瀨の小川、笹船の香懷かしき片貝の里、夕陽鮮やかに繪りたる故鄕の村に入りたる鏡子は、遍りなくも十三年前を憶ひ起して、唯だ夢心地に恍然と看めたり、

越山鏡子は小千谷の町の在、信濃川に傍たる塩殿の村に生れたり、小學校を卒業したる後、年十七の秋東京に出で、外務官吏の家に奉公したりしに、我より二歳下の令孃の氣に入られ、活潑の性質にて而も學問に志しあるを主人に愛でられ、令孃の行ける學校に附人となりて同じ机に書學ぶ事となり、令孃と同じ卒業免狀を受くる身となりたるが、妙齡の令孃は旋て外交官試補の秀才の家に歸ぎ、夫と共に米國へ往くてとゝなりし時、氣心知れたる鏡子を侍婢代りに伴ひ行きなば、萬事につけて好からんと、次第に開く運と共に彼の國に渡りし後夫人は亡くなり主人も任地の換りたるに、鏡子は豫て夫人より學び得たりし刺繡の技をもて一人の口をば餬すに足れりとて、獨り彼の地に留まりて學校に入り、五年の月日を學問に委ね、さて本年の夏の初無事に歸朝し世話する人ありて今の身となりしなり、

「什麽したんだらうね、車屋さん、まだ見えないやうだね後の車は」と鏡子は母衣の中より瞞し視たり、

「今に參りませう、」

「餘まり遲いぢやないか、遲いんぢやない、お前が疾いのかも知れないね、」

「後の車は與太ばかりで御座いますもの、」といひながら雅健ぶりに肩を揺つて復た走りぬ、

「ま、俟つてお吳れ、停めてお吳れ、」

「此處で俟てと仰しやるので御座いますか」といひながら、腕に絡めし手拭を解いて淋漓と流るゝ汗の額を拭いたり、

「妾一人、先へ行つては惡いから、」

「西日は射す、陰はなし、秋の日を眞額に受けましては、じり〳〵と熱りつきますさア、此の先の嬉しの森、御存でも御座いませう、彼處には湧玉の泉といつて、全く玉を溶したやうな清水が湧て居りますよ、彼處へ往つて休まして戴きませう、」



嬉しの森、湧玉の泉、其の言葉は怪くも銚子の胸に浸み入りて、在りし昔に聞き殘したる蟬時雨、苔の香ひた〳〵と碧流るゝ岩清水の私語、等刎ねし石甃の上に散り布く椿の花、吹き寄せの椎の實、村雨の宿の庇に古りし繪馬の額、月夜に青き石硯の背なぞ、分明と憶ひ出さる、無言に點頭けば後に眼なき車夫は唯だ一散に曳

き出す、旋て眼に入る一本の大銀杏路は迂りて嬉しの森の中を穿てば、故のまゝなる朱の鳥居、日影もらさぬ森の寂かさ、蜩も昔の音に鳴く、轅を卸して車夫は獨り凸凹の甃石を斜に切り、銀杏の陰に行きたりしが犢牛に似たる苔石の上に覆せたる缺



茶碗を取つて、先づ健かに水を飲み、さつと浣いて滾さじと擦り足して持ち來し水を、鏡子の前に差し出して、

『一杯如何で御座います』

『欲しくはないよ、』

『爾う仰しやらずにまア一杯、氷の溶けたやうな清水なんで御座います、』

『要ないよ、』

『十三年ぶりで一杯、』

『欲くはないの、』

「モシお鏡さん、此の水の味を忘れたのですか」

「何とお言ひだ、」

「眉はきり〻、瞳は凝然、扇骨の母衣に手をかけ、饅頭笠の陰を睇せば、車夫は始めて笠を脱ぎたり、眼涼しき色白の小意氣の男、

「正可お忘れなさるまい、銀三郎で御座います、」

「えーッ、」

驚く鏡子、翡翠玉の長柄の洋傘は、膝より滑りて地に落ちたり

「覺えて居て下すッたか、」

「お前が彼の銀三郎……、」

森守の神の私語か、さや〳〵と林を度る風の音、外に聲なし、

「まア什麼したの、」

「お鏡さん、貴女は喫驚なすッたでせう、」

「餘まり姿が變つたので、妾は些しも知らないで居たよ、」

「私も貴女の餘まり立派になつて來たので、喫驚しました、」

「什麼して、まア、」

「凝乎と顏を視め居りしが、手快く車の膝掛撥ねて下り立ちぬ、白襟、紫袴、金縁眼鏡、胸に垂げたる細金の鎖の先には、七寶の小さき紀章搖らぎたり、

「貴女が、外國へまで修業に行つて、大層な學者になつて歸つて來たといふとは、兼て噂さに聞いて居りまし

た、私はお鏡さん、お前さんと一歳違ひ、家は信濃川を間にしてお鏡さんは此岸、私は彼岸、窓と窓とは相對ひ、朝曦夕暉の障子の陰で、廣い川瀬を眞中にして、手招ぎしたり呼び合つたり、幼さい時から兄妹のやうに睦ましく遊んで居たのを、お鏡さん、お前も善く覺えて居るだらうね、」

言ひさして背を鳥居に靠せつゝ、力なげに太息つくを、鏡子は憐れと打ち目り、

『學校でも一番仲善し、蜻蛉釣りやら稻子取りには、例時も一緒に遊びましたね、此の森もお前と二人の遊び場所、椿の花笠揃らへたり、團栗のお猪口の酒事、昔の事を憶ひ出すと罪のないことばかり而して、お前は其後は、」

『まア聽いて下さいまし、お鏡さん、今ぢやア貴女は昔しと違つて立派な學者、女の學校の校長樣へ、牛馬のやうな稼業をして居る此の銀三郎が、直々にお話をするのも恐れ多い、お前さんは蒼天の鶴、私は地の下の土龍、見たやうなものだが、幼い時からのお馴染甲斐に、お耳を借して下さいまし、貴女も知つて居る通り、私しの親爺は、信濃川の川筋の鳩が淵から柳が瀬まで一里の間が自分の漁區、夏は香魚、秋から冬へかけては鮭隨分收入があつたのだが、八年跡に鳩が淵の絶壁の上から石油が湧き出して、それが川へ流れ込むので支配の瀨には魚屬が棲ます、漁はパツタリ寡つたりで、身代は三年の中に滅茶〱、揚句の果に父親も母親も續いて黃泉へ旅立して跡は私が一人坊師、五年越し晝は車挽、夜は草鞋を揃へたり繩綯したり、生甲斐のない生計をいたして居りますよお鏡さん、お前さんは私と違つて、大層な御出世、お悅びはいたしますが、羨ましいとも思はぬほどの根氣が脫けて仕舞ひました、見そぼらしい斯んな服裝をして、辱ぢて姿を顯らしもせず、おめ〱逢つて名乘るほどの活智なしになりましたよ、」と、握る拳の甲に散りたる一と雫、

『辱かしいことはない運ですよ、運命ですよ、落膽をしないで稼ぐのが好う御座んすよ、』と鏡子は慰さめ衆ね

て眼を瞑りぬ、

「全く運です、落魄た私も運、出世した貴女も運、運といふ奴は悪戯者で御座いますな、」

無言に相顧りみしが、銀三郎は旋て慌たゞしく鳴く蜩に促されて、

「さア、お乗り下さいまし、モウ後の車も参りませう實は今日客を來迎寺の停車場まで送つて、虚車で歸るところを、貴女の阿兄様に呼び止められて、貴女を載せて呉れとのお頼、何の面下げて貴女にお逢ひ申されませう、強て辭退をしたところが、十年逢ずに居たお前が、什麼して娘に分らうか、私や又たお前とは決して明さぬ、お前も笠で顔を隠せば、變つた姿を觀破されやう筈はないと言ひ負かされ、他に車がなかつたので到頭お載せ申しましたが、昔しの事が懐かしく、夢心地になつて仕舞つて、耻も、外聞も、前後不覺で、自分から名乗つた譯で御座います、さア早くお召し下さい、」

紫袴の裾ちらはら、漆の小靴を徐かに移せば、苔に浸み入るやうな音、翡翠の長柄に手をかけて、颯と披さし浮織摸様の綾の洋傘、

「妾は歩いて参りませうよ、」

五

星月夜、霧は下りぬ、

空には斜に流る丶星河あり、地には眞珠の底光りする信濃川の滔々として流れたり、

彼岸に一點幽かなる燈光ありて人影なく、此岸に滿窓の燈火、華やかに、笑譁の聲は時に顛れて水を度る、憐れむべき彼の銀三郎は、此の夜昔し馴染の彼岸の家の娘に贈らんが爲め、舟を河心に浮べて魚を網するなり、

滈然一聲、滿江の霧は捲きぬ、網を擧れば唯だ見る三尺の銀刀躍つて波間に在るを、
『初鮭だッ』
鳩が淵に油湧くこと少うして、魚復た故の淵に還り來しなり、禍ひなる哉

（終）

トルストイ伯童話 罪の兒

武田櫻桃

（一）

一人の小兒がある貧乏な百姓家に產れました、兩親は大悅びで、早速敎父を賴みに近所へ行きましたが、『そんな貧乏な家の兒に敎父になるのは可厭だ、』と云つて体よく斷つてしまひましたから、百姓はまた他の家へ行つて賴みましたが、誰も相手にするものがありません。

百姓は什麼も敎父を探さなくつては、洗禮を受けさす理由に行きませんから、村中駛廻つて賴んで步行きましたが、誰一人敎父にならうと云つてくれるものがない、仕方がないから、今度は隣村へ行つて賴んで見やうと、急いでやつて行きますと、其道で大人に遇ひました、すると大人は立停つて、

『お早う、お前は一体何處へ行く積りだえと聞きますから、

『神樣が俺に一人の小兒を下すつたので、俺の若い中は俺の眼を慰め、年を老れば手助けともなり、死ぬ時には祈禱を上げて貰ふ積りですが、何分今貧乏して居ますから、俺の村で誰一人敎父になつてくれるもの

がありませんから、誰か教父になつてくれるものがあるだらうと、かうして探して歩行いて居るのです

と謂ひますと、大人はうなづいて、

『俺が教父になつてやらう！

百姓はどんなに悦んだでせう、丁寧にお辭儀をして、

『此處でこんな立派な教父にお遇ひ申さうとは思ひませんでした、難有うございます！ そこで餘り附上つたお願ですが、何處かに教母はございますまいか

『教母？ あるとも！ 教母には靴舖の娘がいゝや、お前が町へ行つてね、其處の四ッ角に石造の靴舖を見たら、直ぐに這入つて行つて、其處の家の娘になつて貰ふがいゝ

自分の村の者すら誰も相手にしないものが、町の立派な靴舖の娘が教母になつてくれる筈がないと思ひましたから、百姓はもぢ〳〵しながら、

『こゝでいゝ教父にお遇ひ申しました上は、今度は其富有の靴舖へ行つて教母を賴むより外ありませんが、そんな金有のお孃さんが教母になつて戴けるでせうか

『そりやアなつてくれるともさ、まア行つて見るがいゝ、俺は明日の朝早く聖堂へ行つて居るから！

其處で百姓は大人に別れて、一反家へ返り更めて町の靴舖へ參りましたが、裏庭の方へ馬を向けて歩行かせて居る中に、其處の家の主人が其處へ出て來まして、

『これはお出でなさい、何か用でもありますかえ。

と云ひますから、

『甚だ申かねた次第ではございますが、實は俺は一人の小兒が出來まして、若い中は眼の慰みになり、年を

老れば手助けになり、死ねば俺の爲めに祈禱を上げてくれる一人の伜を設けましたのですが、敎母がありません、そこで貴郞のお孃さんに敎母になつて戴きたく出ましたのです、如何でございませう、敎母になつて戴く理由には參りませんでせうか、

『何日洗禮があるんだえ？

『洗禮は明日の朝受けさせやうと存じますので

『よろしい、娘を敎母に貸して上げやう、明日の朝聖堂へ行かせるやうにするよ

翌る日になりますと、敎母も來れば、敎父も聖堂に來て、芽出度く洗禮も濟みましたが、敎父が聖堂を出たかと思ふと、誰も其姿を見たものはない、それから後も此大人は何處へ行つたか見たものがありません。

（二）

百姓の小兒は漸々大きくなりまして、名を太郎とつけ、百姓の慰みになるやうになりましたが、大變可愛い、悧口な、柔順しい兒で、十歳になりましたから、早速學校へ入れて、勉强させて見ますと、根が悧口な處へ一生懸命に勉强するものですから、他の生徒が五年もかゝつてやるものを、此兒は僅か一年で記憶へてしまふと云ふ風で、忽ち卒業してしまひました。

耶蘇の復活祭が來ましたから、敎母になつてくれた娘を祝つてやらうと、太郎は其娘の處へ行つて祝ひを述べ、さて家へ歸りまして、

『お父さん、僕は今町の靴舖の敎母の處へ行つてお祝ひを云つて來たがね、一体僕の敎父と云ふのは何處に居るの？

と聞きますと
「いや、それは知らない、お前の教父と云ふのはな、お前が洗禮を受けると直ぐに何處へか行つてしまつて實は俺も其行衛を知りたいのだが、其後見た事もなければ、聞いた事もないのだから……
太郎は暫らくお父さんの顔と阿母さんの顔とを見比べて居ましたが。
『僕は探しに行かう、教父を探しあてゝ、お祝ひを云はうと思ふのです、どうか其行衛の解らない教父を探しにやつて下さいまし
と其處で愈々教父を探しに出る事になりました。

（三）

太郎はお父さんと阿母さんのお許が出ましたから、速ぐに仕度をして、だんだん村はづれの方へ參りますと、此所へ一人の大人がやつて來て、
『今日は！お前は一体何處へ行くんだね
と聞きますから、太郎はこれまでの事を悉皆話し、さて
『さう云ふ理由で、僕の教父に遇つてお祝ひを申上げやうと思ひますが、教父の行衛が解りませんから、それでかうして探して居るのです！
すると大人は、
『さうか、其教父と云ふのは俺だよ
と云ひますから、小兒は嬉しく思ひまして、

『貴郎が教父の叔父さんですか、丁度復活祭の事ですから、什麼か家へ來て下さいませんか、え、什麼か僕の家へ來て下さいな、

いかにも餘義ない頼みですが、大人は頭を振つて

『いや、折角の案内だが、今と云つてお前の家へ行く事は出來ない、俺も隨分忙がしい方だからな、だが、もう一度俺に遇ひたければ、明日の朝俺の家へ來るがいゝ！

『だけども、僕は叔父さんの家を知らないもの！一体何處へ行けば遇はれるの、

と聞きますと、

『お前は何でも關はず太陽のお上りになる方へ向いて行くと、其處に一つの森がある、其森の中にはまた一つ開拓いた所があるから、其處へ一憩みして、何が其處で始まるか能く見屆けたら、今度は森を出て行くと、綺麗な庭へ出る、其庭にある金で葺いた屋根の家が俺の住居だから、遠慮なく戸を叩くがいゝ、さうすりやア直ぐ遇つてやるから

と云ふかと思ふと、教父はもう何處かへ行つてしまつて、太郎の眼には見えませんでした。

（四）

翌る朝になりますと、太郎は教父の云つた通り、森の方へ來て見ると、成程其處に少し開拓いた所がありますから、まア一憩みと草の上へ座り込んで、さて周圍を見ると、一本の松の木がある、其の枝には重い樫の木頭が結へてある繩が引懸つて居るのですが、下を見ると凹んだ蜂蜜の這入つて居る箱が置いてあるのです、太郎は什麼してこんな處に蜂蜜の箱が置いて在り、松の木には何故こんなものが引懸つて居るのだ

らうと訝しく思つて居ます中に、森が何だかが、、さ〳〵云ふかと思ふと、其處へ大きな熊が出て來ました、第一が雌熊、第二が若い雄熊、第三が小さな子熊です。

雌熊は鼻をフン〳〵、、、やりながら、蜜箱の方へ子熊を連れて來ましたが、蜜の匂ひを嗅ぎますと、直ぐと子熊を呼びました、子熊は駈けて來て突然蜜箱の中へ首を突込まふとする途端、松の木に釣つて在る樫の木頭の繩が少しづゝ緩んで、子熊の上へ落ちましたから雌熊は見て居られません、前足で樫の木頭を搔き除けやうとしましたが、木頭は反つて強く搖れ始めて、小熊の背中へ落ちる機みに、雌熊も若熊も頭や背中を揆されました、雌熊はもう夢中になつて兩方の前足で向ふへ搔き除けて居る中に、木頭は高く飛び上つてしまいました。

今度木頭が落ちて來た時に、若い雄熊は飛ついて咬みましたが、子熊は未だ荐りと苦んで居るものですから、また一つ搖ぶると今度は落ちて來て若い雄熊を揆り殺してしまひました

雌熊は先よりも烈しく吼りながら、木頭を力まかせに突きますと、其機みで木頭は高く飛び上つて、繩が松の枝に搦んでしまふ程高く飛び上つた隙を見て　今度こそと蜜箱へ飛つく拍子に、其飛上つた樫の木頭は、突然雌熊の上へ落ちて來たから堪りません、雌熊がヴオーと一聲、手足を振はして死んでしまひました。

これを見て居た太郎は驚いたの驚かないのではありません、速ぐに其恐い森を出て大きな庭へ來て見ますと、其處には大人が云つた通り金で葺いた屋根の立派な御殿が建つて、其門の前に、もう昨日の敎父が自分を俟つて居るのですが、こんな立派な御殿は今迄夢にも見た事はありません、それは恰で天國にある御殿のやうであります。

敎父は御殿の中へ太郎を連れて行きましたが、一々室の中を見て歩行く中に、其綺麗な事と云つたら繪にも畫けない位で・一番終局の室は戸が締めてありました。

敎父は其戸の前に來ました時に、

『お前は此戸をどう思ふかね、この通り御覧！　鍵はかゝつて居ないのだが、こゝへ這入るには少しお前に云つて聞かせなければならない事がある、一体此室は、滅多に人を入れないので、若し此室へ入るものがあれば、其人は思ふやうな事が出來て、大變幸せな人になるのだが、これは俺が這入れと云はなければ這入れないので、若し俺が吩咐けずに這入つたら、森の方を見ろ、いゝかね解つたかね！

かう云つて敎父はもう消えてしまひました。太郎は獨り殘りましたが、自分の家に居るよりも幸せのやうな氣がしまして、茫然廊下へ立つて居ましたが、ものゝ三時間も距つたと思ふ頃は、もう三十年距つて居るのです、そこで太郎は、『何故敎父は此室へ這入つてはいけないと云つたらう、何があるか一つ這入つて見てやらうと戸を推すと封鎖が戞然と外れて戸が開きました、太郎は急いで室の中へ這入つて見廻しましたが、此處は先刻に見た室よりはづゝと綺麗で、中央に金の玉座が据ゑてありますから、、、、、ぐる〳〵室の中を歩行いた擧句、其處の玉座へ腰を掛けました。

玉座の後ろには一つの杖が立懸けてありますから、悪戯半分手に把つて見るが早いか、室の四隅の壁はばらりと落ちてしまつて、其處から世界中にありとある事が見透うされますので、太郎は正面を見つめて居ると、向ふはづゝと大きな海で、帆かけ船や蒸滊船が通つて行きますし、今度はまた右の方を見ると印度だの、支那だの、耶蘇敎國でない國が見え、左りの方を見ると、佛蘭西や、獨逸や、英吉利だの、耶蘇敎國が能く見えますが、露西亞ばかりはどうしても見えません。

太郎は什麼かして自分の住んで居る露西亞が見たいものだと、四隅の窓を見廻はすと、四番目の窓から露西亞が能く見えるのです、『やア露西亞が見えらア、僕の國の人逵は一体何をしてるだらう、お米の出來はどんなだ

らう』と有繁百姓の子だけに野の方へ眼をつけますと、澤山の羊が遊んで居ますから、なほ能く見ると、それが皆自分の家の羊ですから、何疋居るか、一つ勘定してやらうと思つて居ますと、其處へ一個の車を馬に曳かせて來るものがありました、其人は屹度自分のお父さんに違ひないと見て居る中に、漸々近くなつて來ましたが、お父さんではない、バシル、クドラショフと云ふ竊盜で、今其羊を見ると、突然捕へて車の上へ積まふとするのです。

『アラ、お父さん！　竊盜が羊を竊んで行くよ！

思はず大きな聲を出しますと、不思議な事には



家の寢床に寢て居たお父さんも羊を竊まれる夢を見て居ましたが。

『どれ一つ見廻つてやらう！

と起き上つて、馬へ乗るが早いか、野の方へ來て見ると、今一人の竊盜が羊を竊んで行く所ですから、お父さんは周章て丶村

の人達を呼ぶ中に、窃盗はもうお父さんに飛びついて擲き倒し、そして捕虜にしてしまいました。仕方がわりませんから、太郎はまた町の方を見ますと、靴舗の教母が其處に居て、もう一人の商人と婚禮してしまつて居るのですが、



丁度小兒の見た時は、教母は寝臺の上によく寝て居て、お婿さんばかりのこのこ起き初めて、女主の方へ行かうとして居るのですそこで太郎はまた大きな聲をして、

『お起きなさい、お起きなさい、貴嬢のお婿さんは今惡い事をしやうとして居ます

と云ひますと、其聲で教母は飛起きて、急いで寝衣を着かへて廊下へ出て見ますと、お婿さんはもう女主人と何か話をして居ますから、散々女主人に毒づいた擧句、頬邊を擲りつけてお婿さんを取返して行つてしまいま

したからまア安心と、今度は眞個のお母さんを見ますと、お母さんも矢張り能く寢て居ましたが、一人の窃盗が家の中へ忍び込んで、今にも金箱を抉ぢ開けやうとして居るのです、するとお母さんは其音で眼を覺して、「盗賊！」と一聲云ふ間もない、賊は大きな斧を振り上げて、忽ちお母さんを斬り殺してしまひましたから、太郎はもう默つて見て居る理由に行きません、突然側にあつた杖を投りますと、丁度窃盗の頭の所へ當つたから堪りません、手足を慄はして死んでしまひました。

（五）

丁度太郎が其窃盗を殺してしまふと、四隅の壁は元の通り密着いてしまひまして、太郎はまたちやんと元の所に立つて居ましたすると後の戸が開いて、其處へ敎父が這入つて來ましたが、恐ろしい權幕で太郎を玉座から引下し、

「お前は惡い事をした、第一俺が這入つてはならんと云つて置いた此室へ無斷つて這入つた、第二に禁制の戸を開けた、第三にお前は神聖な此玉座を冒し、剰え杖まで翫弄にした、お前は世界中の惡い事に輪をかけた惡い事をしたのだから、もう一時間もあのまんまで此處に居れば、半分人間の籍を失す所なのだ！」

かう云つて、今度はまた太郎を玉座へ坐らせ杖を握らせますと、四隅の壁はまたぱらりと離れて、種々なものが見え出しました、で、敎父の云ひますには、

「そら能く見ろ、お前の阿父さんはあんなものになつて居るのだ！見ると自分のお父さんは、窃盗に捕へられてから、其窃盗に種々な惡事を敎はつて、大惡人となつて居るのです。

『能く見ろ、お前の阿父さんはあんな悪人になつて、現在自分の家へ忍び込んで、二頭の馬を盗み、今度は自分の家へ火をかけるのだ！

と教父が云つて居る中に、阿父の家は烟の中へ隠れてしまひましたが、教父はもう其後を見せません、そして無理に他の方を見させました。

『まア見るがいゝ、お前の教母は一年前に御亭主から見放されて居る、教母の御亭主と云ふのは他の女に迷つて財産を喪してしまふし、女主は身体を損へばお金も消つてしまつて、もう自棄になつてお酒ばかり飲んで居るのだ、

かう云ひながらまた能く見せもしないで、直ぐに太郎の家の方を見せました、見ると阿母さんは自分の罪を後悔して、泣いて居ましたが、

『あゝ何故こんなに苦しいだらう、彼の時盗賊に殺されて居れば、こんな苦しみはしないでも好いのだらうに！

と頻りに愚痴を翻して居ました、教父はまた其の後を見せないで、今度は盗賊の方を見せました盗賊は二人の典獄に囚虜となつて居るです。

『どうだ、あの盗賊は九人まで人を殺めて居る、だからいつかは其罪を償つて潔白な人間にならうと思つて居たのだが、お前は彼奴を殺してしまつた、彼奴がやつた罪を悉皆負擔つてしまつたのだ、だからお前は、お前の罪を其人の前で懺悔しなければいけないお前は森の開拓いた所で雌熊が始めに樫の木頭で子熊を殺し、次にまた木頭に飛ついて若い雄熊を殺し三度目には自分で自分を殺したのを見たらうが、お前も丁度それと同じ事をして居るのだ、俺はお前にこれから三年の暇をやるから、世界中歩行いて身に負擔つた盗

賊の罪を雪ぐがいゝ、しかし萬一雪げない時には、いつそ盜賊になつてしまへ！
と云ひますので、太郎は心細くなりまして、
小『ぢやア什麼したら其罪が雪げるでせう！
敎『そりやアなにさ、お前が世界中にしたゞけの罪をやらなくなればそれでいゝのよそれで盜賊の罪も雪げてしまへば、お前の罪も消えると云ふものさ
『僕が世界中にしただけの罪をどうしたらしないで居られるやうになるでせう
と更めて聞きますと、
『何でもいゝから、お前は俺の家を出たら太陽のお上りになる方へ眞直行けばいゝ、さうすると人の居る野原へ自然に行くから其人にお前は何をして居るのだと聞いて見て、今度は自分の知つて居る事を悉皆話し、さて話してしまつたらヅン〳〵先きへ行きながら、お前が眼で見たものを氣を注けるのだ、すると四日目にお前はある森へ出る、其森には一つの洞窟があつて、洞窟の中にはまた一人のお爺さんが居るから、其の爺さんに悉皆自分の事を話して見るがいゝ、さうすればお爺さんはお前の爲めになる事を訓へてくれる、その時がお前の罪の滅びる時なのだ。
と云ひながら敎父は太郎を門の外へ連出して其儘居なくなつてしまひました。

（次號完結）



山（竹柏園歌會兼題）

久我建通

山よりも高き齡にくらぶれば
裾野の岡と見ゆる富士の嶺

松浦詮

君が代は寶と云へる富士の根に
新高山も立ち添ひてけり

津輕承昭

隅田川川上遠く見ゆるかな
朝日輝く小つく波の山

松平乘承

小鹽山昔忍ばゆ今も尙
御幸をまつの色を常磐に

水野忠敬

進み行く世に習ひてや數多く
人こそのぼれ富士の芝山

諏訪忠元

塵ひちの積し山を思へとも
尙仰がるゝ不二の神山

前田利定

天つ風長へす吹く劍か峯の
岩角に刻りぬ吾が名君が名

千家尊福

松杉のとはに榮ゆる山こそは
國の柱といふべかりけれ

小杉榲邨

冬木して骨もあらはす瘦たれど
山は動かぬ甲斐ぞありける

木村正辞

あつさかは花も紅葉の白雪の
冬をとはなる富士の芝山

弘田吸江

足柄の峯のかや原霜枯れて
吹風寒し殘る枯れ穗に

小出粲

餘にも開け／＼て君が代は
浮世遁れぬ奥山もなし

上眞行

ますらをの奥つきいづこ杉暗く
こみち嶮しき城あとの山

小原頼之

雲霧に見る／＼かはる山の色
日毎／＼に新しき如

矢田晋園

海の外に我國人の誇りつゝ
　語るは不二の高根なるらむ　　又原保行

緑なるみ空に高く眞白きは
　蓋せぬ不二の雪にぞありける　　波多野英一

鷄の聲こそ響け雪深き
　此山奥も人は住みけり　　山崎勝吉

二里の山越えて降れば里人の
　詞のなまり又かはりけり　　石橋千亦

山は見えぬ山は見えぬと舟人の
　蘇りては諸聲にのる　　横山碩

卑人は山にいほりす都人は
　おのが庵に山をし築く　　關屋祐之

雲の上に煙の冠頂きて
　神代ながらの霧島の山　　澤弌

打靡く霞の隙に見ゆるかな



　こや久方の天の香具山　　高木敬二

今年行かむ今年行かむと思つゝ
　未だ登り得ず不二の神山　　佐藤宗次

韓山の彼の山蔭に植ゑ置し
　若木の櫻今も咲くらむ　　土田道一

仰ぎ見れば朝日の光きらめきて
　まばゆくもあるか不二の神山　　篠崎正

聊の破におぢて山に入るに
　餘りやさしき心ならずや　　久米巻平

高根には鹿の音響き麓には
　砧音する山中の里　　渡邊顯

瘦し背を朝夕雲に撫られて
　幾千代經たる山にかあるらむ　　水野清名

見る人の心にやあらむ富士筑波
　長閑など見ゆる年の始は

湯川貫一

美しきめ山富士姫ありと聞て
語りよりたる新高男山　神山源之

高千穗の山の高根の朝霞
神わもりけむ古おもほゆ　佐々木慶三

瀧もあり松も生たり家もあり
子等がすさびの箱庭の山　龜山新一

尋ね來し都の友をとめおきて
今日も一日を山狩くらす　竹栄俊泰

草鞋の紐結びをへてふり仰ぐ
菅の小笠に山おろし吹く　鶴峰了豐

とんねるに入にし滊車の煙見えて
長閉にかすむ春の山かな　芳賀雲鵬

家路急ぐ荷車の音遠く消て
朧にくるゝ里のむら山　大野泰

天雲に聳だつ山も塵ひぢの
積りてなれる物にやあるらむ　新井千濤

山の端を色どる雲の美しく
くしくうつれりはるな水海　早川喜隆

吹荒し吹雪はやみて荒山の
有月の月に猨のなく　新井鎭城

西へ十里草津に出る山道を
誰ゆくらむか山駕籠の行く　樋口寅二部

漂ひし雲の一村消え失せて
手にとる如し小筑波の山　遠藤千濱

高き山美しき山と品はあれど
猶けだかきカリバルの山　笠原幡多雄

故鄕の山の夢見しあしたより
又ふるさとの君を戀つる　松寺久雄

海の十日船の上に飽きて見えそめし

名もしらぬ山もなつかしき哉　　菅野直澄

嬉くも迎の駒を急がせて
山路こえ行く故里の道　　高石眞廣

近づきし山を眺めて少女子は
よべの船酔わすれ顔なる　　伊藤梅子

遠山を見つゝ樂む我庵の
いと〳〵ゆかしき春は來にけり　　西升子

通れ住む人やなからむ足引の
山の奥までひらけ行く世は　　板倉止子

昨日まで雪白妙に見えしかど
今朝はかすめる富士の神山　　板倉藤子

新しき年の初日をほゝゑみて
向ふるかごと見ゆる遠山　　大澤圖子

美しき峰のあやとも見ゆるかな
朝日に匂ふ遠の山の端

九重の都の空の西東
目につくば山不二の大山　　安藤齋子

不二の山二荒筑波根赤城山
はるなの高峰淺間神山　　駒井圖子

雪ふゝく三里の山路夕べこえて
やみたる乳母に逢にゆくかな　　橋本重子

海つらに打向ひたる紀路の山
木の芽匂へり春ならずして　　奥村岸子

力山を拔と云ひけむ古ことも
誠となれる世にこそありけれ　　大村八代子

人皆の得まくほりする位山
思へば低し人の心の　　大竹いせ子

景色なく花も紅葉もなけれども
なつかしきかな故さとの山　　佐々木信綱

雑録

伯林娘氣質（上）

巖谷小波

全躰伯林と云ふ所は、男より女の方が多いので、人口二百萬の中、六分までは女だと云ふ事である。して見ると、假にこの男と女が、皆巧く配合した所で、十人の中二人は賣れ殘つて、生涯寡で暮らさなければ成らない。婦人として伯林に生まれるのも、亦不運の次第では無いか。

さればその結婚の困難な事は、元より云ふ迄も無く。うつかりして居ると、直き賣れ殘つてしまふと云ふ有様だから、随つて婦人たるものは、豫じめその賣殘りの場合に備へる爲め、腕に藝を覺へておくか、身に産を備へておかなければ成らぬ。

元より婦人として、よし運よく好い縁を見付けはやく一家の妻に成るとしても、腕に藝無く、身に産の無いものは、自づから輕んせられるのは、何處の國でも同じ事であるが、殊に西洋では、身に付いた産、所謂持參金なるものが、結婚の場合の最も大切な條件であるから、所詮伯林の婦人と云ふものは、決して遊んでは居られぬのである。

そこで伯林の娘達が、之に對して如何云ふ事をするか、今話したいのは即ち是だ。

尤も一概に娘と云つても、其中に階級があつて、上等社會、中等社會、及び下等社會と、その家柄、境遇に依つて、自づから覺悟のちがふのも、元より當然の事である。

中にも上等社會の娘は、何も自分で齷齪せずとも、親讓りの産があるから、例の持參金に心配は入らない。

隨つて腕に藝はなくとも、將た容貌が隨分見苦しくても、決して賣れ殘る氣は無いが、それすら嚴格な家庭では、唯だ遊ばして置く事はせず、一と通りの高等敎育の他に、繪畫と音樂は、必ず仕込ませておくのである。

次に中等社會に成ると、親讓りの財產が、決してアテに成らぬのみか、若し同胞でも多ければ、いよ〳〵それが覺束無いので、勢ひ自分で藝を覺え、それに依つて得る利益を、他日の持參金、乃至賣れ殘つた場合の、一生の食扶持に備へねば成らぬ。

さてその藝とは何を云ふか？、これには元より種々ある。或る者は語學を練習して、語學敎師となり、良家の子女、若くは新來の外國人などに、日々何時間かの稽古をしてやつて、相當の報酬を取るので。其相場が、一時間一麻から二麻、即ち我が國の、五十錢以上一圓迄である。

或者は音樂を硏究して、ピヤノヤバイオリンの出稽古に、應分の謝儀を取つて居る。

或者は看護學を修めて、產婆や看護婦に成り、或者は師範學校を卒業して、敎師に成つたり保姆に傭はれたりする。其他新聞社に入つて校正をやつたり、會社に通つて書記を務めたり、又辯護士の事務所で、筆耕を手傳ひなどして、それ〳〵月給を貰つて居る。

是等は即ち中等社會の娘の有樣で、この種の娘は、皆相當の敎育を受けて居るから、隨つてその職もやゝ高尙であるが、さて下等社會の娘に至ると、なか〳〵さう云ふ事は出來ない。

そこで此種の連中は、多く店の賣子に成る。元來西洋の商家では、その店で客に應對する者に、日本の樣な番頭や小僧を使はず、多くは年頃の女を用ゐて居る。又勸工場の如きも其通りで、その方面に非常な需用があるから、敎育の餘り無い、下等社會の娘達は、まづ之に身を委ねて、若干かの手當を受て居るのである。

で、其身已に職を持ち、多少の收入を得ると成ると、もう親の脛はかぢらず、身のまはり頭の物など、皆自分で辨ずるばかりか、住居も食物も獨立で、たとひ親

の家に同居しても、その下宿料は支拂はねばならぬ、イヤ、中等社會の中でも、娘が職を得る樣に成ると、全然親がゝりと云ふ事をせず、食料丈は拂ふとか、乃至衣服を自分で拵へるとか云ふ風に、半分獨立するのもあるらしい。

又賣子に出ない娘は、工塲の職工に成つたり、停車塲の切符賣に成つたり、又は銀行會社へ行つて、タイプライタアを叩いたりして居る、倫敦などでは、郵便局の事務員が女であつたが、これは伯林にはまだ無かつた、又下婢と成つて臺所を働くのは、伯林の娘のあまり好まぬ事で、それには矢はり地方の者が使はれて居る。

かう云ふ風に、中等以下の娘は、皆それ〲に職を求めて、一定の時日の間に、持參金、若くは食扶持の用意をするのであるが、その中に機會があつて、然るべき婿の候補者を見付けたとしても、決して直ぐに結婚はせず、即ち約婚、獨乙語でフエルローベンの間に、矢張り自分も精出して稼いで、一簾の產の出來る迄、双方辛抱して居るのである。

若し又貯れ殘つた塲合には、その出來た財產を資本にして、又然る可き渡世の策を立てるのであるが、其間に何か魔が指すと、忽ち墮落の谷底に陥らぬとも限らぬ。

況んや下等社會の娘の中には、品性の劣つた者もあり、意志の强からぬ者もあり、姓來の怠者もあれば、又薄命の者もあつて、前に陳べた樣な職業に、從ふ事を好まなかつたり、又それにあり付き兼ねる事がある。然らばさう云ふ連中は、何に依つて自分の產を作らうとするか。是が又問題である。然しそれは此の誌上に、寧ろ憚るべき問題であるから、今委しくは說くを好まぬ。

只、この伯林二百萬の人口の中、その一割は醜業婦で、その他に尚無鑑札の化粧の者が、斷えず市中に徘徊して居ると云ふ。――これ丈の話で澤山であらう。

伯林の女學校（婦人教育會に於ける巖谷小波君の演說）

所異れば品かはるとて私が獨逸の女學校を見ました時も隨分面白いと思ふことがありましたあちらの女生徒達は休み時間に廊下や庭園を連れ立つて步きながらかくしからパンや果物をとり出してムシヤ〳〵と食つて居ります教師の控所に行つて見ても一人が私と話して居る間に側には一向平氣で何やら食て居る人があるお孃樣や先生の立食は感服しないと思ひましたから試に校長に尋ねて見ると便利なことだから構はんではありませんかと云ふそれは生徒達は大概朝飯を食べずに學校に參りますのでお晝も日本の樣にドンが打つたらすぐ始めるといふのではない大概一時か一時半になりますからその間に日本で申しますなら握飯とか海苔まきとかいふ樣なものをひまのある時食べるので便利と云へば成程便利でありますが日本人の目には一寸不思議に見ゆるので御座いますまた學校に何かかはつた事のあつた時後で無禮講の遊びをするその時生徒の自分に作つて大勢の前で讀み上げる文章や歌の中に某先生は年寄でいつでもカラーを曲げてゐるとか何先生は雨降りに傘なしで步いて居たとか云ふやうなことが澤山あるので罪もないことですが生徒が先生の惡口を云ふとは我々には矢張り變に思はれる併しあちらの人は一向この文章に笑ひ興じて惡る口を云はれた當の先生は頭をかゝへてこれも笑つて居るやうな有樣ですそれかと思ふと一度教場に入つて仕舞ふと生徒の先生にビリ〳〵するとドンナ命令でも自由自在に行はれますもしも聞かない生徒があると先生は打てもよいと云ふことになつて居るそれは嚴重なもので御座いますモー一つ日本のお孃樣方と異つて居ますのは日本の女學校では參觀人でもありますと御存じのことは成丈おいひにならない向ふは反對で御座ます私供のやうな外國人でも見に參りますと殊に喜んで我がちに椅子などを持つて來てくれますソシテ教師が或問を出しますとうろ覺への連中までも競ふて手をあげる中にはドーかして自分にあてゝ貰ひたいと云ふので以て拇指中指をキツ〳〵ツと鳴し乍高く手を上る人なども御座ます

斯く西洋の男兒も女兒も日本のむすこ、娘に比べて遲くまで子供らしく無邪氣なるは彼の人々の六七十にしてなほ元氣旺盛なる所以でせう。

織物の話

根岸里人

(一)はしがき

織物と謂へば何人も先づ雄畧天皇を聯想さるゝでありませう、併せて工女漢織、呉織の上を偲ばるゝでありませう、帝は剛毅に在して殺伐苛酷のことを好ませましたが、それは所謂白玉の一微瑕でありまして、此の一面



は、否、その全面は御心を政治にお止めになり、服装を改め、新たに衣冠の制を正されました聖天子で在せられます。御即位後六年、后妃に詔がありまして躬ら桑を植ゑ、蠶を紬ぐことを奨められましたし、十四年に御使を呉の國へ御遣しになりまして前記の工女や縫衣工兄媛、弟媛などを召されまして織物及び縫裁のことを勧めたまひ、十六年には桑を植ゆるに適して國々縣々へ勅を下されまして蠶桑の業を奨勵遊ばされましたりして、只

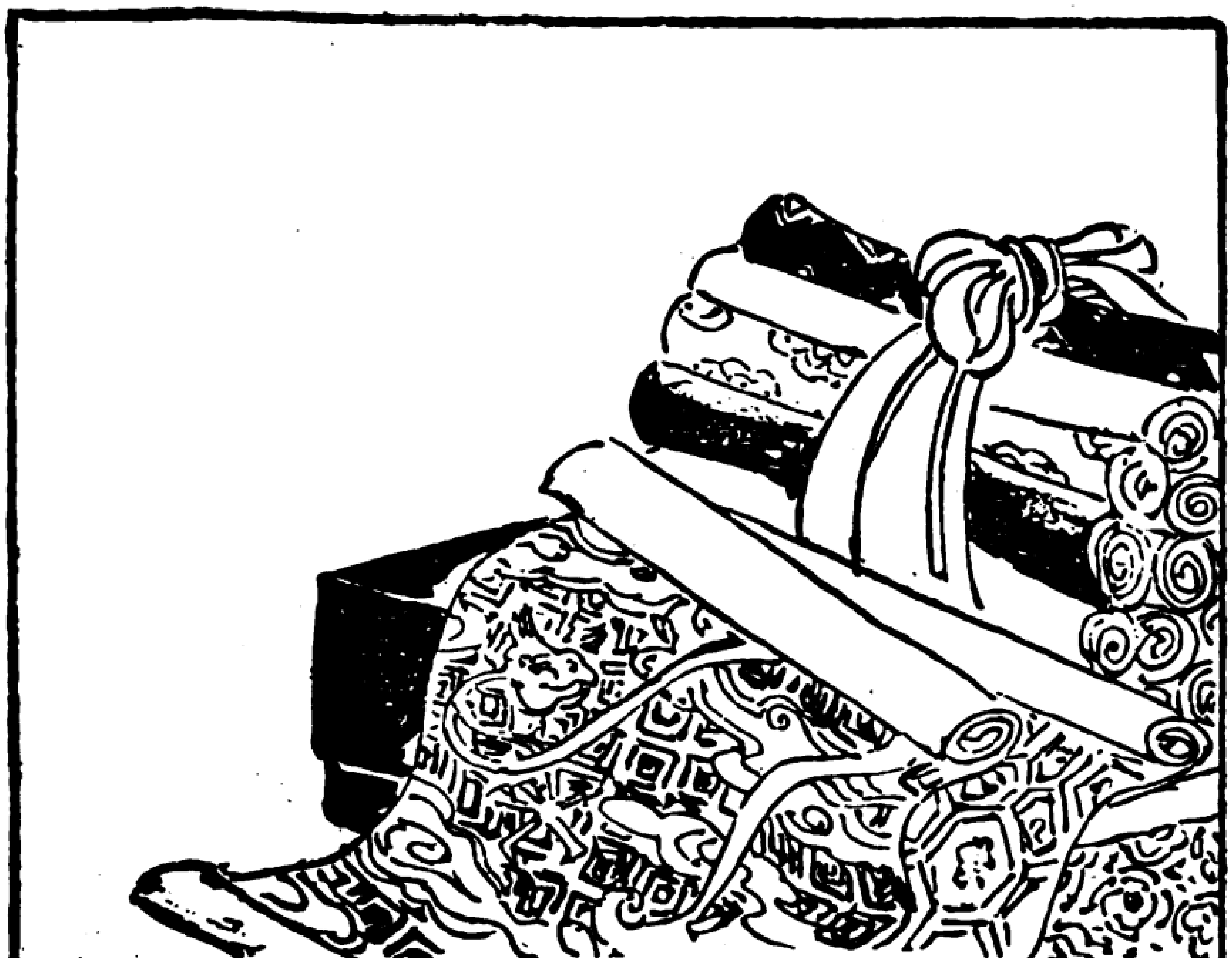
管民の爲めに大御心を注がれました。

上御一人の御心が爾く產業の上に傾きましたので、錦や綾や美しく尊い織物が盛んに產出して參りまして、從來は凡べて外國――其頃は何れの織物も支那から輸入されたのでムりました――から需要を仰いでゐたのでムりましたが、内地で充分間に合ふ樣になりました。

情けないことには、我邦は摸倣の邦ですが、又一方では他國のを執てそれを日本化する技量は長所でありましたから、皇室の御奬勵が動機となりまして僅かの間に發達することが出來たのでムりませう。

で、織物を稱して今日に至りましても呉服と申して居りますのは、如上の歴史がありますからで、是等の事は歴史を御研究になりました方の、何れも御存知で入らつしやいませう。

我々が今日身に纒ひまして、暑寒を防ぎ、それ〲品位を保つて居られますのも、其後幾多の變遷はありませうが、皆此時、此帝の英明に在して大御心を產業に注がれました賜物と感謝せねばなりますまい。今、本誌で諸孃へ織物の事をお話し申すに先だち、聊か前提といたして、是等のことを一寸と申添へて置きます。



（二）錦

錦は織物の中で最も尊い品で俗に立派なものを形容して錦の樣だと申します位、爾く高貴なものでムりますから、

第十番に撰びました。

で、錦は糸を青、黄、赤、紫等のいろ〳〵の色に染めて、華章を織つたもの丶稱へで、その起源はと申しますると、雄略天皇の七年、帝は前にも申した通り盛に織業を御興しにならといふ思召があらせられましたから、斯道に堪能の者を召されました、時に、西漢の才伎歡因知利と申す者がありまして、上奏致しますのには、織工の上手なのは臣より勝れた者が澤山ありまして、其中で韓國(今の朝鮮)のものが最も勝れて居りますとの事でしたから、帝は早速吉備上道臣弟君等を御使として歡因知利を副使と致して韓國へ御遣しになりますと、其年に歡因知利は百濟の職工定安那といふのを引率て歸朝しましたが、正使の吉備上道臣は不幸にして彼土で卒りました。さて又、帝は再び詔をお下しになりまして定安那に地を河内國桃原に賜ひまして錦を織らせなさいました、後年上古の錦とも河内の錦とも申しますのはこの事で厶ります。其後此桃原の地は錦部郡錦部郷と稱へられ、本邦に於て韓様の錦を織り出す様になりましたのは實に此時が始めなので、これを韓錦又唐錦と申すので厶ります。これと同時に本邦に止まりました定安那は姓を錦部連と賜り、その祖となりまして、錦部氏は後世に至る迄是れを業とし世襲として居りました。

降つて大化元年、孝德天皇が御位に即れました頃は織工の業も大に進歩いたしましたが、雄略帝が斯業を御奬勵遊ばしましてから百八十三年に相成ます。斯う年を經ましたので織出します所の錦もなか〳〵精巧となり、華章も頗る精密となりまして大伯仙錦、小伯仙錦、車形錦、菱形錦、麒麟錦などの數種、又此間に織出されましたが、其品の如何に立派なものであつたかは支那人が是れを稱して人間業ではない、神業だ、神錦だと申しましたのでも知ることが出來様かと思ひます。此帝もまた雄略帝の如くに大に改革なされ織部司といふ役を新たに設けられまして、錦部連が監督してゐる錦の織工を輦轂の下に召されました。

天武天皇の朝十年、新羅の使者か來朝しまして霞錦

といふのを献じました。帝は乃で錦部氏に仰せ付られましてこれを織られせなされました。是れ本邦で霞錦を織出す始めでムります。此錦は諸物の縁を取るに用ゐるものです。

なほ降つて大寶元年、文武天皇令を制し、織部司が監督の下に在る職工の戸額を定め、錦及び綾を製する家を百十戸と爲されました。慶雲元年、帝又工人に仰せられて窠子錦を織らしめましたが是れ此錦の起源で伊勢太神宮の幣物としたのです。

元明天皇の和銅四年に、帝　詔をお下しになつて織部司の挑文師を伊勢、尾張、三河、駿河、伊豆、近江越前、丹波、但馬、因幡、伯耆、出雲、播磨、備前、備中、備後、安藝、紀伊、阿波、伊豫、讃岐の二十一ヶ國へ分ち遣されまして錦を織ることを敎授させました。是等の諸國は當時好き糸を製したからで、又錦を織ることが國内に傳はりましたもまた此時が始めなのです。同五年に前の二十一ヶ國へ令を下し、錦を織つて上らせました、是れ昨年遣された挑文師に依つて如何に其法を習練したかをお試みになつたのでありませう。同六年、大和國に鞍作磨心といふものがありました。此者織工としては不思議の天才で、其業凡を抜き、殊に錦を織るのが名人でありました。帝、これを聞召され、藝術を尊ぶの大御心から磨心の子孫には永く雜戸を免され且姓を柏原村主と賜りました。

延暦十三年、桓武天皇、都を山城の平安城（乃ら今の西京）にお遷しになり、是れと同時に織部司を皇城の艮位にお建てなされた、地は東大宮の東、土御門大路の北に當つて、實に東西四十丈、南北二十丈の面積である、此地に織手町を置いて錦を織らせなされた。けれども時移れば品變ずでして始めは精巧を極めてゐた錦も、同二十一年には諸國で製する所のもの漸次麁惡に流れて來ましたので、帝、大いに大御心を惱され、勅を下して麁惡の錦を製するを禁じ、務めて精巧なのを織出す樣になされました。延喜五年には伊勢、尾張越前、丹波、丹後、播磨、安藝、紀伊、阿波、讃岐、伊豫の十一ヶ國に制を下して、其製する所の錦を以て

調貢に替えさせました。(是れより先、錦を以て調貢とした例はありましたが、何れも史册に傳はつてゐませんので何れの國ですか明らかに分りませぬ。)が、その錦は兩面織でありました。元明天皇の和銅四年、桃文師を諸國に分遣して錦を織る事を傳へましてから、此年まで〻恰是二百年になります、此間に麁惡に流れた時代もありましたけれど、織業の進歩は實に驚くべき程で、優に外國品を壓倒する價値があつたのです。それから承平、天慶の世となりまして、將門其他の戰亂がありましたので、大いに斯業に影響を與へ、錦の製作漸く衰へ遂に其調貢も他の品を以て代へる樣になり肝要の織部司もまた織出すことが尠くなりましたのは、一盛一衰で仕方がないとは申せ、誠に殘念なことでムります。是れより前、支那の商人輩が久しく錦を輸入してゐましたが、日本で出來るのが頗る良好であつたので、其數はたいしたこともなかつたのです。所が、我邦の業衰へたりと知つて利に敏い彼等ですから盛に輸入して來ましたので、朝廷を始め貴顯縉紳等、今迄蓄へてゐた本邦人の手に成つた錦を取出して是を貿易しました。ですから支那人の齎らして來た錦を唐錦といひ、從來の錦乃ち韓錦を大和錦といふに至りました。

それから正和四年、朝廷、近江國の日吉神社の御造營を爲さるに就て、諸國の名匠をお召になりますると此時、錦を織る工人として敎願、廣繼、宗淸などいふ兩面織の妙手が召に應じて集りました。が、これは恰是燈火の滅せんとする時、一時パッと明るくなると同じで、衰退に向つた錦織の業は是等の人々に依つて支へて行くことも出來ませんで、此後は遂に錦を織る業を廢するに至りましたのです。併し、朝廷で伊勢太神宮や其他の神々へ是れを供することのあります時は、故事に從つて織工に仰せて特にこれを織らせたこともあり、又は支那の錦を用ゐたりしました。

斯くて世は星移り、物變り、俗に戰國と申す天正年間、其處にも此處にも鬨の聲、矢叫びの音が絕間なく血腥い風が吹き荒んで居りまする中を、馴れては後世

想像する程でなかつたと見えまして、商人は不相變取引を遣つて居りましたので、支那の織工が和泉の堺へ參りました時に、明樣の錦を織る業を傳へました。堺の機業家は此術を傳はり盛んにそれを織出しましたが、是れ我邦に明樣の錦を織り出した始めなのです。其後京都の西陣に機合が出來まして此錦をドシドシ織出しましたが、元は堺から傳はつたのですけれど、西陣で製するものは堺のより精巧を極めましたので、果ては本場のを凌ぐ程の美事なのが出來る樣になりました、加之ならず別に糸錦と申すものを織出し、更に又俵屋某といふものが蜀紅錦を手本としまして唐織錦といふのを織出しました、これは伶人の着る裝束や猿樂の衣裳、婦人の臥具などに多く用ゐましたもので、なか〳〵美しうムります。なほ又同じ西陣の織工の手で毛宇留といふものを織出しました、これは元を其頃交通してゐました南蠻の製法に取り、錦の織方から割出しましたもので、金線を用ふるのを金毛宇留といひ、銀線を用ゐますのを銀毛宇留といひ、金銀の何れをも用ゐないのを普通毛宇留といひます。今もなほ大禮服や軍人などの服に用ふる金銀の飾りは乃ち是れなのです。西陣は爾く我が織物業に對して貢獻する所があつたので、其後數百年を經まして今日でも依然として機業界の大立物となつて、精巧なる美術品——服飾品といふよりも、其品からいつても價格からいつても無論美術品です——を織出しますのは、偶然ではありまい。

天正以後幾多の變遷を經まして文政初年、上野の桐生の織工が絶えて久しい糸錦を織出しましたが、是れは京都の法を傳へたのです。それから天保年間にこれも桐生の人で、石田九野といふものが、樣々に苦心の末、華章を製する法を發明したので、織工が其法を機上に用ゐまして糸錦を織り、撚糸を以て華文としました、これを與利伊止織といひ、又阿都伊多織とも云ます。それからといふものは桐生の機業は年と共に大層進運に向ひ、十數年を經ますと其織出す所の數、昔日に數倍する樣になり、有繫の京都も爲めに販路を蠶食

されることゝなりました。安政五年、德川幕府は從來の鎖國主義を捨て、海外諸國と貿易することを許し、且横濱を開いて貿易場としましたので、海外の商人が木綿糸を持つて來ました、桐生の織工がこれを得ました與利伊止織の緯として織ましたが、習熟すると僅かに一兩年で、木綿糸を以て製しましても蠶糸で織つた如く、一寸とは見分ることが出來ません程巧みになりました。

尊いものとなつて居ります錦は、その始め全國重なる土地で產せぬ地はありませんでしたが、斯く樣々な變遷を經まして今では只僅かに京都、桐生の工人等に依つて、其餘勢を保つて居るのでムります。



(三)綾

綾は阿夜、阿奈といふと同じで、何れも其衣の美しいのを稱へました辭です。元は外國——支那若くは朝鮮——の織物を模したもので、地には屹度文があり、其種類もなか〳〵多く名稱もまた復雜てゐますから、一寸と算へたてることが出來ません。京都で出來るのを一番上等とし、それに次では和泉の堺、出羽の秋田、米澤、續いては越後などでもこれを織出します。

(四)金襴

是れも前項の明樣錦と同樣で、天正年間に支那の織工が泉州堺に參りました時、其織法を傳へましたもので、此時が我邦で金襴を織出しました始めでムいますそれから降つて天和年間『錦』の條でお話し致しました通り、京都の機業が年と共に發達致しまして、其製作する所の金襴は地といひ質と申し、舶來品——支那製——に比較しましても些の劣る所がありませぬものですから、竟に年々輸入を防ぐ樣に

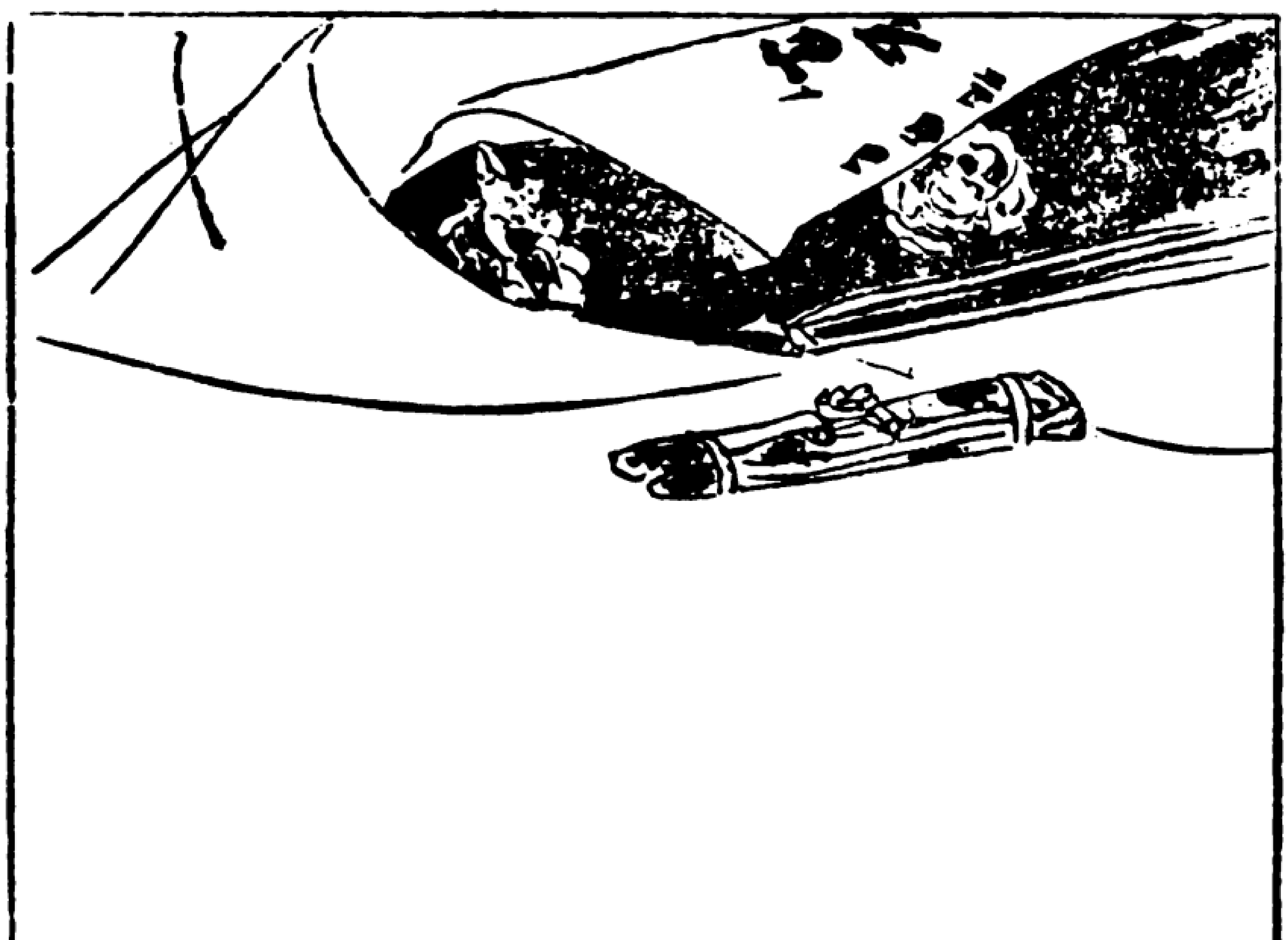
なりまして果ては支那製は寸錦をも見ぬ程になりました。ですから、利に敏い商人輩は京都で産する金襴を目して舶來品と詐り諸國へ賣附て暴利を貪つて居りました。今昔ともに商人根性の卑しさは同様であつたと見える。

併しそれも唯僅かの間でして、年一年、益す其業の精巧を極むる様になり、本邦品は遙かに支那を凌駕する程になりましては舶來品の名も何時までも光を放つて居ることが出來ませんで、奸商の悪手段も長く功果を收むることがありませんでした。のみならず金襴は今日に至りますまで、獨り京都の機業家で製するばかりでムります。

(五)唐織

唐織は、京都西陣の機業家俵屋が始めて機に上せましたもので、前項の『金襴』と同じく錦の類でムります。緯に平金糸を加へて模様を織出しましたもので、其平金糸に代へますのに、銀糸を以てしましたのを銀襴と申します。是れも亦京都に限つて産出しますので。

(六)緞子



最初は支那から舶來しましたもので、同様天正年間支那の織工に依つて泉州堺町の我工人に傳へられましたのが、我邦の織物の中に、『緞子』と

いふ名稱を加へます始めなのです。所が、何かにつけて器用であつた京都の職工は、支那製のものに倣つて、さまぐ\に苦心と經驗とを重ねました末、七糸緞子といふのを織出しました。けれども堺の品から比べて見ますと遙かに見劣りがします。何しろ一方(堺)は本元たる支那の織工に手を取つて敎えて貰ひましたので、一方(京都)は如何に器用だとは申しながら、品物を見樣見眞似に拵へましたのですから、出來上りの上に著しい巧拙がムいますのは元より當然でムいます。

が、根が物事に執拗く且魂氣のよい京都人士でムいますから、一度や二度の失敗位で氣をくさらす樣なことはありません。工夫に工夫を加へ、熱心に熱心を重ねまして只管成効せんことを希圖して居りましたが、怖しいのは人の一心と時の力です、長い歳月、腦醬の有丈を絞りに絞つて彼樣でもない、斯うでもないと試みた結果、出來上りましたのは實に最う何處へ出しても欠點のない、立派な緞子でした。是れを堺のと比べて見ますると優に數等の上に出て居りますので、從來は堺のが本場、本場と持て囃されて居りましたのが恰是月の前の星の樣に光りを奪はれまして、緞子と申せば京のでなくてはならぬ樣になり、從つて其產額も堺を壓倒するに至りました。

啻に緞子ばかりではムいません。絹、紬、同じ品でもそれぐ\等級のありまするもので、此緞子にもまた上緞子、次緞子、七糸緞子などとあります。七糸緞子とは華章を織出しましたもので、其最上のものを上七糸次を次七糸と申します。で、京都では斯う成功しましたに拘はらず益々研究を怠りませんでしたから、年月を經ますに從ひ華章も愈よ緻密になつて參り、婦人の帶として好評を博する樣になりました。

それから元文三年、京都の織工が上野の桐生に參りまして緞子を製する術を傳へましたが、是れ東國で緞子を織るの始めです。其後天保年間、桐生の人石田九野(錦の條にも出づ)が華章を製することを發明しましたから工人等緞子を織りますのに便宜を得まして、其緻密なることは京都に讓りませんでした。が、七糸緞子

ばかりは織りませんけれど、二重緞子、三重緞子などはなか〳〵巧みに出來てゐたソーで、其産額も京都に幾倍しましたか知れぬ程でした。又、安政五年に至りましては更に木綿緞子といふのを工夫して織出しましたので、桐生の地は有數の機業塲と目さるゝ樣になり殊に其新案の木綿緞子は近年に至りまして愈よ精巧を極めて參つたといふことです。

（七）繻子

繻子は緞子と同じく最初は支那から來ましたもので、天正年間に京都の織工が其法を摸して織出したものです。それから幾多の歳月を經ました天保の或年、桐生の織工が京都のそれに倣つて始めて繻子を織出しましたが、其品は遠く京都に及びませんでした。ですけれど桐生はまた桐生でいろ〳〵の改良を施しましたので京都、桐生相並んで今日に及びました。

（八）綸子

事實は多く單調のもので、『天正年間、京都の織工支那の製に倣つて何々を織る』と何れも是れも皆同じもので、金襴も左樣でした、緞子、繻子、此綸子もまた左樣なので、讀者諸孃は



餘りに單調なのにお飽きになりましたらうが、暫く事實を事實として同じ事を繰返すことをお許し下さい。で、此綸子も同じ年（天正年間）同じ方法を以て始めて我邦で織出されましたが、最初は其品も餘り美事ではなく、唯支那に摸倣したといふに過ぎない程でしたけれど、前項にも申上げた通り時は勢力なので、竟には支那に勝つたものを織出す樣になり、紋綸子や、檜垣綸子（其華章は多く檜垣に菊花を雜へましたもので）などを織出す樣になりました、京都が爾く盛大に

なりましたので元文三年、是れを他へ傳へ樣と試むることゝなりまして、先づ最初に桐生の織工に綸子の織方を傳授致しました。で、桐生でも紋綸子を織出すことも出來、以て今日の盛を見るのであります。

(九)紗

紗は羅と大體が同じ品質でありまして、其織法は新羅から傳來しましたもので、仲哀天皇の九年に、新羅貢物として始めて羅を献りました、我邦の織工がこれに傚ひまして羅及び紗を作りましたのが始めなのです。けれどもまだ機業術の發達しません上古時代のことでムいましたから、見るべき程のものは出來なかつたでせう。

それから幾多の星霜を重ねました天正年間、支那の織工が堺に參りまして明樣の紗、紋紗、金紋紗などを織り、併せて其術を傳へ、それから又京都の機業が盛大となるに連れまして、堺に傳はりました此法が更に京都に傳はり、羅や紗や金紋紗などを織出しましたがその竹屋町(京都)で織ましたものを俗に竹屋町金紋紗と申しまして、織法は凡べて明樣のに傚ひましたのです。

それから元和元年には支那の織工がまた堺に參りまして、金紗を織る法を傳へました。金紗は金糸で横柳條を織出すものですが、錢屋某、松屋某などが此法を傳習しまして作りましたから世俗これを錢屋織、松屋織と申して居りました。

紗の一種で紗綾といふものがあります。元は京都の織工に依つて織出されましたもので、元文三年に京都の織工が桐生へ來て此法を傳へましたので、これを紗綾絹と申して居りました。其後、桐生の織工は絹を織ることを廢めまして只管此紗綾絹ばかり織ることを努めてゐました。

(未完)

糸は細まか爲めに切れず其弱くして且つ紡績法の拙劣なるが爲めに切る

妻の名文

糸南泉

今は昔南京の商人言佩といふ者が、萬里の波を越えて、我が長崎へ、所謂九層倍の利を得んために、數多の漢藥を齎した、其頃我が國人が支那を非常に尊んだことは、今の西洋心醉よりも甚しかつた、であるから佩は豫想外の利益を得て、嬉しいまぎれに、一夜路傍の柳を折つた、ところが其の婀娜とした姿に迷つたものか、願くは爲輕羅着細腰 といふやうな調子、一しよに來た朋友も屡諫むるけれど、與彼雙棲共一身 なと〻言つてゐる、友は已む無く本國へ知らせて遣つた、そこで佩の妻から、左記のやうな書翰が來たのである。

荷錢貼水 堤柳鳴蜩遙想
相公與時多福貴體康泰爲慰 玆啓者 自
別以來倏經四月有餘家中
翁姑兩大人玉體全安無庸掛念也至干朝夕侍
奉左右妾雖不才自當留心其一切諸
務妾自料理再兒輩攻書雖有先生教誨然
妾亦當日夕勉勵大女亦安吉女婿今春聞
得第進士是爲萬幸但妾近聞
相公在崎迷戀煙花使妾亦爲未信因
相公在家凡事皆有斟酌況飄洋渡海莫不
爲名爲利豈反如是耶妾在家獨挑寒
燈操持拮据亦莫不爲家業計乞
相公切不可貪戀閑花以失素守千祈三思
而行則家門幸甚 妾書中言語倘有犯冒
猶祈寛宥爲感餘再叙專此須請
近安

言佩相公清鑒　　賤妾淑貞歛衽拜

六月初七日沖

（字解）荷錢貼水——蓮の葉が水に浮ぶこと○堤柳鳴蜩——堤の柳に鳴く蜩がゐるといふこと○相公——御元様といふやうなこと○玆啓者——陳ればといふに同じ○無庸掛念——氣に掛るには及ばぬぞといふこと○料理

‖取計ひなり○再‖倘又といふ樣なものである○勉勵‖勉め勵ますをいふ○大女‖姉娘をいふ○女婿‖婿なり○聞‖役所即ち試驗場を指す○進士‖現今我が國の文官登用試驗に及第したる人に同じ○煙花‖遊女なり○斟酌‖取計ひなり○飄洋‖灘にさまよふこと○寒燈‖心細い燈火といふ意味○操持拮据‖色々營なみ辛苦をしてゐるといふこと○貪戀閒花‖いたづらなる花香に迷ふこと○素守‖昔の契なり○爲歡‖忝く思ふといふやうな意。

(和譯)蓮の葉か水に浮び、堤の柳に蜩が鳴く時節と相成候處、御元樣には、時と共に多福、貴體御安康ならんと思ひ慰め申候、陳れば、御別れ申候てより、はや四ケ月あまりを過ぎ候へ共、内方御兩親樣御平安に入らせられ候間、御心配被下間敷候、朝夕御側まはりの御奉公は、私不才には候へども、隨分心をつくし、一切の用向手づから取計らひ居申候、倘又子共には學問勉強致させ居り候、師匠の敎訓も有レ之候へ共、私も亦日夜に勵まし居申候、姉娘も達者に御座候、聟殿も當春進士及第致され候て、誠に萬幸と存候、偖此頃承り候へば、御元樣には遊女に迷ひむつび玉ひ候よし、されど、私實事とは思ひやらず候、御元樣宿元にては、萬の事に御指引おはしまし、殊に灘にさまよひ海を渡り玉ひしは、名の爲利の爲に候へば、などか左樣なることのおはしまし候はんや、又私は宿元にて獨心細き燈火をかゝげ、凡てのいとなみに辛苦致し候も、すぎはひの計りごとに候へば、御元樣必ず徒らなる色に迷ひ、昔の契りを御違ひなされまじく候、能々御辨へ下され候へば、家門の幸ひと存じ候、文中の言葉、もしや御氣に背き候事御座候とも、御ゆるし玉はり候へば、忝けなく存候、餘は又後便に申上べく候、先は便りに任せ、御容體相伺ひ申候。

言佩この原文を讀み終るや否や、醉眼忽ち萬斛の泉を迸らし、思はず後悔の唇を嚙んで、その日早々出發の準備に取りかゝつたとのことである、先には親愛なる友が數十度の諫めも更に用ゐなかつた者が、今や一片の手紙に感動して、中庭堪ヘタリ愛スルニ一樹ノ梅と悟

つたのは、抑何れの點にあらうか、是に於て余はかう思ふ、言葉づかひの如何にも優しくて、それで滿腔の誠が、文章の上に溢れてゐるからであると。

今更に、この文の批評をして見るに、少しも嫉妬らしい處が無くて、自然の情が表はれてゐる、其の氣候の遠方でも、何となく故國が思ひ出さるゝ上に、月日の經つたことが分る、その兩親の無事を報ずるにも、己れが專心孝道を盡してゐることを述べて、家庭の樂しきを思はしめ、次に最愛の子供、次に外に在る姉娘から、其の婿の吉事を通じて、益々夫を歡ばしめ、次にそろ〲と本文に入る處が仲々並々の筆では無い、その主意を言ふにも、夫が家に在つたときの事から、遙々海を越えて行く目的の如何を序して注意を與へ、却つて又己が家にある樣に及ぼし、再び主意を表はして、昔の契を言ふ處などは、女らしくて、何となく讀む者に、一種の感を與ふ、況んや其の夫たるものに於ては萬斛の涙を流したのは、露無理ならぬことである、さうして其の文字も仲々面白い、始めには烟花と言ひ、後には閑花と變へ、飄洋渡海といふ大なる形容詞の次に、挑二寒燈一といふ小さな狀態を寫すなど、餘程文學に達した女であつたらうと云ふことが、尙ほ左記の事柄で確めらるゝのである。

其の翌年、言佩は藥品の外陶器物などを輸入し、その妻をも携へて、再び我が國に來り、商業の傍文學を講習した、妻淑貞は、我が國の歌など覺えて到る處に其の美想を洩した、今その一二を擧ぐれば、

鏡山

くもりなき御代の鏡の山なれば
　君が千歳の影も見へけり

伏見の里にて

たれもかもさひしきものか草枕
　ひとりふしみの夜半の月影

不二の山を

人とはゝいかゝこたえんことの葉も
　及はぬふしの雪の白妙

など、外國人としては、實に感心なものである、され

と「見へ」「こたえん」のへとえとの假名間違ひがある、これは我が國の學者でさへ、往々有り勝のことであるから、無理もないことゝ言はねばなるまい。其の後言佩は、數多の利益を得、夫婦目出度歸國したとは、實に羨ましい話である。

右は或る人が持つてゐた寫本の中に有つたのを請うて其の一つを書いたのである、夫婦は誠といふものが肝要であることは、申すに及ばず、學問即ち教育の忽にすべからざることも、まづはかくの如し。

吹雪のはなし

雪片子

去年の春は例の有名な雪中行軍といつて青森の第八師團兵の一部が雪の中を行軍して途中吹雪に閉ぢ籠められて道を失ひ非常な難義をして可惜生命までも喪ふた者がありました、その御話は皆樣よくごぞんじでせうがこの恐ろしい吹雪、即ち東北の名物たる吹雪に就て當時記者が彼の地のお醫者に就て實際の有樣を聞きました、御話の中に極めて趣味ある雪の實驗談がありましたから、此に少しく述べて雪に珍らしい暖國の方々の御一粲に供しませう。

◎南部地方の寒氣は青森よりも又一層上で雪も中々ひどいけれども私の職業が醫者であるから隨分深夜にも叩き起され大雪を冒して出診せねばならぬ事がある其時は必ず一瓶の酒と握飯、餅、燐寸の類は欠した事はないくらい雪中に苦しんでもこの用意あれば必ず半日なり一日なりを保長らへる事が出來る雪中を歩く時には甚だしく寒さを感じる跡が必ず空腹になつて劇しく疲勞を感じ其次が睡氣が兆して雪の上でも何でもかまはずに轉りと寢たくなるこの時が運命の分る丶處でその藥としては酒と握飯に越すものはない腹を空しさへせねば滅多に死ぬものではないこれから次に身体に着けるもので萬一の時の役に立つものは大きな饅頭笠であるこれは一つには吹雪を防ぎ雪中に埋まつた時には笠のまはりだけ雪に隙間を生ずるから暫くの間は呼吸

を續ける事が出來て其内に助けられた例は能くある事だ。

◎それから又曾て獵に出た時大吹雪に遭て雪に埋まつた事があつたが矢張笠を冠つて居た爲息が留る事もなかつたが段々空氣がなくなつて息せはしくなつた時其處は村近くであつた爲犬に嗅出されたのが仕合せで吠えて同村に驅け戻り又自分の頭の上を驅廻つては吠えるので村人も只事ではないと氣が付たと見えて二三人犬に尾て埋つてるのを發見され危く助けられた事がある其時笠の德を深く感じたのである雪に埋つて死ぬのは吹雪に吹き埋られるのは滅多にない多くは足跡を踏違へて深い處にヅプ〳〵とめり込む時である其時焦燥つて手でも突かうものなら手も入つてしまひふわ〳〵した中に埋るのだから捉つて起返る便のものがない人に見出される事でもなければ見す〳〵埋め盡されるのでこの際見付けて助けやうとする者も餘程注意せぬと自分も一緒に落込で同じ運命に遭ねばならぬ丁度溺死者を救はうとして獅噛み付かれ泳ぐ自由を失ふて溺るゝのと同様其者に力一杯捉まられるので思はず自分も●●●のめり込で動けなくなる。

◎されば此際にはまづ埋つた人の身邊から雪を踏堅めて置き胸の邊まで掘て置て引出すのである凍え切た揚句に急に火にあたるのは甚だ危險である曾てある山中で吹雪に遭た旅人が凍えた上に炭木屋を見付け出しそこから二三俵の炭を引摺り出して一時に火を起しあたつてゐたがつひに五人とも火を取圍だなり死んでゐた實例もある凍え人を介抱するは注意しなければならぬ

◎いくら雪國でも一丈何尺と云ふ雪が一時に降りつむのではありません十一月の中旬頃より降る雪が消え殘り〳〵寒中にでもなると前の雪が全く消え樣ともせぬ中に次のが積ると云ふ風に四月の中頃までは全然雪の世界でありますので大雪の朝など高い木も附近の農家も殘らず埋れて仕舞いました白皚々の野原をば巳むを得ぬ旅人などがどうして途をも違へずに行くのかと申しますと前日までの雪の上には行人の足跡の附いて居て道筋丈が固まつて居りますゆゑ匍匐しては兩の手

で新たに降つた雪の下を探ぐり探つてその足跡を見づけては進むので暫く歩いてまた軟い所に出るとまた匐匐して探してはとう〱人里に出るのです此時に困難なのは前日に馬でも通つて居りますと目標の堅い道が散々に壊はされてありますゆゑ彼方か此方かと探し廻つてとう〱知れぬ事があります。

◎斯う云ふ時に多分此方であらうなどゝの輕卒に思ひ定めて一歩でも方向を違えた日には夫こそお仕舞です行けば行くほど間違つた方角に進む計でありますゆゑ雪道に慣れた人は試に聲を上げて大に呼んで見るのです斯ういふ時には大抵向ふから此方に向つて進んで居る人もまた道を失して弱つて居ると云ふ事もあるので十に一つはオーイ〱と向ふから應ずる事もあるのです互ひ〱に聲を便つて寄つて行くと吹雪の中に懐かしい旅人同士がヒヨックリ顔を合はす事などありますと。

◎慣れた沈着いた人などは吹雪の折など自分の家ならモ一五六間の所まで來た樣に思つても見えない時や道のわからぬ時は聲を揚げるので家族は主人とも心附かずに助けに行つて驚く事もありますと。

◎積雪の中を押し分けて行くのでなしに普通の雪道でも非常に疲れて息苦しい者でして大層空腹になるのです夫が嵩じて參りますと二歩三歩を歩いてはボクリボクリと轉るので實に腹の立つ事があります此時火には有附かれぬでも食物を取りますとまたズン〱と歩けるさうです。

故横井玉子女史

去月四日に歿られし、前の女子美術學校舍監横井玉子女史は誠に當代得易からざるの婦人にして、其の清く秀でたる生涯の事歷は、後進女子の龜鑑なれば、未だ其の人物の賢たり彥たり、其の面目の方たり圓たるをも知らざる者の爲に、そが小傳を紹介せん。

女史は熊本支藩の家老兼砲術師範役たりし原尹胤の次女にして、安政元年九月十二日を以て江戸築地鐵砲洲

に生る、明治五年二月小楠先生の養子横井時治氏に嫁し玉へり、良人時治氏は間も無く我邦最初の洋行者として米國に渡航す、歸朝して後職を元老院に奉せられしが、明治九年病を得て不歸の客と成り玉ふ、于時女史二十一歳、夫妻家居の和樂を共にしたるの日は實に數へる程にて不幸寡婦となられ、横井家の美夫人といはれし才色双美の身を以て、斷乎再婚の勸誘を斥け、肅乎として貞操を持する爾來二十有八年、其の後半をば專ら女子教育の事に委ね玉ひぬ、去る三十三年九月胃癌を患ひ大學病院に入りし時、既に餘命の幾も無きを知るものから、女子學院を辭し、年來の宿志たりし女子美術學校の創設を企畫する事とは成りぬ、設立の事成るや病を押して舍監兼幹事となり、殆と一身を犧牲に供して校務にいそしみ玉ひぬ、昨冬十二月再び病を發し、東洋内科醫院に入院せられしが、病勢革まるに及んで友人佐藤進氏夫妻、己が順天堂病院に迎へ取りて、百方治術を盡し手當至らざる無かりしが遂に其効無く、一月四日午后七時十分、數多の知友の好意に圍繞せられつゝ、從容として永眠せられぬ、乃ち女子美術學校より校葬を以て仝月八日、天王寺畔故横井時治氏の墓側に葬りまつりたり、享年四十有八嗚呼哀しい哉

女史の學問と素養

女史は多能多伎の天才を有したる人なれば、其の修得せし學科も頗る多樣にして、禮式、裁縫、割烹、繪畫等の女藝各般一として修めざるもの無く、加ふるに琴茶の湯、生花等の素養さへ有り、今左に女史が履歴中より學業に關するものを摘記して、そが修學の跡を示さんか、

明治四年　熊本英和女學校に於て和洋普通學を修む
仝　年　米人ミセズ、ゼンスに就きて西洋裁縫及び西洋料理法を修む
仝　年　宮内卯吉氏に就きて日本裁縫を修む
仝　年　井上長次郎氏に就きて日本料理法を修む
仝十二年　ミセス、ワデルに就きて洋服裁縫を學ぶ

仝十四年　小笠原家の高等女禮式を卒業す
仝十七年　吉島瀧音氏より琴の免許を受く
仝十九年　東京府師範學校に於て高等裁縫及び高等女禮式の試験を受けて及第す
仝　年　本多錦吉郎氏に就きて西洋畫を學び後淺井忠氏に就きて水彩畫及び油畫を學ぶ
仝廿二年　古流好靜庵氏に就き茶道及び生花を學ぶ
仝卅二年　白馬會に入り洋畫を研究す

以上の如く女史は諸種の藝術を修めて何れも之に堪能なりけり、女史は學問を消化したる人なれば一度學ぶや直ちに之を日常實地に活用したり、中にも禮式に就ては當代有數の聞えありて、禮法に關する遺稿多し、令甥大野洒竹氏之を編纂して江湖に頒つといふ、料理の如きも其の方則又は献立に泥まず、巧に之を家庭朝夕の料に應用して常に新工風を出だされたり、故に客の訪ふあれば乃ち自己發明の調味を勸め、食卓を圍んで談笑するを何よりの樂みとせられたり、女史平生人に言つて曰く「何事にても心を籠めて行へば出來ないものは有りません、今の人は兎角意志が弱くて困ります」と嗚呼世の生地無き青年男女よ、鑑みざる可からず。



女史の敎育と事業

女史は其の生涯を一意專心女子敎育に委ね、身を忘れ己を捨てゝ青年男女の誘導に努められ、遂に是が犧牲と成つて我身の花を萎ますするに至りしなるが、其の始めて敎鞭を執られしは、明治十八年築地明石町海岸女

學校に入て禮法敎授を擔任せられし時なり、次いで芝區柄小學校にて禮式裁縫を敎授し、仝年十月築地新榮女學校事務監督となり、兼ねて禮式及裁縫の敎科を受持つ、二十二年同校及び櫻井女學校の合併して女子學院となるや引續き同學院の寄宿舍監督となり、禮式、割烹、裁縫、洋畵の諸科を敎え玉ふ、三十三年大患に罹りて大學病院に入院されし時は自から餘命の長からざるを知られし故にや寄宿舍監督を辭し、女子美術學校新設の宿望を果さんとて、病中大躰の計畫を定められ、平癒退院さるゝや人の靜養を勸むるにも拘はらず、病餘蒲柳の資を以て、藤田文藏氏及び其他の有志と謀り、東奔西馳、夜を日に次いで創業に盡瘁せらる、是が爲め翌三十四年四月本郷弓町に女子美術學校なるもの、設立を見るに至りぬ、思ふに是れ女史が畢生の希望を實にしたるものなり、女史は敎育の人たる言ふ迄も無けれど、其の才は寧ろ事業の人なり、經營慘澹學校創立の困難と鬪ひ、紛紜を排して遂に其成功を致せり、設立後は病を押して舍監となり、幹事となり、總ての繁務を一身に負ふて之を處理し、或は外交の衝に當り、或は職員間を調停し、熱誠事を執つて倦ます、重き病の身に在るも知らざる者の如かりし、長逝前數日食事も既に咽喉を通らず、總て滋養浣腸のみなれば顔容憔悴、躬らも亦た再び起つ能はざるを承知されし程の事とて、言語も自由ならざるに拘はらず、看護婦を床側に招び集へ、其の職責の重且つ大なる所以を説き明し、諄々數十言の訓戒を年少の女子達に手向けられしと、是ぞ女史が此世になせし敎育事業の最後にてありける、誠に女史の如きは女學界の明星と謂つ可くその敎育上に放ちたる光輝は長へに滅せざる可し。

女史の人物と性行

女史は資性純良、眞摯、容儀亦た温雅、己を捨てゝ人の爲に盡し、自ら處する謙和、毫も世の所謂女權家の風なし、かゝれば上下各種の方面に知己を有し、總ての人に愛敬され又た景慕されたり、中にも青年男女の如きは常に女史の身邊に集り來りて、女史より慈愛の

訓言を受けたりと云ふ、又た武士の家に生れたる女史の事とて、克く武士道を守り、加ふるに現代の新智識を以て世に處す、英才に非んば能くすべきにあらざるなり。女史は又た若くより基督教を信せられたるが、さりとて世の婦女子の如く迷信に陷るに非ず、博愛の敎義を解して慈仁の美德を其の身に修め、而して常に神の爲に眞面目に事に從ふを得るといふ信念をば有せられたり、『何をしても私達は正義の爲めに働いて居るから少しも憂ふる所は無い』とは女史が始終口にせられたるの語なりき、親戚知己の病床を見舞ふ者あれば則ち曰く『實に私程幸福な者は有りませぬ、恰度蜂や蝶が萎み掛つた花に來て、露をかけて往く樣に來る人も來る人も、私に惠の露をかけて往つて下さる、其に死後の事も夫々きまりが付いて居るのですから、總ての方面から來る報告は私の耳に勝鬨の注進であります、私は既う何も心配する事はありません、死んでも生きても神の命ずる儘ですから、這麼安心な事は無い切望世間の婦人達にも此の安心といふことをば爲せて遣りたい、死んでからの樂園は兎も角、私はもう是が樂園であると思ひます』と、蓋し此の安心あればこそ臨終の當時も悠優として死を見る歸するが如くなりしなれ、夫れ女史は逝けるも女子美術學校及び女子學院は代々に榮えて、無限の恩に浴すもの多かるべし、殊に女史が畢生の心血を灑ぎたる女子美術學校は年と共に校運の盛を致さんとす、女史亦た其の所を得て逝く、女史自身には些の悔ある可からずとはいへ、我邦敎育界にその人乏しき折、斯の如き良師を喪ひしは惜みても餘りあり、此の人にして壽長からんには幾ばかり芽出度き効績も尙は多かる可きに、今は即ち其の人なし、嗚呼。（勝間生）



家庭日記

四谷荒木町廿七上田内　櫻子

▲一日――新春の旭ぎら〳〵さるし昇りて天氣晴朗榮へ行御代の餅なしめしぬ朝五時一同起床六時ごろ例によりて主人よりはじめ目出度さそなくみ此御代を祝ひ納めて後主人は拜賀の爲出らる今日第一の來賓者は麻布の實父來狀の一着は在獨乙の弟なりし母上よほどの御滿足折よくも一日は來りしものかなさ皆々いふ何事もにき〳〵しくて此日はくれぬ來禮者八十三人來狀二十一本

▲二日――今日も晴快定時起床樂しく食事の折しも老女の艱事一日早朝安產母子共に健全の報來りたり同女のよろこびさもあるべし今日第一には園田氏見へ午後梅本氏御兄妹にて來宅ありし夕食後母上子供等も共にすごろくに興つきせず克巳大得意なりし禮者九十人

▲三日――今日も晴天母上誠に近年珍らしき新年かなさ朝よりいく度ものたまふ朝の營み例のごさく八時半より親き内への禮の爲主人外出二時頃國元より上京の學生方多人數にて來宅弟なども仲間にて歌かるたの大戰爭は始まりぬ、例によりて休戰の折御馳走を出す、三時頃主人歸宅後間も無く實家の妹年始の爲來宅、五時頃歸宅せしめたり、禮者七十八人來狀昨日さ合して四十三本

▲四日――朝例によりて常の如し居間に挿したる寒椿の花の開きしを長男の克巳見出したしたりさて非常なる自慢話しに一同笑を催したり。九時より主人在京の同縣人の新年會に出席の爲出宅せらる、弟は學友さ共に品川へ軍艦拜觀の爲赴く、二時頃主人歸宅、春野氏御夫婦にて來宅せらる親しき仲さて共に夕飯を戴きにきはしかりき。七時頃御歸宅別に記事なし

▲五日――天氣よし今日老女を銚子なる姪の内につかはす、他の者にも午後より暇を與へたり。沼津の親類より蜜柑澤山に送り越されたり

▲六日――朝の内少し曇り、降雪ありたりしも後晴たり、母上には妹さ共に沼津なる親類に赴かる、弟及克己新橋迄御送りす。午後一時過老女歸宅、主人の大好物の鮨を土產にさて

▲七日――発片付例によりて女共部屋掃除及洗濯をなす、自分は老女さ共に後一週間分の獻立を作る、主人公用にて橫濱に迄赴かる、沼澤より母上の親書來る、同地は溫度四十五度位にて梅花は既に盛りさ御老体の旅行なればさて皆々氣づかいまゐらせたるさころ一同安神四時ごろ主人歸宅克巳にさて軍艦のおもちやを給はる

評曰　簡潔にして要を得たり（優等）

伊勢國宇治中之切町　河原芳子

▲一月十一日―晴―午前十時母上妹さ共に內宮に參拜四丈殿にて奉奠せらるゝ私御饌を拜し夫れより五丈殿にて舞樂を拜見す振鉾春庭花納曾利の曲例によりて嚴かに且つめでたし。

午後東京の叔父君來る三年振の面會、小說の材料に有りさうなりしお土產には日本女禮式大全さ舶來のバイオリンさ。夜に入りてバイオリンを奏し未熟なる曲を叔父君に笑はれぬ。

來る一週間の獻菜を左に。

月　朝みそ汁、玉子、香の物　晝干物、香の物、　夜芋、佃煮、香の物

火　朝みそ汁、香の物

晝あげ、大根、香物、　夜魚、ひたし、香物、　水　朝みそ汁、玉子、香物、　晝松葉豆腐、午蒡、香物、　夜肉、うまに、香物、　木　朝みそ汁、香物、　晝にんじん白あへ、花鰹海苔、香物、　夜風呂吹大根、芋汁、香物、　金　朝みそ汁、玉子、香物、　晝れんこん、いも、香物、　夜はぜこぶ巻、ひたし、香物、　土　朝みそ汁、香物、　晝海苔巻玉子、うま煮、香物　夜豆腐汁、白魚、香物、　日　朝みそ汁、玉子、香物、　晝きんさん、酢の物、時雨煮、香物、　夜肉、つゆ、香物、

家計範記を記載す。

▲十二日―晴―歌友山本光江君より來狀 明十三日臨時歌會を催す可く兼題は山家の新年と室梅とゝ薄墨にて、縫ひかけの袴を仕上げて隣家へ送る改良服を是非にと强られて詮方なく取寛りぬ。叔父君に所望されて晩餐の料理をなして薦めぬ庖丁のとり初めに理想の料理法を實行したりしに不甘味いものだらけと眉を顰め給はねが未だしもの幸運なりし。家計簿記を記載す

▲十三日―晴―母上と妹とは叔父君と同伴にて二見浦に赴く。祖母君の膝下にて敎科書事件などご噂しつゝ改良服の裁縫に余念なき折柄電報來る拔き見ればトシチサングヮイマタツと東京の叔母君より叔母君に宛てたる也我れは新學士の君來給ふかと胸轟きぬ。晩景より光江君を訪らひ歌會の用意すやかて會せられしは君子雪子玉枝子露江子の君などにていと興深う打ち語らひしか。東京博文館へ原稿發送信濃高木棠陽君へ贈物添狀發送。山田中村勇君より來狀。

▲十四日―曇―祖母君と共に新學士の君を停車場に迎へしが一昨年の夏避暑にさて二見浦に來られし時より逢はざりければ皆物珍らしき事のみなりき。夕日雪氣の雲にかくろひたる頃叔父君母上新學士の君妹など打ち連れて父上の墓に詣づ懷舊の情切に胸を衝きて人々無限の暗涙に沈みたりき。夜に入りて例のバイオリンを奏すれば新學士の君得意の尺八を弄し給ふ母上の一絃琴をと叔父君の申されしなれど老ひたればさて止み給ひぬ。

評　すべて場慣れたる書き方なり(優等)



大阪　仙田蒔子

△一月五日　昨年末より積りし雪の上に旭きらきらと輝き渡り眼もくるめくばかりなり。今日は祖母君の實家へ、祖母君母君弟の三人年賀に參らるゝに、さても善き日和なるよ、それ〳〵こしらへもとゝのひければ母君は我をよび給ひて、明日は早く歸るべければ萬事に心せよ、父君は温き食物を好まるゝに、させよ、かくせよなどれむごろにいひ付給ひて出立たる、雪のふみ付路ぞうりばきの御足元もかろけに、いづく迄でもと見送れば外套の赤裏風にひろがへらせつゝ振かへりて何やらん云ふ樣なる弟は前き、紺の頭巾に合羽姿の背丸き祖女君は次ぎ、薄色のお高祖に吾妻コートのしんがりは母君、いつぞや學校にて先生が親

が二人に子が二人三羽の雛を一羽づゝ携へ歸りしとの給ひし者へ物も言ひ出されてなかし。

早夕げの仕度せばやと立にかゝるを何すぞと父君は問ひ給ふ、夕げの事にと申せば、止せ止せお身は今宵加留多會に行く約束ならずや、煮豆もよし數の子も結構とおどけ給ふ、イエ私は又行きます程にといへばよしなき事な 一月五日は來年ならでは又なきぞ早く衣など着更ずやと何時になき父君の御心づくし、實に正月はよきものぞ、親はありがたき物ぞ。

隣家の御兄妹と共に光子君許行く例年の通り皆る人多し興つきれど十二時前家路につく、友人と門前に別れ内に入れば隣家の小父君の下駄ありまてはと靜に奥の部屋行けばはたして今宵烏の戰中、只今、遲なはりましてといひけるに小父君の居ながらにとび上り給ふ、左程迄驚かし參らせしは重々お氣の毒なれど、餘りの可笑さに物も得言で我はころげまわりぬ。

△一月六日　待ちに待ちたる人たち十一時前に歸らる、我にとて小母君より赤地に白く兎織出せるりボン贈りうれしともうれし

今日は七草摘む日なればとて我と母君はかひ〴〵しく身をかためて、父君。最早唐土の鳥が日本の土地へ渡らつた後なれば詮なき事よさけなし給を後に出は出たれど、此寒なればさていかにせんとさすがにためらひぬ。種々苦心の末辛くすゞ菜一本取れり、其冷さよ。

我はやさんさまないたの前にすりこぎもて天晴三百石の御用人然とかまへたる始、祖母君はほく〳〵笑ひ給ふ、やがて唐土の鳥が日本の土地へ日本の鳥か唐土の土地へ渡らぬ先に七草かたいでヤッほッほ 何とも知らで

評　滑稽的の筆おもしろし(優等)

康子

十一月七日　風立ちぬ。頭痛ければ机にむかひしのみ、短册入るゝ箱など、あつき紙にて作り古き絹の歌帯たるを張て、其上に手習を、

誰ためにかきしいはひの青の葉かむかしの筆のやさしかりけり

後木枯やみて、宵より雨となれり、

八日　女學世界きたる。桂月先生の家庭時言、例の如く襟を正しうして讀む、すみれ女史の才筆此號をもかざりぬ。春秋の職は替るも此君の筆の花は、何時も匂深し、あゝ才なるかな、

九日　夜、地震ふるう、霜いと深し、

十日　曉を出て見れば、雲ににたるは霜なり

月陰のさゆる夜中ともまごわせて今朝いと白き板ぶきの霜

十一日　殘る紅葉の山に瀧日さしたる、秋も春の眺なり、正午地震あり、夜板びさしもる月陰、あまりに清ければ立いでゝ

なく霜にたねの姿のあはれなり月かげ更し垣の白ぎく

十二日　つゞりし者に女ごゝろと題す、恐ろしくも苦敷もまた何と無禁しき者よ。衣ならぬなとす、夜英國史を讀む、人の來て我垣の裏に、夜半幽靈出ると敎へぬ。星飛で枯尾花風に慄々の聲ある此比の夜中、幽靈には誂むきの時節なり。蚊に騒ぐる蚊帳の夜、または虫の音に萩の露こほしつゝの初秋ならんか。老道の路辨に雄心ふりをこし、すき見なぜせんも、此頃の小夜風、よしや秋の女郎、我はみらかと別な佃の此山 里の霜の上に、おり立給ふときくも、ぬくき夜具の中出がたきを、まして物好に風邪引そへんもと、惜や見すに過ぬ、

十三日　顔あらふと水を器にされば、美くしき楓一葉浮びたり。昨日掛花いけになげ入しつるもどきの殘り、二枝三枝入おそ手洗鉢にも、軒端

の葉の森葉浮びてあり。松間にまざる山櫻、夕べの鐘のひゞき毎に、はら／＼と散たる、これはやさしき叢の中にあはれを示せる。傷ん方なく美く敷氣高き姫君の、と殊深く人に思はれつゝうせ給ひしににたり。紅葉は、才花いみちく一代の名媛さよばるゝきわの人、いたづらに高くのみ思ひ上りて戀人なうしなひ、海老茶の袴栄の散布、若やかに取つくろふ姿には、朝毎に見る鏡の、びんの毛の霜まさり癪筋ふゆるひたゐの皺笑にかくせたゞ心淋敷、冷たき／＼涙あるにもたさねん、黄に深紅にかば色に橙色に、こき薄き見る目はあざやかなれど、黒ずみて散除の力なさと眺つゝ何時か想にふける。淺々敷者のたさね心の底もはかられて。

十七日　昨日おさつひ、かはる事なく綿入物出來上りぬ。其晩冒もなく村雨のすぎたる、寒さいさうまさりぬ、すがきの許霜柱立て鉢の水などは初氷にもにでいと厚う、納屋の軒につりし千柴の屑、あさる鳥の背に日陰さす迄もさけやらず。もみぢはや衆なり耕捨ふ子等のたき捨る夕べの烟、昨日迄美くしさ一栄こぼるゝをも拾ひ上しが今灰と成つゝあるの烟なり。葬ふ可く歌ふの才無く、寫す可繪がくを知らす、唯想のみは人にもまして哀さは……、想は外にもみだれゆきてそゞろ

木の葉ちりあらわになりしみなし子の
　み墓や霜につめたかるらむ

評　審美的の筆つき御手にあらず（優等）



鎌井鶴登子

▲一月一日　曉告ぐる鷄の聲と共に。新らしき年は來りぬ。空少し曇りたれども。四方の景色何となく長閑なり。たて渡したる門の松竹。千歳の色濃やかに。日章の國旗。年の初風に打ち靡へり。明かに治まる御代の光を示すぞ先づめでたきに、我一家無事に年を迎へ皆打ち揃ひ笑みさかへて。屠蘇雜煮を祝ふぞめでたき限りにはありける。年賀に來る人絶間なく。外には少女子の羽子つく音いと賑はし。親しき友達へ年賀狀送り終日樂しく遊びたり。

△二日　晴れ。今日は事始めとて、朝の内書初めを皆打ちよりてなし。午後よりは琴の彈じ初めをなす。次ぎの妹と松竹梅、千鳥の曲をはじめ、めでたき物を種々選び奏づるに。彈じ馴れたる琴の音も今日は一入さね渡り。唱ふ聲さへ。よくいづるやう覺ゆるも年の始の心にや。幼き妹の花やかなる友仙の被布を着し。お下げに桃色のリボンかけて。丹頂の鶴など彈づる様いとらうたく。お雛様の如く見ねしは例のひいきめにや。終りの方には母君も交りませしかば。我風琴をかなど合奏せしに意外にもよく合ひて、嬉しさいはん方なし。妙なる琴の音亮々たる風琴の音歌うたふ聲、いづれめでたき年の始の聲ならぬはなく。たのしさ一室にみち／＼て日の暮るゝも知らでうち興へけり

△三日　晴れ昨夜より風烈し。花子の君より御題にちなめる繪端書にて年賀狀送らる。水垂の跡もいと匂ひやかに、めでたし夕方より朋友打ち集ひて歌がるたとる皆面白く勝負を爭ひ給時頃迄樂しく遊びたり。

△四日　晴れ。樂しき正月三ヶ日は。ゆめのまにすぎゆきて名殘惜しさいはん方なく。別に記すべき程の事なし

△五日　晴れ。夕方門外にて賑やかなる聲するに。見れば妹の友達と繩飛びなして遊び居るなりき。あはれ是迄。女の子の間には。絶ゑて見し事となき。かゝる活潑なる遊戲の流行するに。至りしは。女子体育の喧しき今日喜ぶべき事にや如何に。など思ひつゞけて。そゞろになかしく老人は此樣を見給ひ、あきれ居給ふも理りぞかし。

△六日　晴れ午はたちぬれど。今日より。さむき／＼寒の入りとて流石に寒氣烈しく。手洗鉢の水初めて氷り。ツラヽなど下りたり。少しく風邪にをかされしやう思ひしかば今夜は例より。早く床に入りしに。母君來まして夜着のかけやうが惡るし。寒からんといひ給ひつゝ直し給ふ。いつにかはらぬ暖かき母の情。身にしみて、忝けなさ限りなし。風のまに／＼聞ゑくる寒念佛の鐘の音いと寒げなりや。

評　敍事精細（佳作）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

攝津　田中瑜璉子

一月四日　晴天　鷄の聲に眼をさませば早や雨戸のすき間はまつかになつてゐる驚いて時計を見れば七時五分前。身仕度をすまして臺所へ行けば　溜桶の水はすつかり氷てすきまもる風の冷さ。

妹の髮をなでつけて居ると弟は。大きい姉ちやん僕が持てゐる物なにか當てゝ御覽なさいとにこ／＼笑ひながらはいつてくる見れば御本が三冊。女學世界に婦人界と閨秀文學。あまり澤山で何れをさきにとむまよひがする今讀みたいがお居間の掃除もできてゐないし。御飯も未だ。夜分の樂しみに此まゝにして置きませう。

食後は母樣と次の妹と三人長火鉢をかこんで朝來た雜誌のしなさだめ。それがすむと各居間へ引取て縫物に取りかゝる。幼い妹等は手鞠をついて遊んでゐるらしい。梅に鶯ほゝらほけきよとさーへづる。と謡てゐる聲が何となう長閑にきこゑて障子にうつる日陰迄が　未だ寒中ながら春の如な心地がする

夜は六時半から八時迄例によつて勉強。父上のお居間から碁の音がかすかにもれくるのみ誠に靜で。

時計の針が八時をさすと　さあこれからが樂しみと　皆が茶の間へ集り無邪氣な話に一日の勞を休める弟は軍歌を妹は唱歌を、それがすむと何かお話をとの事に自分は新聞にでゝゐた兎の話をしてやる。すると幼い妹はあたしも一つと云つて日曜學校でおそわつたダビデとゴライアスの談をよどみなくしてのける。あまり手ぎわよく話したので母樣から夏蜜柑を一つお賞に頂た。それをみた弟はさあほしくてたまらぬ。暫くすると坊やも話をすると云てすつくと立た。何を曰ふかと思て居るとランプの話で。爺さんが子供にやつたランプがまたほしくなつて御殿の近くを毎日ランプの破れ／＼といつてあるきました……そこ迄云たが忘れたと見ゑて次が出ぬ。どーしても思ひ出せぬかもぢ／＼といかにも、きまりわるそう。幼い妹等はそれからどーしたとしきりに尋ぬる。終にたまらなくなつたか　今迄の元氣はどこへやら　坊やは忘れたと云て母樣の乳房へくつゝいてしまつた。　皆は大笑ひ

も一皆お寐みとの母樣のお言葉がでたので。母樣お寐み。姉さまお寐み。異句同音。恰も時計は九時を報だ。今日の如く幸なる明日を迎へん事を神に祈り寐に着く

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

●坊の日記

土浦本町　山口須美子

正月元旦　ふさ眼をさますさ、朝日がイッパイに窓からさしこんでゐる。驚いてはれおきて、小さな雨戸あけた。最う勝手元では母様さ下女の話聲が聞ゆてゐる。雀のお饒舌も、松の梢や竹の上で引切無に歌を唄つてゐるから、僕もまけずに「年の始めの」つて聲ふるま大きな聲で唄ひ出すさ、おざろいたらしく下女が飛んできて、そして笑つて見てゐる。それにはかまはずずん〳〵茶の間へ行くさ、祖父様や祖母様や、父様母様がお膳を揃へて僕を待つてゐらしかつた。で急いで顔を洗つて行儀よく兩手をついて、お目出度うを言つたら、祖父様や祖母様に大層ほめられた。父様母様もにこ〳〵笑つてゐらつしやる、ほんさにうれしくつて仕様がないから、またおめでさうをやつた、するさ今度は笑はれて了つた。

お飯がすむさ、すく大好な海軍服さ海軍帽をかぶつて學校へ行つた、今日は先生も誰も〳〵嬉れしさうな顔をしてゐる。漸く式が終つたので急いで家へ歸つて來て見るさ、村田の叔母さんさ君ちやんさが來てゐる、君ちやんは大層おしやらくして袖の長い赤い房の被布を着てゐた。僕は少しきまりか悪るかつたがかまはず叔母さんの側へ行くさ、いろんなおみやを下すつたので、本當に〳〵うれしかつたの。するさ奥からいつもくる父様のお友達の長田さんが出て來て、いきなり僕を抱いて、高く上けたり下したりゆすぶつたりする、そしてお酒くさいつたらない、僕いやで〳〵しやうがないから、おろしてよッさ言つてもきいて下さらない、餘り失敬なさ思つて、力いつぱい長いお髭をひつぱつたら、驚いてすくおろして、顔をしかめて髯をなでてゐる、叔母さんさ母様はころげて笑つて、君ちやんも笑つてゐる、僕もおかしくなつて、萬歳ッさはやしてやつた、そして君ちやんさ手をひいて裏の田圃へ出た。お日様はいつぱい田の面にてり渡つて、むれ飛んでゐる鳥までがゆう〳〵さ羽をのばして、それ〳〵お年始廻りをするのであらう、左右に飛び走つてゐる。木の上では小鳥が歌ひ合したやうに、新年の歌を唄つてゐるので、君ちやんも僕も君ヶ代を歌ひながらあるいて行く其時向ふから隣のお作やお民がきた。昨日迄は田や畑に働いて眞黒になつてゐたのが、今日は赤い帶に赤い襷をしめて、鼻の上や額のあたりを白いものでぬつてゐる、そして大きな口をあいて、坊ちやんどこへ行きますだ、さ二人を眺めて笑ふので、何て失敬なさ睨め返し、坊ちやんぢやないぞ海軍大將だ、さいばつてやるさ、では大將様奥様さお二人でどこへ行きますだ、さまた笑ふ。僕はきまりか悪くなつてそつさ君ちやんはさ振り返るさ、いつか俯向て眞赤な顔。



本郷　しら菊

七日。晴、風少しありたれど暖し。朝、米國にいます兄上より年賀狀届く。いさも美事の繪はがきなり。新らしき髮さや云はまし。正午の頃、乳母の長子太郎來る、乳母が心盡くしの年玉物、嘹し、弟は遊び相手の太郎が來りし事さて大喜びなり。夜、皆々緣日に赴き、お汁粉を食ふ久しぶりにて旨かりし。

八日。晴、朝少し曇る、角力番附來る。父上は夢中になりて見給ふ、何が面白きにやと母上笑ひ玉ふ。太郎には乳母が好める物持たして歸す。父上の小袖縫ひ初む。夜に入りて初刊の女學世界をよむ。大町先生の婦女雜感、小波先生の東西の花と女、殊に面白く讀まれぬ、洋人の目に映ずる日本の田舍は、少し見當違ひの樣なり。皆讀み了らぬ中、久子の君來らる、お土產に新發明の湯たんぽを戴く。家内中にて歌加留多をもようす。とよむ聲、さゞめきの聲、笑ひの聲、いづれ新らしき年の聲ならぬはなし。

九日。晴、夕刻より曇。此朝常になく寢過す。四五日見ぬまに庭の早梅、一二分開く、去年より一週間程早き樣なり、一枝手折りて、筆たてに挿す、香り室に滿ちて、何となう心地長閑なり。母上正午より年始廻りにと、出て玉ふ。留主中、お居間を掃除し、床の花を更ゆ。四時頃お歸宅。早寢。

十日。爾后晴、日增しに寒し。此朝、俳句、三つを得

○歌終に御題に入らぬ恨哉
○むつき干す庭更へたり梅の花
○初雪の一とふしかくす木賊哉

玉（猫の名）、父上御秘藏の植木鉢を、棚より落して割る、御不興甚し。
十時頃より弟、腹痛とて床に入る。

十一日。晴、角力初日とて父上出ましぬ。函館なる文子の君より書狀屆く。文中「御地にては、梅の花も咲き初め候はんに、此方は春とは名のみにて、梅の花より一つ花びら多き花の眞盛りに候」と面白き事仰せらるゝ方かな。父小袖縫ひ終る。下女に年玉として帶を與ふ、喜ぶ事限りなし。夕刻父上歸宅、夜來客秋田氏鈴木氏。就寢十一時。

周防國玖珂郡由宇村　中谷鳥羽子

一月一日、新らしき年を迎へし嬉しさに朝とく起き。いざ今日こそはと窓押開き眺むれば。馨床しき軒端の梅に聲こそ立てね鶯の春知り顏なる優しき姿に面白き節も思ひやられていと愉快なる折しも。萬歲の鶴かめ祝ふ聲幽にとう〳〵と鼓の音の聞ゆるにいざゆあみせんとて勝手に出づれば。下婢は機嫌おめでたうと年始を述ろに妾もいと目出度さをいらへつゝ用事すまして立歸り髮かき撫でつ新年の事とて平服をあらためつゝ父母の居室を伺へば。早父上ば年始に知己を訪はんとて身仕度すでにとゝのはせ給ひぬ。母上は机にすがり年始狀をば認め居給ひぬ。やゞて一家團欒の朝げを終へし折しも玄關の彼方に郵便の聲勇ましく聞えしにいつこよりやと赴き見れば妾が親しき友よりの端書或は他鄕の兄上又は親族知己よりの數多の年始狀なり。他の端書をば母上に渡しながら妾は親しき友よりの年始狀を我居間にと持かへり。見れば友は恙なく春を迎へし由。いと嬉しさいはんかたなし尙も端書をよみ返せばいとも美しき水莖の跡。あゝ友はいつの間にかゝる美はしき筆蹟を得給ひしやと羨しさに餘念なく端書に眼をそゝぎ居たる折しも。姉さんは何をして居てよ今日は四方拜故わたし學校へ行きますよと。優しき聲に見返れば幼き妹は。いと嬉しげに着かねし衣服の袖ひろげながら玄關の彼方に走り出でぬ妾もあとにつき。行き見れば友たち四五名待合し居たるに妹の出づるや否いづれも手をとり合ひて學校に趣きぬ。

午後母上の髮を結びてしばらく新聞を見ぬ。

夜は妹をともなひて心へだてぬ友の元をおとづれぬ。かへり路叔母上に出逢ひ妹はたくさん蜜柑を貰ひぬ。

すみ子

▲五日（土曜日）空いさうらゝかなり。朝の程より叔母上訪せ給ひ、ひれもす語り暮す。幼き妹の丸々さ肥ねふさりしに打ほほゑみて、さながら盃に目鼻よさざれ給へば、例のまけぬ氣に、いゝわ顔も休さ一緒に長くなるわ、さよりざこころありげに言ひはなちしには、居あはす人は笑ひこけぬ。夕方細井の君よりの文あり。夜詠草かいつけてれぬ。

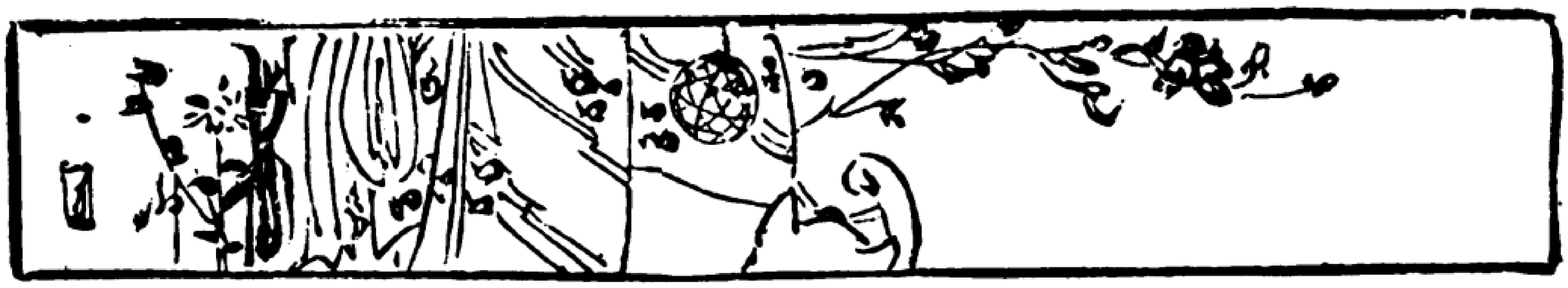
▲六日（日曜）風冷に身にしむに、ましてこの日は亡き父の命日にあたりぬれば、家の中いさゞしめりて妹の唱歌の聲もきこねず、可愛き手に鼓打ちならす樣殊勝なり。手後よりみ墓に詣でむものさ、鉢の椿二枝三枝手折てたづさへ妹さ共に連立ちぬ。鐘の音悠しうみ空に響きて、西の端かすかに茜させし頃おくつきにいたれば、いづこよりか妹の長き袖の上にはらはらさ落葉まひきぬ、やがて花たむけ水そゝく程に、それよりそれさありし昔の事ごも思ひ出されて、拭ひもあへず小草に落つる涙しげきなり地下にては如何なる音さ聞給ふらん。

歸宅せしは五時半なりき。

夜八時袖の露の文をつゞる、破窓をてらす火明し。

七日（月曜）五時に眼さむれば細雨しさしさ軒端に聞ゆ、頭常になくなやましけれざしいて起き出でぬ。午前十一時半妹の帶を縫ひ終り、午後露子の君に送るべき手紙を認む、一時半妹學校より歸り來りて今日の清書の賞などを示してほこり顔なるもをかし。

四時頃雨晴れて空うらゝなるまかゝ妹に誘はれて散歩を試む



飼犬のジョンの足許にまつはりてうるさきを手もて叱りつゝ仰ぎゆけば、空飛ぶ小鳥の影ものごかに、小草には露しげく、袖吹き返す風は怪しきまでに香高し。

花の宿は霞にそれさわかれども
　袖こそにほへ春の夕風

松の内

大阪市　なにがし

▲五日――晴れたり休みもけふ一さ日なればさて父上せの君さもに叔父上をおさづれたまはんさす、御羽織の襟直さんさ後に廻れば實にいづれさもわかぬまで似たまふよ弟の共にさむづかるを母上みかん三ツ四ツいだしこれをさのたまへばわすれしやうに笑顔して走り行くも愛らし昨日居きし女學世界を祖母君の膝の上に置き口繪など御覧に入れ御肩ひれり參らすれば太儀なり苦しからんにやみれなど仰せらるるにいよいよありがたく少しもさかすかに答ねひそかに顔の熱するを覺ねつ午後來狀など揃へ居れば障子の日影もいつしか消ねてあたりくらうなるに御歸りも近からんさ暖かきものこそさくりやに入れば奥に母上の座敷清むる音聞ね祖母君は寒からんさひさりごちたまひ爐によりて弟の捨てゆきし凧の糸のもつれを解き居らそ

▲六日――いさうらゝかにてやうやう春の心地ぞする父上せの君今日より御出勤ズボン下シャツなさ出し置けば又弟の來てくつ下をはきて見つ姉サンより大きいよさいふ母上の御ぐ

し揃へし序妹のも詫びやれば氣に入りしにや幾度となく撫でゝうれしげにましのぞく鏡の内に顔見合せて共にほゝ笑みつ客人のあるに弟の母上にねだりまつはればすかして門に出づ夕日赤き空に何の鳥か飛び行く影ほのかに見ゆる時背に聲ありて鳥々と高らかにうたふ森の下より出し暮色は漸くあたりを包まんとし窓より漏るゝ燈は次第に數を増すあゝなしや五日はくれけるよなど思ふ折しも聞ゆる靴の音に弟は踊り上りてヤアオトッチヤンダ夜は女學世界に見ぬ人と交はる

▲七日――昨日にかはらず松の内もけふひと日巳れ母となりし後ならでは見ることかたき松かざりともおもへばみだれかゝりしもなか〳〵惜まれて

朝は七くさの飯例の通り御出勤來客もなし午後より座敷にて羽織袴に火のしなどかく

評　叙事精しけれどあまりくどき心地す

長野縣更級郡川柳村　山本てまつ

うなゐ、少女等の今日を一族の晴と麗しき衣つくるは都も鄙も同じかるらん。十時頃より、お隣の藤ちやん、お向ふの茂登ちやん、在屋の清ちやんなど、かたみに行々しふ粧ふて來ませるは、今朝、百合子よりの招きに應じて例の歌留多を競はんとてなり。

聞説らく、百人一首の歌かるたは風紀を紊すの害ありと。我邸にして本論の是非を預ら得れど、天眞爛漫、慾も名利も知らなくに、只管札多く取り得しをのみ誇るらん少女うなゐの幼き清き心になど如何計りの害をか挾まん。

誰も彼も玉の如き顏に墨せられんとを厭へば、負けたるものは何にても得意の唱歌すべくとの議異議なく、嬉色洋々のうち。龍爭虎鬪の趣きありしが、此刹那、配達夫（ロ便）は又もあまたの年賀状に添へて東京の從弟より心づくしのお年玉？。

何やらんとそゞろ嬉しさにねたへで、小包の封押し切れば、羽子板（百子へ）、海軍雙六（不二雄へ）、フラシ、ショール（自分へ）の三品。

不二雄は歌留多の手を留めて、早雙六を打ひろげ、一座に對ひて讀は此品の主と云はぬ計りに鼻うごめかすよと見ねしが、歌留多は忽ち箱に收められて、一座は逆卷くわだつみの上の人となりぬ。

午後より出入の諸商店、諸職工等の廻禮者引きも切らず。

昨日迄門松賣れる翁の文賣と化したるも屢々訪ひたれど、我はつやつや求めざりき。誰やらが句に「强ちに見ぬも無粋ぞ懸想文」と聞きにしが我はつゆ之を見まほしうも覺ねず。

足曳の山口に在す伯父上歸省したまふ。父上の留守と聞きて、太く失望したまひし樣子なれど父上居玉はねど、新たに伯父上の加はりたまふ晩餐のまとゐ、又たのしかりき。

夜に入りて二三年間の家計帳を見るに支出嵩みの樣なり、こは我を始め弟妹等の學資殊に伯父上の學友間の交際費にて月々五十圓餘を要する故なり。兩親には伯父上の學資があまりに嵩み過ぎると仰せらるるよ。

されど〳〵、天我に幸して、家の財政、未だ十分の餘裕あるべければ、さして心配する迄も無けれど、常に、兩親が此深きみ恩に報ゐまつらんと、肝に銘じ心に誓ひて、軈て月の桂を手折り得て、其恩一に答ね奉らでやはあるべき。こは伯父上にもひとしきみ心にてあらんずらん。

新年の女學世界を讀みて

長野ゆかり女史

新年の女學世界は當年のに比べまして趣味の多い點に於てたしかに一進境を開きました。表紙は從來のよりかおさなしく成りましたが、これは矢張り奇拔なのがよろしからうと存じます、次に畫端書でございます、漱石は女流丹青家の顧揃で實にうるはしく床く拜見しましたが、併し素人眼には何となく物足らぬ心地でした。これは意匠の上に正格を期せられたからでもありませうが畫端書は畫端書の意匠でやつて頂いた方がよかつたかも知れません。中に就て私の氣に入りましたのは耕雲先生の菊でした、實に奥床しい筆氣味のよい意匠でした。扨記事の中で一番おもしろく感じましたのは露伴先生の戯曲と小波先生の東西の女と花併に丹下女史の飜譯でした巖谷先生の日本の女は個人の飾りとなつて居るだけだのに西洋の婦人は社會のかざりとなつて居るといふ事新な花の色と香とに區別して御話されたのは何でもないやうな事ですが私の耳には大層新しく感ぜられました露伴先生のは支那の戯曲といふので大層むづかしいものだらうとおもひまして初めは手をつけずに置きましたらば、友人の村子の君が一讀して大層おもしろく感じたと申されたので私も讀む氣になつて一と通り讀みました。誠によく彼方の風俗人情を精細に描かれました筆の香り流石は文壇の名家だとおもひました。女學世界もどうか、むづかしい學問づめのものを廢してこれから東西の名作をあんな優美な筆で紹介して頂きたいものです。で私は第二號の出るのを待ち兼れてをりますそれから丹下女史のヒユース夫人傳は小說かとおもひましたに矢張實傳ださうで、實に夫人が運命の爲め悪い良人を持つてそれに困しめられてゐる狀態なご讀んで行くうち自然に涙がこぼれて同情の感に堪へませんでした。又小說はこれまであまり感服するほごの傑作は見ませんかつたが内田先生の作を拜見して如何にも當時の社會のよくうつされてゐるのに感じました。次に私共初等のものに有益であらうとおもつたのは平安朝の文學です、古代の文學の發達して行つた跡を仔細に書き顯はされて手に取るやうに見へました。どうかこれも又職を得て蜀を望むの希望でせうが、源氏物語のやうなむづかしいものを、こういふ工合に砕いておはなしをして頂いたらばとおもひます。それから猶希望しますのは科學をもう少し廣く御話をして頂きたいと存じます、又西洋の有名な人の傳たとへばナポレオンやワシントンのやうな大人物の生涯を美文で詳く書いて頂いたらば一層おもしろからうとおもいますそう體から申せば新年の女學世界は當來のに比べて大そう趣味がゆたかに成つたやうです

才媛詞藻

佐々木信綱先生撰

（天）眺望　美濃　なでし子

さつま潟沖ゆく雲の行く方や
我父います基隆の空

評　景あり情ありこたびの中の秀逸

（地）眺望　橫濱　長谷川さく子

城あとの青き草生に立ちみれば
亡びし國の烟細しも

評　着想新らしく亡國の古へを忍ぶ情言外にあふれて餘情深し唯三句のつまりたるを難とす

（人）野梅　牛込　川田三香子

馬の上に唐詩うたふ聲すなり
うめさく野路の春の夕暮

評　歌ふらむ人の面影うかひいづる心地す梅と唐うたとの配合いとよし

秀逸

眺望　埼玉　田嶋はるかぜ
潮越しに筑波の霞ゆるく流れ浦に沿ふ里桃ほころびぬ

野梅　京都　氷室濱子
隼人らが笑みて戯れし下鳥羽の野邊のあたりに紅梅のさく

鬼　神戸　杉田鶴子
鬼ケ嶋の鬼退治にと太刀さりていさみし弟いまはいづこに

眺望　越後　佐久間靜江
さらでだにあかぬ眺を故郷に似たる此山にたるこの川

野梅　神戸　中村菊子
門の邊の日影長閑に梅さけど訪ふ人もなき野の小家哉

眺望　出雲　奥原さく子
ながめやる大野ま白に雪ふりて一筋黑し瀬の川の水

眺望　伊勢　河原芳子
ゆくりなく海原見ねて里見ねてつかれ忘るゝ春の山道

眺望　下谷　外河花子
牛飼ひの童の姿見ねすなりてかすみにきゆる芝笛の音

野梅　和歌山　石井歌子
さらばとて君にわかるゝ村はづれ二ひら三ひら梅の花ちる
野梅　大阪　井上清子
わたしよぶ聲もきこゐて川上の梅咲くあたり舟一つゆく
眺望　日本橋　朝日圓子
立ちつゞくわら屋の末に海見ゐて白帆浮べり磯松の上に
眺望　下總　石橋たか子
朝月夜声の葉分けて行く舟に鷗むれ飛ぶよ西に東に
眺望　弘前　平山ちい子
ところ／＼紅く色どる江の北の梅のはやしに霞たなびく
眺望　陸前　鐘いれ子
鶯のさゝなき低き岡越の松の葉越に春の海見ゆ
鬼　高知　北川すて子
大江山鬼ものがたりきかせてと乳母をせめたる夜半もありしを
眺望　越後　吉田梅子
繪筆すてゝながめやるかなはろ／＼と霞にうかぶ沖の島山
野梅　和歌山　前山すみ子
罪なくて流されたりし島の畑ところ／＼に梅の花さく
野梅　芝　鈴木つた子
姉君と若菜つみてしふるさとの野邊の白梅今か咲くらん
野梅　河内　大矢たれ子
よしありし長者が屋敷野となりてところ／＼に梅の花さく
野梅　神戸　青木茂子
とひきませ花はさきぬとつげて來し野守がふみも梅が香ぞする
野梅　山口　杉山きくの
そよ／＼とはろ風ふきて山畑の麥生かくれに梅の花さく
野梅　信濃　竹島はる子
ひげ白き翁餌をやる鷄の背に梅ちりかゝる野邊の一つ家
鬼　備後　伊藤千代
年越の豆うつふりのをかしさにほゝゐみながら鬼も出らむ
眺望　伊豫　徳田政子
うぶすなの森や小川や梅林仄かに暮れて淡き我が影
野梅　なにがし
鶯、鴉、白酒ひさぐ追分の茶屋の梅が枝今盛りなり

佳調

眺望　三重　柿本さみ子
牛に乗る童長閑けき眺かな菜の花一里春の風ふく
野梅　常陸　三好桂子
わかなつみて歸るのみちの梅の花ひと枝をらん母のみやげに
野梅　尾張　森みよの
冬がれの野邊にほゝゐむ梅の花けだかくも亦あはれとも見ゆ
野梅　下總　久保木浦子
いそかずば立よらましを名も知らぬ野中のいほの梅の一本
野梅　山口　齋藤秀子
神代より清き流れのいさゝ川に散りては匂ふ梅の一本
野梅　三重　喜多尾とし子
來て見れば野守の家は影も無く跡にわびしき梅の一本
野梅　埼玉　林若葉

ほの〱とわが世靜にあけそめて梅が香清し春の野の宮

野梅　山形　菊地紫楓

花咲けと人さへ問はぬ野梅にもまつ音づるゝうぐひすの聲

野梅　小石川　山崎千代子

牛追てかへる野末に月白く二つ三つよつ梅のちりくる

野梅　新潟　多都子

續く岸に大方枯れし白梅のなほ一枝はほゝゑみにけり

眺望　對馬　古川辰子

汐風に雲のほつれを拂はして望む海原白帆行くなり

鬼　島根　青柳秀子

人の世に人と生れて人の道つくさぬ人を鬼といふらん

眺望　河内　高野八重子

立出て高き光をあふぎ見る朝日に匂ふ雲の富士の嶺

野梅　靜岡　佐藤なか子

うぐひすのこゑものどかに聞ゆなりかすむ野中の梅の梢に

眺望　下總　梅の家郁子

見渡せば野邊のむら松むら梢の霜より匂ふ朝日子の影

眺望　沖田　かし村

鳥二ツ川を横ぎる影みゑてニコライ堂の鐘靜かなり

眺望　佐賀　於保ふき子

筆なげて歌人泣けり玄海の濵靜かなる春の景色に

野梅　佐賀　於保ふき子

春淺み雪にかざる野の梅を誰魁けて枝折りにけん

眺望　和歌山　田中實子

山の花野に舞ふ胡蝶遥揃いづれの方に唱歌うたはん

眺望　靜岡　岩佐有壽子

梢よりあまの小舟のほの見ゑて繪によく似たり三保のまつ原

眺望　仙臺　齋藤みよし

波音の外は聞ゑぬ多聞山ながめあかざる雲のまつしま

眺望　奈良　松本みどり

三年ぶり歸る山道苦もなくて心嬉しく我家眺むる

野梅　奈良　榎本みどり

思ふどちあくがれありく道のべの籔に香清し梅の一本

野梅　肥後　森田しげ子

たゞ一木のこれる梅も咲きいてぬ野原となりしわか友の庭

野梅　千葉　某女

見る人もなき野にひとり梅の花たれを待ちつゝかく香るらん

野梅　常陸　田村げん子

旅人にはるをしらせて梅のはなかほりゆかしくさきそめにけり

眺望　本郷　齋藤はな子

菜の花に見ゑつかくれつ眞帆二つ野中の川をさかのぼりゆく

眺望　甲斐　山田照野

のぼりきてふもとはるかにながむればたゝゑのことし里のいへ〲

野梅　彦根　道元みどり

見渡せば野路の木末に白妙の雲かとみゑて梅の咲きけり

野梅　富山　淺野あや子

おぼろ夜の春なほ寒き柴の戸の垣根に野梅しろ〲と咲く

野梅　岡山　新谷美禧

いくたびか梅を見に來て今ははや野寺が宴も親しかりけり

野梅　大阪　酒井美代子

おゝなゆきて野邊の一家あれはてぬかきねのうめは今もにほへさ
眺望　　名古屋　鈴木紫雲
霞なす海より朝日いでそめぬまだねむれるかふればうでかす
野梅　　荏原　淺野たけ子
去年の春若菜つみけるかへるさに愛でにし梅を今日も見るかな
野梅　　大和　津田節
木々は皆かれたる如き淋し野にさきがけて笑む梅の一枝
鬼　　倫敦　町田周子
願くば我鬼となりて三千の工女を泣かす鬼を攫まむ
野梅　　日向　青松さめ子
幼よりかざしにはゝしき姉君の梅の小枝を折りてたまひぬ
野梅　　下谷　雌暁淑子
友さ二人萬生な〻く野にゆけば御堂の南梅盛りなり
野梅　　東京　若林文子
春かすみ隔れるゞ見ねて野の末に一きはしろき梅の花ぞの
野梅　　高崎　深井せい子
むある梅ならで知らざらむさかりもあはれ野路の白梅
野梅　　上毛　關根はる子
梅の里をしるべに訪れ來て尋はぬ野邊に梅を見るかな
野梅　　牛込　富永憲子
日は落ちて里はかすみてわかくさの上にちら〳〵白梅のちる
眺望　　信濃　山本こまつ
朝日さす凌雲閣に上りみれば千門萬戸國旗かゞやく
野梅　　高崎　輝子
夕月にやどを立出で野路行けばいづくともなく梅の香ぞする
鬼　　薩摩　宮里琴子
今宵また鬼の話をきかんものと五作が家に里の子等ゆく
野梅　　大村　馬場きな子
行き通ふ人も少き野路の梅盛ざかりても猶かほるなり
眺望　　伊勢　船越露子
雲雀なく野末かすみて賤の男が牛引くあたり桃の花咲く
野梅　　熊本　天野きよ
そのかみはゆかしき袖ににほひけむ長者が原にさきのこる梅
野梅　　栃木　倫子
自ら細道なせる野の梅にうぐひすほしき春日和かな
野梅　　徳島　紫園
したかげに牛ねむらせて一本の野邊のおい木の梅匂ふなり
鬼　　東京　千葉まき子
鬼事に服はず暮れて乙女子は迎ひの姉と今歸りゆく
野梅　　千葉　小出文子
新らしき尼寺見ねて新らしきおくつき近く匂ふ梅かな
眺望　　伊賀　服部かつ子
打まもるマストもいつか影消ねて海上千里なみもしづかに
野梅　　廣島　和知廣子
ゆきまざふ野橋のあたりくれそめて二ひら三ひら梅のはな散る
野梅　　信州　山崎はるね子
家の跡は參五六寸の野となりて老木の白本花梅きそめぬ
鬼　　大阪　井上貞女
國まもる鬼となりにし兄上のかたみの日記くりかへし見る
野梅　　大阪　田中瑜瑳子

西山にゆふ日かゞやきなづなつむをとめが袖に梅の花ちる

曉梅　薫　子

はるばるし海づら遠く沖はれて雲ゐにつゞくあまのつり船

曉梅　東京　谷　鶴　子

なき渡る枯野の霜に月さえて只繪のごとき富士の遠山

野梅　愛知　梅溪みよ子

三とせまへ君と語りし野にくれば君いまさねど梅はゝゑみぬ

鬼　長門　梅田染子

鬼は外福は内にと呼ぶ聲も静かになりて年は暮れ行く

野梅　岩代　金子はる子

行通ふ馬子にわらべに手折られてあはれ野の梅花五つ六つ

鬼　肥後　山田梅子

來んとしの事語りあふかたはらに鬼が笑ふと幼子のいふ

鬼　臺灣　熊谷繁子

風すさび寒さみにしむ小夜なかにすてられし子のうゑになくあはれ

野梅　霜　子

なすの原雪かきまがふ梅のもと駒いなゝいでますらをのすぐ

野梅　小石川　成瀬八重子

乳母が家の軒端も見ゆる村はづれ梅さきみちて日はのどかなり

曉梅　三重　伊藤さし子

見渡せば海原遠く霧晴れて夕日輝く雪の島山

曉梅　岩國　豐　子

兄君は山と云ひわれ雲といひぬ海原遠くそれとわかれど

曉梅　上總　花井みさを

ひばりなく野邊のかすみを分ゆけばほのかに見ゆる山本のさと

野梅　和歌山　郭　雪子

再びは踏まじの誓もろかりき梅の花ちる古郷の道

曉梅　新潟　行形よし子

見わたせば薄紅に野はなりぬ桃井の桃は今盛りにて

野梅　磐城　内山房女

父上と畑うち暮れて少女子の歸るかざしに匂ふ白梅

野梅　高知　高橋ゆき子

わかなつみて野もりが宿にいこふまを歌かひつけつ梅の花みる

野梅　伊豫　井手政子

乙女子の歌うたひつゝ打ち連れて歸る畦道野の梅咲きぬ

野梅　播磨　松本秀子

梅か香のかをるまにまにまた寒き雪の邊にうかれ來にけり

野梅　備中　大西政代子

背戸近き小川に起ちて賤の男が鍬洗ふ手に梅の花散る

曉梅　肥前　吉村文子

遠方を根越し山越し暮れてくる四方の見渡し繪にもしてみん

野梅　横須賀　みち子

其儘に手折らでみませ里の子よこゝろ餠けき野路の白梅

野梅　京都　松永敏枝

きえのころ去年のみ雪と見ゆるなり野中か岡の梅の一もと

野梅　甲斐　青柳たれ

のべの梅香りゆかしく咲ぬれどあはれやめでゝ見る人のなき

野梅　攝津　つる子

鶯のなく音尋れて來て見ればぬしなき梅の花さきみだる

曉梅　品川　飯井きよ子

心あらん都の友に告げばやな我がふるさとの梅のけしきを

眺望　岩代　海野初子

和歌の浦にかよふ千鳥の音絶えて霞分け行く眞帆片帆床し

眺望　上州　新井ふぢ子

川添の柳みどりに三里つゞき桃咲くあたり牛の聲する

野梅　周防　中谷乙羽

鶯のなく一聲に立よれば野もりがいほの梅咲きにけり

野梅　麹町　宮内俊子

朝な夕なゆききもごりする路ながら梅さく野邊といつなりにけむ

鬼　麹町　宮内俊子

鬼の目もなみだある世におさな子をいかなる親かうちすてにけむ

野梅　信濃　山崎緑子

あこがれてしばし／＼と見るまゝに梅の細路月になり行く

眺望　麹町　指宿てき子

背子と打つ鍬の手止めて見かへれば春の田三里只霞なり

野梅　千葉　土井貼子

門を出でゝ歸りまつ兒のつとにせんたどる野の邊の白梅の花

野梅　阿部つれ子

野邊の梅ともに眺めし姉君も世には在はさずたれと眺めん

野梅　兵庫　柳田のぶ子

一枝を手折りて妹はかざしにとわれは齒にしぬ野邊の白梅

野梅　下總　白ゆり子

かりためし柴を枕にうなゐ子がねむるゐがほに野路の梅ちる

野梅　下總　白ゆり子

すむやたれ野中のいほに稱名の鉦もきこえてかきの梅ちる

野梅　本郷　本間のぶ子

霜枯て色も香もなき冬の野にわれのみ見よと咲く梅の花

眺望　日向　紀藤榮子

出で船のゆくへ遙かに眺むれば招く背の君影かすかなり

鬼　神戸　高井きくゑ

くらやみに鬼のゑすがた見てしより只何となくうしろめたきかな

野梅　伊勢　岸田春子

根芹つむ少女の袖もかをるなりの川のきしの梅の下風

眺望　大阪　重村政

海を見て我胸の内もかはかりにひろくもがなと思ひぬるかな

野梅　陸奥　秋庭いよ

ときめきし長者が家も跡絶ゑて菜畑に殘る梅盛りなり

野梅　下總　志賀由利子

枯野原さびしくならぶ比翼塚むす苔の上に梅の花ちる

野梅　東京　河村かれ子

草萠る野邊に一本梅の花道しるべにやさき匂ふらむ

野梅　埼玉　倉林孝

岡の上に梅が香ぬくき日曜を醉ひます父と富士の山見る

眺望　美濃　なでし子

參幾畝菜の花いく畝はてしなき千里の沃野たゞ春の色

眺望　福井　長谷川たま子

白妙の世なり我れ也野も山も雪よりほかに見るものはなく

眺望　駿河　林すぎ子

うちつれて紅葉狩せし野に山にすみれつむなりいとけなき子の

野梅　駿河　林すぎ子

學び舍にゆきゝの野邊の梅の花一枝手折りてかざしにやせん
野梅　駿河　林すぎ子

こけつきし石塚一ッ立てる野にあはれも深き梅の一もと
晩霜　駿河　林すぎ子

浦人ののれるつり舟のどかなるかすみの中に遠ざかりゆく
野梅　伊勢　船越露子

牧童の笛の音低く日は落ちて梅が香寒し夕月の影
野梅　信濃　るゝぶゑ

賤の男の畑打ちかへす岡のべに香ひゆかしく梅さきにけり
晩霜　新潟　靜枝

立ちのぼる煙にそれと知られけり霞に埋るゝ遠の村里
野梅　出雲　佐登字みやま

主もなき野路の白梅一枝を手折りかへりて母にさゝげん
晩霜　岩代　小林美武子

夕富士の神山さよくほの見えて白鳩一羽空かすめゆく
野梅　信州　今溝みな子

ゆく〳〵さ眠り催す春の日の野中の空に鶯の鳴く
野梅　熊本　豐子

あられふる冬の枯野に咲く梅は鶯ならでたれかさふらむ
野梅　本所　橋本丹江

いかばかり野路行く人のめずらむさおもへばならですぐる梅かな
野梅　本郷　諏訪瓊枝

こゝちよく東風吹く野路の一ッ家軒に梅あり花六つ七つ
野梅　芝　川井きく子

病む母のなぐさめにせん小女子が袂にそへし野梅一枝
野梅　神奈川　川井あさ子

若菜摘みし籠に野梅も折そえて唯逼歸る里の少女子
野梅　和歌山　島津秋子

野のほさり梅咲く宿はいづくぞさ問ひし彼方に鶯のなく
晩霜　岐阜　服部じゅん

眺めやる五里の柳の草つゝみ二つの白帆をちにかすめる
野梅　佐賀　江口さく子

急ぎゆく野べの細道梅咲けり鶯鳴けりあゝいかにせむ
野梅　佐賀　宮崎澤子

冬枯にひさり匂へる野邊の梅馬子も歌やめ眺めけるかな
野梅　秋田　玉井たか女

父母のつさにならなん野への梅ひさ枝ゆるせうつるあまりに
鬼　肥前　淺田豐子

幼子の鬼の話を聞きつゝも早やすや〳〵さ母の膝の上
晩霜　田中しゅん子

大鷲のはぶたき高く峰こゑて又もはげしく六つの花ふる
野梅　河内　串本房子

梢に殘る雪かさのみも見ゆる敵遠里小野に梅やさくらむ
野梅　向島　花子

雪ふりて春なほさむき朝風にわらひそめたる野邊の白梅
晩霜　和歌山　郭雲子

すみれさく野へのかすみのうす衣つゝめごもるゝ春の俤
野梅　肥前　眞田ふみ子

行きて見る人しなけれど野の梅のいろか猶まで咲ける優しさ
晩霜　肥前　平山知香子

烟たつ野末や出湯の里ならむ若くさ一里駒のいなゝく　下總　田中常子

野梅

あれし野にあはれにさけろ梅一木かをろあたりやもさの我庭　河内　大矢たれ子

野塚

塚塚に一本のころ白梅の片枝枯れて花さきにけり　秋田　梅田くに子

野梅

讀經の聲たゐはてゝ夕風に梅の花散ろ尼寺の庭　三重　龜井爲登子

野梅

下枝を折りつくされて梢のみたかく匂へろ野べの梅かな　三河　落ゐふ子

野梅

わらじ買うてしばし休みしかけ茶屋の葭簀の外に野梅花さく　大坂　をちば

野梅

友訪ひてかへろさ寒き道の邊に香ふも嬉し野梅一もと　群馬　白石なみ

野梅

山里に蕨をたづれて一人行く乙女は持てり野路の梅か枝　甲斐　露子

眺望

道の邊の菫つみ〳〵かたり行く乙女の姿むつまじく見ゆ　長門　今藤欽子

眺望

朝まだき海原遠くながむれば霞につゞく豐後路の峰　大阪　田中瑜瑳子

鬼

うなゐ子が夢におごろき鬼きぬさ母の乳房にすかるいさしさ　加賀　平田色香

野梅

腰のして眼鏡ぬぐひて翁一人のうめの下に打かたむきぬ　周防　大木くに子

眺望

麥青く菜の花黄なる田の中な黑烟たて汽車のはせゆく

女學世界懸賞和歌兼題

酒宴　摘草　島

（〆切二月十五日）
（披露三月五日）

◎賞品天、地、人、の外秀逸二十種に呈す

女學世界懸賞文

▲家庭日記（二十四字詰四十行限）

▲新體詩（三十句限）

▲雜文（二十四字詰四十行限）

◎〆切　二月十五日
◎披露　三月五日
◎賞品　以上三種中より甲、乙、丙秀逸を選び十五名に呈す

懸賞文規程

投稿用紙に半紙又は罫紙二つ折（和歌は端書に限る）の事▲題目の下には必ず住所姓名を明記すべし▲文字は必ず楷書又は行書にして叮嚀鮮明なるを要す一種にして數葉に亘るものは必らず右方の上部一ヶ所を紙撚に綴るべし▲寄稿は博文館編輯局女學世界宛させらるべし▲投書原稿一切返却せず

甲賞

野外の散歩

周防　中谷登羽子

晩告ぐる鐘の音にあたゝかき夢さまされて、起いづれば我より先に鶯は塒はなれて園の梅が枝を此方彼方と飛び傳ひ心長閑に初音をもらしぬ。み空に殘りし月影は次第々々に薄らぎて 東天の白み初めにし折しもそつと吹きくる風はいと冷に衣の袂をひるがへし。やがて松の梢にさはりし時はいとも床しき琴の調べかとあやまたるゝに音やめばいづくも靜に裏の小川のせゝらぎも、ちよろ〳〵と自然の音樂を奏するかの如くにて野邊の景色も一入思やられて中々に獨り破窓の下に居たまられば。いざ散歩をと思立ち午後二時頃家を出でぬ。停車場を左に見て歩み行く路の傍にまだ咲き初めしばかりなる 千草の花は 互に色香を爭ひ賑なるもいとをかし。賤が垣根の白梅は行きかふ人の袖每に千代の薫を送りつゝ今を盛りと咲亂れ。草葉を渡る春風に靡く莖も愛らしく。 彼方の畦道を三たり四たりいづれも髮は束はつにて、水色のリボンを長くたらし身には質樸に紫袴をつけ「春のやよい」の唱歌いと樂しげに歌ひつゝ 通り過ぐるは正しく學校歸りの少女子ならん。豆絞りの手拭にてはちまきしたる翁は畠の岸にこし打かけ鍬にもたれて四方の景色を 眺め居る折しも、なるこに驚く群雀はこをどりしながら逃げ去れるもいとをかし。我もそこはかとなくそゞろ歩みしける程にいつしか小さき社の前にとさまよひ出でぬ。鳥居の彼方には里の童等が數多集ひて。 陣取り或は鬼波しなど種々に遊び戯むるゝもいと面白ければ 餘念なく眺め居たる程にいつしか彼方の明神の森より。ほのかにたそがれそめて美しき夕陽は今や西山に沒せんとして社の常磐木に映ずる狀いふもいはれぬ風情なり。いざかへらんと元來し道を辿れども何となく 名殘をしき野邊の景色に又も彼方を見渡せば 里の家々に夕飯たく烟の立昇れるいと面白くて野べに心を殘しつゝ家路をいそぎぬ。

評　のどかなる春の風光畫かれて恰も實境を望むがごとし

新年故鄕の親の許に

神奈川青木町六七　保田ゆづる

神世より替らぬ初春の御籬ほの〴〵と 明け行く空に匂ひ出たる初日影先嬉しくも尊くも拜し 參りて千歳を祝ふ門松の緣床しく戸每に結ぶしめのゆたけさ吹きしもなき風にゆら〳〵と 打靡く旗影など實に去年は夢かと許り身も 心も生れ變りし心地せられ候を先づ思に浮び初むるは故鄕の御空如何に長閑に御覽せさせ候哉 御二君を始め參り妹弟さては御族の皆樣打揃ひ 給ひ定めの御祝事如何に賑はしくも樂しくも濟ませられ候やと唯々限りなく目出度存じ候こゝは 又千里隔つる花の都長くも雲井に近き此わたり實に行かふ 人の袖たに匂ふ許り數ならぬ身にもいと樂しく一とせを重ね候事御心安う 思召され度何も〳〵今年こそは年と共に新に嬉しき御消息ものし參らせんと 只其をのみ樂しみにいそしみ居申候別製菓子一箱こはさして 美味とも覺ねず候へど新としの勅題にちなみてこゝなる風月堂が意匠凝らせし物とかや 只々目出度きをのみ御賞味玉はらば 喜び何にかたとへ申べき余は春深く申上ぐるを樂しみに取あへず御祝儀のみにとて目出度かしく

雪の朝狗の兒もらひたる人の許に

神戸市下山手通二丁目　青木茂子

さらぬだになつかしき御木立は冬枯たりともなかしかるべきをまして時ならぬ花さきたる今朝の雪景色いかになど問ひまゐらすはなこがましかるべくとたゞ〳〵ゆかしう存じあげ候先頃たまはりたる犬の名はよびよくて愛らしげなるをなどいひてこれやよからむかれやとつけまどひ候程に弟のいつしかポチとよびならし候まゝしひてあらためもせず朝の牛乳の半は必ず彼にとらせ候へば小さきものゝ大きくなるは早くて此頃はいと暴しげになり申候わきて今朝は此の雪を嬉しと思ひたる樣にて馳せめぐれるを埋火かきおこしつゝ硝子越に見やりて獨ほゝゑみ居り候へど同じくは此樣御覧にも入れたくかつは此の雪を題にて歌にまれ文にまれ詠みもしかきもせばいかにをかしからむと存じ候降りつみて道はなくともふみわけておとづれたまはりなば限りなく嬉しと思ふべく候かしこ

乙賞

雪

群馬縣吾妻郡原町大字原町　樋溪女史

空かきくもりて何となう物淋しく、七重八重衣かつぎても猶寒さ堪えられず、人々雪ならむといひ合へる程もなう、はや降りて來る六つの花、鬢のほつれ毛にかゝりて、いよ〳〵寒さをましぬ、

薪など取り入るゝいともなく、怒吹き來る木枯につれて、綿ちぎりたらむ如くに飛々として到り、道行く人も、細う烟の立ちのぼりたる賤が伏屋も、一時に消え失せて破竹の聲二つ三つ、

やう〳〵雪やみぬ、妾は妹と共に雪のけしき樂しまむと窓によればまたたくひまに野も山も見渡すかぎりおしなべて白銀もて粧はれぬ、冬枯の梢に時ならぬ花をつけたる、苔むしたる石燈籠に綿帽子きせたる、えもいはれぬながめなり、餌をあさる雀、梅が枝を飛びまはれば雪ばら〳〵と落ちてちる花かと見え、年ふりたる松の翠の色をいさゝか雪間より現はしたるも、また風情あり、こゝかしこの賤が伏室も今日は玉もてかざられつ、門邊にはわらべら、雪よ〳〵と集ひきて雪達磨作り初む、其の處に黒き小犬の時を得顔にいさましく飛び廻はる樣、一きは際立ちて目につきぬ、

折しも靜子の君來り、雪となむ呼べる題のもとに、一つものせばやと硯箱引きよせ、思ふまゝに書きつくれどたゞこのけしきの十が一をも寫し得ず、妾が筆の拙さをいかにせん、

評　形容巧みにして且つ才藻饒かなり

田家の新年

茨城　山口須美子

起きよと促すむら雀の、千代よぶ聲に夢醒めて朝戸あくれば、ほの〳〵と明けそむる空高く、車井戸の音そこゝにひゞき渡るは早くもあたりの誰彼の若水くまんと物するにやとほゝゑまれぬ。軒端の竹は綠色濃く、葉毎に宿る白露にきわみなき御國の光さしそひて、きら〳〵とかゞやく樣のえもいはれずなむ。御代萬代のしるしと立てわたしたる松竹は

門毎に百歳の色をあらはし、そよ吹く風に日の丸の御旗ひるがへりて高く躍り、はたはたと虚空に響あるはさながらおさまる御代を祝ふに似たり。昨日迄は田に畑に忙かはしう立働きし賤の女も、花やかに身づくろひして、かたみに年のほぎ事いひかはすもうれしう覺にぬ。やがてうからやからまどゐして屠蘇雜煮を祝ひつゝ、樂しく笑ひ興づるうれしさよ、池の氷はさけやられざ、嶺の白雪に深けれど、ここなる伏屋には和氣靄々の春風みちて、室の紅梅は色美しう咲きにほひ、よろこびの香をはなてり。

宵にもなりぬれば、幼き妹共は余念なく羽子もてさわぐ、常は寂しき田の畔にも、幼き子等の凧遊びに笑ひさゞめく聲賑はし。さては今日のみ三紋の羽織正しく下にはきたる袴の折目も新しきに、屠蘇の酒に醉ひしれてふらふらと千鳥足おぼつかなげなる田夫等の様をかしさもをかし。夜は更くるも知らでかるたよ双六よともてさわぐ、妹の我こそ勝をさ競へば、弟もまけじと氣をいらつ、母上の妹の方に心添ゆれば、父は弟勝てかしと片唾を呑む。やがて弟の黒き顔は白粉に色どられ、妹の紅なる頬は墨もて染められ、どつと計り腹切る笑ひ聲の家にみつればむ、門守る犬さへをかしと吠びぬ。

評　宛轉玲瓏

丙賞

梅の花にそへて

おはし

過つる日の骨牌のまとゐの後は世はことわざしげきにかいまぎれ久しう御とぶらひ參らせざりし罪ゆるし給ひてよ　さて今朝しも妾があさひの枕を驚す初音にまだ梢の雪さへ消にやらぬをいといぶかしう花とや見らんとそと障子のすきまより伺ひ候へば　今の初音にや驚かされ候ひけむ一ひら二ひら雪ながらにほころびたるいとな　ほゆかしう侍りきかく目出度を心なき身のたゞひとり見はやさん事のあらたしく色も香も知る人にこそとうくひすの宿はと云ひけむふる　言も侍れ一枝ばかりはさてうくひすの恨も　打忘れ御目にかけ候御庭の花の目うつしには如何ばかりの匂ひも侍らざらめと　文好むてふ名にちなみて例の玉の御机のかたへにしばしが程だに侍らはせ給ひてあはれと　見そなはし給ひなば花もおのれもいかに　嬉しからまし猶東風ふかば事づてを給ひて茅やの梅をあはれみ給ふ　御歌一首給はらば殘る花もこよなき面目とこそ思ひ侍れ先はかむくなかしこ

雪の景色

信濃上田木町　木村綾子

あかつき告ぐる鐘の音に　結びし夢もおのずとさけあたりになく鷄の聲に目さめてふと起き出づれば　窓の透間洩るゝ風こよなう寒し弟は戸をあげ雪よよと呼ぶに　出てゝ庭面をながむればあなめざましいつよりか降りにける夜半までは月さやかなりしをあはれ　今朝は見渡すかぎり野も山も皆白妙にかはりて　四方の木立時ならぬ花を咲かせてけり庭の面に降りしける雪の上に茶山花の二ツ三ツこぼれたる　ねもいはれぬにまして竹の下葉のうづみのこされたるなどいと　美し梅はいかにや松はいかにやとたづぬるに今はたゞ花ならぬ木々こそなけれ
あまりの好き景色に心うかれて門を出づれば二の字の　跡いまだ見ねざ

る白雪の上に聞の　犬は梅の花を散していさうれしげに狂ひ遊べり或はかけり或は集ひ來れる小犬さまろびあひ　下になり上になりつゝゴロゴロところげ行く　稚いさなかしうげにこそ春の日に花にたはむれ狂ふ胡蝶のそれにも似たりけれ

犬はやがていづかたへか去りたれど　雪はなほ降りしきりて止むべうもなし折から二人の士官馬を走らせていづちをかさしていぞき行く其、帽も外套も眞白さなりてげに遠征の面影も見ゆる心地ぞする

あはれ御國の大丈夫雪におぢず　風にたはまず御國の爲君の爲にと勤め勵まるゝ其すがたげにこそ雄々しきはみなれなど　思ひてあさしたしばう見やるにはやそれも　結いたゞけるあなたの森にかくれては雲路の景色また一入淋しうなりぬ

山また山河また河今は只雪ならぬはなくあたり　殊に淋しうなりて早や犬の聲だに聞ねず只散り來る　六花は時々北風にあれて寺の木魚の響や鐘の音は且情ね且聞ねて凍れる耳にしみわたるのみ

あゝげに心地よく興多きは雪の花散る景色なりかしこの　藪には銀の虎を作りこゝの木末には　時ならぬ花を咲かせ散りては花の如く積りてはまた羽二重に似たるなどいかで　春秋の景色におさらむ雪は豊年の貢さか古へ人の云ひけるもげにこさわりさ思はれて　雪の景色こそいさめでたけれ

賞外

福壽草

伊豫　井手政子

昨日まで紅梅のめざましき色香に迷ひて、目にも留らざりし鉢植の福壽草、今日は一輪濃き黄金色に咲き出でゝ、机上一點の趣を添へぬ。人は其花の美なるを愛でゝ其色の俗なるを卑めど、我は此花に對して捨て難き忘れ離き思あり。名の目出度が故にあらず、たゞ此の色を見る毎に限りなき悲しみを追ふて、樂しかりし過去の幻を辿ればなり。

親しき友の、始めて此の花を我に贈りしは四年前の春なりき。友すくなき我を屢々訪れて隔てなく語れど、多く物云はぬ唇に無限の笑を含み、人を見る目の優しきを、我は其賜物なる福壽草に譬へたり。心に染まぬ事ある時、彼の優しき同情の聲に接すれば、いつのまにか深山を出でゝ大澤に向ふ心地しつ、賴もしからざる繼母を持てる其家庭を知りて、彼女を慰むべき地位に立ちながら、却て我の慰めらるゝ事多かりき。長き年月の間にてもかく樂しき交遊に、嘗て富や戀のはかなき幻を追ふ事もあらざりき。温き日には野に出でゝ彼女は花にあこがれ、我は清き流に汲みし事もあり。雨の夜には彼女箏を彈きて、我は胡弓をすりぬ。去れど、今は萬事空しく去りて、行く水のまた歸るべくもあらず。思へばこぞの夏、一たび虎列剌の發生してより、驚くべき流行に幾多の人の子を苦めしが、遂に我が友も亦其襲撃に执し斃れて僅の時間に其貴き生命を奪はれぬ。アゝ蒼天何が故に此の可憐の人を失ひしぞ、我は幾度か其死を疑ひしかど、其後再び彼女を見る事を得ざるなり、麗しく黄金色に咲き誇れる鉢植の福壽草は、遂に我が爲めの形身なりしか。

前夜まで、我が書齋に訪れて、彼女はそこに坐し、我はこゝにありて、常の如睦じう語り居たりしが、運命の波に誘はれて、思ひもよらぬ人の身のたゞ春の夜の夢とや云はん、ひとり心なの此の花のみは、いくその春を樂しく〳〵て、今年も同じ色に咲き出でつ、なつかしき故君を忍ばしむるよ。

文は、少しく生硬の嫌あれど意を盡してよし

はつ音

山田 桂花子

よべは月明かなるまに／＼愛らしき梅の花の三つ四つ二つ笑みそめたるを見つゝかの花や疾き春やおそきといふ古歌を打誦しつゝまたるゝこりを惜みしなほどなく月もかくれければ臥床に入りぬ夢はいづこにか通ひけんけさはほのかに告げわたる初音を夢心地に聞きゐるてもうつゝならましかばやとやう／＼枕もたげ恨みける程二聲ばかり音づれたるに又なくうれしくて（おきがてのわれにきけとやうぐひすのはつね床しくなきわたるかな）と口ずさみつゝやりど推しひらけば窓べに咲ける梅が枝に鶯のかろくとまりたるいはんかたなくてなん

新年を迎ふ

濱松 鈴木好子

光陰は矢の如く月日は水の流るゝ如しと古人の云ひし言の葉も實にさこそなり二十世紀の初年も夢の間にすぎさりて今はた次年の初日をぞ迎ふるうれしさよ初日のかげも昨日にかはり千代呼ぶすゞめの音も朝けを告ぐるにはとりの音もなんとなふあらたまりぬる心地ぞする新にかける日のみ旗門にたてたる松竹のいづれ新玉の年の始めのことほぎと知られけり富士のたかねは千代の白雲をいただき吹く風は枝をならさずいと靜けき大御代に新玉の年を迎ふるはこれ大君の深き御惠によれるになんわれらの如きいぶせき草の庵にいたるまで今日のうれしさを祝はざらん古の諺に一年の計は元旦にありときけば今より一入學の道にいそしみて又こん春のめでたきを迎へなんと今よりまつになん

かへりみち

下谷 嵯峨淑子

洋服、海老茶、島田、束髪、黒き影ゾロ／＼と續つとなく校門を出てより、いつも最後に殘るが我等六人也。若人達の呼吸暖に籠りし室を出れば、殊も夜の風の寒き事よ。時は師走の中ば、若女の化粧に比べらるゝ月の影のいよゝ冷たき様なるに、頭の中もショールにつゝみて校門まで相並びてゆく、二人の友とは此處にて別るゝ也、「左様なら」「御靜に」「左様なら」麗しき美しき低き聲打交りて肩掛せる君二人、眞直に飯田町の方へ此方は四人月の光を肩より浴つゝ、相語りつゝ話草は學びやの事、本かに恐しき聲して逞しう大なる犬、走り去ぬ跡より黒き白き三ッ計りかけゆくを、梅子の君驚きて身を戰はしつ「ホヽヽ」と笑ふ、丈高う色白き多病の才子歌に名を得し方也。其驚きし様のをかしさて皆々笑ひぬ、黒き門ある前迄來りぬ、前髪ふくらかに取てぐる／＼と巻まきたる海老茶袴は安子の君、やさしき京辭にて「さよなら御別れ申升御靜に」「もし門から玄關迄の間で切られたらどうしましやう」と肩をすぼめてほほゑみて。之よりは我等三人いつも／＼此道を辿り行三人也て。一人切りに切られでもするといやだからどーか中に入れて頂戴な」とかしくも政子の君は眞中になりぬ梅子に我も全じく恐ろしけれど、是なければ其まゝ坂を上りゆく。晝も淋しきさいかち坂のまいて夜はほそ／＼人通りもなし、首縊りのありしといふ松の枝の今宵は殊に其枝延びたる様に思はるゝも心よりなりや、枯のころ尾花の風に靡くも幽靈に似たり。かゝる道の人もなかりせば仲仲心安かるべきを三人四人されど聲高うのゝしりて來かかりしなど自づと息ひそめられて。をかしき話に打興じつゝ歩む後をにはかに人車のとゞろきに「あつ」と三人左右にわかれて扨心づけば「あゝ風の寒い事よ。」

嫁ぎて後妹の許に

岐阜 山田桂花子

其後は如何に渡らせ給ふらんさそなたの　空のみ打ながめらるゝ折しも郵便の一聲にうれしくて國元よりのたよりならんなぞ　つぶやきつゝいそぎ開き見れば御兩親樣をはじめ　皆々樣お機嫌うるはしき由先以て嬉しく存じ候次に此許打揃ひつゝがなく候へば　御安心なし下され度候過ゆく月日に關守なしさか當地へ　參りこし候てよりは早一年の春秋をすごし候當家へ嫁せし始めは　日の立つこさいさおそき心地して物さびしくたゞ日のたつを樂さ思ひ候ひしが　此頃は少しはなれ中候さはいへぞ折にふれ時につけては　父母の膝下にわりて面白き物語なぞして父母を慰めしことなど思ひ出でては萬眞さり　出でながめ居候されぞ他家に行きてばそを我家さ定めよく　家政をさゝのへ舅姑をいたはり夫につかふるこそ女子の本分に候へば　いつも申すさほり足らはぬ身ながら力の及ぶかぎりは一筋につさめ候まゝ御安心下され度候　なほお許よりわが身の上につきて　心なやませらるゝ事なき樣よく〳〵御申下され度候そこ許さてもよく〳〵學をつくしてなさめつゝある　業は少しも怠らず家事何くれさ心してまなびおかれん事を　祈り入り候別封母上樣に御あげ下され度候とゝ

少女の夢

麻布 梅津靜子

浮雲もなき春の空に長閑の光滿ちたり。香ばしき風はこゝかしこの若葉木をゆるがしてべに、紫に咲き匂へる小草の中を分け行く。連なる輪の如き池の小波に姿うつして黄羽淡紅なつぎへて戯る。面白く枝かげに囀づる靜婉の調は——思ひ亂れて窓に臥す　可憐の少女を樂しき夢の鄕に導きぬ。

美人捲珠簾。深坐嚬娥眉。但見涙痕濕。不知心恨誰。

*　*　*　*　*

少女は何時か戀しき人さ手を取て幽雅なる湖邊に遊びつ。初戀は只恥かしくやる瀨なきものさぞ——少女は　胸さゞろきて何事も云はざりき。

𦀌麗なる靑年は　愛の手に半ば彼を圍みて蘆汀に立ちたり——若き二人は打さけて戀を語りぬ。日は沈みたり。

されぞ二人は尙其處を去らざりき。泡の如く立つ雲の峯を洩れて湖面を橫ぎる傾斜は錦の如く水波を色ごれり。

夕照を背にせし少女は靑年の手を握て戀に泣きし過去を物語りぬ。默然さして聞き居りし靑年は　感謝さ喜悦に少女を抱きて永く久しきその未來を誓ひぬ。

日は全く暮れて皓魄聲なし。只烟霞を洩れて淸き讃美語は聞ゆぬ——勇ましき聲さ優しき聲に

靑艸湖邊日色低。　黃昏寒鴟湖啼。
丈夫飄落今如此。　一曲長歌楚水西。

*　*　*　*　*

夢は醒めたり。

少女は吊然さして暮れたる庭を眺めつ

アゝゆかしき戀人は何處——醒めてはかなき夢の跡を慕ひぬ。

雪の朝

弘前　井上勝子

只一夜へだてしのみなれど 昨日にかはりて今朝の庭のけはいあなめづらし野も山も見渡す 限り音もせで降り積りたる白雪や昨日までは枯木と見し梢すら今日は時ならぬ花を咲かせ 常に見なれし庭の景色も物あたらしく覺ゆ檐の鳥は時々あやしげなる 聲してさばんともせず姿等の家居すなうらやましけに眺むるもいとあはれなり端 近う打ち出でゝ手水鉢の氷をたゝけば餌を與へらるゝとや 思ひけん牛飼の犬はせ來りあたら白銀の世界を何のおし氣もなく 蹴みつぶして梅の花を咲かせぬ彼しこには雞のありきし跡とも覺しく秋の紅葉の如く 春と秋とを一度に見し心地していと面白し雪は 豐年のしるしとかや實にめづらしうもありうれしうもあり來るもいとはで 打眺むれば折しも東の方より天津日の花やかにさし昇り 白妙の雪と光を爭ふ樣の美しさ又何にかたとへんあかぬ眺めにしばしは我を忘るゝばかりなりき

紅梅にそへて送る

長門　植村精子

先日歌かるたの集ひの時は誠に失禮したるまゝにて 御詫びの文も出さず打ち過したるは許し給へかし。

昨日今日の暖さに梅の 蕾破りぬらんと思ふ折りから今朝鶯の聲聞き申したるゆゑさてはと思ひ庭に立ち出で見れど 紅梅のいと〳〵美はしう咲きにほひて一羽の鶯まだ 幼げなる聲にてかなづる樣可愛らしく其の面白さ譬へん方なく歌ほしう 思へど拙なる筆に上しも得すまりさて此のまゝ止みなんは口惜しき事の限りなれば拙きを二つ三つ記し申しぬ。

今朝の事あまりに忘れがたきゆへ 紅梅一枝に其の時の歌そへて奉らむ 猶に御筆加へたまへ 只紅梅のみにて鶯の無きを怨み申せどこは致し方なしまづは思のまゝあら〳〵かしこ

我庭の梅ほゝゑみて鶯の初音もらせる 今日ぞ嬉しき

旭さす軒端の梅の今はしもにほひこぼれて盛なりけり

梅の咲く頃友の許に

豐後　小栗栖光子

春の寒さなほ去りやらず候へども いよ〳〵御揃いあそばし御きげんよく入らせられ候 御事御目出度存上候夫に玆許何れもぶじに致居候まゝ他事ながら御心安く思召願上候年あらまたりぬれば 殘りの寒さも何となう春めきて 此の内より打つゞく好天氣に春の情をやもらし候はん嚴父母が遺愛の老梅いぶせき 庭ながらいと清けに喜ばしげなる色をあらはし咲きほころびさながら家人を誘ふに 異らず候へば何卒一日は面白く此花をや賞せんと存じ候へども 内わのみにては面白みも少なく就ては兼てうちさけたる御前樣と花の下に 手をとり候へば私の喜びはさらなり花の面目いかばかりうれしがらんと存じまゐらせ候 至て見ぐるしき住居には候へども御差支おはさずば 御妹子樣御連れ遊し學校をも御携へ明日午前七時ころより御出で下され度御まち申上候かしこ

許　清樣

梅見の記

名古屋　長谷川ちやう

夜中の燈、朝の雪を友として學びの道に心をこめし日頃のうさをなぐさ

めばやさ思ふ折から 今日しもまがきの梅の三つ四つ二つほころびそめ空さへ打かすみてのどやかなるにつけて 去年たづれし其の梅園おもひいでられ親しき友垣のたれかれそゝのかして 出立の道すがらこゝかしこの軒端の梅さへ時を得がほに咲にほひて打すぎがたきにもかの 園の景色さこそさ思ひやられて急ぎにいそぎやがていたれは 池のほさりの老木の枝にさき出たる花の水にかげをやどしたるは 水底より咲き出けんさ見うけられ 或は白きさ紅の枝かはしつゝさき匂ひたる色香に木づたふ鴬のこゑの長閑けきなどげにいひ 知らぬながなるになほも一枝たなりして家づさになさばやさかなたこなたをかけめぐるにいつしか 日はくれそめたれどなほ木の間にみゆる夕月のかげ 床しくされどさまではさて名殘を止めて立かへりける

評 簡潔

洋行せし友を思ひて

備後 たかを

夜は沈々さふけゆきて 音もなく萬籟死せるが如き天地唯時計の音のみきれ渡る一室の内身は文机に向ひたれど 書繙かんさもせず清ねなんさする燈火見てあればありし事ども しのばれていさど 悲しく覺ねずおつる一雫意志薄弱いづこよりさなく嘲けるが如く頭をさせりさなり 意志薄弱何のかばかりの事何れは 君が出世の門出ぞ我さ我身を叱すれど 雖しき離別海原遠く船出し給ふ御身の明日よりは千里の孤客何所の 月を眺め給はん濱の眞砂に等しき 數ならぬ此身を妹さ愛しみ給ふに我も亦たより少なき身の兄君さ慕ひまつりて 互に慰さめられつ慰めつ過ぎつる日の久しかりしに 今よりは語らん友もなく誰を賴まん捨小舟さらばさばかり握りし手をはなされし時あわれ 思ふも涙の種されど我は幸く

ませさ聲はふるひたれど泣かざりきつきぬ 名殘に別を惜むもしばしの内汽車は播き初めぬさらばさ君は白き手巾ふり給へりされど心なの 汽車は何を急ぐにや忽ち手巾は見ねずなりぬやがては 汽車も只森の上に黑き烟のたなびくのみ思はじさすれど 其時の光景ありく頭に浮びて溢るゝ涙數滴夜はいたくふけぬらし檐に殘る枯葉を 誘ふ風の音さむし折しも聞ゆる詩吟一聲殘月滴露人袂沾あわれ 君の愛吟なるよいつの頃なりけん紅ふかき紅葉の下彼の 句學びしはまたもやおこる懷舊の念晩風吹髮秋冷再び聞ねぬ聲もほがらかに覺ねず立ちて障子あくれば 月光白く地にたなびきて黑き板塀の下人影一つ

評 健筆可羨

工女の夢

丹波 田井 かね子

アレまでは勉強家! さ村の若衆達が摸範たりし兄上、アノ腹黑き叔母樣さ意見の衝突より起り初めし遊興三昧ソレが嵩じて賭事さやら、勿体なや父祖傳來の財產は 酒さ色さ慾さのため蕩盡せられ止むる此妹を足蹴にかけ家を出でられぬ、あはれ木より落ちし猿に均しき身、 人鬼の手より斯社の工女さなりしより早や三月兄上や今は何處に、

昔問ソレ木嘗よヤレ錦よさ立ち働くにつけ、多くの婦女は蝶よ花よさ侍女供に傅かれ今日は 抹茶生花の席明日は御歌の會など、 騒がるゝに我は何さして……、アノ汗さ油に臭き仕事着を被るにつけ、 多くの婦女は物見遊山に彼やよけん是や用ひん其稲模樣をさ抱ねの 車夫を呼び立てらるゝに、妾は如何にして……、 嗚呼過ぎ去りたまひし父母のせめてお一人だに在しまさば、たさへ側に侍る人なくさも自用車なくさも相應の慨嘆はあるものを、 否々羨やむまじ是れも我身の 不德より來る因緣

ぞ、未だ憂き世には妾より悲境に陥り居る人もあらむなど思ひ浮べては晩鐘の響高く吹雪の夜風身に染みて眠られず、

眠られぬまゝに起き出れば懐しき兄上、オゝ雪子其處にか是れまでは其許に苦労させた免してくれ是れからは樂させよう會社も罷めよ、……さ顧みたまへば其妻にや丸髷姿床しく、ホントにお可愛想に可惜媛盛りなさ携へし包より此れは小姑への土産物さ出す、櫛簪帯小袖嬉しや兄上お心直りしかお嫁様も出來て且種々の賜物、耻かしや嫂様妾が此姿さ思はず手を取れば、雪チヤン何して夢でも見てさ笑ひ起すは隣に臥し同じ職業に苦む友の花ナヤン、嗚妾は暫時眠りしかさ覺むれば淒き寄宿の一室、猶き衾の中、早や起きよさの警拆は地獄へ導く鬼の鐵棒の音かさ聞へし、

評　書様幼稚なれご實境描き得たり

都なる兄上の許に

四多摩郡　千代子

御寒さ強く御座候處兄上様には御變もなう御きげんよく入らせられ候御事御目出度存上候此方皆々丈夫にて常に笑聲のたへし事なく樂しく暮し居候間御安心被下度此は秀雄の七才の春を祝して近日撮影致し候間一葉御送り申候帽子は兄様に頂いたのでなくてはいやだ僕は何んでも兄様の通りにするのださ申て手袋をはめ居候へ共寫り惡しき故か判然させぬさて本人は、殘念ださ申居候母上は袴をつけぬ方が宜しき樣に仰せられしが男子は凛々しきこそよからめさ存じわざさつけさせ候處本人は大喜びにて此れで兄様の様になつた今に大きくなつたら兵隊に行て服を着てさうしてれサーベルを持つのださ今より申居候常より勇しき事を好みて負るきらいの氣質末頼母しき樣見うけくれ候別紙は秀雄の書初故取そへ御目にかけ申候折節來客ありし故母上には只宜しくさのみにて大儀にゆづるさの事猶申上度御事は山々に候へ共此の次の語草にさ申殘し惜しき筆さめ參らせ候かしこ

誠の愛

大阪　伊達朝

已過し日友がり訪ひ歸るさ犬の痛く悲しげに鳴く聲きこゑぬ怪みつゝ進み行く程に一疋の黑犬の目のあたりより血しほ流したるが足を痛めしにや片脚を引きずり引きずり悲鳴をあげて驅せ過ぐる後より年頃三十許の婦人のさも腹立たしげに怒りの聲張りあげ今宵の晩餐の用意にさてわが好める黑鯛を求め置きたるをいつの間に盗み食ひしぞ覺へ居れさ尚も追ひかけ打たんさするにぞわれは悲鳴をきゝしより憐の情起りし折からさてわれ知らず走り寄り婦人を宥め樣々に慰めしに婦人もやがて怒りを沈め歸り去りぬわれは持てる菓子を取り出て犬を呼び寄せ與へんさすれご犬は恐れて近寄らず側に待ち行き與へけるに犬は恐ろ々食ひぬわれは喜び其背を撫で黑よ々々さ呼ぶに尾を振り隨ひ來ろ飼主札もなきまゝ我家へ伴ひ歸り夫より不二さ名付け飼養しぬ」彼を飼養してより日尚淺きにさながら生れ落つるより此家に飼はれしごさ家人を慕ひ暫時も我傍を離るゝを好まず出れば必ず跡を追ひ來り歸れば戸外に出で迎へ尾を振り頭を摺り付け嬉しさに堪へざる者の如し夫自由の意志を有し世道の重んず可く人情の何たるを辨へたる我等人生に於てすら尚且時に愛憎の度を量るかの如く或は悦び或は怒す況してや其關せざる事にして責められむか必ずや反覆其實なるを辨ぜむ辨じて容れられざる時は永年受けし恩惠も一朝にして忘却し顧みざる者あり嗟歎慨すべき鍛さるに我不二は故なきに幼き妹の打つ事度ゝある

も怒りて報はんともせず恨みて 去らんともせず唯耳を垂れ下げ悲しげに鳴きて只管憫みを乞ふ樣にて 露だにも怨ずる色を示さゞる而已ならず己に仇する 小主人の其友と言爭ふ事などある時は彼は必死となりて小主人を守護し營衛し全く己を打忘れたる如しあゝ 可憐なる我不二よ汝婚しくとも語る能はず 悲しくとも訴ふるを得ず汝恩を受くる滯くして報ゆる心のいかに厚きよ其愛の淸くして 仇なきは殊に感ずる所なり己中に省みて大に恥づわれは 献身の愛を不二に學びぬ

たのしき一夜

上野瀧子

今夜かるたのまといすべければせちにと 知るべが方より案內給はりし嬉しさにそゞろ 古年の事ども思ひ浮べて母君に願ひてみゆるしうけしうれしさ今日のみはくるゝ 空のみ樂しくて待程もなくともし火つくる頃再び御使たまはるに急ぎて目ざす方にぞむかひぬ 道すがら十三日の眞晝の如き寒月は大海ならぬ 青畑をてらし人足遠き山里は一しほ物さみしくさてまどゐの君たちは常には友ならねども 知るもしらぬもまどいして 今夜幾度のたゝかいに敵と成味方とたのみやがて大御代の光限なき燈下のもとにぞ 始めしは九時頃ともおぼへし某の君には讀まぬ先より大手ひろげておのが陣を守り給ふ 其れの君彼の君御用意とり〳〵にいざよみ給へとのたまへばあるじの 君御聲高らかによみませばすわこそと我もゆだんなく 陣を守るに互にまけじをさらじとふだのちぎれん程にもみ給ふ常に は手弱きおみなも今夜はあやしや力强うおはして男君とあらそい給ふも處から 興ある事にこそやがて一組の君には先づ吾等は一番上りぞとてかちどき上げて 立ちませばあなにくや君は一番上りにあらずよ人の取りしを 橫どりしてするき君とざれ給へば彼の君いかでまじめで勝つべきや 手早くするうしてこそ上手なれと甲斐なき事をあらそいて 時をうつすもせんなしや又よみ上ぐる御聲をきゝては わが陣を御膝の下に入れ給ひける 君君こそずるうおはすぞよ尋常に出し給へとのたまふ彼の 君は席せまければとて並び並び玉し君たちの眞中にとび入りてたへず御手にもち給ひぬ 今夜はい軍のばつよと逃げ廻り給ふ君を手どり足どり 御頭にくろきしるしぞあらはしける次にこそ此恥辱を必ずそゝがばやと 意氣ぐみ給ふ君のありてこそ此まどいはゝねある事に思はゆる某の君はこの 如きたゝかいにあまり速に上るは興あらず終に成てこそよけれとまけおしみし給ふ君もあり 又某の君はとてもふせぐあたはじとからくもにげ 給ひ人々のぬぎつみ重ねし羽織あるは外とうの下にかくれて 安らかにいつよりかねむり給ふ君もおわすよたゝかいすみて彼の君いまさねば 歸りませしかいづく〳〵と見てければあやしき方にていびきの 聲しければあれひきやう物よされみゝに黑き水をぞかけてける 彼の君「らんぼう」よとやおら起き給ひおいませる君にげませる君は彼の君のおもはを 見給へとて立踊り給ふ一度〳〵の決戰ごとにおいませるにぐるのさやぎも又一のかつせんよゝそに見る目はいかにこつけい成しが某の君はいかゞせしやいづく 行ませしと伺ひ給へば彼の君は先程より人目を忍びて 火桶のかげにかくれませるよ扨てやう〳〵ふけて今は 草木もねぶる眞夜中に近くの家々のせきばくをやぶるらんさぞやとけいのはりのたゆみなく 時のかず〳〵つぐるを知るやしらず 一同にさやぎてこそはあかしける

評　此の文冗漫の嫌あり今少し簡潔にあらまほし

庭の紅梅

高知　あさつゆ女史

吹くさしもなき春風にさそはれて、そこはかさなくさまよひ出ぬ。咲きつゞきたる菜の花にたゝずむる小蝶の三つ二つ、高く低く、ひら〳〵さ黄なるは山吹、白なるは櫻の散りゆくそれにも似て、彼方の森は淡く淡く、霞に包まれて、夢の如く、空にさゑづる雲雀の聲のいさもすが〳〵しきを、などて我一人かく物思ひの淵にしづめるならむ。秋はよろづ物悲しきならひなるを秋去り、〱去りて此樂しき春にあふさも、いかでくるしき我胸の思ひを去るよすがさならむや。

昨日今日笑み初めし梅の花、一輪二輪つぼみをやぶり得ならぬ香をはなちて、胸の浮雲拂はんさすれどいかにせん、いやまさりゆく悲しさ。なつかしき妹よ、こひしき千代子よ、汝はいつも此紅梅の花をこよなう親しき友させり、「姉上よわらはは此花のごさいかにくるしき事ありさも慰たゆまず」さていつも梅の一枝を文机のもさにさして、怠らず愛め翫みみしが、梅の實の熟する頃頭重しさて打ふしたりしがたゞかりそめさのみ思ひしが次第に重りゆきて、夜雨梢にそゝぎ、狂風花を散らすの夜、遂に最愛の妹は長き〳〵眠につきぬ。

右手に梅の一枝もちて、左手にて妾の手しかさにぎりしまゝ。あゝ神も此愛らしき幼児のむをめでゝけがれ〳〵し塵の世に置くを忍びずして、清く美しき神の御國にめし給ひしにはあらざりしか、あはれ。折しも梅の枝にやさしき鶯のこゑ、やよ鶯、しばしまたれよや、我亡き妹のことづていかに。

掲載外優等の部

○新年の決心(藤波正子)○春の朝(三原花子)○すみれ花(堀口きく)○戀ひしの君(佐々木さみ子)○まゝならぬ浮世(久保すいち)○屑籠の香(しら菊)○前崎てる子○姉の許に(小林みよ子)○佐々木さく子○長谷川ちやう○吉川千代○中谷登羽子○松山仲子○しらなみ○星野英子○周防艶子○中山武子○橋本ます○前田美子○田波秀子○岐阜みどり○荒木花子○近藤榮子○山下さめ○松下まさこ○北島つれ子○栗田よし子○瀬口なか子○北濱ふみ子○弘中きよ子○和田きん子○荒井輝子○關川君子○森みよの○福家八重子○佐藤春子○井上勝子○神田鈴子○沼田すきゑ○藤波正子○原しき子○堤崎すみ子○信濃ひで子山崎倫子○猪狩きん○秋田きん子○松下まさ子○大阪八重子○富山そよ子○豊前さきは○井上政子○鈴木たみゑ○池永文子○椿本花子○廣瀬三衣○山田ふさ子○栗原千代子○佐々木さよ子○みどり女○松本しん子○四辻あや子○關家やゑ子○井川ふい子○田崎秀子○糸田みよ○新保照子○榎木すみ子○小池花子○猴山かめ子○伊藤織重○内那佐美



花賣女（甲）

山口縣美禰郡岩永村　井川ふい子

やよ少女子よ待ちれかし
　自然のかみのふところに
うち抱かれてきよらかに
　咲き出でたりし其の花を
いづこの里にもちて行く

ながき月日のいたつきに
　なやみますなる汝が父を
かひ〲しくも助けつゝ
　かよわきなれがやせ腕に
やうやく立つる細けぶり

あゝなりはひの爲さては
　やさしき蝶のふしどをも
うちあらしつゝ汚れたる
　人のこゝろに媚ぶるべく
塵のちまたにはこぶさか

神のこゝろに打ちそむき
　なほき枝さへ折りまげて
たくみに誇るつみの子の
　手にしぼみゆく花やさぞ
うらみの涙灑ぐらむ、

野べおくり（乙）

町田周子

夕の鐘に送られて
　夕の風におくられて
　　野邊をたどる棺物の、
中に收めし小棺に
　紅き綸子を被せたるは
　　世つかぬ花の少女かも、
あゝ帯くけて袖つけて
　裏はづかしき紅綸子
　　人に隠れて縫ひしなさ、
ひつぎの右に泣くは母
　ひつぎの後に沿ふは父
　　父さ母さにさもなはれ、
露深く分け入れる
　花の乙女の後追ふて、
　　舞ふや胡蝶の羽重し。

胡蝶（丙）

羽後横手　小西秀子

草に宿る白露を
双の羽袖に抱きしめて
夕風かろく舞ひのぼる
胡蝶の夢を嗤ふなかれ
ねむれる靈魂を導きて
み空に還る神の子の
きよき姿と見ゆらむを。

あゝ胡蝶よ君が身は
花咲く陸に生れ出で
羽に觸る葉の花亨に
小さき樂の魂を秘め
朝の風ひ囁きつ
夕べ小草の露汲みて
露を抱いて舞へるかな。

せめて胡蝶よ人の世の
奇しき思ひを去らしめて
戀になやめる少女子の
背戸にかなしき聲きかば
忽ちそこに訪ひよれな
今我朽ちし井桁に凭りて
君を慕ひつ歌ふなり。

仰ぎ見よ

伊勢四日市四ツ谷新町　阿部文子

空にあやなす雲の色

峯には松のしらべあり
野にも山にも花薫る
自然のたくみ面白や
吾歌はんと願ふなり
吾畫かんと願ふなり
されど世の人いたづらに
歌ひそ畫きそ
人の力は細くして
歌はゞ切るゝ琴の糸
畫かば筆に悔みあり
されば世の人いたづらに
歌ひそ畫きそ
只そこしねに仰ぎ見て
自然の母の暖かき
袖に蔽はれ樂のごと
花のまに/\
風のまに/\
讃美の涙高く捧げん

君の猫

北信小縣郡 田中村 樋口藤代子

文よむ君の膝の上に、
長閑き夢をむすぶとき、
たのしからずや汝が心。

やさしき君に抱かれて、
蝶まふ園に遊ぶとき、
うれしからずや汝が心。
月、雪、花にさそはれし、
なれが心のうれしさを、
せめてはかたれ君の猫。
實にうらやましきは汝が身よ、
なが身の如く欲すれど、
世はまゝならぬ闇あれば。

* * * * *

儚なき蝶にあこがれて、
うらみにむせぶわれありと、
告げてよ君にそれとなく。

梅ちゃん松ちゃん

清水谷鴫川

梅ちゃん松ちゃんお休みよ
ちいさな御床はあつたかに
ちいさな人形は待つてゝよ
早くねんねよおころりよ、
柱時計のカチカチと
御枕もとにひゞく時
玉のかいなは夜具より出でゝ

あやしくあたりにころがりぬ
小さなまぶた閉ぢしまゝ
笑ふは何を夢むらん
月の世界か花園か
神の愛手に抱かれてか
夜はもう疾うに明けました
早くお起きよ嬢さまよ
軒端の雀はチュー/\と
お日様たかく笑つてゝよ

兄さま

乙羽子

其一

兄様よびてかあさまよ　ふたりがうゑし菊の花
はや三までも咲いでゝ　蕾も多くあるものを
兄様などてかへらざる

其二

早くみのれと願ひてし　お庭の葡萄ふさ/\と
葉も重げにきのふけふ　るり色づきて稔りたり
兄様などてかへらざる

其三

池のみぎわの草むらに　雛鳥ながめしその折に
雛を生むと言はれしが　今は四までうまれしを

兄様なさでかへらざる

其四

見さまはやく歸りてよ　いかに遊ばん永き日を
ひとりし遊ぶ淋しさよ　見さま歸り來まさずば
蝶もいやなり花も實も

小作人

伊勢四日市四ツ谷新町　阿部文子

奴隷の泣きし封建の
時代と同し掟米
車に盛りてよぼ〱と
地主の庫に運び行く
老ひたる農夫の影哀れ
膏の汗を搾りつゝ
堅き鍬の柄握りたる
其のくるしみに報ひんと
天の賜ひし賜物を
奪ひ去られて冷たくも
薄き情の衣着る
生れながらの小作人
あはれ弱肉強食の世とかや
強とは何よ
弱とは何よ
月に問へどもほゝゑみて
稲の刈り跡寂くして
千町田遠く寒くして
そこに哀の影宿る

梅と月

伊勢國宇治中之切町　河原芳子

梅

あゝ春ごとに　ほゝゑみて
花のすがたを　よそへども
君に逢ふまの　みじかくて
思ひはとほき　闇の空。

月

夜の女神の　かざしには
星のひかりを　宿さむに
春やむかしの　春ならぬ
戀をあはれと　おぼされな。

梅

さば涙なき　人の子の
破れし軒端に　たゝずみつ
かくて散行く　運命かと
我れは闇夜を　泣きにけむ。

月

あはれは多き　君が身の
若き齢に　酔はむにも
など永久の　かたらひに
清きなさけを　けがさむや
咲ちたまひぞ　梅の君。

かたみ

石川縣鳳至郡輪島町河井三　櫻木壽美子

今日おくつきに詣でんと
　稚兒が晴衣を出だすべく
あけしつゞらのかたへより
　はからず出でしひとひらの
　うつしゑは誰が形見ぞや。
母様これは誰が寫眞
　稚兒は乳房を持てる手に
ささくとり上げ愛らしき
　面をあげて母親を
見つめしまみの罪なさに
　母の眼はうるみ來ぬ
　語る言葉はふるひけり。
さち多かりしいにしへの
　夢くりかへす涙にも
うつる面わは見ねながら
　なれに逢はせん父ぞなき。

枯野

神戸市下山手通二丁目　五百枝子

菫つみにし野邊やこゝ　黄金の色にほこりたる
菜の花いづこさぶ蝶の　夢にも似たる果なさよ
螢たづねし野邊やこゝ　玉さみだれしその光り
あえなく消て今ははた　何のなごりか殘るらむ
萩の咲にし野邊やこゝ　錦さばかり見まがひし
はえある色はしら露の　消て跡なくなりにけり
今冬枯の野にたちて　すきにし方を偲ぶれば
唯まぼろしの夢なれや　晩鴉みつよつ鳴きりつ
おほざれふしゝ枯薄　夕のしもはおきそめて
みそらに高き月かげは　物凄きまできらめきぬ

亡き妹を思ひ出して

備中玉島町　大野悦

思へは今は二たとせの　昔しの夢となりけるよ
わがなつかしき妹は　如何なる風や誘ひけむ
遠山寺の鐘の音　諸行無常と告る頃
桐の一葉の音づれて　露と儚なくなりしより
二たび花は匂へども　二たび雁は音づれど
我のみ一人如何せん
ありし昔の春の日に　桃の小枝を手にもちて
やよ姉上よ聞こしめせ　妹が手にせるこの桃を
籬のそばにさしなかば　妹が學びの業終へて
學びの舍を出づる時　味よき實をも結ぶらむ
其時汝は心して　土かいやらむ姉上よ
笑み樂しみて植にしを　今や界を異にして
手植し桃は花咲けど　手植し桃の實はのれど

撰外優等の部

新体詩　山口楓葉○遠藤久千○浦井まつ子○岡田美千代○大木くに子○みどり子○川達秋子○小山松枝○朝霧女史○柿野さし子○工藤京子○青柳秀子○津家よろ人○石村歌子○白香女史○菅谷なほ子○田中常子○西野幸子○三瀬菊子○阿部文子○橋本しげ子○三尾眞佐子○白百合○阿部文子○さだ女○都野しげ子○伊東綾枝○みぞれ○横尾まつ子○木村直子○青木茂子○あやふ○廣瀬三衣○鈴木雛子○ふさ子○森みよの○岡田道代○乙羽子○藤家八重子○山崎りん子○康子○松下眞佐子○椿本花子○馬田喜惠子○眞鎖○大久保愛子○星野英子○青柳秀子○堀内ます○秋月英子○永橋しぐれ○河原秀子○石井歌子○佐々木さく子○井上靜子○杉生千代○おはし○塚崎久子○前田美子○小山松枝○つゆ子○高橋みどり○岡本匡子○嵯峨すみ子○田中璃璣子○名木山靜子○谷村秋子○花井なか子○中山久喜子○森美子○加藤たけ○青木京子○長谷川ちやう○田中常子○中谷音羽○井上うめ○町田岡子○井川ふい○高橋雛子

▲タヲルの洗濯競爭　去る頃英國リバープール市の某教會に開かれたる慈善會に附屬して催ほされたる珍らしき競爭は四拌手拭を洗濯する競爭にして二分半の間に多くのタヲルを洗濯し上げたる者を以て勝者とし一定の賞與を與ふるに在りしが、其日は參觀の婦人は何人を問はず自由に競技に加入し得ることに定められありしと云ふ、此の競爭後には大に一般の歡迎する所となり、所々方々に行はるゝに致りし由なるが、或所にては競爭者を既婚未婚の兩種に分ちて競爭せしめたるに、勝利は常に既婚婦人中に多かりし由なるも、時には兩者殆んど同一の成績を呈し勝敗決せずして分れたることもありと

●私立裁縫女學校（芝山内）

同校は多年學校講習會等に實地教鞭を執りて名ある戸板せき子女史の私設する所にして、女子に必須の裁縫術を修得せしむるの目的を以て、本年一月校舍を芝公園第二十一號地能樂堂前に設置して以來授業をなすの日尚は淺しと雖も既に卒業生を出すこと前後二回に及び、頓に校運の隆盛を來たし、目下は百二十餘名の生徒を養成しつゝありと、其學期は前期後期に分かれ各々三ヶ月、即ち六ヶ月を以て速成的に業を卒へしむるに在りと云ふ、而して同校の教授法は在來の諸學校とは大に其の趣を異にし、總て分解的の教授法を用ゐ生徒をして一齊に學修せしむるにあり、記者が同校を訪問せし折は恰かも前期生の綿入仕立中にてありしが、記者の爲に特に運針術の教授を實見せしめんとて、先づ教場内五十有餘の生徒をして一樣に二尺五寸許の布片を取出さしめて『運べ』の號令を下せり、仕事机の前に姿勢正しく坐したる生徒は此號令の懸るや一齊に針を動かし始む、軈て『拔いて』の號令と共に運動はハタと止りぬ、秒時にして『運べ』又た『拔いて』と同じ技術を繰返すこと兩三回、針の歩、手の運びの快速なるは驚くに堪へたり、以上は唯だ運針に就ての一節を示されたるに過ぎざれど、入學してより一週間目には早くも單物を一時間にて縫ひ上げ得るといふが如き、又組縫ひといふて一枚の單衣を三人懸でなす時は遲くも十五分時にて足れりといふが如き、如何にその技の駿速にして實用的なるかを想見するを得べし。尚ほ又た同校には實業部なるものを併置し、餘裕なき人々の爲めに無月謝にて斯術を教ふる傍ら、足袋、襯衣、袴下等の小物類を縫はしめその賣上高の幾分を賃錢として給するの設備さへあり、同校學科課程表を掲ぐれば左の如し

寄宿五圓　月謝一圓五拾錢　束修一圓

前期

●總論、運針、尺度數、縫合物・衣服名稱、本裁男女單物裁縫
單物羽織裁縫　袴上ヶ方、本裁男女綿入裁縫　本裁男女袷羽
織裁縫
●洗濯及補綴　子供及袍着裁縫　飾割　綿入羽織小供物及
本裁々縫　男女帶縫方　小裁中裁十番袴裁方積方

後期

●男女單物仕立　單物羽織仕立　男女袷羽織仕立
下、シャツ裁縫　改頁前掛、腹掛裁縫　本裁中裁小裁被布男
女合羽裁縫　男女衣服重物裁縫　男女帶仕立方　片面三

身幾並幅中幅大幅羽織及被布　十番裏付袴裁縫　結び物　飾縫
●女袴大中小裁縫方
夜具類裁縫　小物類、巾着頭巾信玄袋莚掛類　股引半股
引　脚半　足袋裁縫　單重比翼裁縫　肩衣及垂衣　甲斐
絹襟揚方
（前後期共凡ソ七十五日四百五十時間ヅヽ、前期は主として木綿物、後期は主として絹物を教授す

○新年歌御會始

去一月十九日は宮中歌御會始の御當日なりしに付午前十時天皇　皇后兩陛下には德大寺侍從長、田中宮相、香川皇后宮太夫以下侍從各女官等を隨へて鳳凰の間に出御あらせられ當日の所役たる讀師、講師、發聲、講頌、奉行御歌所參候等の諸氏參列の上御廂には讀師控東久世伯爵を始め御歌所員一同並に拜觀員順次着席御恒例により御式を行はせられ同十一時半兩陛下には御機嫌麗はしく入御次に參列の諸氏に御酒肴を賜りたる由當日御前にて披講せし御製及御歌並に撰歌は左の如しと

新年海

御製

あつさゆみ八洲の外もなみかせの
しつかなる世のとしたちにけり

皇后宮御歌

いくさふねいかりおろしてあた浪も
おとせぬ御代の年いはふらし

東宮御歌

ふねことにしるしの旗手うちなひき
うらにきはしく年たちにけり

東宮妃御歌

年浪のたてるあしたはうなはらも
あらたまりぬることゝちこそすれ

撰歌　京都府平民　正七位　則武正副上

ゆたかにもあさしはみてりわたの原
年のはつ日のかけをうかへて

撰歌　東京府士族　根岸敬女澄江上

あらたまの年のはしめのよろこひを
たゝへたりともみゆる海かな

撰歌　愛知縣士族　中野知佳上

ふしのねの雪のひかりにあけそめて
年たちかへる田子のうらなみ

撰歌　兵庫縣平民　大日本女學會會員　小出楢子上

うらなみにあまのよひこゑとよむなり
年のはつ網幸こそあるらし

撰歌　岐阜縣平民　西村孝之助上

のとかにもとしたつ浦のはつあひき
おものゝ鯛やまつかゝるらむ

撰歌　熊本縣平民　北里直樹上

ふねはみなとに入りて年のたつ
あしたしつけき海のおもかな

懸賞文募集

女學世界
定期増刊
（三月十五日）發行

花にしき

投書〆切二月十五日限

才媛詞藻
春の巻

我が女學世界は才媛文學の進歩を圖るの目的を以て、來る三月十五日を期し、定期増刊『春の巻』を發行せんとす『花錦』即ち是なり、意匠の斬新なると資料の有益多趣味なるとは今更喋々を要せず、されば先づ編輯の準備として汎く作品を天下の女學界に募る、懸賞課題等は下に記す如し、時は是れ艶陽の好時節滿眸の櫻花正に研を競はんとするの時、乞ふ徐ろに錦繍の心腸を錬り華麗の筆を揮はれんことを

文種

▲小説（題随意）
二十行二十四字詰にて紙數十枚まで

▲和歌（題 春 貝 船 女學校）
端書に一題一首の事

▲新體詩（題随意）
三十句限

▲消息文（候文 言文 随意）
二十行二十四字詰にて紙數一枚限り

▲普通文（課題 女子と學問 花）
二十行二十四字詰にて紙數三枚以内

賞品

特賞
金五拾圓　壹名
金五圓　壹名
甲賞　金三圓（圖書切符）五名
乙賞　金貳圓　仝　六名
丙賞　金壹圓　仝　拾名
秀逸　金五拾錢仝　三拾名

注意

▲特賞は小説の優等者に限る
▲和歌の高點は別に乙賞以下にて相當の賞品を呈す
▲普通文に限り一等五圓二等三圓三等一圓四等五十錢圖書切符を呈す
▲原稿二枚以上は紙捻にて綴る事
▲封筒には必らず『花錦』と附記すべし

女學世界第參卷第參號記事豫告

（三月五日發行）

毎月五日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）…金二十錢
四册（三ヶ月分）……前金七十五錢
八册（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
内｛定刊數………………十二册
　｛增刊四回……三、六、九、十一月價格同一

郵税　一册　二錢

廣告料

	二十四字詰一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	四十四錢	十四圓〇八錢	割引三十三圓
一等	三十六錢	十一圓五十二錢	割引二十七圓
二等	二十九錢	九圓二十八錢	割引二十二圓
三等			割引十八圓

▲等級の位置ハ切日等御照會次第御報可致候

注文規署

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
●郵券代用は一割増にて五厘一錢の切手に限る。
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ。

明治卅六年二月五日發行　第參卷第貳號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　水谷景長
印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　合資會社博進社
發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局
三百三番　千十八番
二千六百二十番

佐々木弘綱先生著　佐々木信綱先生補

（第九版紙數七百八十頁）

增補 詠歌自在

全壹册

洋裝上製總クロース
金文字入頗る美本
正價壹圓　郵稅拾二錢

此書は故の佐々木弘綱翁の著にして、息信綱先生に增補を請へるもの初學を導くと最も懇切なり而て本書の特色といふべきは、歌題を改良して、當世に適せざるを省き、歌題を載せ、且つ作例の歌を精選せるにあり。尙は本書の体裁はまづ題の作法を示し、次に句々順序に隨ひて歌詞を截せ作例を擧げたり

落合直文先生著

新撰歌典

正價四拾錢郵稅八錢

落合直文先生は當代國學家中有數の人なり、本書は先生が精緻なる蘊蓄の端一にして、初學者を稗補するとの大なる發行以來第十一版を重ぬるに見ても知らるべきなり世の文學嗜好の人は既に已に知られもせんが和歌沿革の如き作法の如き最も面白く書き綴られ殊に類語は充分に枯選せられ證歌は萬葉をはじめ代々歌拱集家々の歌集最近歌人の作に至る迄其英華なるには漏すところなし就中長歌の如き今樣の如き先生の經營慘憺たる用意の周到は諸者の既に知らるゝ處世の歌に心掛けある人是非購ふて几上に備へられたし

大和田建樹君著

日本大文學史（全部五冊）

洋装並製總紙數千五百頁
正價一冊四拾錢郵税八錢

文學史は文學發達の歴史なり、故に苟も斯道に志す人の明にせさるべからざるものとす　大和田先生が斯道の指導者として、特に得意の此著を成せしは偶然にあらざるなり四方の君子請ふ明窓浄几の下此寶典を繙け寔に造詣する處深く廣く斯文の室に入る蓋し難からざるべし

華族女學監下田歌子女史著

女子普通文典

▲全壹冊和装美本
▲正價卅五錢郵税八錢

日本文は文章と言語と全く相異なり且つ書翰文体の一種亦別樣なるが上に男女の文をさへ區別せらる故に女子が文書の便りに其特有の文典を要する辨を要せさるなり本書は其急需に應せしもの說述懇到又精緻

落合直文君著

日本大文典

全壹冊洋装上製背皮金文字入
正價金壹圓七拾五錢郵税八錢

世に文法を學ぶべき書、多しと雖も、完全ならざるは、世人の認むる所なり。落合直文先生常に之を歎せられしが、幾多の春秋を經て、刻苦研磨玆に一大文法書を著はされたり、古今の文法書を參酌して、其精を拔き其粹を採られたるは勿論、其議論の精覈詳密なると古人未發の考案多きとは實に本書の特色なり

家庭

下田歌子女史著

東京本町 博文館發兌

第壹編 女子書翰文

書翰は先づ自己が云はんと欲する所のものを意の如く筆に寫し得られんことを務むべし、本書は此趣旨に依り丁寧懇切に書簡文を説明せられたり

第貳編 女子普通禮式

本書は斯道に智識經驗深き下田歌子刀自が古今東西の制を一々挿圖によりて陳述したるものなれば其圓滿完備斯道の指南車たること言を待たず

第參編 詠歌の栞

本書は類題歌詞材料作例書式等現今に行はるゝものゝ中最も必要なるを取り初學輩のたづきとなさんとす、詠歌の栞として本書の右に出づるものなけん。

第四編 料理手引草

夫れ料理と献立とは之を修めたる人と雖困難を感ずる所なり本書は專ら其實踐と衛生と經濟との注意を主として年若き主婦が參考の一助とす

第五編 婦女家庭訓

此編には其母たるべき人の注意衛生の點より幼兒が漸々發育して小學校に在る程の事及其翫具遊戲の有益なるものをも丁寧懇切に擧げ示さんとするなり

第六編 母親の心得

本書は母親の守るべき德義責務より妊期中の心得育兒法小兒の取扱ひ哺乳小兒の衣食住虫齒種痘小兒の疾病負傷遊戲翫具傳婢伽等を親切に述べたり

文庫

第七編 家事要訣

本書は衣服の取扱方裁縫洗濯染物等の簡易法及び住居の選定搆造に就きてその注意殊に室内装飾清潔法及び金錢出納家事經濟の概略を詳述せり

第八編 女子手藝要訣

蠶桑裁縫刺繡押繪編物等凡て我邦の女子に缺くべからざる手藝は一々圖解して說明を施し之れを讀めば師に就かずして各種の工藝自ら悟了するを得べし

第九編 女子普通文典

浩瀚難解の文法書は世其選多しと雖も、專門の學生に適すべく以て日常家庭の用に供し難し、此書は煩簡中を得最も女子日常の用に適合せるものなり

第拾編 女子作文の栞

本書は先づ文章の作法を示し、且つ種々の場合に望み種々の題を採りて、斯うやうの材料に成り立たしむべきものぞと云ふことを敎へたり

第拾一編 女子遊嬉の栞

本書は專ら女子幾多の遊嬉中其體育に將た智育に有益無害なるべきものを選びそが心身の發達を助く又卷頭には我國太古よりの遊嬉の沿革を記したり。

第十二編 泰西所見 家庭敎育

我國外邦に交際する今日婦女の彼國婦人と交際するの必要尤も多しそが第一に心得べきは彼國家庭の如何を詳かに知るより急なるはなし本書之を詳記せり

正價

壹冊金參拾五錢●參冊金壹圓●六冊前金壹圓九拾錢●郵税壹冊六錢●拾貳冊前金參圓六拾錢▲本書は全編何れも女子に取りては欠くべからざる有用の書冊なれば是非全部を通して講讀ありたし

（後付の五）

日用百科全書

全部五拾册

本書は家庭日用必須にして知了せざるべからざる藝術事項を網羅し以て齊家處世の指針に充てんとするもの家長主婦たるもの座右に欠ぐべからざる要書なり

第一編　和洋禮式
第二編　茶の湯と生花
第三編　實用料理法
第四編　家政案内
第五編　琴曲獨稽古
第六編　衣服と流行
第七編　裁縫と編物
第八編　住居と園藝
第九編　勤學と處世
第十編　育兒と衛生
第十一編　俳諧獨學

第二十六編　致富要訣
第二十七編　書法自在
第二十八編　工業大意
第二十九編　農業大意
第三十編　内外遊戯法
第三十一編　商家書翰文
第三十二編　陸海軍人書翰文
第三十三編　農工書翰文
第三十四編　記事論説文範
第三十五編　外國貿易案内
第三十六編　會社銀行實務案内

（後付の六）

第十二編　通俗書簡文
第十三編　西洋料理法
第十四編　旅行案内
第十五編　祝辭演説法
第十六編　聲曲自在
第十七編　作詩自在
第十八編　作文自在
第十九編　商業大意
第二十編　圍碁と將棋
第二十一編　作歌自在
第二十二編　化粧品製造法
第二十三編　書法自在
第二十四編　秘術傳法
第二十五編　日常行爲法則

第三十七編　官私學校就學案内
第三十八編　寫眞及幻燈
第三十九編　内地雜居改正條約案内
第四十編　國民必讀陸軍一斑
第四十一編　易占及骨相法
第四十二編　國民必讀海軍一斑
第四十三編　相撲と芝居
第四十四編　養蠶と製糸
第四十五編　謠と能
第四十六編　造家と築庭
第四十七編　世界宗教一斑
第四十八編　狩獵と養鷄
第四十九編　果樹と蔬菜
第五十編　水練劍術柔術馬術銃術弓術諸藝指南

裝釘　大判洋裝紙數凡一冊二百五十頁　**正價**　一冊貳拾五錢●六冊壹圓四拾錢●十二冊貳圓七拾錢●廿五冊五圓五拾錢●全部五十冊拾圓●郵稅一冊六錢つゝ

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　**博文館**

女學世界
每月壹回五日發行
第參卷第貳號
（明治參拾六年二月五日發行）
（明治卅參年拾貳月廿五日第參種郵便物認可）

少年世界定期增刊……二月十五日發行

お伽芝居 春若丸

小波山人作
米齋畫伯畫

日本には類の無い、お伽芝居の序開きに、小波山人が苦心の此作は、これも獨逸土産の一つ、彼地の中古に名高い物語を、我日本の時代物に、作り變えた所がお慰み、その登場の人物には可憐無邪氣の春若丸の他に、慈愛溢るゝ、父母あれば姦獰極まる老婆あり、牧童出つれば、山賊も出で、狂女あれば、仙人もありて、其天來の妙想には、魂舞ひ神飛ぶの感あらん、見よ〳〵！！

▲正價金拾錢▼

▲郵税金壹錢五厘▼

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

（定價金貳拾錢）

 （東京市小石川區久堅町百八番地 博進社工場印行）

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版⑰
明治36年1月（第3巻第1号）、2月（第3巻第2号）

2006年12月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　有限会社オンデマンドジャパン
製　本　有限会社青木製本

ISBN4-7601-3046-2　C3321